

# 地域の想いに出会う

富山県滑川市・上市町の調査記録

地域社会の文化人類学的調査 32



2023

富山大学人文学部文化人類学研究室

# 地域の想いに出会う

## 目次

はじめに…… 3  
地域概要…… 5

## 第Ⅰ部 つくる・つなぐ

第1章 「にぎわい」はどこからやってくるのか 滑川市街地の事例——— 窪田歩実 21  
第2章 ネブタ流しの今昔と子供の参加からみる可能性——— 大井萌莉 47  
第3章 上市町におけるさまざまな農業 課題解決に向けた取り組みを中心に—— 富岡雪乃 65  
第4章 滑川市及び上市町で活躍する作家たちと彼らの作品——— 丑蘊斐 81

## 第Ⅱ部 おもう・かたる

第5章 宿場町の過去と現在 滑川市瀬羽町の事例を中心に——— 浦上結衣 99  
第6章 上市市街地の歴史を紡ぐ 街と人々の記憶——— 松井成弥 115  
第7章 上市町における歓楽街の昔と今——— 上野由愛 131  
第8章 自然を求める人々 山岳と緑に恵まれた上市町において——— 渡辺聖菜 145

## 第Ⅲ部 まつる・いのる

第9章 滑川市加島町における獅子舞 次世代へと継承される伝統——— 小林滉 167  
第10章 道端の石仏と地域の人々との関わり 上市町の地蔵を中心に——— 森由希子 189  
第11章 「霊水」に魅せられる人々 上市町黒川地区の穴の谷霊場の事例——— 星野正樹 211



## はじめに

富山大学文化人類学研究室（富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野）では、1979年の研究室創設以来、教育の一環として、北陸の一地域を選んで調査実習を行い、その成果を報告書『地域社会の文化人類学的調査』にまとめてきました。この報告書は、その第32巻になります。

今回の調査地は滑川市と上市町です。このうち、滑川市は初めて取り上げることができました。上市町では四半世紀ほど前に「猿害」をテーマに調査を行ったことがあり、その成果は『猿害と地域社会——富山県大山・上市・立山町の事例から』（1999年、調査は1997年度）にまとめられています。ただし、単一のテーマに絞らずに広く学生たちの関心に任せた調査ができたという意味では、初めての機会になりました。学生たちが訪れた調査地も、ネブタ流しやホタルイカで有名な滑川の沿岸部から劔岳の登山口である馬場島までに広がっており、まさに海と山に恵まれた富山県の縮図をなしています。

本報告書は「文化人類学フィールド演習」という、2年間（4半期）にわたる授業の集大成です。学生たちは2年次前期にあたる2021年の春から初夏にかけて富山県内の複数の土地を訪れ、秋に調査地を滑川市・上市町に決めました。以後、（雪で外出がままならない期間をのぞいて）授業時間を利用した日帰り調査を重ねて、翌2022年の8月には調査合宿を行いました。世の中がコロナ禍に突入して以来、実に3年ぶりの夏合宿です。学生たちは上市町の善導寺（神明町）で寝食をともにしつつ、集中的なフィールドワークを行いました。

「フィールドワーク」は文化人類学という学問の最大の特徴のひとつであり、ここには単に現地に赴いて調査データを得るという以上の意味合いがあります。メディアやSNSがかつての人間の想像を超えるほどに発達した現在、私たちは遠く離れた土地のことも簡単に知ることができるようになりました。しかし、そうしてパッケージ化された情報が、実際に生活する人々の息づかいや活動のリズムを含むとは限りません。それに対してフィールドワークの場で学生たちは、人々の真剣な眼差しや生き生きとした語りに出会い、その想いにしばしば巻き込まれます。それは何らかの「知識」を得る活動を越えたひとつの「経験」と言えるものであり、座学では決して達成できない、ましてや教師が教え込むことのできないものです。調査経験をそれほど積んでいない学生たちならではの瑞々しい「驚き」が、この報告書を通じて読者のみなさまに伝わることを願います。

いっぽうで、この冊子にまとめられた学生たちの報告には、これまで誰も文字にしてこなかった情報も多く盛り込まれています。これまでせいぜい数ページのレポートしか書いた経験のない学生たちにとって、これだけの分量の報告書を仕上げることは簡単なことではなかったはずですが、学生たちは調査地での人々との出会いをエネルギーに奮闘したのだと思います。拙い表現も散見されるこの文章たちを、若きフィールドワーカーの格闘の軌跡として、寛大に受け取って頂けると幸いです。それに加えて、本報告書が地域の営みを記録した資料としての価値をもつことがあれば、本研究室のスタッフとしてこれ以上の喜び

はありません。

なお、彼らの原稿には教員が何度も目を通して参りました。したがって、本文中に不十分な点や誤りがあるとすれば、その責任は私たちにあります。忌憚のないご批判・ご助言をお寄せいただければ幸甚です。

最後になりましたが、このたびの調査は数多くの地域の方々のご協力があってはじめて可能になったものです。個々の学生がフィールドワーク中にお世話になった方々のお名前は各章末に記してあります。ここでは、困難な状況のなかで善導寺を合宿所として活用することを寛大にもお許しくださった、兼務住職の戸田光隆さん（眼目山立山寺住職）に感謝の意を記します。本当にありがとうございました。

2023年2月

富山大学人文学部 野澤豊一（主担当）  
藤本 武（副担当）

#### 追記

紙媒体の報告書は発行部数・頒布先ともに限られていますが、ここ10年あまりの実習報告書は富山大学学術情報リポジトリより閲覧可能です。ご関心のある方は「地域社会の文化人類学的調査」でご検索ください。

## 地域概要

### 1. 自然・地理・気候

#### 1-1. 滑川市の自然・地理・気候

滑川市は富山県の中央部からやや北東部寄りの、富山湾に面する場所に位置している。市の北東部で早月川下流部を境界に魚津市と、南西部で郷川と上市川下流部を境界に上市町や富山市と接しており、富山湾に向かって半開きの扇形に広がっている。県の南東部には立山・剣岳・毛勝山（毛勝三山とも）などの「北アルプス」が連なり、これらの典型的な鉾山地形を背景に、丘陵地帯や台地群、早月川扇状地の低地面が広がる。尻高山中腹地点から海岸線までの直線距離は約13キロメートルで、海岸線は約8キロメートルまで広がっている。海や田んぼなどの自然に囲まれた、豊かな土地である。

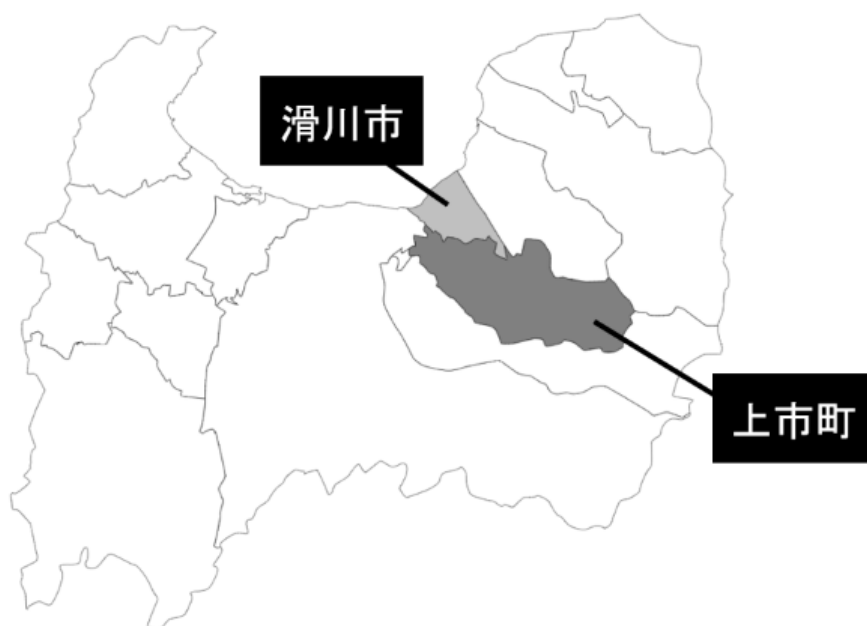


図1 滑川市及び上市町の位置（「白地図ぬりぬり」より作成）

昭和48（1973）年には、市の花として菊が、市の花木としてツツジが、市の木として松が選定されている。また、北西に広がる富山湾ではホタルイカ漁が盛んに行なわれており、平成3（1991）年にはホタルイカが「市のさかな」に認定された。海岸線の沖合い700間以内（1間は約1.8メートル）の海面は、昭和27（1952）年に国の特別天然記念物「ホタルイカ群遊海面」に指定されている。この海面には3～5月に産卵のためホタルイカが押し寄せる。ホタルイカは波打ち際に打ち上げられる際、神秘的な青白い光を放つ。これは、ホタル

イカの身体に備わっている発光器が刺激を受けることで生じる。この光景は、「ホタルイカの身投げ」とも呼ばれ、春の風物詩として親しまれている。

## 1-2. 上市町の自然・地理・気候

上市町は、富山県東部に位置し、新川平野の中央から町の最高峰劔岳に向かって東南に長く伸びた形状をしている。南東部は魚津市、宇奈月町、立山町に接し、北西部は滑川市、富山市、舟橋村および立山町に接している。(図1)

上市町の地形は、飛騨帯に属する高山性山地から複合扇状地の扇端へと、東に最も高く北西に急に低く傾く特徴的な断面を示す。南東部には標高2,999mの劔岳を主峰として、南へ奥大日岳、大日岳、早乙女岳、北へ池平山・赤谷山などの山地帯がある。早乙女川を源頭にした千石川と大辻山から流れる小又川とが、千石地点で合流し上市川となって富山湾に注ぐ。

上市町は、人がほぼ居住していないエリアを除くと、相ノ木・宮川地域、上市中央地域、南可積・陽南・白萩地域の3つの地域で構成されている。相ノ木・宮川地域は町の北西部に位置し、広大な農地が広がるなか住宅団地が点在し、国道8号や北陸自動車道が横断する地域である。上市中央地域は町の中央部に位置し、上市駅や上市町役場、商業施設など中心市街地を形成する地域である。南可積・陽南・白萩地域は町の南東部に位置し、地域北西部の農地が広がる一帯、地域南東部のなだらかな丘陵部とこれに続く山麓部によって形成された地域である。(図2)

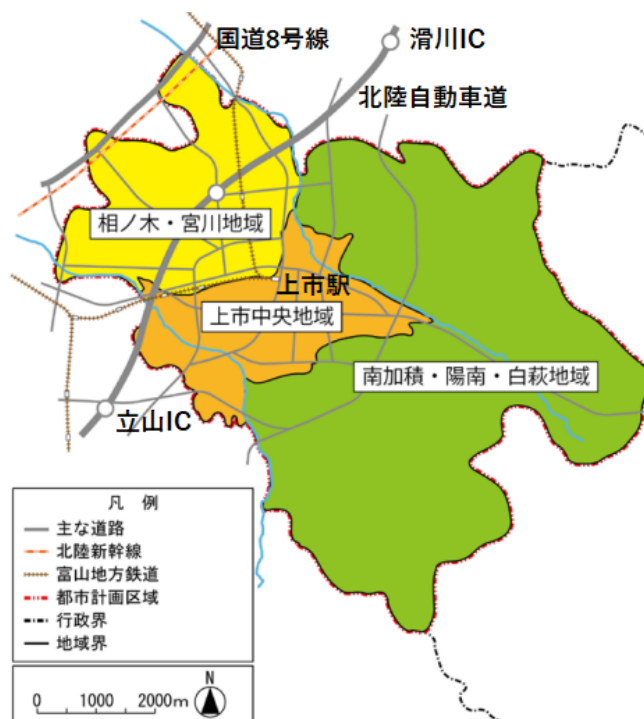


図2 上市町の地域区分（「上市町都市計画マスタープラン」より）

町のシンボルである劔岳は、そのふもとの馬場島の開発によって町営馬場島荘は登山隊の基地となり、その周辺一帯のキャンプ場は若人の修練の場となって、夏期には盛況をきわめている。劔岳をめぐる周辺には、大岩の磨崖仏や劔岳頂上および大日岳頂上で取得された錫杖頭など、古き時代のかずかずの遺跡や遺物が残っており、山岳宗教がさかんであったことが推測される。

## 2. 歴史

### 2-1. 滑川市の歴史

まず滑川市の地名の由来だが、これはいくつか説が分かれる所である。「後の滑川市となる場所の隣村の中河原村から出た湧水がこの地へ流れ込んだものを『滑川』と呼び、そこにちなむ」といったものや、「古くから『波入川』の名があり、承久の乱の折に北条朝時が越中に侵攻した際、鎌倉の滑川に似ていたところから名付けられた」というもの、「『河波保』が逆転して『南河』となり、『波川』と変化し、故事にちなんで『滑川』となった」という説が存在する。しかし、どれも初出の資料より新しい資料からのものであるか、伝承の域を出ないものである。それとは別に語源から考えると、「滑」は「なめ」あるいは「なめる」と読み、沼沢の多い低湿地を表しているという説もある。（『滑川町誌』より）

次に滑川の歴史について紹介する。中世ではこの辺りは佐々成政の領地であったが、天正15（1587）年に肥後へ転封となり、時の天下人であった豊臣秀吉はこの地を前田利家へと預けた。ここから当地域は加賀藩として江戸期を迎え、そのまま幕末へと至った。この間に滑川は沿岸の滑川町では北陸街道の宿場町として繁栄した。現在の養照寺本陣や旧宮崎酒造を始めとした伝統的な町屋建築が続く街並みはその名残である。この時期、内陸の台地部分ではたばこが栽培されるようになった。また、この辺りから高月村の高田千右衛門が富山売薬松井屋から製法を学んだことをきっかけに滑川売薬が始まった。そしてこの売薬業で得た資本を元にたたら製鉄が始められたが採算が取れずに打ち切られた。現在でもその遺構として「東金屋たたら跡」が発掘調査されている。（『日本歴史地名大系第十六巻 富山県の地名』より）

明治期に入ると、明治4（1871）年の廃藩置県により金沢県の一部となった。同年11月に府県統廃合によって新川県に、明治9（1876）年に石川県へ移り変わり、明治16（1883）年の富山県成立に伴い富山県の一部となり、現在に至る。当市域は明治11（1878）年の郡区町村編制法公布を機に上新川郡となった。戦後になると北陸街道沿いに位置していた滑川町は県内で最も人口密度が高い町となり、将来的な住宅建設や工場誘致には隣接する村に土地を求めるしかなかった。そこで滑川町を含めた一町六ヶ村の合併が目指され、紆余曲折ありながらも昭和28（1953）年11月に合併が行われ、新たな滑川町が誕生した。そして翌年の昭和29（1954）年の市制施行により滑川市となる。その後は上市町から山加積村が分離、滑川市に合併し、現在の滑川市が完成した。（『滑川市史』、『日本歴史地名大系第十六巻』より）



巻 富山県の地名』より)

大正7(1918)年には富山県で米騒動が起こり、全国的にも広まった。滑川市でも大正7(1918)年8月5日に漁家の主婦たちが米屋の前に集まり口々に生活の窮状の訴え、米の移出停止、安売りを求めた。中には晒屋橋の上に座り込む者もいた。一方で加積雪嶋神社沖では貨物船から米を積み出そうとしているのを漁家主婦たちが発見し、米俵へと殺到。しがみついて積出を阻止した。こうした出来事に滑川警察署の警官が総動員で対処し、辺りは騒然となっていた。8月7日の「高岡新報」では6日夜の滑川町の米騒動を大々的に報道し、同日の社説では政府批判を行ったため、富山県警察より頒布禁止処分を受けた。

明治41(1908)年には北陸線(現在のJR北陸本線)の富山―魚津間が開通した。大正2(1913)年には立山軽便鉄道の滑川―五百石(現立山町)間が開通。昭和6(1931)年には立山軽便鉄道と富山電気鉄道が合併(現在の富山地方鉄道の前身)、昭和11(1936)年には滑川―魚津間が開通した。近世以降の滑川港は漁業振興のために昭和21(1946)年に現在の坪川新から高塚で県営事業として漁港工事が行われた。その後は財政難などもありながら、昭和32(1957)年に開港式が行われ、現在では滑川漁協関係施設や県水産試験場などが集中している。そして富山市水橋付近から滑川市を通り、魚津市に至るまでの富山湾沿岸部は「ホタルイカ群遊海面」として国指定特別天然記念物となっている。

## 2-2. 上市町の歴史

上市町は古くから立山参拝の中継地であり、人が集まる場所であった。特に上市町三日市は交通の要衝であって、人の往来も多く、いつ頃かは不明であるが自然発生的に市が生じたということだ。月に3日、市を開くことから「三日市」と称するようになったらしい。現在においても使われている「上市」の地名は、この三日市に対して新しく山側(上手)にできた市を「上の市(=より山の方にある市)」と呼んだことがはじまりで、それが「上市」へと変化したのだとされている。なお、上市町に古くから存在する寺「常福寺」のおこりを伝えた文書「常福寺縁起」によると、大永年間(大永1〔1521〕年―大永8〔1528〕年)の建立の際、上市町には7軒の家が存在したということであるから、上市が町として発展したのはそれ以後ということになる。

室町から安土桃山時代にかけて、上市(新川郡)は源頼朝の重臣、土肥実平の後裔である土肥氏によって支配された。上市町には現在でも土肥氏に関係する遺跡が数多く残る。ついで佐々成政が治めた(天正11〔1583〕年に越中全土を支配)が、佐々成政は豊臣秀吉との関係悪化などが起因して、天正15(1587)年、熊本に転封され、明治に至るまで前田家が藩政を敷いた。

藩政下の上市(新川郡)では当時、金の採掘が行われ、加賀藩の経済成長を支えていたとともに、幕末から明治にかけて農家での木綿製造が盛んに行われ、木綿問屋もあった。これは「上市木綿」と呼ばれ、現在まで続く上市の主力産業である繊維業の源流となっている。また、売薬業(富山売薬、「売薬さん」)も富山県東部の例に漏れず盛んであり、現在におい

でも上市町には富士化学工業や池田模範堂などの有力な企業が存在する。

現在の上市町は明治 22（1889）年に市村町制が実施されたことに始まる。前述の通り重要な場所であったため、大正 2（1913）年には鉄道（立山軽便鉄道、滑川―五百石駅間、後の富山地方鉄道立山線）が開通し、産業などがより発展した。昭和 16（1941）年に上市と音杉村が合併し、その後、昭和 38（1963）年に至るまで周囲の村々を合併して今の上市町となった。

### 3. 人口

#### 3-1. 滑川市の人口

令和 5（2023）年 1 月 1 日時点の滑川市全体の人口は 32,878 人で、性別人口は男性人口が 16,106 人、女性人口が 16,772 人である。世帯数は 12,817 世帯である。昭和 55（1980）年から平成 27（2015）年までの人口推移（5 年ごとで、国勢調査に基づく）と、平成 30 年（2018）の年齢別人口割合を以下に示した。

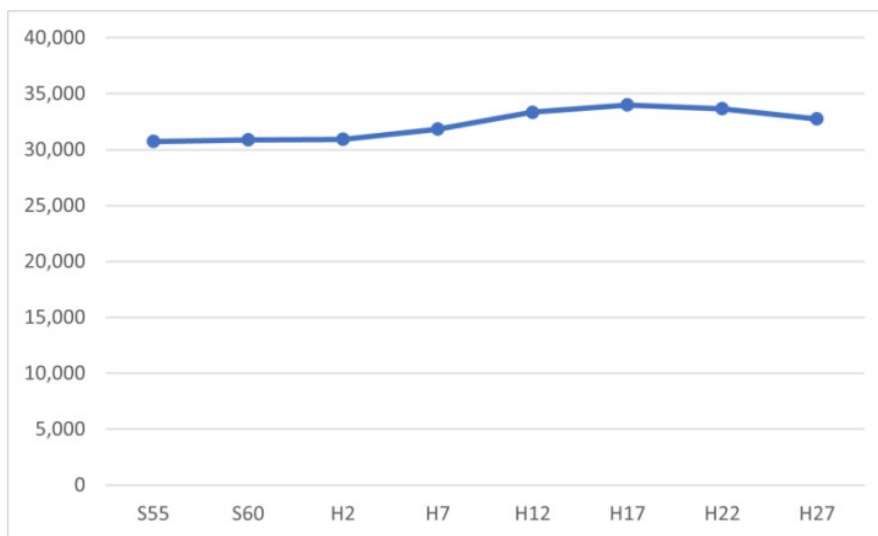


図3 滑川市の人口推移（統計なめりかわ 2018 より作成）

図3を見ると、昭和 55（1980）年から平成 17（2005）年にかけては、人口が増加している。特に、平成 2（1990）年から平成 17（2005）にかけての増加幅が大きく、平成 17（2005）年には、34,002 人にまで増加した。しかし、その後の人口は減少している。

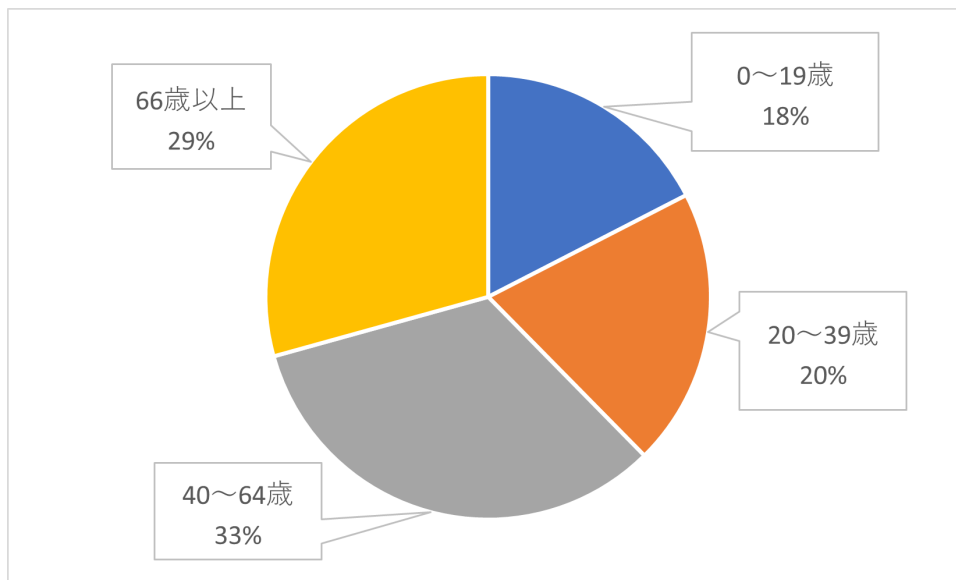


図4 平成30（2018）年滑川市の年齢別人口割合（統計なめりかわ2018より作成）

また、図4の年齢別人口割合を見ると、平成30（2018）年時点では、65歳以上が占める割合は、29%となっている。これは、WHOや国連が定める定義によると、超高齢化社会と位置づけられる数値である。

次に平成21（2009）年から平成29（2017）年の滑川市の住民の転入・転出者数をグラフに示す。

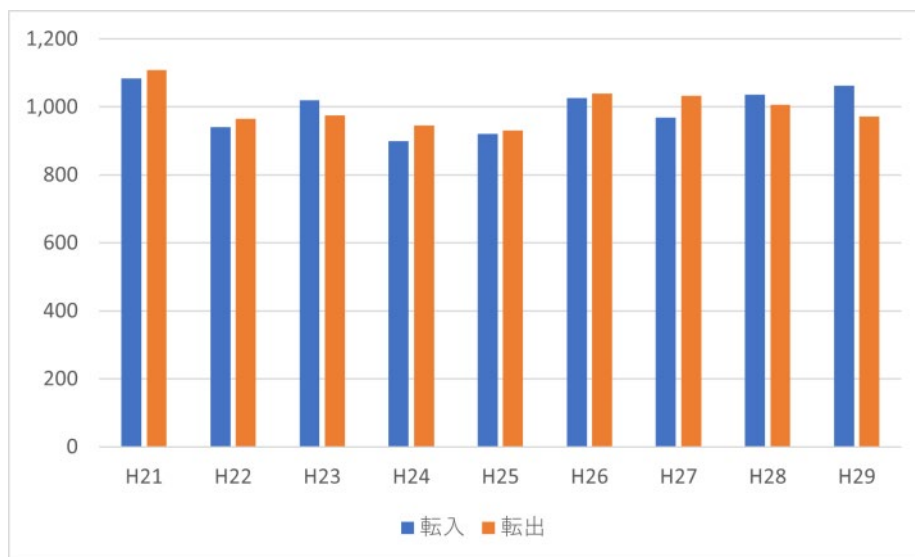


図5 滑川市の転入・転出者数（統計なめりかわ2018より作成）

図5を見ると、平成21（2009）年から平成29（2017）年にかけては、どの年も、転入者数、転出者数ともに1,000人前後である。平成29（2017）年には、転入者数が転出者数を

上回っている。

### 3-2. 上市町の人口

令和5（2023）年1月1日時点の上市町全体の人口は19,228人で、性別人口は男性9,241人、女性9,987人となっている。世帯数は7,709世帯である。平成2（1990）年から令和2（2020）年までの人口推移と、平成27（2015）年の年齢別人口割合を以下に示した。

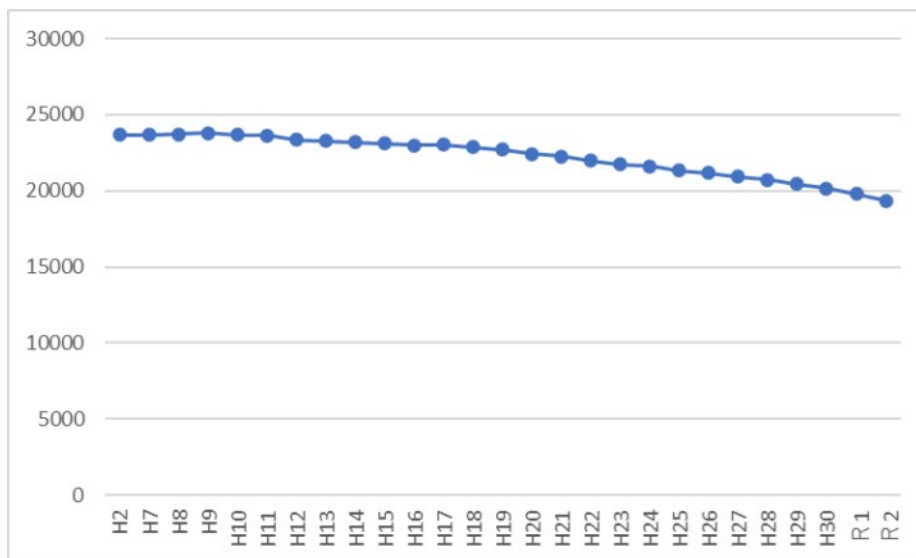


図6 上市町の人口推移 (第26回統計書 上市町より作成)

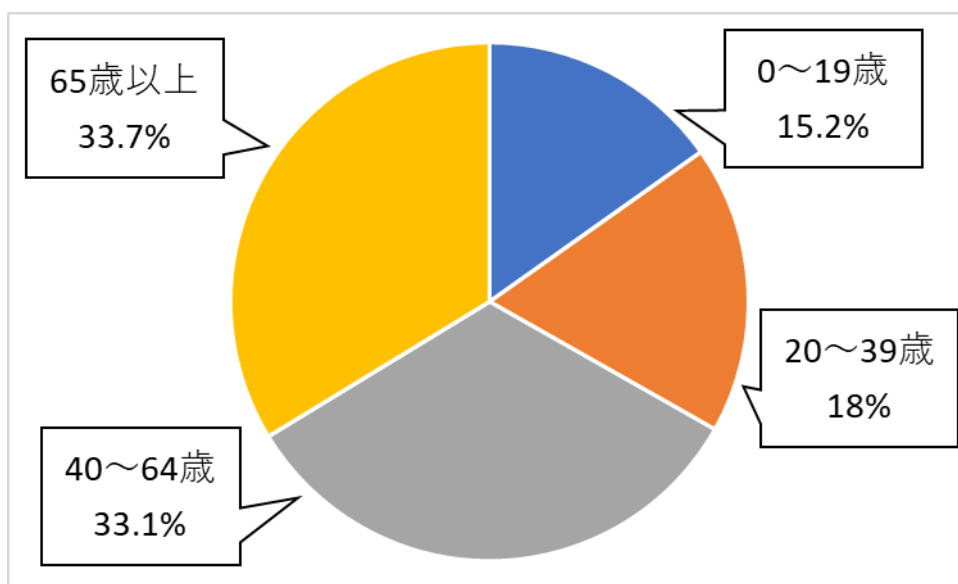


図7 平成27（2015）年上市町の年齢別人口割合 (第26回統計書 上市町より作成)

図6を見ると、上市町の人口は毎年減少傾向にある。平成17（2015）年頃を境に減少幅

が大きくなっている。上市町の平成期の人口ピークは平成9（1997）年の23,795人であるが、令和2（2020）年までの23年間で4,444人減少している。

また、図7の年齢別人口割合を見ると、平成27（2015）年時点では、65歳以上が占める割合が33%を越えている。これは、WHOや国連が定める定義によると、超高齢化社会と位置づけられる数値である。

次に、平成22（2010）年から令和2（2020）年にかけての上市町の住民の転入・転出者数をグラフに示す。

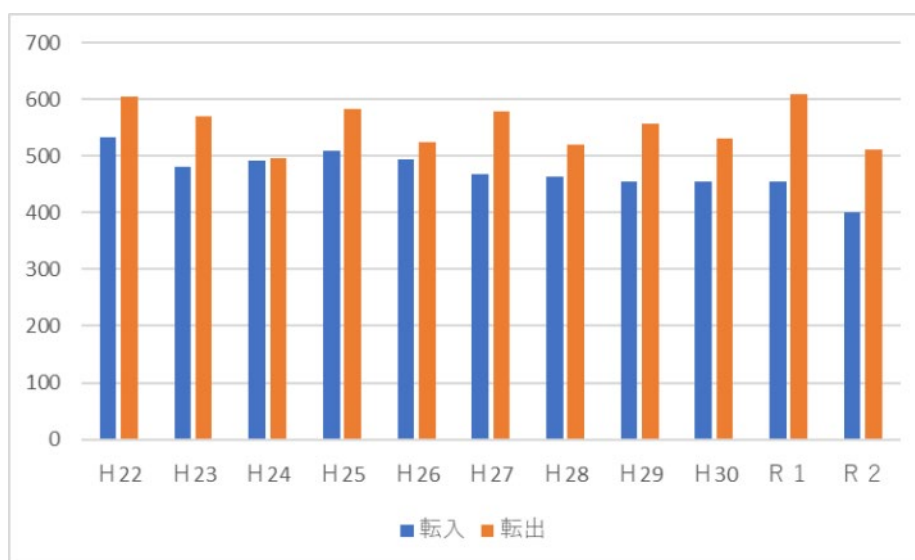


図8 上市町の転入・転出者数（第26回統計書 上市町より作成）

図8を見ると、平成22（2010）年から令和2（2020）年にかけての10年間は、常に転出者数が転入者数を上回っている。特に、令和元（2019）年において、転出者数が転入者数を大きく上回っていることが分かる。また、平成24（2012）年にかけて転出者数と転入者数の差が縮まっているが、その後は再び差が大きくなっている。

## 4. 産業

### 4-1. 滑川市の産業

平成27（2015）年の滑川市の産業別就業人口を示したのが図9である。第3次産業が半分以上を占め、第2次産業と合わせて全体の96%を占めている。第1次産業の就業人口が626人、第2次産業が6,779人、第3次産業が9,600人となっている。全体の5割以上を占める第3次産業の中でも、サービス業に従事する者が5,351人と最も多く、続いて卸・小売業に従事する者が2,234人である。

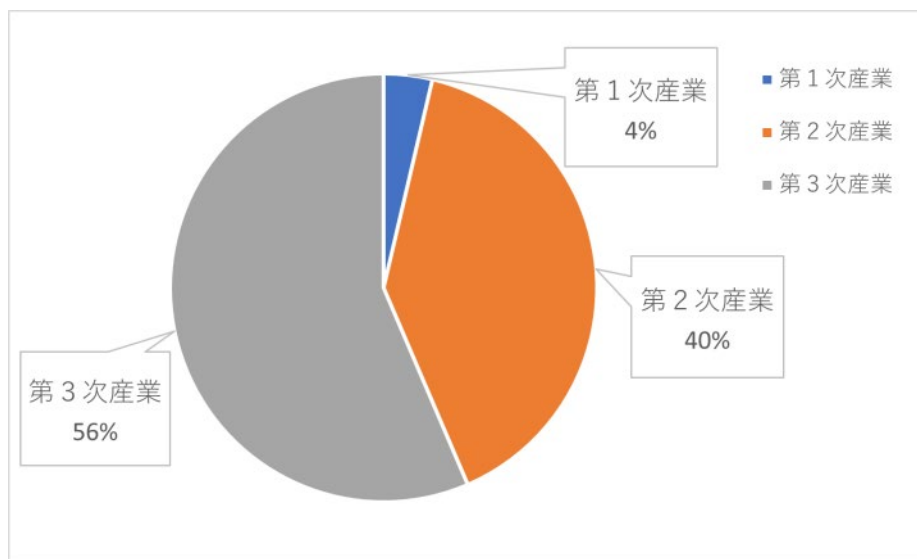


図9 平成27(2015)年滑川市産業別就業人口(統計なめりかわ2018より作成)

その20年前の平成7(1995)年の滑川市の産業別人口の割合を示したのが図10である。第1次産業の就業人口は1,098人、第2次産業は7,937人、第3次産業は8,713人であった。平成27(2015)年までに、第1次産業と第2次産業の就業人口が減少しており、第3次産業が増加していることがわかる。

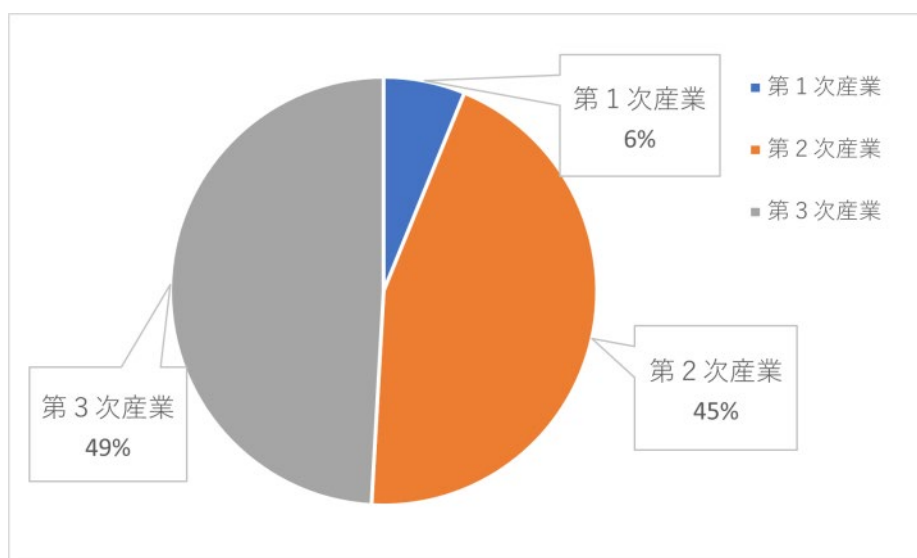


図10 平成7(1995)年滑川市産業別就業人口(統計なめりかわ2018より作成)

滑川市の農家世帯数は、平成27(2015)年に586世帯で、平成7(1995)年の1,761世帯から著しく減少している。経営耕地総面積も、平成7(1995)年の2,290ヘクタールから、平成27(2015)年の2,028ヘクタールへと減少した。この経営耕地面積のうちの大半を占

める水田では、雪どけ水を利用して、コシヒカリなどが生産されている。他の農作物としては、滑川沖で取水した海洋深層水を利用して栽培された海洋深層水トマトをはじめ、サトイモやリンゴなどが生産されている。漁業では、ホタルイカ漁が盛んで、平成 29（2017）年には、397 トンのホタルイカが水揚されている。

滑川市の工業については、平成 28（2016）年の製造品出荷額では、化学工業が製造品総出荷額の約半数を占めており、16,079,453 万円となっている。続いて、金属製品、生産用機械の出荷額が多い。

#### 4-2. 上市町の産業

平成 27（2015）年の上市町の産業別就業人口の割合を示したのが図 11 である。第 1 次産業の就業人口は 460 人、第 2 次産業は 3,862 人、第 3 次産業は 6,108 人となっている。第 2 次産業と第 3 次産業が全体の 96%を占めている。第 3 次産業に従事する人が約 6 割を占めており、その中で卸売業、小売業に従事する人が最も多く 1,533 人、続いて医療・福祉関係の仕事に従事する人が 1,269 人である。

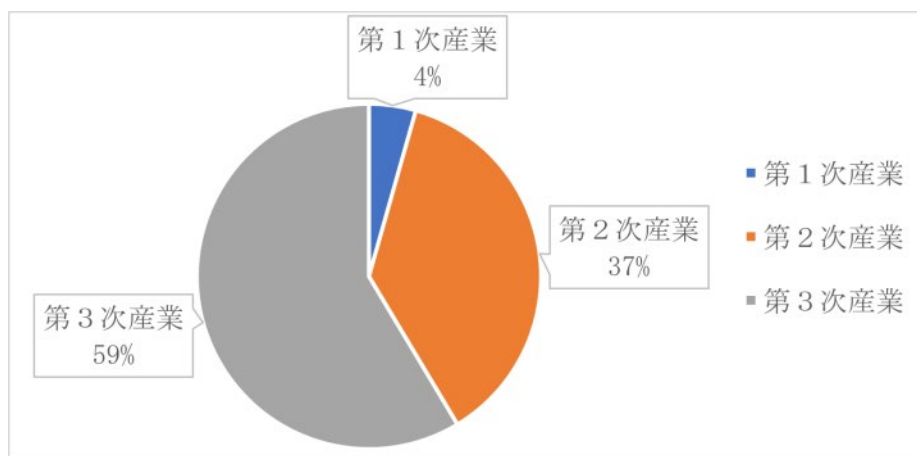


図 11 平成 27 年上市町産業別就業人口  
(上市町ホームページ『第 26 回統計書（令和 2 年）』をもとに作成)

その 20 年前の平成 7（1995）年の上市町の産業別就業人口の割合を示したのが図 12 である。第 1 次産業の就業人口は 991 人、第 2 次産業は 5,485 人、第 3 次産業は 6,679 人である。比較すると、20 年のあいだに第 1 次、第 2 次産業従事者の割合が減ったことが分かる。また、全ての産業の就業人口が減少していることが分かる。

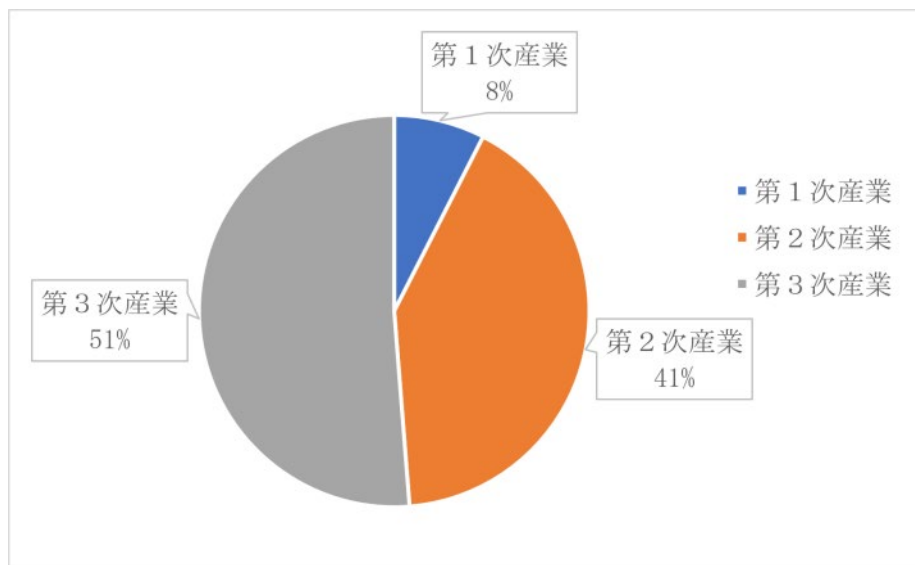


図 12 平成 7（1995）年上市町産業別就業人口（平成 7 年国勢調査をもとに作成）

上市町は古くから物資流通の中心地として栄えた。現在は、米作を中心とした農業と製造業を中心とする工業が盛んである。

上市町は広い農地を有しており、特産品として主にアルプス米・サトイモ・白ネギ・つるぎりんご・ズイキ・ショウガが挙げられる。北アルプス劔岳の麓に位置する上市の米は、冷たく清らかで美味しい水で育てられている。またサトイモは富山県で 2 位の生産量を誇っており、主に 10～11 月が出荷のピークである主力品種「大和」と、9 月が出荷のピークである早生品種「石川早生」の 2 種類が育てられている。また、無農薬栽培である自然農や自然栽培を行うことで、持続可能な農業や作物のブランド化を目指している人も多く見受けられる。そのように育てた作物を上市の学校給食で利用することで、子供たちに農業に触れてもらったり、安心安全なものを食べてもらおうとする動きも活発である。（このことについては第 3 章で富岡雪乃が詳しく説明する。）

上市町の工業・製造業は、繊維業（細川機業など）や製薬業（池田模範堂など）を中心に、金属製品・コンクリート製品・プラスチック・フィルム製品製造業などが盛んである。それと同時に、電化製品用部品など、様々な部品を生産している電子・電気機器製造業などの誘致企業群の先端産業も着実に発展している。

また、上市町では、日石寺や立山寺、穴の谷の霊水、劔岳の登山入り口である馬場島など、自然環境や文化遺産をもとに形成された観光地が多く存在している。他に、健康施設「アルプスの湯」や文化ホール「北アルプス文化センター」などの文化施設も充実している。



## 5. 年中行事

ここでは、滑川市と上市町で行われている祭りやイベントをまとめる。滑川市と上市町では、表1の示すような様々な行事が行われている。

表1 滑川市および上市町の行事

	滑川の行事	上市の行事
1月		
2月		劔岳雪のフェスティバル
3月		
4月	春のホタルイカ祭り	
5月		つるぎ山菜まつり
6月	花しょうぶまつり	劔岳山開き 市姫祭礼
7月	ふるさと龍宮まつり ねぶた流し 茅の輪くぐり	大岩山滝開き そうめん山菜まつり
8月	ベトナムランタンまつり	ふるさと観光上市まつり ショウライコ
9月		劔健康マラソン大会 かみいちスポーツまつり
10月	キラリングルメの森	黒川フェスティバル
11月		
12月		

以下では、これらの行事の中からいくつかを取り上げたい。

花しょうぶまつりは、6月中旬から下旬にかけて行田公園で行われる。行田公園では88種類約4万株の花しょうぶが見ごろを迎える。2022年からは花しょうぶを灯りで幻想的に照らす「花しょうぶキャンドルナイト」が始まった。（このイベントについては第1章で窪田歩実が取り上げる）

ねぶた流しは7月31日の夕方に滑川市中川原海岸で行われる行事で、国指定重要無形民俗文化財に指定されている。紙や野菜で作ったヒトガタ（人形）を4メートルあまりの大きさのたいまつに飾り付け、これに火をつけて海に流し、厄除け、無病息災を祈願する。（本行事については、大井萌莉が第2章で詳しく報告する。）

市姫祭礼は、6月8日から10日に上市町の市姫神社で行われる祭りだ。商売繁盛などを願い、市姫社から熊野社に至る街道に露店が軒を並べる。昼には子供新興がある。

ショウライコは、主に上市町で行われる盆行事である。8月13日に、地区によって河原にニオトンボと呼ばれる櫓を七夕の竹や枝で組んで火を焚く、たいまつを左回しに回し「ショウライコ」と言いながら共同墓地まで行くなどの風習がある。

剣岳雪のフェスティバルは、2月11日に行われ、熊鍋などの屋台を出店するほか、各種ステージイベントも設ける。始まりは昭和63（1988）年と比較的新しい祭りである。

#### 参考文献

上市町誌編纂委員会編、1970年『上市町誌』上市町。

新上市町誌編纂委員会編、2005年『新上市町誌』上市町。

滑川市史編さん委員会、1979年『滑川市史 考古資料編』滑川市。

滑川市史編さん委員会、1985年『滑川市史 通史編』滑川市。

滑川町、1982年『滑川町誌』新興出版社。

平凡社地方資料センター、1996年『日本歴史地名大系 第十六巻 富山県の地名』平凡社。

#### 参考にした記事

『広報かみいち』昭和63（1988）年2月号。

『広報かみいち』平成27（2015）年3月号。

#### 参考にしたウェブサイト

上市町ホームページ〈<https://www.town.kamiichi.toyama.jp/top.aspx>〉（2023/01/27 閲覧）

上市町「上市町イベント情報」

〈[https://www.town.kamiichi.toyama.jp/hp/event/event\\_info.html](https://www.town.kamiichi.toyama.jp/hp/event/event_info.html)〉（2022/01/17 閲覧）

上市町「上市町都市計画マスタープラン（平成29年12月） 第4・5章」

〈<http://www.town.kamiichi.toyama.jp/attach/EDIT/005/005179.pdf>〉（2023/01/25 閲覧）

上市町「上市町の特産農産物」〈<https://www.town.kamiichi.toyama.jp/event-topics/svTopiDtl.aspx?servno=70>〉（2023/01/31 閲覧）

上市町ホームページ『第26回統計書（令和2年）』

〈<https://www.town.kamiichi.toyama.jp/attach/EDIT/011/011671.pdf>〉（2023/01/03 閲覧）

上市町「統計書」

〈<https://www.town.kamiichi.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=2817>〉（2023/01/27 閲覧）

上市町工場協会ホームページ〈<https://www.shokoren-toyama.or.jp/~kamiichi/kami->

kou/> (2023/01/3 閲覧)

とやまの文化遺産魅力発信事業実行委員会「とやまの文化遺産」<<https://toyama-bunkaisan.jp/>> (2023/01/17 閲覧)

滑川市ホームページ <<https://www.city.namerikawa.toyama.jp/index.html>>  
(2023/01/17 閲覧)

滑川市ホームページ「行事・イベント」

<[https://www.city.namerikawa.toyama.jp/travel\\_namerikawa/Japanese/1/index.html](https://www.city.namerikawa.toyama.jp/travel_namerikawa/Japanese/1/index.html)>  
(2022/01/17 閲覧)

政府統計の総合窓口 (e-Stat)「平成7年国勢調査」<<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200521&tstat=000001064072&cycle=0&tclass1=000001064137&tclass2=000001064125&tclass3val=0>> (2023/01/13 閲覧)

# 第1部

つくる・つなぐ



## 第1章 「にぎわい」はどこからやってくるのか——滑川市街地の事例

窪田 歩実

### はじめに

本章では、滑川市街地における「にぎわい」について、フィールドワークで調べたことをもとに記述する。調査を始めた当初、私が滑川市について知っていることは、瀬羽町に「hammockcafe Amaca」があるということだけだった。それは若者を中心に人気のあるリラックスした雰囲気が特徴のカフェだ。季節ごとに変わる個性的なパフェが注目を集めており、私もSNSでその存在を知った。実際に瀬羽町に行ってみると、通りにはカフェだけでなく、パン屋や雑貨屋などの新しい店が立ち並んでおり、通り自体の旧さとのギャップが感じられ、独特の雰囲気が漂っていた。しかし、そこには滑川市に長く住んでいるだろうと思われる年齢層の人たちの姿はあまりみられなかった。

その後、瀬羽町およびその周辺に古くから住む住民たちが普段の買い物で利用するのは、瀬羽町から2kmほど離れた滑川駅前のエリアであることがわかった。ただし、滑川駅前の買い物スポットであるショッピングセンターと商店街のうち、後者はシャッターが閉まっている店が目立つ。また、滑川駅前には私たち世代にアピールするようなお店があまりなく、実際に若者の姿がみられなかった。あたかも、若者と高齢者でにぎわいの中心となる場所が分化しているかのように感じられた。

以上のような印象がもとになって、私は、滑川市街地のにぎわいの変遷を辿ってみたいと考えるようになった。フィールドワークでは、滑川駅前の公園通り商店街で商店を営む方や、同じく駅前のショッピングセンター「エール」の関係者など、今昔の滑川の姿をよくご存じの方を中心に聞き取りを行った。また、調査を進めていくうちに、現在の滑川に新しいにぎわいを創出しようと活動する人たちに出会うことができ、彼らが企画・運営するイベントの様子を見る機会も得られた。

本章では、以上のような聞き取り調査や観察をもとに、過去から現在にかけての滑川市街地の様子をまとめる。また、滑川で現在行われているにぎわい創出事業についても記述する。第1節では、昭和初期に繁栄していた地域の様子について記す。第2節では滑川駅前を盛り上げる現在の取り組みについて、第3節では調査合宿中に行われたベトナムランタン祭りについてまとめる。第4節では、滑川の新たな文化づくりとその背景について紹介した。第5節では、新たなにぎわいをつくる場所としての滑川の可能性について、また、にぎわい創出のために大切にすべきことは何かについて考察した。限られた期間での調査をもとに考えたことなので足りない点もあると思うが、ご批判いただければ幸いである。

## 1. 昭和初期の記録と記憶から

### 1-1. にぎわいの中心地の移り変わり

滑川市街地のなかで、明治時代に入ってから急速に発展し商店街が形成されたのは、現在の中滑川駅周辺に位置する橋場・晒屋（さらしや）・瀬羽町（せわまち）であった。これらの地域は昭和初期には最盛期を迎え、特に瀬羽町は「滑川銀座通り」と呼ばれたほどであった（このころの様子については第5章第2節を参照されたい）。中新川郡随一の繁華街として栄えたこれらの商店街だが、昭和50年以降衰退してしまう。そこには大型商業施設建設という背景があった。

昭和53（1978）年、滑川駅前にショッピングセンター「エール」が開業した。協同組合による大型商業施設として完成したエールには、新規の店舗に加えて、それまで瀬羽町や晒屋にあった店舗も移転して入っていた。当時珍しかったショッピングセンターであるエールには食料品屋・八百屋・肉屋・おもちゃ屋など40店舗ほどが入り、大勢の人が集まる場所になった。その後エールの周辺には、昭和57（1982）年に「公園通り商店街」や「パティオ」（ホームセンター的要素を持つショッピングセンター。20年ほど前に閉業し、跡地はエールの駐車場となっている）ができた。この時に新しく集まったテナントのなかには、エールの盛況ぶりをみて出店を決めた晒屋や瀬羽町の店も多く、かつての商店街地域から滑川駅前地域に商店が移動する傾向がさらに強まった。

このようにかつて繁華街として栄えた商店街は時代の流れとともに大型施設に吸収され、モノの移動とともににぎわいの中心も移っていったのであった。しかし現在まで滑川駅前のにぎわいが保たれているわけではない。全国各地の商店街と同様に、シャッター街化や利用者の高齢化が課題になっているのだ。このような現状に対して行われている工夫や取り組みについては第2節で詳しく述べる。また第3節ではここ数年で瀬羽町通りに戻ってきた新しいにぎわいについても紹介する。

### 1-2. 晒屋商店街

はじめに、晒屋という地名について説明したい。「晒屋」とは公式の住所ではなく、その地域一体を指す言葉として慣習的に用いられてきた地名である。公的には滑川市下小泉町と称される地域で、中滑川駅の北東に位置している。晒屋（さらしや）とは、滑川宿の中央を流れる中川の清水を利用して綿布や麻布を晒す職業を生業とする家が多く存在していたことに由来している言い方なのである。

前項では、昭和初期の滑川市で最も栄えていた地域として晒屋・瀬羽町・橋場を挙げた。これらの地域はいずれも商店街を形成したくさんの店や人でにぎわっていた。また、聞き取り調査から、その繁栄ぶりは1番手が晒屋、2番手が瀬羽町であつたらしいことも分かった。しかし現在、晒屋に足を踏み入れてみても商店街としての面影はほとんど見られず、かつて1番手と称された繁栄ぶりは想像しがたい閑静な場所となっている。その中で、現在も営業

している上野文美堂の店主である上野俊さんに、かつての様子をお話いただいた。



図1-1 滑川中心地の移り変わり（国土地理院地図を加工）

### 商店街の繁栄と生活

晒屋商店街に現在残っている商店は、「上野文美堂」と「ニッタ食品店」のたった2つだという。そのうちのひとつである上野文美堂は設立が昭和22（1947）年の歴史ある文房具屋だ。現在は企業や学校の納品が中心だが、店頭販売も行っている。現店主の上野俊さんのお父さんが始めた店で、開業当初は現在の店舗の場所に自宅があり、店舗は川沿いではなく「さらしや一番街」と称される通りにあったという。エールなどができたとき、上野文美堂も公園通り商店街に支店として店舗を出したが、現在は晒屋での1店舗営業を行っている。

晒屋に商店がたくさんあったおよそ60年前頃、上野さんは小学生から中学生くらいだった。同級生は晒屋だけで30人ほどおり、鬼ごっこや釣りなどが遊びの中心であった。現在は町内に子どもはひとりもないそうだ。上野さんが書き並べてくださった当時の店の数は51。呉服屋が4軒に加えて駄菓子屋、下駄屋、ダンス屋、傘屋、金物屋、電機屋などで、ショッピングセンターとは違い個別の商品に特化した販売店ばかりであった。現在も看板が残っている「こんぶや」という店は化粧品と昆布の販売をしていたようで、その組み合わせの珍しさにも驚かされた。また、「フードセンター」と呼ばれる場所があり、そこには現代のフードコートのように様々な飲食店が入っていたそうだ。ほかにも、現在富山第一銀行があるところには滑川日本劇場があり、映画を楽しむ人で賑わってもいたという。滑川には他にも、滑川東映劇場（瀬羽町）、滑川中央劇場（橋場）、滑川第一劇場（常盤町）があった。



ここからも、この地域が中新川の中心地としてにぎわっていたことが垣間見える。

### 写真からみる当時の特徴

続いて上野文美堂で見せていただいた2つの写真を紹介する（同一の写真を滑川市立博物館 HP より転載した）。この写真から当時の特徴が分かる。白黒のそれは昭和初期の晒屋だ。当時のころの晒屋の地図を見ながら写真を見ると全体像が分かりやすい。（図1-2）

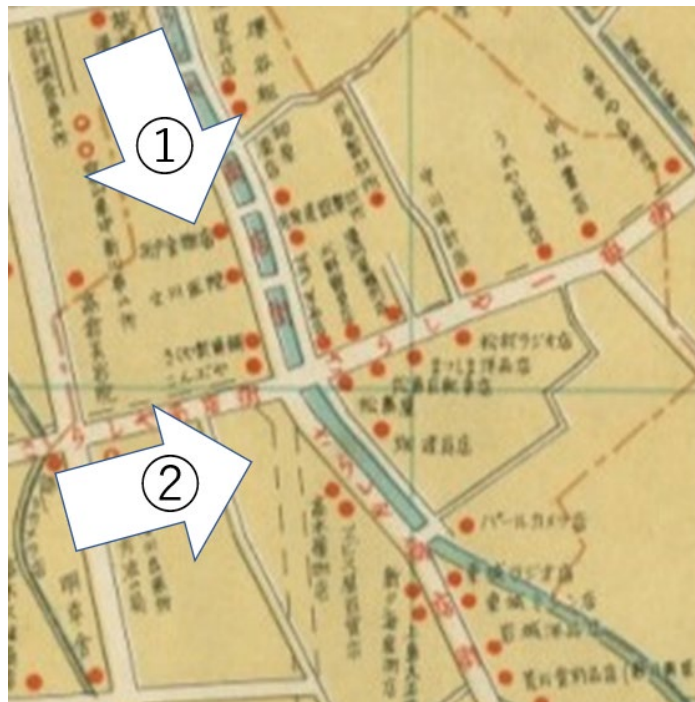


図1-2 昭和31年の晒屋地区（滑川市立博物館所蔵『富山県滑川市全図』を加工）



写真1-1 晒屋商店街の夜店の様子（滑川市立博物館所蔵）

写真1-1は「夜店」の様子だ。地図(図1-2)でいうと①の矢印の向きから撮影されている。夜店とは今でいう夏祭りで、毎年夏に1、2回開かれていた。町内の商店街にある店が、外に屋台のようなものを出し、お祭りのようなにぎわいがあったそうだ。上野文美堂も文房具をいつもより安く売ったり、店舗とは関係ないけれど飲食の屋台を出したりしていたという。写真の左側、一番手前に写っている家族が上野さん一家だそうだ。上野さんは、向かって左手が上野さんのお母さん、右手が小学生時代のご自身、真ん中で立っているのがおそらく焼きそばを焼くお父さんだと話してくれた。

夜店は通常店が閉まるよりも少し長い時間行われ、およそ9時ごろまでにぎわいがあったようだ。またこの夜店は晒屋だけでなく各商店街で行われ、日にちをずらして開かれていた。まさに現在の夏祭りのようだといえる。

写真1-1を見て真っ先に目に留まるのは中央を流れる川ではないだろうか。道路の真ん中を通る大きな川は晒屋の大きな特徴といえる中川で、上野さんによると「川に1度は落ちなきゃ晒屋の者でない」という言葉があったほどである。写真からも分かるように川をまたぐ橋がかけていたようだが、この橋は商店街にある用品店の人たちが作った木製のものだという。いかにも危なっかしく事故もしばしば起きていたようだが、先の語りからは、晒屋での生活の一部であり、住民から親しみを持たれていたことがうかがえる。木製の橋はやがてコンクリートに作り替えられ、現在は川全体がコンクリートで蓋がされて、駐車場と化したために、晒屋から川は消えてしまった。



写真1-2 図1-2における①の逆方向からみた現在の晒屋の様子(著者撮影)



写真 1－3 昭和 30 年代のさらしや一番街の様子(滑川市立博物館所蔵)

写真 1－3 は、昭和初期の晒屋商店街一角であるさらしや一番街の様子だ。図 2 でいうところの、②の矢印の向きから撮影されたと思われる。右側の手前から 3 つ目くらいの看板に「上野文具店」とあるのがオープン当初の上野文美堂だという。看板が重なるように並べられていることから、この通りだけでもたくさんの店があったことが分かる。垂れ幕は常にかげられ、にぎわいを持たせるために工夫されていたようだ。

写真の中央部分に人力車のようなものがみえる。これは荷物を運ぶために使われていた荷車で、自転車とこの荷車が商店街では主な交通手段として定着していた。

### 1－3. その他の商店街のかつての姿

晒屋のかつての様子について取り上げて説明してきたが、そのすぐ近くにあった瀬羽町商店街についても、わかった限りでのことを記しておく。

「滑川銀座通り」と呼ばれた瀬羽町では、かつてサーカスのような見世物や曳山祭りがあったという。それほど大規模なお祭りではなかったようだが夜店にはそれなりに人が集まり、にぎわいがあったようだ。瀬羽町と晒屋はどちらも栄えた商店街地域であったが互いに争うということはなく、それよりもそれぞれが独立して組合などを作り各自の商店街の集客に力を注いでいたという話も、調査の中で聞くことができた。

以上より各商店街はそれぞれの特色を生かして工夫をしており、その工夫が集まることで地域一体としてにぎわいが生まれていたのではないかと考えることができる。

## 2. 駅前商店街の活性化——街 ing 滑川の活動を中心に

### 2－1. 滑川駅前の変遷

滑川市街地の商業的な中心地は、昭和 53 (1978) 年に完成した「エール」建設を皮切りに

滑川駅周辺に移った。現在の滑川駅周辺の商業地域を構成するのは「エール」「公園通り商店街」「滑川市民交流プラザ」の3つだ。それらは広い駐車場を囲うように配置されており、市民の立ち寄りどころとなっている。

公園通り商店街は、エールの建設・開業について昭和57(1982)年に完成した。現在の商店街の全長は約230mで、その長さは当初から変わっていないが、店舗数や雰囲気に変化はある。

公園通り商店街の完成当時、そこは人が自然に集まるにぎやかな場所だった。通り全体を使ったお祭りには人があふれるほど訪れ、道の細長い隙間では水をためてスーパーボールすくいが行われていたのだそうだ。しかし20年ほど前から、公園通り商店街の人通りは減ってきている。その理由はもっと便利な商業施設の登場である。例えば平成12(2000)年、市街地から滑川市上島の国道8号線沿いに「PLANT-3」が出店したことが挙げられる。かつて、当時珍しかったエールに人が集まったように、新しくて珍しい便利な方に客は吸い寄せられていくのだ。さらに店主の高齢化による経営の維持困難が重なり、シャッターや空きテナントが増えた。

実際、商店街に入ることができる店舗数は25軒ほどだが、そのなかで現在まったく営業していない店舗が6軒ほどある。瀬羽町や晒屋から自宅ごと移り住んだ商店が多いので、商店の多くは2階が自宅だ。そのため、閉業したために1階のシャッターが下りていても2階の自宅には人が住み続けているということがしばしばある。また、公園通り商店街はエールのような協同組合ではないため商売するにあたってのつながりは薄いですが、町内会は存在するため住民同士に連携はあり、アーケードの掃除などは協力して行っている。

商店街の完成当初はパン屋やケーキ屋などの飲食店が大半を占め、大勢の人でにぎわっていたという。現在も飲食店は数軒あるものの、利用客のほとんどが高齢者であることから、需要の高い歯科医院や接骨院、薬局などの医療系店舗や福祉サービス事務所のテナントが増加傾向にあるようだ。商店街に店を構える人の中には、「ただでさえ商店街は利益が別々だから一緒に集客しようという風潮になりにくいのに、サービス業が増えると求める利益に違いがあってさらに店同士が協力しての集客が難しくなった」と嘆くむきもあった。

## 2-2. 街ing滑川

商店街単独でのにぎわいづくりが困難になり、滑川駅前全体としても当初より活気が失われてきている現在、滑川駅前を中心とした地域再生団体として「街ing滑川(マッチングなめりかわ)」が活躍している。代表をエール理事長の高木久斗さん、副代表を公園通り商店街にある「リペアワークス」社長の中島美紀夫さんが務めており、「エール」「公園通り商店街」「滑川市民交流プラザ」が一体となって人があつまるにぎわいの場を作ろうと活動している。

## 活動について

「街 ing 滑川」を構成するメンバーは、エールや公園通り商店街で商店を開いている人もいればそうでない人もいる、滑川で生まれた人もいれば他地域から移住してきた人もいるという、滑川を愛する様々な背景をもつ人たちだ。活動拠点はエールであり、毎月会議を行ってイベントを企画するなどしている。

代表の高木さんによると、この地域を活性化させるためにはモノを売るだけではなく、「コト消費」にしなければならない、という。モノを買うために訪れる場所でなく、ここに来たいと思うような「コト」を作っていくうえで、さらにはそのついでに「モノ」も買ってみたいと思ってもらうのが目標である。

街 ing 滑川には、「エール」と「公園通り商店街」それぞれで活躍するメンバーが在籍することでお互いの理解を深め、それまで関係が希薄だった両者をつなぐ役割があるのだという。言い換えると、滑川駅前を拠点に滑川で生活する人と人、活動するグループとグループとをつないでいる。

街 ing 滑川の活動内容は多彩である。そのひとつである「みんなのミライ商店街」というプロジェクトでは、毎週末にライブステージやワークショップを行っている。試しに令和4（2022）年1月のチラシを見ると、一カ月のあいだに、落語や大正琴演奏会、マジックショーなど10種類ものイベントが開催されていることがわかる。副代表の中島さんは「今いろんなことを試している時期。ここからこの地域に合うことを見つけて定着させていくことが大切」と語った。例えば東京では居酒屋で落語をきくというイベントがよくあるということを知り、需要が高いのだろうかと考えて滑川でも試してみたが、思ったよりも客が集まらなかったという。そうした経験をへて、地域には地域に合った需要の高い「コト」が存在するという事に思い至ったのだという。滑川の場合それが何なのか、幅広いジャンルの催しをする中で模索している段階なのだ。

## 恋するハワイ

これまでの街 ing 滑川としての活動の中で、2018、2019年に行われた「恋するハワイ～みんなの夢をかなエール～」を紹介したい。一見びっくりするようなキャッチフレーズだが、これは街 ing 滑川のメンバーがそれぞれのやりたい夢を、エールを中心とした会場で叶えようという思いから始まった企画である。筆者はこのイベントを実際に見たわけではないが、当時のチラシを見ると、みる（フラダンス・ウクレレバンド・タヒチアンダンスなど）・たべる（ロコモコ丼・ココナツアイス・ハワイアンステーキなどおよそ10種類）・ならう（アロマキャンドル・ビーズ手芸・ボディペイントなどおよそ20種類。親子で楽しめるワークショップが中心）・かう（シーグラスの手作り雑貨・ホノルルのアーティスト作品など）まなぶ（古代ハワイアンスピリットの教え）というカテゴリーに分かれており、1日を通して行われる、意欲的なイベントであったことがうかがえる。

たとえば、「ならう」では先で述べたようなワークショップが20種類ほど開かれる。公園

通り商店街にあるマルナカ手芸店（第4章に詳述）をはじめ、富山県内のアーティストたちが講師として参加する。また、ステージプログラムにあるウクレレコンサートに出演したウクレレバンドは、街ing滑川のメンバーを中心に結成されたバンドだ。皆がもともとウクレレを演奏したことがあるわけではないが、それぞれの仕事の合間を縫って練習し本番に臨んだという。「恋するハワイ」はステージや出店などの企画の中で様々な団体や個人が自分の力を試すことができるのが特徴だ。イベント自体を主導する街ing滑川のメンバーもこうして新しい挑戦をすることは、他の参加者と同じ目線でイベントに関わることができるという点で良い試みといえ、非常に効果的だと感じた。

「恋するハワイ」はここ数年、新型コロナウイルスの影響で開催を見送っているが、感染状況が落ち着いてきたら再開することを予定しているようだ。



写真1-4 ワークショップの様子（恋するハワイ Facebook より）



写真1-5 フラダンスステージの様子（マルナカ手芸店提供）

### みんなのミライギャラリー

エールの1階の一角に、写真1-6のような空間がある。これは、「みんなのミライギャラリー」と呼ばれるスペースである。もとは店舗が入っていた場所だが、空きテナントとな

ったためこのように名前を変えて活用されている。このギャラリーの使い道は多様で、個展を開いてみたい人やイベントをやってみたい人など、誰でも利用できる。そのためギャラリーには一般の人が製作した雑貨からプロが撮影した写真まで、多様な作品が並ぶのだという。

このギャラリースペースは、コロナ禍に自宅で手芸などをして楽しむ人が増えたことを受けて、そうした作品を披露する場を設けようという目的で始まった。初めは運営側から声をかけて出展してもらうのが基本スタイルだったが、最近では県外のアーティストが出展を申し込んでくるほどだという。高木さんは、大々的に宣伝をしていないにもかかわらず出展申し込みが後を絶たないのは、口コミの効果ではないかと推測していた。一般の利用者は「初めての個展ならこのギャラリーのサイズ感がちょうどいい」、プロは「ここで展示をするとなぜか知名度が上がる」、とSNSを中心に口コミが広がっているようだ。

「みんなのミライギャラリー」は多い時には1カ月に2回展示内容が変わり、買い物をしに来た人がふらっと立ち寄れるような場所になっている。逆に、ギャラリーを見に来たついでに買い物をしていく人の様子も見られる。この現象はまさに街ing滑川が目指す「コト」消費であるといえそうである。



写真1ー6 みんなのミライギャラリー（エールのFacebookより）

### 2ー3. 商店街の限界とにぎわいづくり

中嶋美紀夫（なかじまみきお）さんは株式会社リペアワークスの社長だ。リペアワークスは楽器の修理・販売および音楽教室をしており、富山市にも店舗がある会社である。滑川の公園通り商店街には平成14（2002）年から店舗があり、中高生を中心に滑川市だけでなく新川地区全域から利用者が集まる。中嶋さんは、公園通り商店街の町内会長と街ing滑川の副代表を兼任して、地域のにぎわいづくりに積極的に関わっている。その中嶋さんに、公園通り商店街の変遷と、そこから感じる商店街の持続可能性についてお聞きした。

公園通り商店街のにぎわいの様子について、リペアワークスが商店街に店舗をもった約

20年前は現在と比べれば店が多かったものの、人通りやにぎわいの様子はほとんど変わらないという。シャッター街化していきかねない商店街の中で店が生き残っていくためには、「専門性」が必要だと中嶋さんは語る。専門性のない、つまり「ただモノを売るだけの店」を求める客は、大きなショッピングセンターに吸い取られてしまうのだ。最近インターネットショッピングも発達していることから、商店街の客足も減っていく傾向にある。

公園通り商店街でも長く営業している店、例えば先述のマルナカ手芸店は単にモノを売るだけではない専門性のある店だ。膨大な量の手芸用品を扱い、ここに行けば求めるものが買えるということで常連客がついている。実際多くの人に親しまれ、平日でも客足が絶えない人気店だ。中嶋さんは、商店街にはマルナカ手芸店のような専門性のある店が集まれば活性化していくのではないかと語った。

しかし人が集まる店を並べても、商店街で店を出している人のやる気がないと全体としての活性化は難しいのだという。大型ショッピングセンターと違って管理の方法が個別である商店街は、各店舗が独自に利益を追求する傾向にある。淡白な言い方をすれば「同じ通路に並んでいる店同士」にすぎないわけで、みんなで協力して集客しようとかにぎわいを持たせようとかいうことは、口火を切る人がいないと始まらないのが現実だ。いくら商店街の「ソトの人（商店街に直接かかわらない、例えば市役所員などの人）」が企画を持ち込んでも、商店街で自分の仕事をしながらコストや時間を割いてなにかやろうとする人がいなければ、成功しないのである。

その意味で、「街 ing 滑川」は、滑川のなかでもやる気のある人の集まりだといえる。メンバーにはエールの人、商店街の人など様々いるが、このように各フィールドの中にいる人で、なおかつやる気のある人達がつながって一緒に活性化を目指している。商店街にいる人すべてに同じ程度のやる気があるわけではないが、街 ing 滑川のような団体が先陣を切って様々な企画をしていくことで周りを巻き込み、専門性が低く商店街から消えてしまいそうな店もみんなで守っていくというスタイルができてくるのではないかと、筆者は考える。

### 3. 瀬羽町ににぎわいを戻す試み——ベトナムランタンまつりの事例

瀬羽町は宿場回廊にあり、かつて滑川の中心として栄えていた地域の一つである。晒屋と同様に滑川駅前前の商業化に伴って衰退していったエリアであるが、現在瀬羽町には古道具屋・カフェ・古本屋・パン屋・雑貨屋・美濃焼を扱う店など新しいユニークな店が並び、若者層を中心に訪れる人が増えている。空き家を再利用しているため、かつての雰囲気そのまま残っており、どこかなつかしい雰囲気があるのも大きな魅力だ。

瀬羽町の再生の核になったのは旧宮崎酒造<sup>1)</sup>だ。大きな木造の建築物は平成 22 (2010) 年に国の登録有形文化財に指定されており、瀬羽町通りの中心として大きく門を構えている。また旧宮崎酒造は数々のアーティストのライブ・講演会・骨董フリーマーケットなどが定期的に行われる会場としても利用され、誰もが立ち寄ることのできる場所として親しま



れている。

旧宮崎酒造で行われている催しの中に、令和4（2022）年で11回目の開催を迎えた「ベトナムランタンまつり in 滑川」がある。平成22（2010）年から始まったこのイベントは、現在では瀬羽町だけでなく滑川の代表的な祭りとなっている。本項では、第1回から祭りの運営に関わっている滑川市観光協会の廣橋和親さん、「NPO法人滑川宿まちなみ保存と活用の会」の小森忠さんのお話と、まつりの準備期間および当日に私／筆者がみてきたことを加えて、「ベトナムランタンまつり in 滑川」についてまとめていく。

### 3-1. まつりのはじまりと概要

ランタンを使った祭りは世界各国、日本でも各地で開催されているが、地域によって開催時期や方法が違っている。例えば空に向かって飛ばすスカイランタンを使った祭りがあったり、中国では春節に赤いランタンを飾ったりするなど、多岐にわたって場の雰囲気づくりにランタンは使用されている。

ベトナムのホイアンで開催されるランタン祭りはフルムーンフェスティバルと呼ばれ、月に1度、ちょうど満月に当たる旧暦の14日の夜に開催される祭りである。街中の照明をランタンの灯りだけにして過ごし、人々はそこで踊りや演奏などを楽しむ。港町であるホイアンにはランタンの灯りが浮かび、幻想的な雰囲気が漂う祭りだ。また、ホイアンのランタン祭りで使用されるランタンは周りを布で覆われているもので、デザイン性に富んでいるため観光客のお土産としても人気を集めている。

「ベトナムランタンまつり in 滑川」は上で述べたホイアンで開催されているランタン祭りをモデルにした祭りである。ではベトナムという異国の地で開催されているランタン祭りがなぜ滑川で開かれることになったのだろうか。それは、廣橋さんの中学校の同級生であり、ベトナムのホテルで営業部長をしていた清水由美さんが滑川を訪れた際に、「瀬羽町の街並みがホイアンに似ている」と言ったことがはじまりだった。このイメージがきっかけとなって、にぎわい創出の起爆剤にしようとする事業が始まったのだ。立ち上げの中心となったのは廣橋さんに加えて、現在の「NPO法人滑川宿まちなみ保存と活用の会」の前身組織のメンバー5名を加えた計6名だ。祭りを始めるにあたってまず必要になったのがベトナムランタンで、メンバーのうち5人がベトナムに行って200個のランタンを持って帰ってきた。段ボールいっぱいベトナムランタンを詰めた一行は、税関で別室に呼ばれるなどの苦勞の末、無事に最初のランタン調達に成功した。

廣橋さんは、ベトナムの異文化と滑川の街並みを組み合わせることで新しい魅力を創出し、祭りがきっかけで人が集まってくることがあるといいなと語った。

### 3-2. まつりの準備

現在「ベトナムランタンまつり in 滑川」は8月上旬に、旧宮崎酒造の敷地内とその周辺で4日間行われている。はじめの2日間は完全予約制の写真撮影日、残りの2日間は一般入

場日となっており、令和4（2022）年は8月4日（木）から8月7日（日）まで行われた。

祭り前日の8月3日の昼ごろ、旧宮崎酒造にお邪魔して準備の様子を見させていただいた。ランタンの飾りつけは、廣橋さんとキャンドルアーティストの中澤泰一さんの2人が主に行っている。8月2日の時点で大体の飾りつけは終わっており、私が伺った8月3日には微調整など残りの作業をされていた。

新型コロナウイルスの感染が流行する前は、旧宮崎酒造内だけでなく周辺の瀬羽町通り沿いにも多くのランタンが飾り付けられていたが、ここ数年は室内のみの飾りつけだという。今年は周辺の店入り口付近にも各1つずつランタンが飾られ、通りにもにぎやかな雰囲気が出ていた。感染対策のために飲食ブースがなく、鑑賞メインとなった代わりに、大きく6つの写真撮影スポットが設けられた。玄関、玄関の裏庭、中の座敷、壁掛け、酒造の5つの場所にはベトナムランタンが飾られる。ただ飾るのではなく、配色を工夫したりガラスに反射させたりキラキラ光るビー玉を近くに置いたりすることで、それぞれの場所で違った雰囲気のベトナムランタンを楽しむことができるようになっていた。撮影スポットにはもう1つ、キャンドルブースもある。ベトナムランタンの周りを覆う布は経年変化のために破れてしまうことがある。その布を再利用してキャンドルにし、展示しているのだ（写真1-8）。破れた分のランタンは、毎年新しく買って補充している。ベトナムランタン祭り実行委員のメンバーがベトナムに直接調達しに行くが、今年は70個ほど新しくしたという。



写真1-7 ランタンの飾りつけの様子（著者撮影）



写真1-8 ランタンの布を再利用したキャンドル（著者撮影）

飾り付けるランタンの数は 300 ほどである。ベトナムランタンは飾られているときはふくらみを持った形をしているが、組み立てる前は折りたたんだ傘のような形をしている。形は、ほおづき、丸、四角、ひし形（この形の呼び方は中澤さんがそう呼んでいる）の 4 種類が主で、ほかにもたくさん種類があるというが、どれも組み立てる時には上部を押して広げる。これは思っているより力がいる作業だ。こうして広げたランタンを、脚立を使って 1 つずつ丁寧に飾っていく。飾るときには、配色のバランスを考えながらランタンの柄や色を選んでいくという工夫がある。また、ランタンの中に入れる灯りにも工夫がある。もともと白熱灯ばかりだったが最近は LED も増えてきており、外から見たときに LED の方が明るくみえる。白熱灯と LED の発光の仕方にはそれぞれよさがあり、組み合わせ方で雰囲気も変わるため、バランスをみながら配置していくのだ。

準備の日、会場では CD プレイヤーから音楽が流れていた。当日も流す予定だという音楽はベトナムの「トルン」という竹琴の演奏だ。もともと少数民族の間で使われていた楽器であるために、数少ないトルン奏者である小栗久美子（おぐりくみこ）さんの演奏を雰囲気づくりとして流すということだった。

### 3-3. フォトデー

1～2 日目は完全予約制の写真撮影日（フォトデー）となっている。18 時から 22 時まで、30 分ごとに区切られた時間に 15 人ずつ会場に入場することができる仕組みだ。1 人につき 500 円の入場料がかかる。入場者数を制限するのは、人が多いと本来撮りたいものとは違う、余計なものが映り込んでしまう可能性があるからで、少人数でストレスなく撮影を楽しんでもらう工夫だという。令和 4（2022）年は 1～2 日目とも定員に達したということから、その人気ぶりがうかがえる。

私が訪れた 8 月 5 日 19 時ごろ、旧宮崎酒造の入り口には予約した時間帯を待つ 10 名ほどの列ができていた。三脚を片手にした人や一眼レフカメラを首から下げた人が目立った。いわゆるカメラ趣味のような人がほとんどだと予想していたが、意外にも子供連れが多く、浴衣を着た子どもとそれを撮る母親の姿がしばしば見られた。人数制限がされているため会場内は広々としており、1 つの撮影ブースに 2 組以上が重なって撮影するということもなさそうだった。時間が来るとスタッフが呼びかけて、次の時間帯の予約客と入れ替わるという流れをとっていた。

この日来ていた大学生の女性 2 人組に話を伺うと、もともと富山県出身ということでイベント自体は以前から知っていたが、祭りに来るのは初めてだということだった。写真を撮るのが趣味ということで、今回フォトデーの予約を取って来場していた。雰囲気が幻想的で写真を撮るスポットもたくさんあって満足していると語ってくれた。

### 3-4. 一般入場日

コロナウイルスが流行する前は、一般入場の日には入場制限を設けず自由に人が出入り

できる形態をとっていた。旧宮崎酒造の外にもランタンがたくさん飾られるだけでなく、瀬羽町の通りには飲食できるスペースもたくさん設けられていたため、満員電車のように道が来場者でいっぱいだったという。今年は、1度に館内に100人以上が入らないように人数制限が設けられた。

8月6日の20時ごろ、旧宮崎酒造の前には長蛇の列ができていた。今回は天候が悪く足元もよくなかったがフォトデーのときの落ち着いた雰囲気とは一変し、屋内は大勢の人でにぎわい、前に進むのもやっとなくらいだった。人数制限のため、一定時間が経つと何組かが館内に入れるという流れになっていた。

フォトデーと違うところは、まず物品販売が多いという点だ。入り口でカップ麺のフォー（ベトナムの料理）が販売されていた（写真1-9）。例年は屋台でフォーの販売をしていたが、人手不足からやめたそうだ。中に入ると初めに雑貨販売ブースがある。これはフォトデーのときからあったが、廣橋さん自らがベトナムからもってきたベトナム雑貨や、廣橋さんの知人のハンドメイド雑貨が売られていた。バッグやアクセサリなど、個性的なデザインが特徴的であった（写真1-10）。



写真1-9 祭りで販売されるフォー



写真1-10 祭りで販売されたベトナム雑貨

(いずれも著者撮影)

さらに奥に進むとベトナム人・中国人ブースがある。ここでは富山県在住の中国人の手作り雑貨と、同じく富山県在住のベトナム人によるベトナム料理「サンドバインミー」<sup>2)</sup>が販売されていた。販売をしていたベトナム人の方にまつりの雰囲気について質問すると、「本当のホイアンのランタン祭りと同じような雰囲気だととても楽しい」と答えてくれた。

また、一般入場期間には「ダーカウ」の体験ができる。ダーカウとはベトナムの国技的スポーツで、バドミントンの羽のようなものを蹴り合う。屋外でカターレの選手がダーカウをしているところを鑑賞できるというイベントが企画されていたがこの日は雨天のため見ることができなかった。しかし屋内では子供を対象にしたダーカウを投げるゲームが体験できるコーナーが開かれており、ダーカウがかごに入ると光るおもちゃがもらえるという特

典付きで、参加者が楽しむ様子がみられた。このコーナーは「ばいにゃこ村」（第4節で詳しく述べる）が運営しており、非公認ご当地キャラクターである「ばいにゃこさん」も会場に登場し、子供たちと触れ合うことで祭りを一層盛り上げていた。

### 3-5. まつりの運営について

祭りの運営は、ベトナムランタンまつり実行委員によって行われている。メンバーは基本的に有志で構成されており、はじめはmixiやFacebookを使って協力者を募ったそうだが、廣橋さんの知り合いの人もいれば直接に関係のなかった人もいるという。またメンバーは滑川在住の人ばかりではなく、富山市から参加している人もいる。なお、当初の立ち上げメンバーの6人は、現在は運営にほとんど関わっていないという。開始から3、4年経った頃、若手の有志が入ってきたことで、タイミングをみてメンバーチェンジを行ったそうだ。立ち上げメンバーである小森さんは、「若い人を中心にになって運営してもらうことで文化を継承していくことができる。若い人の視点で新しい企画や集客をしていくことが大切だ」と語った。現在は15人ほどメンバーがいるそうで、若手が中心になって運営をしているということだ。廣橋さんや小森さんはメンバーチェンジが行われてからは基本的に「傍観者」であり、どうしても地元の人たちに話をして理解してもらう必要があるときなどに、橋渡しをするなどして陰で支えている。

祭り期間中は、それぞれの日に10名程度のスタッフがいた。スタッフはベトナムの国旗が描かれたTシャツを着用しており、交通整理、写真撮影、販売、受付などそれぞれ円滑な運営に協力していた。年齢層は比較的若く、20、30代が多く見受けられた。友達の紹介で、今回初めて参加したという女性スタッフもいた。普段は滑川で農業をしているという男性スタッフは、2014年に初めて訪れたベトナムランタンまつりで異文化の融合に感動し、その後スタッフとして参加するようになったという。このイベントをもっと多くの人に知ってもらいたいと、イベントに対する強い思いを伝えてくれた。

### 3-6. まつりの変化

今年で11回目の開催を迎えたベトナムランタンまつり in 滑川だが、10年という期間中でどのような変化が見られたのだろうか。

まず、祭りの開催期間は初め土日の2日間であり、現在のようなフォトデーは設けられていなかった。新型コロナウイルスの影響でオンライン開催となった令和2（2020）年に、写真を撮りたいという人たちのために、1日フォトデーを作ったのがその始まりである。それ以来需要が増え、フォトデーを一般入場日の前に2日間設ける仕組みが作られたという。

来場者は平成22（2010）年、第1回の時は1,500人だったが、およそ10年後の令和元（2019）年には18,000人もの方が訪れた。2010年代の半ばには滑川の花火大会と日程が重なったことがあり、その年にはさらに大勢の方が訪れたという。令和2（2020）年は新型コロナウイルスの関係で祭りの開催が難しくなったが、なんとか続けたいという思いでオンライ

ン開催をした。ベトナム現地と滑川を中継で結ぶなど、普段の祭りではできないような企画を行ったという。

次に協力者や周囲の変化についてである。立ち上げ当初から活用している Facebook に加えて、最近は様々な SNS で宣伝活動を行っている。その効果もあって、年々協力者は増えている。準備の時に廣橋さんとともにランタンを飾っていた中澤さんも、4、5回目のまつりから協力しているようだ。キャンドルアーティストである中澤さんにはランタンの置き方などのプロデュースを頼んでおり、その甲斐もあって年々ランタンの飾りつけも豪華になっている。

イベント内容の変化もみられる。SNS で祭りを知ったベトナム人の来場が増え、ベトナム人の来場者がより楽しめる内容が取り入れられた。コロナ禍以前の話だが、実行委員会の若い女性メンバーが提案したベトナムの民族衣装「アオザイ」のファッションショーは大きな人気を呼び、その数は 100 着にも増えたという。また、新型コロナウイルスの流行前には飲食の屋台やステージライブが行われていた(写真 1-11 および 12)。初めは実行委員会からベトナム県人会に頼んで、フォーを屋台で販売してもらっていた。そこから年々屋台は増え、ベトナム料理やベトナムの食材を使った食べ物、また滑川の深層水を使った食品などの屋台が出ていた。ステージライブにはトルン奏者の小栗久美子さんを招待したり、ベトナム人で構成されたバンドの演奏や歌唱などが行われたりした。富山大学・金沢大学のベトナム人留学生を呼んでブースを作ってもらうなど、ベトナム人を積極的に呼び込むようになった。このような工夫で祭りは多くの客を呼び、ますます賑わっていった。コロナ禍で制限があったが今後は徐々にまた拡大させていきたいと廣橋さんは語った。

このようにベトナムランタンまつりは 10 年以上の継続の末に今やねぶた流しと並んで滑川を代表する祭りになった。年々滑川のベトナムランタンの貸し出しは増えており、富山県内では黒部のパッシブタウンに飾られ、県外では神奈川県が多摩ランタンフェスティバルに滑川特設ブースを出展するなど、全国に広がっている。ランタンは滑川と全国各地をつなぐ大事な役割を担っているのだ。



写真 1-11 および 1-12 コロナ流行前の祭りの様子  
(ベトナムランタンまつり Facebook より)

#### 4. 「光と灯りの滑川」を新たな文化に

現在、新たに滑川を「光と灯りの街」として定着させようとする試みがある。滑川はかねてより「光と灯りの街」というキャッチフレーズを掲げている。このフレーズには、滑川市に伝統としてあるホタルイカ漁・龍宮まつり三尺玉<sup>3)</sup>・ねぶた流し・東福寺野の夜景がどれも「ひかり」に関係するものであり、産業も生活する人も皆が輝く街でありたいという願いが込められているようだ。しかし実際住民の方に聞いてみると、滑川が光の街だという認識は薄い。そうした現状を変えて、滑川に住む人にも市外から訪れる人にも「光と灯りの街」として認識してもらうべく、廣橋さんを含む「光と灯りのプロジェクト実行委員」が中心となって、令和4（2022）年までに以下のような通年のイベントが完成した（各イベントの内容や実行委員については4-2で説明する）。このように1年を通してイベントを行うことで、滑川に「光と灯り」を文化として定着させたいという思いがあるのだ。

表1-1 光と灯りの滑川プロジェクトのイベント（開催月順）

開催月	イベント名（開始した年）
4月	サクラキャンドル（2022年）
6月	花しょうぶライトアップ（2019年）
8月	ベトナムランタンまつり（2010年） 光と灯りの夏祭り（2022年）
10月	あかりがナイト（2015年）
12月～3月	キラリエ（2020年）

この通年のイベントの中で最も長く続いているのは第3節で取り上げたベトナムランタンまつりだ。廣橋さんは13年間祭りを休むことなく開催してきたが、新しい何かを文化として認めてもらうには「継続すること」が大切だという。滑川を「光と灯りの街」にしようと活動するなかで、「はじめはよそから来た人間が何を勝手に始めているのだと思われていた。それでも10年続けていたらだんだん認めてもらえるようになってきて、協力してくれる人も年々増えてきた」と語る。通年のプログラムが完成したのは令和4（2022）年のことで、まだまだ文化として定着させるには長い時間がかかる。今の目標はこのイベントを細々とでも続けていくことだそうだ。そして事業を始めた以上は責任をもってやり続けたいという気持ちがモチベーションとなっている。



図1-3 各イベントの開催場所

#### 4-1. 光と灯りのプロジェクト in 滑川

先で滑川を「光と灯りの街」にするべく行われている通年のイベントを紹介した。このイベントの企画と運営は、「光と灯りの滑川プロジェクト実行委員会」が行っている。はじめに「光と灯りの滑川プロジェクト」について説明する。

このプロジェクトは、令和3（2021）年11月に行われた富山県成長戦略ビジョンセッション<sup>4)</sup>において「滑川市を光と灯りの街にしよう」という提案がされたことから始まった。提案したのは、「一般社団法人ばいにゃこ村」の代表、樋口幸雄（ひぐちゆきお）さんである。ばいにゃこ村は、富山県の非公認ご当地キャラ「ばいにゃこさん」（写真1-13）からスタートした民間団体で、平成26（2014）年に発足した。「子どもたちが誇れるふるさと」を目指して、滑川市で賑わい創出事業・リベラルアーツ事業・ボランティア事業を行っている。活動のモットーは「ゆるく、たのしく、おもしろく」だ。

ばいにゃこ村はなるべく行政に頼らず限られた財源の中での活動を行っているが、企画の特徴は、市民が中心だということだ。樋口さんは、「過去に滑川は閉鎖的と称されることもあったが、市民の中には街の賑わいを求めている人たちもたくさんいる。そのような考えの人たちが埋もれてしまわないように、楽しいイベントを増やしたい。そして参加する人たちに楽しいと思ってもらいたい」と語る。





写真1-13 ばいにゃこさん（「日本ご当地キャラクター協会」HPより）

光と灯りの滑川プロジェクトは、現在樋口さんを中心に実行委員会のメンバー約20名で運営されている。メンバーには観光協会の廣橋さんやキャンドルアーティスト中澤さんをはじめ、滑川市で活躍する様々な団体の代表者などが名を連ねている。

滑川市には、このプロジェクトの活動が始まる前から、「光と灯り」に関するイベントが複数存在していた。しかしそれらは個別に企画運営されていたためつながりが薄かったという。「光と灯り」を「滑川の文化」にするには、まず運営する側が意思疎通を図る必要がある。この考えから、樋口さんは個別の事業を1つのものとして取りまとめることにし、実行委員会を組織した。

#### 4-2. これまでのイベント

令和4（2022）年10月の時点で行われている光と灯りのイベントは本節のはじめで表にした6つだ。表を参照すると、プロジェクトが始まる前から行われているイベントが4つ、令和4（2022）年に新しく始まったイベントが2つあることが分かる。初めに既存のイベントを開始年順に説明する。

平成27（2015）年から始まった「あかりがナイト」は、キャンドルアーティスト中澤泰一さんが立ち上げたイベントである。毎年10月にほたるいかミュージアム周辺で行われ、綺麗に飾られたキャンドルの光を楽しむことができるイベントだ。キャンドルブースは10程あり、NPO法人や企業などがそれぞれのブースを担当している。また、飲食の屋台が並び、音楽ライブが行われるため、来場者は夏の花火を見る気分で光を楽しむことができる。当初は中澤さんがFacebookなどのSNSを使って集めた有志たちとともに運営をしていたが、現在は「光と灯りの滑川プロジェクト」の1つのイベントになっており、実行委員会のメンバーも協力している。

中澤さんはキャンドルアーティストとして数々の「光と灯りの滑川プロジェクト」に関わっているが、そのモチベーションは「まず自分が楽しいと思えること」にあるそうだ。キャンドルの光が好きで、それをほかの人にも見てもらいたい、光を見て笑顔になる人たちの姿を見ることが原動力となっていると、中澤さんは語った。

6月に行われる「花しょうぶライトアップ」は、滑川市の行田公園で行われる「花しょうぶまつり」に付随しておこなわれる。行田公園では6月中旬から下旬にかけて花しょうぶ88種類、約4万株が咲き誇る。「花しょうぶまつり」は以前からある祭りであったが、ここをライトアップしようと廣橋さんは考えて、令和元（2019）年に開始した。花しょうぶ自体は全国様々な地域で見られるが、どこも人が訪れにくい場所にある。滑川の花しょうぶは街中の公園にあるから、ライトアップをしたらもっと多くの人が訪れるようになるのではないかと考え始めたそうだ。当初は屋台などの出ないライトアップのみのイベントで、準備も廣橋さんと中澤さんのふたりだけで行っていた。それがいまは、「光と灯りの滑川プロジェクト」ができたおかげで協力者が増えて、より凝った飾りつけができるようになったりフリーマーケット・体験教室が開かれたりするようになった。一方で、花しょうぶの管理状況が悪く花が減少してきているという問題があり、ライトアップにも影響が出ていると嘆く向きもあった。

「キラリエ」は令和2（2020）年から始まった滑川市のイルミネーションイベントだ。ライオンズクラブや滑川商工会議所青年会が中心となっているが、地元の有志が集まって運営している。

キラリエ実行委員長の竹島健太郎（たけしまけんたろう）さんは、滑川で歯科医をする傍ら、滑川市唯一の療養保育園<sup>5)</sup>理事長を兼務している。竹島さんが所属するライオンズクラブではもともと事業の1つとしてイルミネーションを毎年行っていたが、滑川駅前で行われていたそれは規模も小さく、大々的に宣伝したりすることもなかった。竹島さんがライオンズクラブのイルミネーション担当になったのは、ちょうど新型コロナウイルスの流行下であり、滑川でも多くのイベントの中止が相次いでいた。そこで「イルミネーションは外でやるイベントでこのご時世でもやりやすい。せっかくの機会だし大きなイベントとしてやり直してみよう」と考え、「あかりがナイト」をやっていた中澤さんに声をかけたそうだ。

キラリエは12月から3月までと長期間のイルミネーションイベントで、滑川駅前中央公園をイルミネーションとキャンドルで飾る。期間中に、クリスマス、バレンタインデー、ホワイトデーがあるため、それらの日程にはイルミネーションに加えてそれぞれにちなんだイベントも行われている。

滑川でイルミネーションイベントを開くには、より人の集まりやすい富山や高岡とは違った、興味を引くなにかがあることが必要だ。竹島さんによると、他のイルミネーションと差をつけたところは設備の新しさだという。使用するライトの数は富山県で一番多く、雪に反射すると一層きれいにみえる。木にライトを巻きつける方法にも工夫があり、普通なら幹に沿って飾り付けるところを、幹に巻きつけるようにライトを巻くことでより明るく光って見えるようになる。この方法のほうが、準備が大変で人手が必要だが、ボランティアの手でまかなわれており、有志の中に関連業者の方がいるため費用が削減できている。



写真 1-14 キラリエの様子（「キラリエ 滑川を彩る光の祭典」公式 HP より）

#### 4-4. 新しく立ち上げられたイベント

表に記載した新たなイベントは2つある。4月の「サクラキャンドル」と8月の「光と灯りの夏祭り」だ。サクラキャンドルは、滑川市柳原公民館前の河川敷で、しだれ桜とキャンドルの光を楽しめるイベントだ。光と灯りの滑川実行委員会を中心にボランティアを募り、準備と運営が行われた。「光と灯りの夏祭り」は滑川駅前中央公園をキャンドルで飾り付け、ビアガーデンや屋台、ワークショップを行うイベントだ。

このようなイベントは、樋口さんを中心に実行委員会のメンバーが意見を出し合って企画している。企画していく流れはLINE グループ上でイベントの大まかな骨組みが共有され、そこにメンバーが提案や意見をしていき構想を練る。そして必要に応じて会議が行われ準備を進めていくというものだ。私は実際の会議に立ち会っていないが、LINE グループに参加させていただき、構想を練る段階の様子を見ることができた。

例えば「花しょうぶライトアップ」にて行うキャンドルの飾りつけにおいては、まずキャンドルアーティストの中澤さんから装飾とライトアップしたい場所の概要が、写真と説明書きでグループに共有された。その後で準備しなければいけないものを考え、分担して手伝えることをそれぞれが行うという形だ。実行委員会のメンバーは皆各々の仕事を抱えているため、全員が毎回の企画に参加できるわけではない。しかし当日参加できなくても案を出したり準備を手伝ったりして、できる範囲で協力していることが分かった。

新しいイベントを立ち上げ、それを継続していくのに大切なことは、「参加した人が楽しいと思える企画にすること」、それらを「地域の人たちに楽しんでもらえるイベントにしていくこと」だと樋口さんは語る。地域のイベントとして行う以上、そこに住む人たちの協力があって成り立つのだから、それがないと継続していくことは難しいのだという。

光と灯りの滑川プロジェクトは2022年度に始まったばかりの事業でまだ街の認識が薄い。滑川がこのキャッチフレーズを掲げていくには市民の意識が変わらなければいけない。住む人が「滑川は光と灯りのイベントをたくさんやっている」という意識を持つように

なることが、樋口さんをはじめとする、プロジェクトメンバーの掲げる理想なのだ。

樋口さんは、今後はプロジェクトマッピングなども取り入れたいと考えていると語る。ランタンとのコラボレーション企画にして、既存のものに新しいものを加えてバージョンアップさせたいと胸の内を明らかにした。

## 5. 滑川のこれからを担う人たち

### 5-1. 外から来た人の力

滑川のにぎわい創出について調査を進めていく中で、これまで紹介したような先陣を切って活動している人たちに出会った。その人たちの多くに共通していたのは「もともと滑川の人ではない」ということだ。滑川市観光協会の廣橋さんは高岡市から、キラリエ実行委員長の竹島さんは魚津市から滑川市に移住している。また、リペアワークスの中嶋さんは石川県から、キャンドルアーティストの中澤さんは岐阜県から、ばいにゃこ村の樋口さんは山梨県からと、富山県外から移り住んだ方も多い。こうした滑川市外あるいは富山県外出身者に、まちなみ保存と活用の会の小森さんやほたるいかミュージアム館長の小林さんなど、滑川市で生まれ育った人たちが加わって、滑川のさらなる発展に向けて活動している。

では、なぜ地元が滑川の人たちよりも県外や市外から移り住んだ人の方が活発にまちづくり活動に加わる傾向があるのだろうか。話を聞く中でよく聞いたのは「地元の人よりも外から来た人のほうがまち自体に関心がある」というものだ。実際に聞いてみると、市外や県外から来た人達は「滑川には海があり山があり景色がきれいでとてもいいところだ」と口をそろえる。一方で、滑川市で生まれ育った人たちは、滑川の魅力を語ろうとしない。ためしに、現在滑川市から富山大学に通っている学生に滑川の魅力について聞いてみたところ、「特に何も思いつかない。強いて言うなら静かなことくらい」と返された。

外から来た人には比較対象があるため、地元の人にはない視点からのアプローチができ、地元の人が見つけれない魅力を見出すことができる。滑川で新たな魅力の生かし方を発見し活動している人たちに県外や市外出身者が多いのにはこのような理由があると考えられる。自分に置き換えて考えてみると、地元である福井県には買い物する場所も遊ぶ場所もなく、旅行先としてとてもおすすりめできないとよく周りの友人に話している。だが福井県を旅行で訪れた友人は私が気づかなかった福井の魅力を語ってくれたという経験がある。

滑川のにぎわい創出を行う人たちの中に市外・県外出身者が多いのは、彼らがもともとまちづくりに取り組みたいと思っていたということでは必ずしもないのかもしれない。むしろ、外部の眼によって、滑川の魅力の新たな生かし方に気づくことができたという理由も大きいと考えられる。

### 5-2. 「何もない」がいい

滑川で活動する人たちから聞いた「滑川の魅力」には、先で述べた景観の良さのほかに、

「何もないところ」があった。これは「魅力がない」という意味ではなく、取り立てて大きなイベントやキャッチフレーズがないということだ。だからこそ魅力を活用した文化づくりができた、新しいイベントを作ったりしやすいのだという。

例えば廣橋さんは、出身地である高岡市との違いを次のように語る。「高岡では1つなにかイベントをやろうとするだけで本当に大変。高岡にはもともとたくさんイベントがあって関わる人も多く、いろんな声が寄せられるから簡単にできることではない。それが滑川だとやってみようと思ったことに対して寛容だから気軽に企画しやすい」。誰もがいろんなことに挑戦できるという意味で、「何もない」ことが滑川でにぎわいづくりが進められやすい理由の1つだということがわかる。

他方で、「何もない」ところがいいとは言っても、そこに新しく構築される観光資源や文化をブランディングしていくことは不可欠だ。何もないところに何かを作ったら、(例えば「光と灯りの滑川」)それを発信していかなければならない。ほたるいかにミュージアム館長の小林昌樹さんは「光と灯りは最近よく聞くがインパクトとしてはまだ根付いていないように感じる」と語る。ホタルイカやほかの食のように地域特有の観光資源ではない「光」をどのようにアピールしていくのかは、これから試されるのだともいえる。

### 5-3. 時代に合わせて発信していくこと

ばいにゃこ村は、代表者の樋口さんと「ばいにゃこさんのファン」と呼ばれる有志のボランティアによって構成されている。後ろ盾のない団体である以上、多くのボランティアを集めることが必要だ。広報の仕方で樋口さんが意識していることは、「自分を魅せていくこと」だ。イベントの内容を宣伝するのではなく、「ばいにゃこさんがやっています」、「樋口がやっています」、というように個人にスポットを当てた方法で宣伝していく方法である。例えば海岸清掃をするにあたって「海岸清掃をするので集まってください」と宣伝しても、その地域の人たちしか集まらない。しかし「滑川の海岸にはルアーがたまっていて子供たちが遊べない海になっているので、ばいにゃこさんと一緒に清掃しましょう」と呼びかければ、メッセージに共感した人が各地から集まってくるのだ。これは完全に時代に合わせた方法である。同じ内容を発信していても集まる数に差があるのはそれを行う個人に影響力があるからだ。つまり今は個人が社会に影響を与える時代だといえる。

広報で活躍するのはSNSだ。樋口さんは主にTwitterとFacebookを使用しており、ボランティアのターゲット層である30代を網羅しているという。若い人の文化に合わせていくことの重要さから、今後はInstagramやtiktokの導入も検討しているとのことであった。

### おわりに

私はフィールドワークが本格的になった2022年の春ごろから夏にかけて、自分が文化人類学分野専攻を選択したことを心から後悔していた。アポ取りの電話も、自分が聞きたいこ

とを整理して話すことも苦手で、毎週の調査が憂鬱だったからだ。また、調査地が滑川に決まってからというもの、手当たり次第にお話を伺いに回ったのはよかったものの、調査の方針がなかなか決まらず、同級生からの遅れを感じて焦ってもいた。

そんな中で、私の興味に基づいて様々な人とのつながりをつくってくれたのが樋口さんだった。そこで出会った滑川のキーパーソンたちもまた、新しいつながりを提供してくださった。そうした前向きな方々と会って話しているうちに、いつのまにか自分も積極的に調査に向き合えるようになっていた。8月の調査合宿中に実際に参加することのできたベトナムランタンまつりは、特に有意義な時間になったと感じている。

私の調査、それにこの章の執筆も、滑川で活動する多くの方に支えられて進められた。滑川と市民・富山各地・日本をつなげようと活動している人たちは、滑川市内でのつながりだけでなく、私のような外から来た学生も快く受け入れてくださったのだ。「光と灯りの街」を文化にするという新しい取り組みが、勢いのあるキーパーソンを中心に今後盛り上がっていくに違いないと感じるのは、こうした私個人の経験にも裏付けられている。

本章を締めくくるにあたって、調査や執筆にあたってお世話になった廣橋さんや樋口さんをはじめとする多くの方に向けて、滑川を私の第二の故郷としてその魅力を伝えていきたいという気持ちを込めて、感謝を述べたい。

## 注

- 1) 明治8 (1875) 年に宮崎家の所有になり、酒造業が営まれていた。現在は戦後に改変された外観が往時の姿に復元されている。
- 2) ベトナムのサンドイッチ。具材には野菜と肉が合わせられることが多く、パテやレバーペーストが使われるのが特徴的。
- 3) 毎年7月にほたるいかミュージアム周辺で行われるまつりで打ち上げられる花火の1種。県内で唯一の正三尺玉で迫力があることで有名。
- 4) 富山県の成長戦略のビジョンとして「幸せ人口 1000 万～ウェルビーイング先進地域、富山～」が打ち出された。このビジョン実現に向けて意見交換を行うために15の市町村で開催された会議
- 5) 一般的に保育所に預けることのできない、病気にかかってしまった子供や、病気が治ったものの、普通の保育メニューを受けるのが難しい回復期の子供の対応を行う病児病後児対応施設

## 参考にした新聞記事およびウェブサイト

キラリエ 滑川を彩る光の祭典ホームページ〈<https://www.kirarie.org/>〉(2023年1月29日最終閲覧)

滑川市立博物館ホームページ：資料紹介 Vol.6 昭和30年代の滑川

〈<https://www.city.namerikawa.toyama.jp/soshiki/35/introduction/484.html>〉

(2023年8月30日最終閲覧)

日本ご当地キャラクター協会ホームページ (<http://gotouchi-chara.jp/>) (2023年1月29日最終閲覧)

## 第2章 ネブタ流しの今昔と子供の参加から見る可能性

大井 萌莉

### はじめに

私は祖父母の家が滑川市にあるため、幼い頃からよく滑川を訪れていた。その中で夏祭りなどの地域行事に参加することが多くあったが、ネブタ流しというものは知らなかった。令和3（2021）年5月に滑川市立博物館を訪れた際、ネブタの模型とともに実際にネブタを燃やしながら海に入る様子を撮った写真が飾られているのを見て、滑川にもこのような伝統的な地域行事があるということに衝撃を受けた。私は滑川のことをよく知っていたつもりでいたが、まだまだ知らないことが多くあることを実感し、今回その一つであるネブタ流しを調査したいと思った。

フィールドワークでは、主に地域住民へのインタビューを行なった。滑川市内にある寺家小学校にも訪れ、子供達がネブタを制作する様子を見学させて頂いた。また、滑川市立博物館や滑川市立図書館で入手・閲覧出来る資料を中心に、文献調査も行なった。令和3（2021）年と令和4（2022）年にはネブタ流しを実際に見に行き、その様子を観察した。

本章の記述は、以上の調査データをまとめたものである。第1節でネブタ流しの概要を述べ、第2節で当日までの様子を記述する。第3節では地域住民の方が感じる昔と今の違いを、第4節ではネブタ流しが抱える問題を述べ、最後に第5節で今後の可能性についてまとめる。

### 1. ネブタ流しの概要

#### 1-1. ネブタ流しとは

滑川市では、毎年7月31日に和田の浜でネブタ流しが行なわれる。毎年複数の地域が参加するだけでなく、当日が土曜日や日曜日などと重なるときには、県外からも多くの見物客が訪れる。

ネブタ流しは東北地方を中心によく見られる祭りだが、関東地方や南九州地方など全国各地で行なわれている。地域によって呼び方は様々で、青森県や秋田県では〈ネブタ祭り〉、関東地方では〈ネブタナガシ〉、鹿児島県では〈ネブイハナシ〉と呼ばれている。全国的に有名な青森県青森市のネブタ祭りは特に規模が大きく、毎年8月2日から7日にかけて行なわれ、多くの観光客が訪れている。

滑川市のネブタ流しは日本海側の南限で、正確な起源は不明であるものの、100年以上前から続いていることが確認されている。人々は“ネブタ流され、朝起きやれ”と掛け声を発し、町内を練り歩きながらネブタを和田の浜まで運ぶ。そして夕方になると一斉に各ネ



ブタに火を付け、海に流す。

### 1-2. ネブタ流しの歴史

滑川のネブタ流しに関する最初の文献は、ドイツの地質学者ハインリッヒ・エドムント・ナウマンが発表した論文『日本の自然地理及び日本人についての短評』（明治20〔1887〕年）であるとされる。しかし、いつからネブタ流しという行事が行なわれるようになったかは定かではない。文献からナウマン博士がネブタ流しを見た日が明治9（1876）年7月31日だと推測されることから、100年以上前から続いていることが分かるだけである。

ネブタ流しを7月31日に行なう理由としては、〈夏越の祓〉が関係しているとされる。春秋の変わり目には病虫害が発生したり疫病が流行したりする。当時の人々はその原因を怨霊や悪霊による祟りであると考え、霊を鎮めるために祭りを行なった。霊を鎮め、穢れを祓うために最も効果がある夏越の祓が旧暦6月（新暦7月）末日であり、後述するようにネブタ流しにも穢れを海に流すという意味合いが込められていることから、同時期にネブタ流しを行なうようになった。この時期に行なうことで、旧暦7月（新暦8月）13日からのお盆に、清らかな身体で祖霊を迎えることが出来た。

### 1-3. ネブタ流しに込められた意味合い

ネブタ流しには、4つの意味合いがあるとされている。1つ目は、先に述べたように、ネブタ流しと夏越の祓には深い関わりがあることから、〈夏越の祓〉の意味であるといえる。2つ目は、〈眠り流し〉の意味である。ネブタは眠気を意味するとされているため、ネブタ流しという名前からもその性格を読み取ることが出来る。ネブタ流しは夏に行なわれ、それが過ぎると収穫の秋を迎える。収穫作業の際に眠気によって労働が妨げられることを避けたり、眠気による怪我を防いだりするために、この行事に眠りを流すという願いを込めたといえる。3つ目は、〈疫病送り・虫送り〉の意味である。戦前までは、ネブタの中にイナゴやヘビ、病人の汚れ物などを入れていたという。戦後これは行なわれなくなったが、これらをネブタと共に燃やすことは、病や害虫被害を火によって浄化する意味合いが込められていたといえる。4つ目は、〈七夕・お盆〉の意味である。現在では七夕と聞くと、織姫と彦星が一年に一度会うことの出来る日という印象が強いが、本来はお盆を迎えるための行事の一つであった。しかし新暦7月の七夕が一般的になったことでお盆との関わりが薄れたとされる。滑川のネブタ流しでは輪飾りにした短冊が松明に飾られることから、旧暦7月の七夕を採用していることが分かる。また、ネブタ流しがお盆を迎えるための行事であることに関して、茄子や胡瓜も松明に飾られることから、これら3つの行事の関わりを感じる事が出来る。

これらのことから、滑川のネブタ流しには様々な性格が入り混じっており、中には疫病送りや虫送りのように廃れていったものもあることが分かる。

## 2. ネブタ流しの様子

令和4（2022）年度の調査では、主に寺家小学校と東地区公民館を訪れ、当日に備えてネブタを制作するところや、当日午後からの準備と実際の行事の様子を見学した。以下、第1項では寺家小学校でのネブタ制作の様子を、第2項では7月31日に行なわれたネブタ流しの開始数時間前から終了までの様子を、そして第3項ではネブタ流しの参加者へのインタビューの内容を記述する。

### 2-1. 寺家小学校における準備の様子

寺家小学校では、毎年5年生と6年生が学校行事の一環で、〈ネブタ作り〉を体験している。5年生は飾りを、6年生はネブタの松明部分を制作する。子供達に指導するボランティアとしては、東地区公民館の方や近所の住民、育友会が参加する。この体験行事は、子供達と地域住民との交流の場としての役割も果たしている。

調査を行なった令和4（2022）年は7月8日（金）にネブタ作りが行なわれるということだったので、筆者はその様子を見せて頂いた。本来であれば5年生もネブタに付ける飾りを制作する予定だったが、新型コロナウイルスによる学級閉鎖のために、リモートで参加する形になった。会場となる寺家小学校の体育館では、体操服に着替えた6年生が集まり、どこかそわそわした様子で開始を待っていた。ボランティアの紹介が終わると、子供達は2つの班に分かれ、それぞれ制作を進めていく。松明の材料としては、ムシロ6～8枚、松明を縛るためのロープ約15本、松明を立てる際に支えるための太いロープ4本、大量の藁くず、青竹4本が用意された。制作過程は以下の通りである。

表2-1 ネブタ作りの手順（実際の様子をもとに筆者が作成）

1	松明を縛るためのロープ（両手を広げた幅×5の長さ）を用意する
2	ロープの片側の先端に輪っかを作る
3	2人一組のペアを作り、ロープの両端を持って並び、床に等間隔に並べる
4	並べたロープの上にムシロを敷き詰める
5	中心部に藁くずを積み重ねる
6	藁くずを包み込むようにムシロを丸め、ロープでしっかりと縛って固定する
7	ロープとムシロの間に青竹を4本通す
8	太いロープ4本を松明上部に通し、松明を立てて完成

まず、子供達は両腕を大きく広げ、ロープを持ったボランティアの前に並ぶ。ボランティアの方々はロープを腕の長さの5倍分のところ（約7メートル）で切り、それぞれに手渡す。受け取った子供達は別のボランティアの所へ向かい、次の作業を教えてもらう。ここではロープに輪っかを作る作業を行ない、大人の手のひらより少し大きい程の輪っかを

ロープの片側に作り、解けないようにきつく縛る。輪っか作りの作業を終えた子供達は、次に2人1組のペアを作り、2人のうち片方のロープを使ってブルーシートが敷かれた場所へ進む。このとき、2人で1本のロープを使うことから、松明作りに使われなくなったロープも出てくるが、子供達全員にロープ作りを経験してもらいたいという思いから、全員分のロープを作ったと推測される。

ペアを作った子供達はロープの両端を持って並び、ブルーシートを敷いた床の上に等間隔に並べていく。その上にボランティアの方々がムシロを隙間なく敷き、その中心に藁くずを積み重ね、松明の中心となる部分を作っていく（写真2-1）。この作業は子供には難しいため、ボランティアが中心となって行ない、子供達は真剣な表情でその様子を見ていた。藁くずを上から下までまんべんなく重ね置いた後は、それを下に敷いたムシロで包み（写真2-2）、中から藁くずが溢れ出てこないように、ロープでしっかりと縛り上げる（写真2-3）。



写真2-1（左） ムシロの上に藁くずを重ねる（筆者撮影）



写真2-2（右） 藁くずをムシロで包む様子（筆者撮影）

その後子供達は一列に並び、片側の先端が細くなっている5メートル程の青竹を受け取り、ロープとムシロの間に差し込んでいく。この時、松明の頂点部分に青竹の細いほうの先端が来るようにするため、ボランティアの方々が青竹の向きに注意するよう子供達に呼び掛けていた。また、青竹を差し込む作業は子供の力では難しいことから、全員で息を合わせて青竹を時計回りに回しながら差し込むことをボランティアの方がアドバイスしていた。4本ある竹を全て差し込み、余分な長さの竹を切ると、松明が完成する（写真2-4）。このあと、ボランティアの方々が完成した松明の上部に太いロープを通し、立った状態の松明を子供達に見せた。子供達からは歓声が上がリ、自分の身長と比べたりしながら、松明を眺めていた。



写真2-3 (左) ロープでしっかりと縛る (筆者撮影)



写真2-4 (右) 微調整をして完成 (筆者撮影)

飾りの制作は、今年は遠隔による見学であった。東地区公民館から来たボランティアの女性4名が制作する様子を5年生の担任が撮影し、5年生はそれを遠隔で見学した。今回は短冊(写真2-5)と、野菜に巻き付ける〈着物〉(写真2-6)を制作した。どちらも折り紙を使用した、誰でも簡単に作れるようなものである。短冊にはそれぞれの願いを記入し、それらを繋げて1本の長い輪飾りにする。ボランティアの女性達が手本として短冊に願いを書いて5年生に見せていたが、その願いは新型コロナウイルスの終息を願うものが多かった。〈着物〉の内側には自分の良くない所や直したい所を穢れとして書く。当日それらを燃やして海に流すことで、穢れを流し、願いが叶うとされている。短冊と〈着物〉は5年生にも一人1枚ずつ与えられ、後日それぞれの願いを書き入れたという。

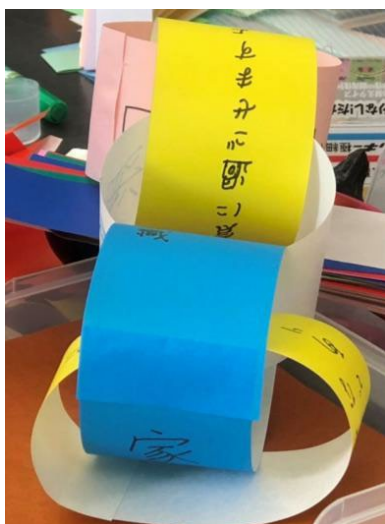


写真2-5 (左) 願い事が書かれた短冊 (筆者撮影)



写真2-6 (右) 「着物」を着た茄子 (筆者撮影)

この時に制作した2基の松明と飾りは、当日寺家小学校と東地区公民館のネブタとして使用するため、ネブタ流しの当日まで体育館で保管された。

## 2-2. 当日の流れ

令和4（2022）年のネブタ流しは日曜日であったこともあってか、多くの見物客が訪れていた。天候の悪化が心配されたが、運良く好天が続いた。

櫛原神社では茅の輪くぐりも行なわれており、ネブタ流しの参加者や地域住民だけでなく見物客も体験に訪れ、多くの人で賑わっていた。茅の輪くぐりは、年に2回ある「大祓い」のひとつであり、夏越の祓の時期に行なわれる。今では同じ日に実施されているが、元々茅の輪くぐりとネブタ流しは別の行事であった。ただ、多くの地域住民は同じ禊祓いの行事であると認識しているようだ。茅の輪には青草が使用され、青草の若々しさによって身体を清々しいものにするという意味合いがある。また、身体の穢れをヒトガタにうつして祓う行為もあることから、穢れを祓い身体を清めるネブタ流しと同一視されるようになったと考えられる。以下に茅の輪くぐりの手順を記述する。

櫛原神社の境内に入っすぐ、手水舎が見える。参拝者はまずここで手を清め、手水舎の横に設置された受付へ向かう。受付で地域住民は事前に配布されたヒトガタと封筒を提出して確認を受ける。地域住民以外の参加者は受付でヒトガタと封筒を受け取り、その場でヒトガタに自分の年齢と名前を記入する。次に身体の調子が悪い部分を中心に、ヒトガタを自分の身体に撫で付け、息を吹きかける。息を吹きかけたヒトガタを封筒に入れた後は（この時地域住民以外の参加者はヒトガタと共に100円を入れる）、神主に大幣を振ってもらい、一礼して茅の輪をくぐる。茅の輪をくぐったあとはそのまま拝殿へ進み、賽銭箱の横に設置された箱にヒトガタの入った封筒を納め、お参りする。これで茅の輪くぐりは終わりであるが、奉納したヒトガタはこの後神社でお祓いされる。



写真2-7 茅の輪をくぐる参拝者（筆者撮影）

次に、寺家小学校と東地区公民館を中心に、ネブタ流しの準備から後片付けまでの様子を記述する。当日の流れは以下の通りである。

表2-2 ネブタ流しの流れ（観察をもとに筆者が作成）

14:30	寺家小学校からネブタを持ち出し、和田の浜まで運ぶ
16:30	海岸で組み立てる
16:50	浮き輪の括り付け、飾り付け
17:30	ネブタ流しの参加生徒到着、ライフジャケットなどの準備
18:08	松明の頂点部分に灯油をかける
18:28	松明に点火、入水
19:04	終了のアナウンスの後、土台を解体する
19:08	参加した子供達とその家族は帰宅、残った人々で周辺の清掃作業
19:22	解散（男性を中心に土台などを寺家小学校へ返却しに行く）

まず、事前に寺家小学校の学校行事である〈ネブタ作り〉で制作された松明を、トラックで和田の浜まで運ぶ。和田の浜まで運んだ松明は堤防の上で組み立てを行ない、土台部分を取り付けていく。土台は、木材を“3×3”の碁盤目状に合わせたもので、電動ドライバーやロープを使って交点をしっかりと固定し、作られる。碁盤目の中央にはベニヤ板が敷かれ、そこに松明が置かれる。松明は倒れないように、松明の中腹部や下腹部から伸ばしたロープを土台の交点と結んで固定する。筆者も実際に、後に行なう飾り付けの際に土台に登らせて貰ったが、片側に体重を乗せてもびくともせず、安全のため頑丈に設計されていることが実感出来た。松明と土台を合体させたあとは、土台の4つの頂点にゴムチューブ浮き輪を取り付けていく。

これらの作業が終わると、松明部分への飾り付けの作業に移る。飾り付けの作業は、東地区公民館のスタッフが行ない、筆者も手伝わせてもらった。今回は〈着物〉を着た胡瓜と茄子、輪飾りにした短冊、〈寺家小学校〉〈滑川東地区公民館〉の習字、そして寺家小学校からのみ教育目標の“自らを啓く”と書かれた習字が用意された。習字はどれも遠くからでも文字が読めるほどの大きさで、風で飛ばされないようナイロンテープで松明に縛られる。胡瓜と茄子の飾りについては、まず胡瓜と茄子それぞれに割り箸を刺し、そのあと折り紙の〈着物〉を着せていく。〈着物〉は脱げないように糊で貼り付けてあり、そのあと松明部分に刺して飾り付ける。輪飾りの短冊は松明の上部から下部にかけて螺旋状に巻き付けて、習字と同様にナイロンテープで縛り付ける。

飾り付けが終わり、ほとんどの作業が終わった頃、寺家小学校の生徒3名とその保護者が到着した。子供達はTシャツに半ズボンという恰好で現れたが、和田の浜に到着してすぐ、服を脱いで下に着ていた水着姿になる。次に、それぞれの体格に合ったライフジャケ

ットを装着し、他の参加者から説明や注意事項などを真剣な様子で聞いていた。



写真2-8 (左) 完成した土台 (筆者撮影)



写真2-9 (右) 完成した寺家小学校のネブタ (筆者撮影)

18時を過ぎて、全てのネブタの準備が終わると、松明の頂点部分に灯油を流していく。ネブタにはしごをかけて、一人が登り、下で数名がはしごとネブタを支えるのだが、ネブタは5メートルほどあるため、途中で少しふらつくなど危なっかしいと思わせる場面もあった。無事に灯油がかけられたあとは、日没のタイミングが訪れるまで待つ。このときネブタは、波によって流されないように、堤防と一本のロープで繋がれた状態で海に浮かべられ、点火のときを待つ。

令和4(2022)年7月31日の日没時間である18時28分に、青年会議所が代表して最初に松明に点火した。青年会議所の点火に合わせて他の参加団体も点火し、人々は海に入ってネブタを沖へ運ぶ。海に入らない人は堤防に残り、ネブタと堤防を繋ぐロープをしっかりと握りながら、ネブタが運ばれる様子を眺めていた。燃やされ始めたネブタは、徐々に火力を上げながら燃え広がっていく。燃焼が進むと時折パンッという爆発音が聞こえるが、これは青竹の節の中の空気が熱せられることによって膨張し、破裂したときに生じる音である。この破裂音が聞こえると、周囲からは歓声や驚きの声が上がった。海に入っている人々は、ネブタが燃えやすくなるように鎌を使って松明を崩していく。海の中からは松明の頂点部分には届かないため、3メートルほどある青竹の先端に鎌を括り付け、それを動かしながら藁とムシロを崩す。更に火が燃え広がり、松明もよりほぐされていくと、大

きな炎を上げながら藁とムシロの塊が海へ落ちる。大きな塊が落ちるほど見物客の歓声も大きくなるが、時折海に入っている人の頭上近くに落ちることもあったため、悲鳴のようなものも聞かれた。海に入っている子供達は、上から火が落ちてくる様子に驚きながらも、ネブタが燃えながら崩れていく様子を楽しげに見つめていた。ネブタは長い時間をかけて燃え、約30分ほどで全てのネブタが燃えきった。このタイミングで丁度陽が沈みきり、太陽の日差しとネブタの火がほぼ同時に消えることで辺りの光が無くなる様子は圧巻だった。



写真2-10 点火された寺家小学校のネブタ (筆者撮影)

終了のアナウンスが流れると見物客は徐々に帰り始め、海から上がった子供達は親からバスタオルを受け取って身体を拭き、身体が冷えないうちに家へと帰って行った。土台は海から陸へ引き上げられたあと、ネジやロープを外され、分別して解体される。それと同時に、堤防や浅瀬付近に残った藁くずを拾い集め、海岸の美化活動にも力を入れていた。解体された木材やゴムチューブ浮き輪などは寺家小学校まで軽トラックで運ばれ、来年まで保管される。軽トラックが寺家小学校へ向かって出発すると、和田の浜に残った人々も挨拶を交わしながら解散し始め、令和4(2022)年のネブタ流しは終了した。



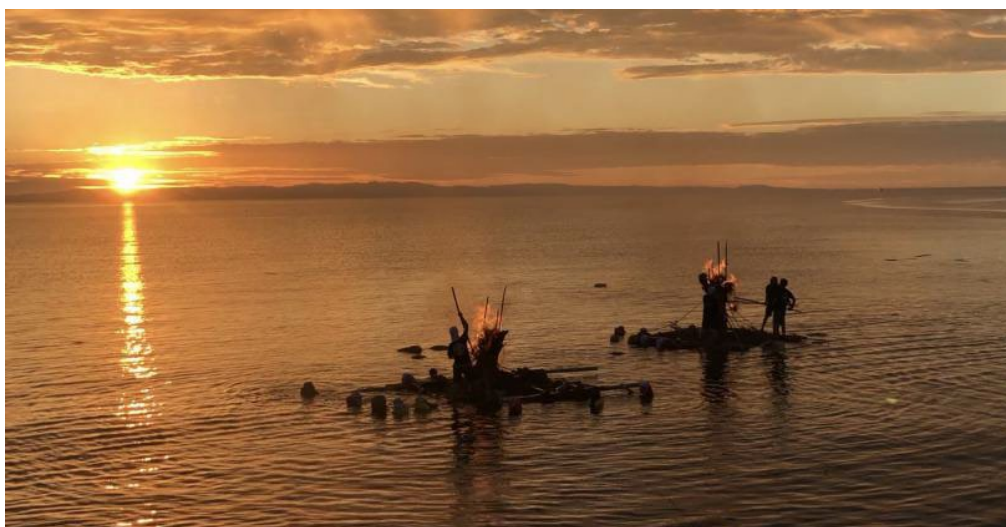


写真 2-11 日没に合わせて燃やされるネブタ（筆者撮影）

### 2-3. ネブタ流しを実施する際の工夫について

東地区公民館のネブタ流しの参加者である男性は、頭にタオルを巻き、足袋を履いた状態で準備を進めていた。海に入ってからすぐ頭のタオルを海水で濡らしており、これを行うことで、海に入って松明を燃やす際、上から降ってくる火の粉から頭を守る効果があるという。

また、先に述べたように、海に入ったネブタは波によって流されやすいため、位置がずれやすい。そこで、海に入っている側で自主的に位置の調整を行なうと同時に、堤防側から声を掛け、堤防とネブタを繋ぐロープを一直線上に保つ必要がある。男性によると、堤防側から見て左は富山市があることから“とやま”、右は魚津市があることから“うおづ”、海の沖側は“おき”と呼ばれており、海に入っている人達と堤防にいる人達はこれらを使って声を掛け合っているという。具体的には、堤防側から見てネブタが右に寄っているときは“とやまへ”と声を掛けて左に寄るよう指示をし、左に寄っているときは“うおづへ”と声を掛けて右に寄らせる。海に入ったネブタが浅瀬から進んでいないときは“おきへ”と呼び掛け、海に入っている人達が安全で、かつ堤防と繋がっているロープが無理に引っ張られたり千切れたりしないような、ちょうどよい場所まで進めさせる。この掛け声について、“ひだり”“みぎ”“おく”と言っても良い気がするが、そうすると堤防側と海に入っている側で認識の違いが生じる。どちらかに合わせるにしてもややこしいため、この言い方になったと考えられる。

また、東地区公民館のスタッフの女性は、ネブタが燃えきるタイミングについて話してくれた。ネブタ流しは、陽が沈み始めると同時に開始され、陽が沈みきると同時に燃やし終わるのが最も理想的であるとされる。これは、先に述べたように、陽が沈むタイミングと松明の火が消えるタイミングが揃うことで、光が同時に消える美しさがあるためであるとされる。そのため、早く燃えすぎるのでも遅すぎるのでもなく、丁度良い早さで

燃やす必要があると語ってくれた。また、令和4（2022）年の海は凪いており、波にネブタが流されることなく、安定して行なえたことに安堵した様子だった。最後に女性は、この行事を終えると夏の折り返しを実感し、残り半年も乗り切ろうという気持ちになれると話してくれた。

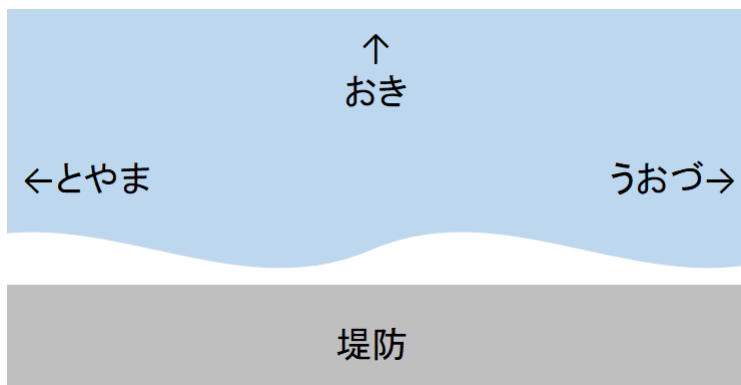


図2-1 掛け声の種類（男性の話をもとに作成）

#### 2-4. 主な参加者

令和4（2022）年のネブタ流しには、寺家小学校、東地区公民館、中川原児童クラブ、中川原町内会、常盤町一区町内会、常盤町二区町内会、滑川青年会議所、滑川市役所、吾妻町、西地区公民館から10基のネブタが出された。

地家小学校と東地区公民館のネブタには、どちらも東地区公民館のスタッフや地区の住民が参加しており、これに加えて地家小学校からは3名の児童が参加していた。この3名は小学校で募集し集まった児童であり、今年は募集期間が短かったため3名のみでの参加となったが、昨年は7名が参加したという。

子供が参加するもう一つの地域に中川原地区が挙げられる。中川原地区では16時30分頃まで地域住民を中心に組み立てなどの準備を和田の浜で行ない、一度中川原公民館へ戻る。中には、和田の浜に残って他の参加者と交流する人もいる。公民館へ戻った人は、18時頃に子供達を連れて和田の浜へ戻ってくる。集まった子供達はネブタの飾り付け作業を行なう。飾り付けには学年を問わず誰でも参加出来るが、その中で、希望した5年生と6年生のみが海に入ることが出来る。今年は10人ほどが大人達と一緒に海に入り、ネブタを沖へ運んでいた。それ以外のネブタに子供達の姿が見られなかったところを見ると、子供が参加するのは東地区と中川原地区だけのようだ。他の地域は大人の地域住民が中心となって参加しており、市役所や団体も参加していたが、それらは職員が主に参加するという形であった。

### 3. 昔と今との比較

現在では町内会や団体を含め、毎年 10 基ほどのネブタが出ているが、かつてはより多くの町内が参加していた。『滑川のネブタ流しと夏を彩る民俗行事』（1999 年）によると、かつてはネブタ流しに参加していたものの、参加を中止した地域が 16 あるという。例えば田中町は、昭和初期から参加していたが、防波堤の建設により、昭和 10 年頃までには参加しなくなった。領家町や高月町も同様に、昭和 32 年に護岸工事が行なわれて堤防が建設されたことをきっかけに、参加しなくなったという。加島町二区でも、後継者不足のために、昭和 15（1940）年までには参加を取り止めた。現在参加している中川原地区も、太平洋戦争の始まった昭和 16（1941）年頃に一度途絶えたという。



図 2-2 参加地域の比較（国土地理院地図より作成）

また、東地区公民館のネブタ流しの参加者である田口稔さん（50 代）にもお話を伺うことが出来た。田口さんは 30 年近くネブタ流しに参加しており、子供の頃から親しんできたという。田口さんにはまず、昔と今のネブタ流しの違いを伺った。田口さんによると、ネブタの材料や飾り、参加する人など、どれも常に変化を続けており、“もはや変化していないところはない”という。例えば材料について、戦前は松明が今よりも大きく、高さは大

きいもので7メートルほどあったため、多くの材料が必要だったという。飾りについては、胡瓜や茄子を供え物として飾るのは今と変わらないものの、昔はイナゴや蛇の死骸なども供えていた。これはネブタ流しに込められた意味合いの一つである〈虫送り〉に通じるものであると考えられるが、今では飾られなくなった。参加する人については、昔は海に入る人だけで20~30人ほどいたというが、今は10人ほどが海に入るのみである。

田口さんは、これらの変化は、ネブタ流しという行事を楽に行なえるように試行錯誤した結果生じたものであると語る。ネブタ流しに参加する町や人数が減少したことによって、少ない人数でも可能な規模でのネブタ流しに変化させることを余儀なくされた。そのため、松明を小さくしたり、集めやすい材料を使用したりするようになり、今の形になったという。令和4(2022)年のネブタ流しでは、寺家小学校と東地区公民館のどちらも、準備や組み立ての段階に参加するのが約15人、海に入るのはそれぞれ10人ほどであり、ネブタの大きさは約5メートル、飾りは輪飾り状の短冊と〈着物〉を着た胡瓜・茄子だけであったことから、変化の様子が伺える。

また、見学に訪れる人も変化したと田口さんは話す。ネブタ流しは地域行事の一つとして行なわれており、参加者はもちろん、見学に訪れる人も、かつては地域住民ばかりだった。しかし平成11(1999)年にネブタ流しが国の重要無形民俗文化財に指定されたことをきっかけに、地域住民以外の人でも訪れるようになった。その理由としては、国の重要無形民俗文化財の指定によって全国に滑川のネブタ流しの存在が広まり、一度見てみたいと感じる人が増えたためであると推測される。実際、筆者は令和3(2021)年と令和4(2022)年の2回見学に行ったが、どちらの年も和田の浜のすぐ後ろにあるほたるいかミュージアムの駐車場に県外ナンバーの車が何台も止まっており、地域住民以外の見物客が多いことが伺えた。和田の浜からすぐ近くの歩道橋には三脚と一眼レフカメラを用意して撮影する人も数人いたが、田口さんによると昔はそのように本格的なカメラを持って来る人はほとんどいなかったという。

田口さんは、新型コロナウイルスによる変化についても語ってくれた。新型コロナウイルスが流行する前の令和元(2019)年までは、ネブタ流しが終わったあと、〈お疲れ会〉をしていたという。〈お疲れ会〉にはネブタ流しの参加者など関係者が東地区公民館に集まり、ご飯を食べたりお酒を飲んだりして盛り上がった。この〈お疲れ会〉が地域住民と語り合う機会にもなっており、交流の場として活用されていた。しかし令和2(2020)年に新型コロナウイルスの流行が始まったため、ここ数年は〈お疲れ会〉の開催が出来ていないという。また、新型コロナウイルスが流行して最初の年である令和2(2020)年には、東地区公民館はネブタ流しへの参加をぎりぎりまで悩んでいたという。最終的には参加を決めたものの、当日出たネブタは3基しかなかった。その日は金曜日だったこともあり、見学に訪れた人も多くなく、全体的に静かな様子だったという。

他に、昔ネブタ流しに参加したことがあるという、谷山俊夫さん(70代)にも当時の様子についてお話を伺った。谷山さんは今から約50年前のネブタ流しに参加している。当時

は十数基のネブタが出ており、谷山さんが参加した中川原地区だけでも3基のネブタが出ていた。海に入る人は大人も子供もふんどしを着用しており、上半身は裸だった。また、海で燃やしたネブタは回収せず、海に流したまま放置されていたという。更に、当時はネブタ流しに対して祈祷や厄払いの意味合いを強く感じており、“海の神様にお祈りする”という気持ちが常にあったという。海から上がったあとは、身体の至るところが燃えた松明から出るススで真っ黒になっており、身体を拭くタオルにも色が移ったという。身体に付いたススが取れないこともあったが、それも頑張った証であり、思い出の一つであったと谷山さんは誇らしげに語った。

ところで、田口さんと谷山さんのどちらも、当日は子供達がたくさん見に来ていたと話した。また、昔も今もいくつかのネブタでは海に入る人の中に子供が混ざっていたことから、ネブタ流しへの子供達の参加の様子は、昔と今とで大きく変化はしていないと考えられる。

#### 4. ネブタ流しが抱える問題と子供達の参加

##### 4-1. ネブタ流しが抱える問題

地域住民に支えられて続いているネブタ流しだが、抱える問題もある。滑川市ではかつて、多くの町内がネブタ流しに参加していた。しかし徐々にネブタ流しに参加する町内が減少し、当日出るネブタの数も少なくなってきている。

櫛原神社の禰宜である横川道子さんによると、領家町や高月町などの西側地域もかつてネブタ流しに参加していたが、高波による被害が生じ、死者も出たことから、昭和30年代に高月海岸で護岸工事が実施されたという。工事前までは海水浴や釣りなどに訪れる人が多く、海にも行きやすい環境だったことから、海と人との関わりが深かった。しかし、護岸工事によって海と居住地域との間に壁が生まれ、海との関わりが徐々に減っていったことで、ネブタ流しの文化が廃れていったのではないかという。また、横川さんは、交通網の発展もネブタ流しの衰退に影響しているという。昭和50年代に自動車が普及し、道路網が整備されたことによって、車社会が進んだ。それによって自動車による遠方への移動が可能となり、地方から都市部や郊外へ移住する人が増加した。滑川市でも、町を離れる人が多かったという。それによって過疎化が進行し、ネブタ流しに参加するための人手が足りなくなった地域が増加した。加えて、多くの若い世代が市外や県外へ移住したことから、町に残った人の多くは高齢者であり、高齢者だけでは体力的にもネブタ流しの実施が難しい部分があるため、参加を断念することもあったという。実際、常磐町三区は、平成29(2017)年まではネブタ流しに参加していたものの、住民の高齢化と人口減少が問題視され、以降ネブタ流しには参加しなくなったという。

このように、護岸工事や交通網の整備などによって、人々にとって暮らしやすい社会の実現が進んだ一方で、海と人との関係性の希薄化や、人口流出が問題となった。そして、

これらが影響してネブタ流しへの参加が困難となり、参加を諦める地域が出てきたと考えることが出来る。

#### 4-2. ネブタ流しへの子供達の参加

第2節で述べたように、寺家小学校では平成13(2001)年から学校行事の一環として〈ネブタ作り〉を行なっている。現在の校長である広田積芳さんは、この行事を実施することで、ネブタ流しに込められた無病息災の意味合いを子供達に知ってもらおうと同時に、松明の制作作業を通して地域住民との交流を深めてほしいと語った。また、ネブタ作りに参加した6年生の代表生徒は、実際に松明を作ってみるとかなり難しい部分があったものの、ボランティアの方々の指導のおかげで大きな松明を作ることが出来、達成感があったと語った。実際、〈ネブタ作り〉の様子を見ていると、一つ一つの作業に真剣な様子で取り組む子供や、ボランティアの方々との共同作業を楽しげに行なう子供が多く見られた。また、ボランティアの方々と積極的に会話をしている子供も多く、まるで親戚同士であるかのような、近い距離感で話しているようだった。新型コロナウイルスの影響による学級閉鎖のためオンラインで見学していた5年生も、東地区公民館の方からの呼び掛けに対して元気よく返事をしたり、飾り作りの制作作業の様子を見て感嘆の声を上げたりしていたことから、この行事に対する関心の高さが伺えた。この学校行事は、広田さんの言うように、ネブタ流しという滑川の伝統行事を子供達に知ってもらおうと共に、ボランティアの方々との交流を深めることで、地元への愛着をより深める役割を果たしていると考えられる。

中川原地区でも、児童クラブの活動の一環としてネブタ流しへの子供達の参加を促している。先に述べたように、中川原地区では昭和16(1941)年からの太平洋戦争を理由にネブタ流しへの参加を中止したことがあった。しかしその後、昭和34(1959)年に開催されたネブタコンクールをきっかけに、児童クラブの行事として復活した。中川原地区でも、ネブタ流しと子供達との関わりを深めようと積極的に参加を勧めている。

令和3(2021)年のネブタ流しでは、30人ほどの子供達が中川原地区のネブタ周辺に集まっていた。子供達は飾り付けを中心に、1年生から6年生まで、様々な学年の子供が手伝いをしていた。飾り付けが終わると、事前に海に入ることを希望していた5年生と6年生9名が水着に着替え、海に入るための準備を進めていった。準備では寺家小学校と同様、各自ライフジャケットを着用し、ストレッチをするなどしていた。まだ海に入る事の出来ない1~4年生は、和田の浜のすぐ後ろにあるはまなす公園で遊んだり、海に入る子供達の様子をじっと見つめたりしていた。海に入る準備をしていた6年生の男子児童に話しかけてみたところ、海に入ってネブタを運ぶのは今回が初めてであり、楽しみだと話してくれた。令和2(2020)年は新型コロナウイルス流行の年であり、その年のネブタ流しに子供は参加出来なかった。そのため、6年生になって初めて、海に入るという形でネブタ流しに参加することが出来たという。また、その男子児童の弟である4年生の男子児童と、妹である2年生の女子児童は、どちらも兄が羨ましいと話していた。4年生の弟は、来年

からは自分も参加出来るようになるため、来年が待ち遠しいとわくわくした様子だった。

寺家小学校と中川原地区児童クラブの例から、どちらも子供達とネブタ流しを積極的に関わらせようとしている様子が伺える。どちらもただ話を聞かせるのではなく、実際に手を動かし、身体を使わせることで、子供達を退屈させず、また印象に残りやすくする工夫がなされていると考えられる。

## 5. 今後の可能性——まとめに代えて

滑川地域では、かつては多くの町内がネブタ流しに参加していたものの、戦争、護岸工事、そして後継者・人手不足などを理由に、参加町内が大きく減少してきた。その中で東地区公民館や中川原地区は、子供の積極的な参加を促すことで人数を確保し、ネブタ流しへの参加を可能にしてきた。

これまでのことから、ネブタ流しの継続のためには、若い世代の積極的な参加を促し、参加人口を増やすことが重要であると考えられる。そうなれば、上の世代から下の世代への文化の継承が可能となる。また、体力面でも若い世代は大きな力を発揮することから、若い世代の存在は大きいといえる。そのためには、何よりもまず若い世代を地域に呼び込むことが必要である。町から離れていった人のUターンを促したり、滑川市出身の人だけでなく、ネブタ流しに興味がある市外や県外の人にも行事に参加してもらうことも有効であると考えられる。

例えば、一般財団法人地域伝統芸能活用センターが運営する「まつりーと」というサイトでは、「人とまつりと地域をつなげる」ことをテーマに、祭り参加者の募集をかけることが出来る。参加者の募集だけでなく、その祭りや行事に関する情報を提供することも出来、人々に関心を持ってもらうためのきっかけの一つとして利用されている。先に述べたように、ネブタ流しが国の重要無形民俗文化財に指定されたことで、地域住民以外の人々がネブタ流しに興味を持ち、見学に訪れるようになった。このような人々にも参加の機会を与えることで、よりネブタ流しに対する興味や関心を高めてもらうことが可能になり、参加人口を増やすことにも繋がると考えられる。

また、滑川市役所や滑川青年会議所のような団体の参加も、参加者の増加と行事の継続のために有効であると考えられる。市役所や青年会議所のような場所は、その所在地に住む人だけでなく、周辺地域の人々も就職・参加が可能である。例えば滑川青年会議所には、20～40歳を対象に、滑川市民だけでなく、滑川市で働く市外在住者も所属している。滑川青年会議所は参加者の減少によって大切な地域の文化財が廃れてしまうという危機感から、文化の継承に寄与するために、10年ほど前からネブタ流しに参加している。参加者は、滑川青年会議所のOB・OGを中心に、現役の会員全員が参加することもあるという。このことから、滑川青年会議所では、市外在住者や、市内に住んでいてもネブタ流しと関わりが薄い人達にもネブタ流しに参加する機会が与えられており、興味を持ってもらうきっか

けを作っているといえる。このように、滑川市の団体に働いたり活動したりしている様々な地域の人々をネブタ流しと関わらせることも、ネブタ流しの存続のために有効であると考えられる。

## おわりに

今回の調査を通じて、ネブタ流しがこれまで歩んできた歴史を感じ、長い歴史を持つネブタ流しと、ネブタ流しを継承してきた方々に対する尊敬の念が深まった。また、新型コロナウイルスの影響で活動の幅が狭まり、参加の断念や開催中止の可能性も出てきていた中で、その脅威に負けずネブタ流しを開催してきた姿勢から、ネブタ流しに対する熱い思いが伝わってきた。この熱い思いがある限り、ネブタ流しは今後も続いていくと考えられる。今後更に見物客は増えると予想されるが、多くの人々に、ネブタ流しの参加者が持つ熱意や、実際に見ることで感じられる感動を是非味わってもらいたいと思う。

## 謝辞

今回の調査にあたり、ご協力頂いたすべての方々に心よりお礼申し上げます。今回インタビューさせて頂いた方々には、様々な興味深いお話をたくさんしていただきました。また、近くで様子を伺っていた私に声を掛けていただき、作業を体験させて下さったり、熱中症にならないようにと塩飴や飲み物を分けて下さったりしました。大変嬉しく思うと同時に、滑川市の人々のあたたかさを感じました。本当にありがとうございます。

## 参考文献

- 滑川市立博物館（編）、1982年『滑川のネブタ流しと茅の輪くぐり（滑川市立博物館双書）』滑川市教育委員会。
- 滑川市立博物館、1999年『滑川のネブタ流しと夏を彩る民俗行事』滑川市教育委員会。
- 滑川市立博物館、2000年『ネブタ流しと年中行事展』滑川市博物館。
- 滑川の民俗編集委員会（編）、1996年『滑川の民俗 下』滑川市教育委員会。

## 参考にしたウェブサイト

- まつりーと・ホームページ〈<https://matsuri-info.com/guest/index.php>〉（2023/01/16 閲覧）





### 第3章 上市町のさまざまな農業——課題解決に向けた取り組みを中心に

富岡 雪乃

#### はじめに

上市町に初めて赴いたとき、驚いたのは農地の広さだった。私の家族は転勤族で、今までに神奈川県、宮城県、北海道に住んできたが、家があったのはいつも街中のあたりであったため、こんなに広い農地を見るのは初めてだった。

しかし私にもちいさな「農業経験」があった。それは小さいころ、祖母の畑仕事をたまに手伝わせてもらっていたことである。祖母の家の裏には小さな畑があり、キュウリやトマト、ナスやカボチャなど、いろいろな野菜を育てていた。普段食べている野菜を自分の手で育て、収穫するのは、幼い自分にとって、とても新鮮な作業であった。あるとき、畑で収穫したとれたてのジャガイモを使って祖母がポテトチップスを作ってくれたことがあったが、そのときのおいしさと感動を、今でも忘れられない。

祖母が畑を手放してからは、直接農業に関わる機会はほとんどなかったが、私自身は農業にずっと興味があった。今回上市町について各自テーマを決めて調査するとなったとき、その農地の広さが印象的で、ぜひ農業について調べたいと思い、これをテーマにした。

本稿では農業について、3つのトピックを取り上げる。第1節では、機械を使って組織的に行う、営農組合での農業についてまとめる。続く第2節では、上市町の女性たちが行っている農業活動についてまとめている。そして第3節では、上市町に魅力を感じて移住してきた人たちのお話を中心に、農薬や機械の使用をできるだけ控える農業形態である「自然農」について記述している。

#### 1. 営農組合で行う農業——伊東永雅さんの語りから

##### 1-1. 伊東さんの来歴について

「上市町の方は、ほんとうにあたたかい」と伊東さんは言う。最初に伊東さんと出会ったのは、フィールドワーク中に偶然訪れた「アルプスの湯」（上市町健康文化振興財団が運営する温泉施設）（写真3-1）でお話を聞いているときだった。最初に話した職員の方が、「農業に詳しい人がいる」と言って伊東さんを紹介してくれたのだ。

伊東さんはもともと、現在住んでいる「館集落」の隣の集落の出身だ。「上市でゆったりとモノづくりがしたい」という気持ちが強かった伊東さんは、59歳になるまで上市町や富山市でサラリーマンとして働き、子どもが小学校に上がるときに、上市町の館に現在の家を建てたという。家は古民家をリフォームしたもので、筆者も一度お邪魔させてもらったが、手作りのピザ窯やハンモックなど、さまざまなものがあつた（写真3-2、写真3-3）。

河川敷から自分で運んできたという石を敷き詰めた手製の庭園は、個人でつくったとは思えない完成度だった。



写真3-1 アルプスの湯の外観（アルプスの湯公式HPより）

伊東さんは、中学時代や高校時代の友人を自宅へ招き、年に数回パーティを開催しているそうだ。定番はピザパーティ。当日の朝には、粉を使って生地をこねて、ピザ窯には火を入れておく。お昼ごろからちらほらと集まるゲストたちは、並べられた具材から好きなものを生地のにせて、ピザを焼いていくのだ。チーズやピーマン等のメジャーな具材から、フルーツやチョコレート等、デザートピザの材料になるものまでさまざまなものを用意する。「手作りのピザだと、だいたいなにのせても美味しくなるんだよ」と、目を細めて伊東さんは言う。ある時たまたま余ったベビースターラーメンをのせたらとても美味しく、あれにはびっくりした、というエピソードも、嬉しそうに話してくれた。そうして、焼きあがったピザをつまみに、昼から一杯やるのが楽しみなのだ。

目を輝かせながら、パーティの話や、これまでにDIYしたものや農業の話をしてくれる伊東さんは、とても63歳に見えないほど元気で活動的だった。

現在、アルプスの湯で職員として働いている伊東さんだが、民間企業で働くことを辞めたのは、生活の全てを会社に委ねるような会社中心の生活に嫌気が差したからだという。そんな時に、上市の居心地の良さ、そして人の優しさに感動し、ちょうどスタッフの募集をしていたアルプスの湯で働くことにしたそうだ。何事にも全力な伊東さんは、転職後してからも、温泉ソムリエやサウナの資格を取るなどしたそうだ。



写真3-2 手作りの庭園(著者撮影)      写真3-3 手作りのピザ窯(著者撮影)

#### 1-2. 館集落の概要および年間行事

伊東さんが住んでいるのは、約60世帯、人口150人ほどの「館集落」だ。集落はそれぞれの人口が少ないこともあって、住民同士の結束が強いものだが、その中で他所から引っ越してきたいわゆる「よその」である伊東さんを、館の住民は優しく受け入れてくれたという。

館では昔からの伝統が色濃く引き継がれており、季節ごとにさまざまなイベントが開催されている。まず、春には新春祭りがあり、みなで神社に行き、神主さんにお祓いや厄落としをしてもらう。またそれとは別に、「江攪(えざら)い」という行事があり、これは用水を綺麗にする、という大きなイベントだ。そして6月、7月にそれぞれ一回ずつ田んぼの草刈りがあり、みなで力を合わせて作業する。真夏には「納涼祭」があり、盆踊りをする。集落の数少ない子供たちのために、後述する「館青年部」のメンバーが屋台を開いたりもするのだ。次にあるのが秋祭りで、これは春と同じようなイベント。さらに年末には年一回の、「万雑」と呼ばれる町内会総会のような集会が開かれる。

それぞれのイベントもちろん大事だが、みながそれ以上に楽しみにしているのは、やはり祭り後の「飲み会」であり、江攪いや草刈り後の「お疲れ様会」であるという。イベントごとの後に「一杯やる」のも、集落の儀式の一部をなしてきたのである。

しかし、「ここ数年は新型コロナウイルスによって、祭りや飲み会が中止になり、集落の繋がりがどんどん希薄になっていっている」と伊東さんは顔を曇らせる。納涼祭も今年、2年ぶりにようやく開催できたらしい。もともと60戸の小さな集落で、その仲間意識の強さからイベントごとも途切れずにできていたようだが、さすがに世間のこの自粛ムードには抗えないようだ。今後このまま飲み会などのイベントがなくなってしまう、集落同士の繋が

りがさらに希薄になってしまうのでは、と伊東さんは案じている。

このように、近年開催がしにくくなっているとはいえ、年間を通してさまざまなイベントごとがある館集落だが、特に農業は毎年集落で協力しながら行っており、30代ほどの若い人々も「お手伝い感覚」で参加してくれている。このようなことは他の集落ではなかなかいらしく、「若い人が手伝ってくれるので、本当に助かっている」と伊東さんは言う。その手伝いも完全なボランティアでなく、きちんと作業料金表に基づいた謝礼が支払われており、みなアルバイト感覚で作業を行っている。それもシステムが上手く回っている理由のひとつだそう。

### 1-3. 館集落の営農組合

そんな館集落の農業組織は、正式名称を「たち機械共同使用組合」といい、高価な農業用機械をみなで分け合って使っていきたい、という前会長の願いが込められている。

当初は5人で活動していたのだが、集落の高齢化が進んできて組合に耕作を依頼する人が増えたために、しだいに人手が足りなくなってきた。そこで現在では、42歳までの男性が自動的に会員となる「館青年団」の会員や、ほかの集落の人たちにも協力を要請して、その人らで管理を行っているそう。館には現在全体で35町の田んぼがあり、そのうち組合で管理しているのは25町である。残りの10町は5人ほどの個人が管理している。伊東さんの見込みでは、今後も委託が増えていくのではないかと、いうことであつた。

館は「中山間地」と言われる、山と里の間に位置しており、これもまた耕作を依頼する人が増えている理由の一つである。傾斜があると耕作がしにくく、体力も必要になるので、とりわけ年配の方にとっては米作りへのハードルが上がってしまうのである。

しかし、中間山地であることのメリットもある。それは国から補助金が出ることだ。ほかの集落のなかには、館よりも土手の傾斜が激しく、補助金をもらえる範囲に田んぼがあつても、補助金をもらえていない集落も多い。というのも、補助金の手続きや、継続条件が難しいからである。補助金は農業の活性化を目的にしているため、一度受け取ってしまうと、耕作放棄地をなくしたり、田んぼの手入れをし続けないといけなかったりするので、それらを達成し続けるのはなかなか難しいのである。しかしそんな中で、館には補助金に精通している住民がいるため、効果的に制度を利用することができているという。

中間山地の補助金は、田んぼごとに与えられ、14度、17度、と土手の傾斜がきつくなつて行くにつれ、補助金額が増えていく。たち組合ではその補助金の3割を住民に配分しており、残りの7割を使って米作りに必要な農機具を購入している。

しっかりと組織化がされてきているとはいえ、農業従事者は年々減っており、それは上市町も例外ではない。そもそも町の人口自体が減少傾向にあり、たとえば50年前は300人いた中学生が今では68人にまで減っている。しかしさらに大きな原因は、ここ50年で半分ほどに引き下げられた米価の影響と、農業に使う農機具が非常に高価なことに起因する。農業のみではほとんど利益が出ないため、専業農家はほとんどおらず、たち集落でも伊東さん

のような兼業農家がほとんどだ。国は農業をする人を支援するためのさまざまな補助金政策を打ち出しているものの、先に述べたようにそういった補助金は条件や申請方法が複雑で、申請に踏み切れていない集落は多い。そのために耕作を放棄してしまう人も多く、上市町には耕作放棄地が散見される（写真3-4および3-5）。



写真3-4（左）、3-5（右） 上市町平野部で見られる耕作放棄地（著者撮影）

米を収穫するまでの流れは、大まかに田起こし→田植え→農薬散布→定期的な草刈りや水の管理→稲刈りのようになっているが、その中でも田植えや稲刈りはそれぞれ5日間ほどの短期決戦で一気に行われる。特に稲刈りはまるで「お祭りのような感じ」だそうで、みなで収穫を終えたあとは盛大な飲み会が開かれるという。

収穫した米は、自分たちが食べる分をのぞいてすべてそのままJAに持っていきそうだが、しかし、組合ではない、個人で米作りをしている人は、JAに持っていくのではなく、「ブランド米」として独自に販売していたりもするそうである。

#### 1-4. 組合設立者・種田均さんのお話

今回、館集落の営農組合の創設者である、種田均さんにもお話を聞くことができた。種田さんは、長年、JAの職員として働いていたが、「農業で生活をさせてもらっていたから、自分も農業で恩返しをしたい」と、仲間4人とともに、平成21（2009）年に組合を発足した。

最初は5人で活動していた種田さんだったが、事業がすすむにつれ、徐々に田んぼの耕作を請け負うことが増えたため、館の住民に応援を頼むようになっていった。これが、館の農

業組織が住民に広がっていったきっかけである。伊東さん曰く、種田さんにはとても人望があり、組織をまとめていくにはそういう要素も大切であるという。実際、インタビューでお話ししていても、豪快かつ優しい方で、その素敵な人柄が垣間見えた。

種田さんは館以外の農業事情にも詳しいが、現在の農業が厳しい状況にあることを憂いているようだった。たち機械共同使用組合においては、前述した工夫や補助金制度をうまく使っていることから、今のところ組織が瓦解する心配はあまりないものの、中にはやはりつぶれてしまう組合もあるという。その一番の理由は先にも述べた米価の下落で、50年ほど前は一俵22,000円ほどだったのが、今では11,000円とほぼ半額にまで下落してしまっているのだ。これは外国から安いお米が輸入されるようになってきたことと、昔と比べてパン食や麺食が増え、お米の需要そのものが減ったことが原因として挙げられている。昔は米を作っていれば生活の足しになったものだが、現在では米のみで生活を成り立たせるのは、相当大規模な農業を行わないと厳しくなっているのだ。

### 1-5. 農業のこれから

種田さんに、これからの農業の未来について伺った。種田さんは少し考えた後、「僕はドローンが良いと思うね」と言い、伊東さんもそれに賛成していた。農業用ドローンはすでに発売されており、あちこちで利用されている。最も一般的なのは農薬散布での利用で、安価で軽いため、多くの農業従事者が導入を始めている。そのほかにも肥料散布や種まき、さらに農業資材の運搬としても開発が進んでおり、今後ドローンの使用はますます拡大していくだろうと予想できる。

しかし館ではまだ実用化に至っておらず、最新技術を使うことに対する抵抗がある人も多いそうだ。種田さんは同級生からドローンを使ったいちご栽培のノウハウを教わったことがあるそうで、それを踏まえて組合の人びとに共同栽培をもちかけたこともあったそうだ。しかし残念ながら、誰も乗り気ではなかった。ドローンやその他の技術を使えば作業効率が上がるのは明白だが、現状打破してなにか新しいことを始めるにはどうしても資金投資が必要であり、それが今の館機械使用共同組合の財力ではなかなか難しいのである。

## 2. 農業と女性——音杉農産直売組合の事例から

第1節でとりあげた伊東さんが勤める「アルプスの湯」では、6月から12月ごろまで、毎週火・木・土曜日に野菜の直売が行われている。私が調査で訪れた8月上旬には、キュウリ、ゴーヤ、ナス、モモ、ブドウ、ブルーベリー、ブラックベリー、スモモ、リンゴ、カキ、そして色とりどりのお花など、実に様々なものが売られていた。

それらを販売しているのは「音杉農産直売組合」で、今回はその代表をしている松井さん、上市町農協婦人部の部長である宮崎さん、そして農協婦人部の構成メンバーの中で最年少である山本さんにお話を聞くことができた。今から10年ほど前に結成されたこの組合は、

当初は30名ほどの会員がいたが、現在は10名ほどとなっており、男女比としては女性の方が多。以前は米を作っていたが、ある時、農協の指導員から、米だけでなく野菜も作ったらどうかと助言された。野菜を多く作っていることと組合員に女性が多いこととの間には関係がある。女性は男性に比べて力が弱く、米作りを行うのが難しいからである。以前はショッピングセンターの駐車場や、上市の商店街にある商業施設である「カミール」でそれぞれ販売を行っていたが、高齢化が進み夏の外の暑さが厳しくなったこと、そして人数も減ってきていることから、10年ほど前に伊東さんが誘致して、アルプスの湯で販売することになったそうだ。

私が令和4(2022)年の8月に訪れたときには、販売開始から2時間ほどが経過したお昼頃だったが、その時点ですでに商品の8割ほどは売り切れていた。お話によると、数時間のうちにすべて売り切ることが多いという。商品が売れ残った場合は、近くのスーパーへ持って行ったりしているという。また、販売分とは別に、市内に7つある小中学校にも野菜や果物を提供しており、地域の子どもたちの食育にも役立っている。「学校に販売する野菜は調理されるから、市場に出すものよりも(見た目の点で)少し緩い基準で出荷できるの。市場に出すものは、見た目が相当良くないと売れないから」と山本さんは話していた。

どうして音杉農産直売組合に加入したのか、農協婦人部の部長でもある宮崎さんにお話を聞いてみた。アルプスの湯で販売を行っているのは、主に女性である。上市町には婦人部の支部が3つあり、音杉地区はそのうちのひとつだ。稗田集落というところにある宮崎さんのお宅では、はじめは自分たちで食べる分だけ野菜を作っていた。しかし、だんだんと高齢化が進み、まわりに休耕田が増えてきたことで、その休耕田をなんとか利用できないかと考えたそうだ。そこで、「とりあえず」と果物の木を植えてみたところ、とても自分たちや近所におすそ分けするだけでは消費しきれない量が採れるようになった。そんなとき、友人の松井さんに誘われ、今から6年ほど前に組合へ加入したそうだ。それ以降、楽しく販売に携わっている。

しかし、農業をするにあたっての道のりは決して平坦なものではない。特に今年は獣害がひどかったそうで、それも去年まではほとんど被害がなかったのが、今年に入って急に被害が出始めたという。このあたりの地域では特に、ハクビシン、アライグマ、タヌキ、キツネなどが獣害の原因となっていて、トウモロコシ、スイカ、マクワウリなどの作物が狙われやすい。マクワウリというのは、この地域で人気があるウリ科の野菜で、フルーツのような甘い味をしているのだそうだ。そのにおいにつられて動物たちがやってきて、作物を食い荒らしてしまうのだ。一方で、去年までひどかったカラスによる被害は今年あまり見られなかったそうで、やはり自然を読むのは簡単なことではなさそうだ。

松井さんによると、定年を迎えて時間ができたから「ちょっと始めてみようか」と農業を始める人は多いが、やってみて初めてその難しさや大変さに気づき、2年から3年ほどで辞めてしまう人が多いという。また、松井さんはかつて、自分の集落の人たちに共同で農業をやろうと声をかけたことがあったという。しかし農業の難しさを知っている住民たちには



あまり熱意がなく、断られてしまったそうだ。個人で食べる分を育てるといふ、家庭菜園規模の農業をしている人はいるが、「本格的に」、すなわち販売するほどの規模で農作物を作る人は年々減っている。

さらに、昔であれば上市に嫁いで来た人がそのまま農地と農業を受け継ぐ、というのが慣例であったが、近年は上市町に嫁ぐ人が減ったばかりか、逆に町外に出て行ってしまふ人の方が増えている。引き継ぎ手が少ないのも、農業が衰退しつつある要因になっているのだ。

農協婦人部の活動についても伺った。上市の農協婦人部の活動はかなり少なく、その人数も年々減ってきている。5、6年前は30人ほどいたのが、今では22人ほどだといふ。現在の部員の最年少は55歳で、その次に若い方でも70歳近い。婦人部の役員制度は年ごとに持ち回りのため、それを負担に感じて抜けてしまうことが多かったといふ。さらに昔は、活発に活動を行っていたが、近年は公民館やカルチャーセンターでの活動が活発になってきており、農協の活動が減ってきた。それに伴って、婦人部の活動も減っていったそうである。

音杉農産直売組合の方々にも、これからの上市町の農業について伺った。過去に何度か、どうしても食べることができなかつたり、余つたりしてしまう野菜を無駄にしないよう、加工品を作ればいいのか、という計画がもちあがっているといふ。しかし、加工品産業を立ち上げた場合、加工場を作るところから始めなければいけない。一度加工場を借り、漬物を作ってみたことがあったが、加工品を売るには保健所の許可が必要で、その手続きが大変だったそうだ。加工場を造るためのコストを考えると、製作にはなかなか踏み切ることができないのだといふ。

無農薬の野菜を作つて、ブランドとして売つようなことも考えたことがあったが、それもなかなか厳しいものがあるそうだ。無農薬で農業をしようにも、そもそも土にすでに化学肥料が含まれているからだ。土を丸ごと入れ替えるとなると、莫大な費用と手間がかかつてしまう。また、ロボットやAIなどの先端技術を活用する「スマート農業」についても聞いてみたが、同じく設備投資の面から、なかなか実用化には至らない。これからの農業においては、資金繰りが大きな課題になっていきそうだ。

音杉農産直売組合の人々が口をそろえて言っていたのは、「自分たちで手塩にかけて育てた野菜は本当においしいし、なにより農業が楽しいから続けられている」ということである。逆に、そういった気持ちがないと農業は続けられない、ということであった。そこには、経済的な生産性にこだわらずに農業を行うことができるという、女性ならではの生き方とも関係しているだろう。インタビューでは話がいつまでも尽きず、皆本当に農業が好きなのだといふことが伝わってきた。

### 3. 上市町を選んだ人々

#### 3-1. 地域おこし協力隊員、有吉直弘さんの来歴

現在では機械を使った農業が一般的であるが、それとは対照的に、上市町では「自然農」

を行っている人も一定数いる。自然農というのは、農薬や肥料を使わずに、自然の中で野菜が持つ生命力を活かして栽培する農のあり方である。上市町の地域おこし協力隊である有吉さんと所さんも、それぞれ自然農に取り組んでいる。

「地域おこし協力隊」とは、都市地域から人口減少や高齢化等の進行が著しい地域に移住して、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこし支援や、農林水産業への従事、住民支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取り組みである。上市町にも現在2人の地域おこし協力隊員が在籍している。今回のフィールドワークではそのおふたりともに話を伺うことができた。有吉さんは現在51歳。令和4(2022)年2月に滋賀県から移住し、現在上市町の白萩西部地区に住んでいる。近くには1学年が10人ほどの小学校がある、過疎対策のために町営住宅なども建てられている地域だ。

有吉さんは昔から田舎へのあこがれがあり、さらに大学時代に大阪府堺市に下宿した経験や、脱サラ後に世界旅行に行った経験などから、「住もうと思えば、どこにでも住めるな」と思うようになったという。その後、理学療法士として働いていた有吉さんは、結婚して子どもが生まれたのを機に、改めて「自然豊かな田舎で暮らしたい」という思いが強くなっていった。そこで移住先を探すために、さまざまな場所を訪問していったという。

そうして移住先探しで色々巡っているうちに、自分たちが望む条件が見えてきた。それは次のようなものである。「南海トラフの影響が少ない」、「原発からある程度離れている」、「自然豊かな里山がある」、「水が美味しい」、「海の幸が安くて豊富」、「子供が高校、特に進学高校に通える」、「無農薬で米作りができそうな耕作放棄地がある」、「雪下ろし作業のある雪深い所はNG」、「妻の実家(滋賀県大津市)から遠くない所」。これらのすべてを満たす数少ない地域のひとつに上市町があった。ちょうど地域おこし協力隊の募集があったこと、そしてその担当者の対応がとてもよかったことから、上市町を選んだのだ。

有吉さんは昔から農業に興味があったものの、農業を始める場合に高価な農機具を買わないといけないことが足枷となり、なかなか踏み切ることができずにいた。農業をする場合、最初に借金をして農機具を買い、負債を抱えた状態で始める人パターンが多いのだ。そのような中、富山県の旧山田村(現富山市)で自然農をしている人に出会い、これなら自分にもできそうと思ったことが、本格的に農業に踏み切るきっかけになったという。

### 3-2. 有吉さんの取り組む自然農と自然栽培

有吉さんは現在、「自然農」と「自然栽培」の2つの栽培方法で農業を行っている。2つの違いは農機具を使うか使わないかで、自然栽培が中耕除草機(写真3-6)などの小型機械を借り入れて行う、農家向けの農業方法であるのに対し、自然農は機械もいっさい使わない、持続可能を目標にする家庭菜園向けの農業である。

自然農については、最初は農地を探すのに苦労をしたそう。過去に化学肥料が使われていた土地でも、流れてくる水に農薬が入っていてもだめなのだ。最終的に有吉さんは、自然農をしている人たちが共同で使っている田の一部を貸してもらい、自らも自然農を始めた

という。また、柿沢地区に自然栽培の田んぼがあり、その場所を地主さんに借りて自然栽培を行っている。この田んぼはもともと耕作放棄地となっていたもので、有吉さんが草刈りをして手を入れることは地主にとっても助かるのだそうだ。しかしこの草刈りも、完全に雑草を除去してしまうというわけではない。多少の雑草が残っていることで土が乾燥せず、湿度が保たれる。通常の農業では邪魔な存在である雑草でさえも、自然農では農作物の成長を手助けする存在になるのである。



写真3-6 自然栽培で使用する除草機（有吉さんのInstagramより）

農業、特に個人で行う場合には壁となるだろう獣害についても尋ねた。話を聞いた8月上旬の段階では、今年はまだ被害はないという。しかし、じきにイノシシが来るようになる、という噂があるそうで、その対策として地主と協力して電気柵を張ったそうだ。しかし、攻撃的なイノシシは電気柵だけでは防ぎきれないことがあり、イノシシの通り道のようなものができてしまったそうだ。そのため電気柵のほかに、唐辛子の粉を周りに撒くという対策をとっている。このような対策にも、なるべく機械を使わないという自然農ならではの工夫が凝らされている。

有吉さんは、さまざまな「やりたいこと」を考えている。いちばんは、無農薬の米作りの普及に貢献したい、ということだ。具体的には、有機農家同士のネットワークを作って情報共有や販売を促進したり、農家向けの自然栽培と移住者向けの自然農をそれぞれ積極的に行うなどしていきたいそうだ。そうすることによってほかの地域との差別化ができるだけでなく、移住や観光の促進につながる可能性がある。また、環境も食も安心安全な地域を増やしたりしていくことで、子育て世代の移住者が来やすくなるのではないかと話していた。

耕作放棄地を利用できることも大きなメリットだ。

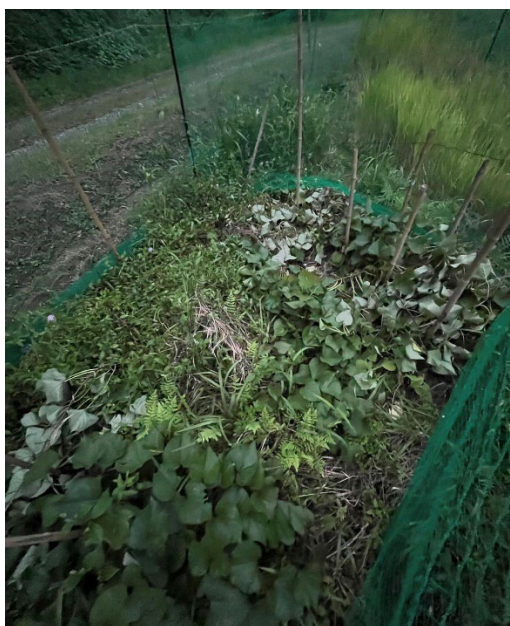


写真3-7 (左) サルに荒らされた自然農の畑



写真3-8 (右) イノシシ対策の電気柵 (いずれも有吉さんの Instagram より)

有吉さんはまた、畑を始める計画も立てている。現在の構想は、種地区に「ストローベイルハウス」を作ることである。ストローベイルハウスというのは、藁を圧縮したブロックを積み重ね、土と漆喰で塗って仕上げた「究極のエコロジーハウス」である。ここを拠点として活動していきたい、と夢を語っていた。

### 3-3. 地域おこし協力隊員・所真一さんの語りから

もう一人の地域おこし協力隊員である、所真一さんにもお話を聞くことができた。所さんは、令和4(2022)年に上市町に引っ越してきて、現在は上市町の特産品を扱うショップである、「里山の駅 つるぎの味蔵」(写真3-9、写真3-10)で働いている。

所さんは、山が好きであること、そして何より「小麦の栽培をしたい」という思いから、上市へやってきた。現在、地元の農家から農地を借りて、小麦栽培をしているという。小麦は10月に種まきをして6月に収穫する。インタビューを行った8月の段階ではまだ種を植えておらず、栽培自体も今年が初めてであったので、実際の作業がどのようなものかについて聞くことはできなかった。

所さんによると、上市町はとても魅力のある素敵な街である一方で、人口が少ないなどのために外部へのアピール力が弱い印象があるという。地元の高校の卒業生はそのまま上市に残る人が多いのだが、一度上市の外にも出て行って、その後Uターンして上市に戻ってくるという循環が理想だという。そうして、上市の出身者が視野を日本や世界に広げること

よって、上市町のいいところを他の地域のところに知ってもらうことにもつながる、と考えている。



写真3-9および3-10 「つるぎの味蔵」では野菜や陶器が販売されている  
(つるぎの味噌が運営する Instagram アカウント「味蔵 (あじくら)」より)

所さんはこのような考えを元に、小、中、高校生を巻き込んだ農業活動を構想しているそうだ。具体的には、子供たちと一緒に小麦を育て、そして収穫した小麦のうち3分の1を給食の材料に回す。もう3分の1をフードバンクに回し、残りの3分の1を海外の貧しい人たちへ寄付する。このような経験を通じて、子供たちに社会問題を知ってってもらいたいと考えている。

小麦を栽培することとこの構想のあいだには関係がある。本来、富山で小麦を育てるのは難しい。雨が多い富山では梅雨に差し掛かると、乾燥できずに小麦が腐ってしまうことがあるからだ。そのため、収穫が早く梅雨に差し掛かることがない大麦の方が一般的である。また、大麦の栽培には補助金が出るというメリットもある。それでも所さんがあえて小麦を選ぶのは、世界的に利用されている小麦の方が、子どもたちが農業を通して世界のことを知るのに適しているという発想にもとづいているのだ。

所さんは、自然農にも興味があるという。小麦の栽培もできれば減農薬で行い、さらに理想を言えば、半分を自然農でもう半分を一般的な農法で育てていきたいという。農薬が体に悪いことは周知の事実だが、それを使っていかなければ生産が追い付かないという現実もある。今、有機野菜は「高級品」だが、もし学校給食で出すことができれば、所得の差にかかわらず子どもたち全員が食べることができる。その一歩として、まずは減農薬から始めていき、最終的には上市町を「多文化多世代共生が可能な、豊かな里山づくりを目指していきたい」と所さんは胸の内を話した。

### 3-4. 「つるぎの味蔵」について

「つるぎの味蔵」のスタッフである、山田梨沙さんにもお話を伺うことができた。先述した通り、つるぎの味蔵は上市町の特産品を扱っているショップであり、定期的に野菜の直売や、上市町で作られたものを販売するなどのイベントも開催している。山田さんは、上市には移住してきて3年ほどたつ。最初は農業にそこまで興味があったわけではないが、様々な人と関わっていくうちに、だんだんと楽しくなってきたそうだ。

山田さんには、「つるぎの味蔵」の経営の工夫について話を聞くことができた。新型コロナウイルスのためにほとんどのお店が休業せざるを得なくなったとき、上市で農業を営んでいる「稲葉農園」のイチゴが余ってしまったことがあった。そのままでは食品ロスになってしまう苺をなんとかできないか、農家を応援できないかと考えた結果、「つるぎの味蔵」に直売所を設けて売ることにしたそうだ(写真3-11)。また、さばけない分の野菜や果物は、味蔵で販売しているお弁当やスイーツに入れて「つるぎの味蔵」で販売している。これは店にとってもイチゴ農家にとっても、お互いに利益がある工夫なのだ。

食品ロスを減らす工夫として、他にも、通常なら廃棄されてしまう規格外の果物をジェラートに加工し、販売している(写真3-12)。山田さんは、規格外の果物のことを「かわいい大きさ」と呼びながらこの話をしていた。筆者にとってそれは、山田さんが農作物に愛情をもって接していることがよくわかるような気がする場面として印象に残っている。



写真3-11 苺販売の様子



写真3-12 ジェラート  
(いずれも「味蔵」のInstagramより)

## おわりに

ここまで、上市町の農業について、3つのトピックにわけてそれぞれ課題と現状の取り組み、そして将来のビジョンについて記述してきた。

第1節では、少子高齢化や人口減少に伴った耕作放棄地の増加対策として、組合を立ち上げた館集落について説明した。組織化することによって、個人であればなかなか買えることが難しい農業用の機械を購入し、共同で使うことができたり、集落全体が活性化したりするというメリットがある。現在は集落全体の田んぼの7割ほどを組合で受け持っているが、今後この割合はますます増えていくだろうとのことだ。しかし、館集落は特に組織化が上手くいっている組合であるとはいえ、近年は新型コロナウイルスの影響によって飲み会や催しの頻度が少なくなっていることで、集落のつながりが希薄になりつつあることが懸念点として挙げられていた。

将来のビジョンとしては、科学技術を使うこと、特にドローンを使用した農業が第一に挙げられていた。しかし、それを導入するにあたっては、やはり資金面や、農業にかかわるメンバー全員の賛同を得なければいけないという面から、実現はまだ難しい。

続く第2節では、女性たちが行う農業について記述した。上市町では、商品作物である米を主に男性が作っているのに対して、畑仕事は女性が行っていることが多い。今回聞き取り調査を行った、野菜や果物を主に販売する音杉農産直売組合にも、主に女性が所属していた。自分たちで育てた作物を販売する、町内の小学校で給食に使うなど、積極的に活動している。しかし、農業はかなり体力を使う仕事であり、着手した人が2、3年で辞めてしまうことも多い。また婦人部の人数や活動自体も、年々減少している。農業を活性化する方法として、加工場を造って加工品を販売する、または先端技術を活用していくという案も出ているそうだが、食品加工における保健所の許可の手続きの複雑さや、資金面に阻まれて、今すぐの解決は難しいようだ。しかし、農業が好きだという思いをみな強く抱いており、インタビューからもそれが伝わってきた。

そして最後になる第3節では、上市町外から上市町に移住してきて、自然農を行っている人に主に焦点を当て、その魅力や将来のビジョンについてせまった。上市町の地域おこし協力隊員の2人は、どちらも自然農に取り組んでいる。そこには無農薬で安心できるものを作りたい、という気持ちや、子供たちに社会問題について知ってもらいたいという思い、そしてなにより多文化多世代共生が可能な、豊かな里山づくりをしていきたいという願いがこもっている。

聞き取り調査をした方々全員に共通していたのは、農業や上市町のことを本気で考え、課題解決に向かって一人一人が取り組んでいるということだ。今回取り上げた以外にも新しい特産品を生み出そうとしたり、インターン生を受け入れ、農業の魅力を紹介するなどの活動を、上市町では精力的に行っている。そこにはたしかに、上市町への愛が見てとれ、町全体の活性化につながっていた。

今後、上市町の農業がより発展し、どんな人にとっても安心できる、魅力的な町となっていくことを心から望んでいる。

#### 謝辞

今回の研究にあたり、調査に協力して下さったすべての方に心よりお礼申し上げます。初めての調査で慣れていない部分もあったかと思いますが、お忙しいのにもかかわらず快く聞き取りに応じてくださり、ありがとうございました。特に、長らくお時間をいただき、丁寧にお話をしてくださった伊東永雅様、種田均様、有吉直弘様、所真一様、山田梨沙様、本当にありがとうございました。

#### 参考にしたウェブサイト

上市町「アルプスの湯 公式ウェブサイト」〈<https://kamiichimachi-zaidan.jp/>〉  
(2022/12/5 閲覧)

上市町「上市町移住・定住ポータル かみスイッチ」〈<https://iju-kamiichi.com/local/>〉 (2022/12/5 閲覧)





## 第4章 滑川市及び上市町で活躍する作家たちと彼らの作品

丑 蘊斐

### はじめに

現在、世界的に伝統的な工芸や「手作り」の文化は衰退しつつあるようだ。たとえば、中国では、刺繍、唐傘、木彫り、飴細工など、様々な伝統工芸品や手作りものが多く存在している。私の故郷である遼寧省大連市も、昔から様々な古い文化を継承してきた。その中で特に有名なのは、莊河市の切り紙細工である。しかし、それらを製作できる人は年々減少し、新しい切り紙細工が流通する空間は縮小している。現在では後継者が少なく、わずか20数名の職人たちしか残っていない。

このような状況をふまえて、私は、日本の工芸品や手作りの現状について調査したいと考えた。今回の調査では、滑川市および上市町で活躍する方々を対象に、聞き取り調査を行った。調査にご協力いただいたのは、東福寺窯を製作している住吉紀与志さん、裂織を製作している野村順子さん、cotton cup という店を運営している谷口玉美さんなど、様々なジャンルの作品を製作している、合計7人の方々である。

本章では、それらの方々の活動や語りを「手作り」という共通のテーマのもとでまとめる。第1節では、日本の手芸の歴史と現在について簡単に述べる。第2節では、異なる作品を製作している7人の作家さんたちを対象にインタビューした内容をまとめる。それらの記述をふまえたうえで、最後に、日本や中国の工芸品や手作りのあり方について考えてみたい。

### 1. 日本の手芸の歴史と現在

本節では、『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』（上羽陽子・山崎明子編、2020年）を参考に、日本の手芸の歴史と現在について説明する。日本では、「手芸」という言葉は、明治時代の女兒小学の科目名として登場し、裁縫や炊事など、女性たちの生活技術全般を指していた。1900年代から、女子の中等教育制度が整い、裁縫が重要な科目として位置づけられた。手芸も多くの学校で広く教えられるようになった。このような背景のもとで、手芸は「教養化」、すなわち売ることを目的としない技能になった。また、教養としての手芸制作は、女らしさの象徴としても重視された。これが日本の第一次手芸ブームである。

(pp. 33-36)

日本の第二次手芸ブームは、戦後の1950年代に起った。この頃になると、日本は高度経済成長期に突入し、戦前から活躍していた手芸家が再び手芸品を世に送り出すようになり、彼女たちの教室には多くの主婦たちが学びに行った。また、日本各地の婦人会館や町の手芸屋などでも手芸教室が開かれるようになった。また、昭和25（1950）年からNHKによる

ラジオ番組「女性教室」が手芸特集を組みテキストを発行した。このおかげで、個人や手芸屋が開く教室に入れなかった女性たちも、手芸の技術を手に入れることができるようになった。

また、この時代の手芸ブームは、中流志向の高まりと結びついて、西洋料理やアートフラワーなどの技法を学ぶ花嫁修業のための教室をたくさん生み出した。手芸も、結婚前あるいは結婚後の女性たちの「仕事」という「生きがい」を実現する手段となった。(pp. 36-40、pp. 70-80)

2000年代以降、日本は第三次手芸ブームを迎えた。家庭内のモノづくりには、もはや技術が不要となり、誰でもできる趣味となった。この背景には、誰でも手作り品を売ることができ、製品の消費を超えた素材供給がある。また、現代では手芸文化は「ハンドメイド」と呼ばれるようになった。その中には、2000年代以前に「手芸」と呼ばれてきたもののほかに、DIYや伝統工芸の技術継承事業なども含まれている。さらに、かつて手芸は女性だけがするものとされていたが、現在では「手芸男子」も出現した。(pp. 41-44)

現在、日本の家庭では、女性たちが自ら作った手芸作品で家を飾り、手仕事で家を美しく整えることがよく見られる。また、伝統の手仕事を伝える地域の手芸サークルは、手芸の技法継承や作品の製作そのものよりも、むしろ「生きがい」づくりを通して、高齢女性を孤立させず地域と結びつける場となっている。かつての手芸教育は、今や「生き生きとした老後」を実現する中高年女性たちの趣味になったのである。(pp. 81-83、pp. 211-212)

## 2. 主に滑川市・上市町を拠点にして活動している作家たち

私は、滑川市と上市町を拠点にして、焼き物や裂織、ステンドグラス、編み物など、異なる種類の「手作り」を実践している作家さんたちを対象にインタビューを実施した。本節では、その聞き取り調査に基づいてまとめていく。

### 2-1. 焼き物を製作している住吉紀与志さん

まず紹介するのは、「東福寺窯」で焼き物を制作している陶芸家の住吉紀与志さんである。住吉さんは昭和28(1953)年魚津市に生まれ、16歳～17歳の時から自然や山に興味をもち始めた。会社に就職した約2年後、19歳の時に、住吉さんは横浜・神戸・大阪・川崎などの港町から出航し、商船でオーストラリアや南アフリカにも行った。その時から、住吉さんは焼き物に対する気持ちがどんどん高まり、終わりのない旅を始めたいと考えていた。昭和40年代のある日、住吉さんは陶芸家になることを決心して会社を辞めた。

昭和53(1978)年、修行を終えた住吉さんは滑川市東福寺に登り窯を築き、地名からここを「東福寺窯」と命名して、独立した。平成9(1997)年には滑川市田林に陶房や展示スペースを新設し、それ以降はそこを拠点にして陶芸を制作し続けている。住吉さん最初は萩焼を中心にしたが、現在は、唐津焼、信楽焼、織部焼、志野焼などにも挑戦し、作域を広げ

ながら独自の焼き物を模索している。昭和 62 (1987) 年から平成 24 (2012) 年まで、住吉さんは福岡や埼玉、氷見など、各所で個展を開いている。



写真 4-1 展示スペース



写真 4-2 製作した作品

(富山の遊び場「住吉紀与志の傑作陶器が手に入る「東福寺窯」より)

窯焼きの作業については、毎年 12 月に油燃料を蓄え、春と秋の年 2 回だけ行う。土をこねるところから完成するまで、一つの作品は約 30 時間をかけて製作されている。また、窯焼きに使う土は主に県外のものである。住吉さんは山が好きなので、自分でも色々な土を探して、陶器を作っている。



写真 4-3 陶器を作っている様子

(富山の遊び場「住吉紀与志の傑作陶器が手に入る「東福寺窯」より)

住吉さんは、生涯学習者向けの陶芸教室も開講している。現在コロナの影響で教室の人数は減少しているが、一般人と専門学校生のあわせて 10 名程度で教室が開かれている。

令和 4 (2022) 年度の会場は、富山県民生涯学習カレッジ新川地区センターで、毎週水曜日の午前 9 時から 12 時 20 分まで、10 月 12 日から 2 月 8 日までの 5 ヶ月のあいだに、15 回

の教室が開かれている。そのなかで、土練り・ぐい呑み・手びねり・ひも作り・板作りなど基本的な成形方法から、素焼き窯積み・火入れ・素焼き窯出し・施釉・花立て・加飾・花立て掻き落とし・本焼き窯出しまで、すべての過程を実際に体験しながら作品を制作する。その過程で、手回しろくろや電動ろくろを使った本格的な技法にまでチャレンジすることができる。学習した技能を使い、さらに中間と最後では反省会を加え、学生たちはコーヒーカップや茶碗、小皿、花瓶など、自分に合った趣味の器を手作りすることができる。

住吉さんは、「目には見えないものをどう出すか」、「どこにでも自然はある。感じられるのか感じられないのかは、角度が違うからだ。何かを感じるのには差別があるのだ」という美術的な発想や自然に対する熱愛を持ちながら、人々に五感に訴える作品を追求している。

## 2-2. 裂織を製作している野村順子さん

次は裂織（さきおり）を製作している野村順子さんだ。裂織とは、経糸には主に木綿、麻、絹、毛などの糸を使用し、緯糸には木綿や絹の古い生地を細かく裂いたものを使用するのが特徴の織物である。

野村さんは小さい時から裂織に触れて、30年ほど前から製作してきた。元々は装飾やディスプレイ関連の仕事をしてきたが、バブルが弾けて、そのような仕事がなくなってきた。元々洋服や着物が好きで、手作りに関心のあった野村さんは、平成6（1994）年に織作家である豊田栄美さんに師事し、迷わず裂織を作り始めた。

野村さんの話によると、江戸時代には日本の東北地方で裂織が盛んであった。そこでは綿花が取れないため、ぼろでも貴重品であった。そこで、ぼろがよく子供の服に使われ、リサイクルされていた。裂織を仕事にする人が、そうした当時はたくさんいたが、今そのような人は少なくなっている。20年ほど前に、日本で裂織展が新たに始まり、その後ブームになった。

裂織は、日本だけではなく世界中にある。例えば、フィンランドでは裂織の工芸品が多く、人々は各家にある織機で裂織を作り、家でマットなどにして使うことがよくある。

織機には足踏み織機と卓上織り機の二つのタイプがある。足踏み織機は日本だけではなく、全世界で広く使用されてきたが、徐々に珍しくなってきた。今では卓上織り機のほうが盛んである。その方がより使いやすいし、マットを織るなどするには十分だからである。昔は、仕事着やこたつ蒲団、帯などに仕上げ、広く人々に利用されてきたが、今の時代では、裂織で作った実用品は既になくなっている。野村さんの裂織は実用品ではなく、最初から自分の表現、アート作品として作ってきた。

野村さんは、色々な方法で織物の素材を探している。身近な人からもらったり、古いものを買ったり、他人がいないものを引き取ったりしている。

他に、野村さんは月1回程度裂織教室を開催しており、毎回65～70歳の女性10人ぐらいの生徒が参加している。皆は卓上織機を使って、自分が好きな織物を作っている。



写真4-4 インシデント (偶景)  
(手織舎「作品ギャラリー」より)



写真4-5 裂織教室の様子 (野村さん提供)

令和4(2022)年の10月には、滑川市で「酒蔵アート in なめりかわ」というイベントが開催され、野村さんの作品も展示された。一つは「la saison」という四季を表す作品である。野村さんは最近では「平面的な織りを立体的に見せることができないかな」と考えて、工夫している。「la saison」は立体的なだけでなく、右から時計回りで、4つの部分がそれぞれ春、夏、秋、冬を表現している。4つの季節の隣に、それぞれをイメージする色を表現している小さなパネルも添えられている。

この作品は、普段使用している織機ではなく、持ち運びしやすい卓上織機で製作し、3時間ぐらいかけて、一枚ずつ仕上げた。その後4つの部分を組み合わせて、壁に展示するサイズにした。

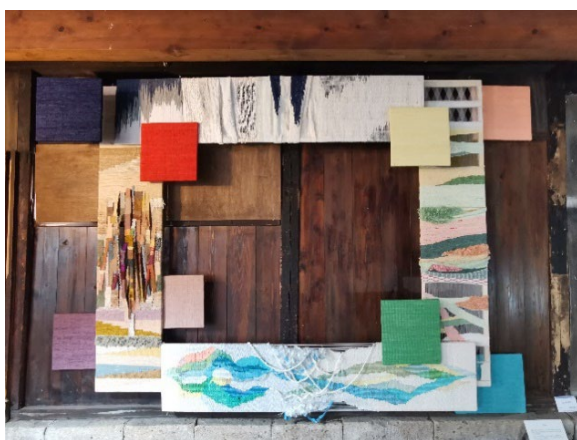


写真4-6 「la saison」(筆者撮影)

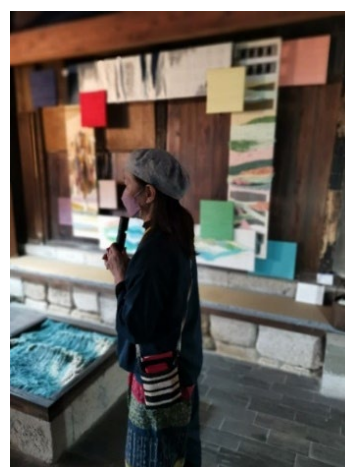


写真4-7 作品について説明する  
野村さん (筆者撮影)

野村さんは富山のギャラリーで作品展を開催したこともあるが、作品に値段をつけるのに消耗した。自分が愛着を持って作った作品に値段をつけることは違和感があると思い、その後、作品に値段をつけることはやめたのだという。野村さんは商売に関心がなく、ただ作ることを楽しみたい、新しいアイデアを形にしたい。そのような気持ちを持って、面白い素材を見つけ、面白いものを製作している。

### 2-3. スタンドグラスを製作する越坂志保さん

3つ目に紹介するのはスタンドグラスを製作している越坂志保さんである。越坂さんは滑川市出身であり、20年前から東京にあるガラスの製作会社に勤めていた。しかし、7～8年間働いた後、会社はリーマンショックの影響で経営状況が悪くなった。その時、越坂さんは転職を考えた。越坂さんはスタンドグラスの素材も好きのため、会社を辞めて、平成21（2009）年からスタンドグラスの製作を一人で始めた。令和3（2021）年に結婚した後、黒部市に住み始めた。

滑川市には「ワンプレート」というカフェがある。そのカフェの店主である浜岡真恵さんは、元々洋服作家だった。浜岡さんは手作り作家の作品や品物を紹介し、横のつながりをしっかり持つ店を開きたいと考えていた。また、スタンドグラスのワークショップはあまりないため、それを紹介する場を、カフェという人が集まる場所でありたいと思っていた。

浜岡さんと越坂さんは10年間以上の知り合いだった。ワンプレートカフェは越坂さんのガラス作品を購入し、さらに、越坂さんに「教室をやってくれないか」と声をかけた。そして、ワンプレートがオープンした7年前から、越坂さんは毎月第1土曜日に滑川でスタンドグラス製作の教室を開催している。



写真4-8および4-9 ワンプレートに展示してある越坂さんの作品（筆者撮影）



写真4-10 (左) ワンプレートで開催している教室で生徒が作品を作っている様子

写真4-11 (右) 越坂さんがガラスを製作している様子 (いずれも筆者撮影)

カフェに来た常連客がパンフレットの案内を見て、越坂さんの教室に参加するようになった。コロナの影響で人数は抑えているが、毎回の教室は人気で、生徒は2～6人の50人以上の女性である。また、黒部市の自宅でも、毎月第1木曜日に教室を開催しており、他に出張教室もしている。

ステンドグラスの素材は主にガラスと金属であり、コテとハンダで製作する。時間的には、2時間で終わる作品もあるし、6～8時間程度かかる作品もある。また、越坂さんが使用しているガラスの素材は、アメリカやヨーロッパなどから年に数回輸入したり、数か月に1回通信販売や問屋から買ったりと、色々な方法でガラスを仕入れている。

越坂さんはステンドグラスのデザインや形を考える時、身近なところからインスピレーションをえていて、いろんな素材をガラス作品に活かしていきたいと考えている。製作することで、光にも敏感になってきたという。ガラスは水のような素材だと言い、それがガラスの魅力だと越坂さんは感じている。

#### 2-4. マルナカ手芸店の中西恵都子さん

4番目に紹介するのは、編み物やその素材を販売している「マルナカ手芸店」の店主である中西恵津子さんだ。この店は40年前に中西さんの母親である中川敏子さんが滑川で開業したもので、当時中西さんは中学生だった。中川さんは洋裁を専門にしていたが、中西さんは編み物が専門である。中西さんは高校を卒業した後、ニットが好きだったため専門学校で2年間編み物を勉強した。その後、20歳の頃から母親と一緒に店を運営してきた。5～6年前に母親が引退したため、それ以降は中西さんが一人で店を運営するようになり、家業として引き継いできた。





写真 4-12 外から見た店の様子（筆者撮影）

中西さんの店では編み物の素材が数多く販売されている。一番数多く販売している糸を例にすると、1種類でも300色がある。種類として、ミシン糸と手縫糸、木綿糸、ニット用の糸、刺繍糸、絹糸、ボタン付け用の糸など全部で10種類があり、合計で3000種類ある。また、洋服やベッドカバー、カーテン、インテリア用品などに使われている布地は2000種類もあり、ボタンも合計で全部1000種類もある。すべての素材を合わせると、数えきれないほどの種類である。



写真 4-13 および 4-14 店内で販売している糸やボタン（筆者撮影）

編み物の素材以外に、メーカーが製作した編み物や、中西さん自身が作った帽子やストールなども販売している。中西さんの話によると、小さいものなら1時間で完成できる。それに対し、一着の衣服を作ると、最低でも10時間は必要である。



写真4-15 および4-16 販売している布地やセーター（筆者撮影）

中西さんは、ズボンや洋服の直し、仕立て直し、オーダーメイドのセーター編みなどの注文も引き受けている。以前は中西さんと母親がこれらの仕事をしていたが、今はあまり時間がないため、縫子に頼むようになってきた。「縫子」とは、雇われた裁縫する人のことで、「針子」ともいう。

中西さんの店が依頼している縫子は、洋装店の仕立屋に勤めていた経験のある方である。しかし、今は仕立屋の仕事があまりないため、縫子は自宅で洋服の直しなどの仕事をしている。また、中西さんの店が依頼している縫子は主に1人で、スカートの幅だしやズボンの丈直しなどの細かいことは縫子に頼んでいる。

中西さんは、「今、縫子さんや編み物の技術を持っている人は少なく、趣味でやっている人はいっぱいいますが、本職としてちゃんとやっている人は少ない」と話す。例えば、一着の洋服を製作しようにも、滑川市で縫子を探すのは難しい。上市町まで手を広げても、滑川市と似たような状況であるという。ある時は、高岡市の縫子に頼まなければならないこともあった。

毛糸のメーカーがシーズン初めに、見本品としてセーターの注文を聞いてくる。その後、注文したセーターが中西さんの店に送られてくる。注文は春夏と秋冬それぞれ1回ずつである。中西さんの店で販売している編み物やセーターは、それらの見本をもとに、縫子に製作を依頼したものである。

中西さんの店の向かいにあるショッピングセンター「エール」では、月1回に「わくわくショップ」というイベントが開催されている。令和3（2021）年の「わくわくショップ」では、火を使わずに香りを楽しむインテリア雑貨であるアロマワックスやリボン、ジェルキャンドルなどを様々なものを製作するワークショップも開催されている。アロマワックスを製作するワークショップは2日間、1回30分の程度で開催されており、ジェルキャンドルを製作するワークショップは3日間、1回30分程度で開催されている。

「わくわくショップ」の一環として、婦人服売り場の隣で中西さんは編み物教室を開催している。初めて編み棒を持つ人、流行りのセーターを編みたい人、おしゃべり仲間が欲しい

人など、様々な人を対象にして生徒を募集している。教室は毎月第1・3水曜日の10時～12時、または毎月第1・3土曜日の14時～16時の時間帯に開いている。毎回の生徒は2～4人程度で、皆編み物に興味を持っている主婦である。



写真4-17（左）編み物教室の様子（中西さん提供）



写真4-18（右）顧客が店で商品を探している様子（筆者撮影）

中西さんは、「編み物教室を開催することも含め、店を経営することで、より多くの若者に編み物や手作りに関心を持ってもらいたい」という思いを持っている。このように、趣味である手芸品の店を営業し、常に顧客の要望を聞き、顧客に喜ばれる「よろずやのような店」を町に提供している。

## 2-5. 浴衣リメイクを製作する姉妹

次に紹介するのは、浴衣リメイクを製作している姉妹の金谷睦美さんと中川順子さんである。おふたりの母親も浴衣をリメイクするのが好きだったので、金谷さんと中川さんも作り始めた。それが、家族や親戚のあいだで非常に評判が良かったことがきっかけになった。趣味で浴衣リメイクを製作しているうちに、雑貨店「じんでんや」の店主である浦田峰子さんに、「こういうパンツ作ってもらいたい」などと言われるようになった。作ってみると、これも家族のあいだで評判良く出来上がった。平成28（2016）年から、金谷さんと中川さんは、じんでんやでリメイクした浴衣を売り始めた。平成30（2018）年12月からは商品にコトコトのシールを貼って、「コトコトさん」の作品として正式的に売り始めた。

金谷さんと中川さんの話によると、服装を製作する際は、パンツのポケットをスマホが入るサイズにデザインするとか、去年製作したスカートより3センチぐらい長くするとか、見えないところにも工夫をこらしているという。また、デザインより着やすさを重視している。最初は男性用の生地やおとなしい柄を主にしていたが、最近は華やかなデザイン、派手な柄のリメイク品が多くなってきた。



写真4-19 (左) じんでんやで販売しているコトコトさん製作の服 (筆者撮影)



写真4-20 (右) じんでんやでリメイク服を買い求めている顧客 (筆者撮影)

リメイクのためには、古い浴衣を利用するほうが好ましい。その方がより良い生地が使えるからである。そのため、浴衣を探す際は、周りの人から不要な、あるいは古い浴衣をもらっている。製作に必要な時間には幅がある。集中的に作業して3～4時間で仕上げられるときもあるし（その場合は1日で2枚作る時もある）、2～3日かけて一着のリメイク品を製作する時もある。

コトコトさんのおふたりは教室を開催していないが、マルナカ手芸店の中西さんと同じように、周りの人々や顧客の喜ぶものを製作し、販売している。そうすることで、顧客もリピーターになっていくことがあるようだ。

## 2-6. cotton cup の店主——谷口玉美さん

6つ目に紹介するのは、花や米を素材にしてアクセサリーなどを作っている cotton cup の店主である谷口玉美さんである。谷口さんは富山市出身であり、以前は花屋で働いていた。結婚した後、花屋の仕事をやめて、滑川市に引っ越して来た。子育てをしながら、家でアクセサリーを作り始めたが、やはり趣味を仕事にしたいと思った。

そのような時に、瀬羽町(旧宮崎酒造周辺)が滑川市で比較的賑やかなところであること、築100年以上の古い建物を利用すれば、滑川市から補助金が出るということを知った。平成25(2013)年に、40年空き家だったという古い建物を改装して、花やアクセサリーを販売する店を設立した。

谷口さんは元々花をアクセサリーにしたいと思っていたが、花は季節や天候によってないものがあったり、不揃いになったりことがあるため、思い通りのデザインにすることが少し難しいという短所がある。しかし、谷口さんは自分が好きな自然な素材を使って作品を作りたいと考えて、まずはスーパーでゴマなどの素材を買いそろえて、アクセサリー作りをスタートした。



写真4-21 cotton cupの外観（筆者撮影）

アクセサリーの製作方法に決まりはなく、谷口さん自身の感覚で素材を色々と組み合わせて作っている。どの作品にもそれぞれ独自の意味や思いが込められている。製作する時に難しいのは、素材の選択と組み合わせだという。たとえば、一つのピアスを作るのには24時間ぐらい、ヘアゴムのようなものでも1時間ぐらいかかる。cotton cupでは谷口さん自身が作ったものも販売しているが、店内スペースはそれ以上の十分な広さがあるため、専門的なスタッフに製作を依頼してその作品を販売することもある。また、滑川市以外に、東京、大阪、埼玉などで委託販売もしている。



写真4-22（左）米やごま活用したアクセサリー（筆者撮影）



写真4-23（右）フラワーアレンジ教室の様子（谷口さん提供）

谷口さんは、商品を製作・販売する以外に、店でフラワーアレンジ教室とレジンアクセサリー教室も開講している。フラワーアレンジ教室は季節の花を使い、毎回違ったデザインのアレンジを作る教室である。毎月第2木曜日の10時30分～12時30分と13時30分～15時30分の二つの時間帯で開催している。レジンアクセサリー教室は生徒たちが好きなアク

セサリーを作る教室である。毎月第3木曜日の10時30分～12時30分と13時30分～15時30分の二つの時間帯で開催されている。毎回の教室は人気であり、主に20代～50代の人が参加している。

谷口さんは、良いものを製作したいという思いから、ジャンルを問わずいろんな作品を見るようにしている。「フリーな感覚」や「美術的な感覚」を求めながら、自分の性格や好みによって作品を製作している。

### 2-7. パッチワーク製作をしている酒井クニ子さん

最後に紹介するのは、上市町在住でパッチワークを製作している酒井クニ子さん(78歳)である。酒井さんは元々上市町役場の職員であったが、週休二日制が導入されたのをきっかけに、「何かものを作りたいな」と考えるようになった。ちょうどその時、富山のある所でパッチワーク展があるという、北日本新聞の記事を見た。布が好きであった酒井さんは、そこで作品を出展していた先生を知る友達に頼んで、その先生からパッチワークを習い始めた。35～36年前のことである。

酒井さんは現在、上市の美術館で毎年自作のパッチワークを出展している。それを見た「アルプスの湯」(上市町の健康福祉施設)の理事長から、「ここで飾ってもらえないか」という話を持ちかけられたため、3年前からアルプスの湯でも展示をはじめた。これは通年の展示で、毎月1日に飾る作品を変えている。他に、「北アルプス文化センター」でも通年で作品が展示されており、こちらは年に1度、新しい作品に取り替えている。酒井さんはまた、2年1回の個展を富山市で開催している。壁に掛けるような大きな作品のほかにも、バッグやクッションなどの小さなものもパッチワークで作っている。



写真4-24(左) アルプスの湯ロビーの展示、2020年11月(アルプスの湯 Facebook より)

写真4-25(右) アルプスの湯ロビーの展示、2022年8月(筆者撮影)

酒井さんはパッチワーク作品を製作するとき、ミシンを使わずに、すべて手縫いで製作している。一つの作品を作るのに、1年もの時間をかけることもある。華やかな色合いを使用することが多いが、大阪に行くことの多い旦那さんに、常に色々な布の素材を買ってくるよう頼んでいる。また、色の組み合わせなどデザインで難しいところがあれば、先生と相談して、アドバイスをもらっている。

酒井さんはかつて教室を開催したことがあったが、その経験から、人に教えるのは苦手だとわかったのだという。今は自分の作品により集中したいという理由もあって、教室を開講していない。

酒井さんはパッチワークを楽しみにしており、パッチワークを製作することで生活が充実するようになったと、ストレス解消の一つになったと感じている。また酒井さんは、今も元気でいられるのは、好きなパッチワーク製作を続けていること、そのおかげで自分の生活が生き生きとした、希望あるものになっているおかげだと思っているという。

## おわりに

今回の調査では、滑川市と上市町を拠点にして活動している様々な作家さんをインタビューした。それにより、工芸品や手芸品についての状況を理解することができた。特に、cotton cup やマルナカ手芸店など、作家さんたちが製作した手作りの品物が個人のお店やネットワークで主に流通しているらしいことがわかった。

また、多くの作家は教室を開催しており、その受講生が主に40～70代の主婦であることもわかった。野村さんは自宅で裂織教室を開催しており、中西さんや越坂さんも個人の店とワンプレートのカフェでそれぞれ編み物教室とステンドグラス製作の教室を開催している。手作りや手芸は主婦の趣味の一つになっており、多くの人が様々な教室に参加していることがうかがえる。他方で、滑川市や上市町では、手作りを趣味にしている若者は少ないということが推測される。

一方で、作家さんたちは色々な方法やルートで、それぞれの作品をより多くの人に認識してもらおうと試みている。例えば、野村さんは平成27(2015)年から令和4(2022)年まで毎年作品を「酒蔵アート in なめりかわ」というイベントで展示している。酒井さんも3年連続でアルプスの湯でパッチワークの作品を展示しており、富山市でも2年1回に個展を開催している。このような方式で、作家さんたちは自分が製作しているものを広く宣伝してきたと言えるだろう。

また、滑川市では、One plateのような個人経営のカフェで、作家さんたちが横のつながりを持てるような機会が設けられ、「酒蔵アート in なめりかわ」のようなイベントで作品の展示などもできる。上市町でも、平成27(2015)年から毎年、「姫たちのフェスティバル」という出店イベントが開かれている。このイベントでは、手作り工房や色々なワークショップが開催されている。このように、色々な場所や活動によって、作家さんたちが交流し、横

のつながりつくることができるようになりつつある。

伝統工芸や手作りする文化が年々先細っている現状の下で、作家さんたちは横のネットワークをうまくつなぐだけではなく、新たな方法で自らの活動を宣伝することも必要だろう。例えば、私の故郷である中国では、平成 28 (2016) 年から、荘河市の切り紙細工やその他の手作り作品の製作方法を記録するドキュメンタリー作品が制作されて、動画共有サイトに次々とアップロードされている。また、コロナが蔓延している状況下で、令和 4 (2022) 年には、ライブ配信の形式でオンライン授業が開催され、作家たちは工芸品の製作方法を人々に教えた。その結果、合計で 120 回以上の授業が開催され、多くの人々に手作り作品の製作方法を実際に体験できるようになり、手作りものや工芸品に対する関心を増やしてきた。

滑川市と上市町で活動している作家さんたちも、今後はこれまでと異なる新たな発想を考え、たとえばオンラインの場などを活用しながら、工芸品や手作りを人々の生活とつないでいくことが期待される。様々な方法で作品を人々の耳目にふれさせることで、「工芸品や手作りものを大切にしなければならない」という気持ちをより多くの人々に伝えられるだろう。

#### 参考文献

上羽陽子・山崎明子 (編)、2020 年『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』フィルムアート社。

#### 参考にしたウェブサイト

手織り舎「作品ギャラリー」〈<http://www.teori-ya.net/gallery/index.html>〉

(最終閲覧 2022 年 12 月 21 日)

富山県生涯学習カレッジ 新川地区センター「令和 4 年度 富山県生涯学習カレッジ 新川地区センターだより みどり野」

〈<https://www.tkc.pref.toyama.jp/attach/EDIT/001/001599.pdf>〉

(最終閲覧 2022 年 12 月 21 日)

富山の遊び場! 「住吉紀与志の傑作陶器が手に入る「東福寺窯」(2015 年)

〈<https://toyama-asbb.com/archives/2521>〉

〈[https://toyama-asbb.com/wp-content/uploads/2013/05/DPP\\_0926.jpg](https://toyama-asbb.com/wp-content/uploads/2013/05/DPP_0926.jpg)〉

〈[https://toyama-asbb.com/wp-content/uploads/2013/05/DPP\\_0927.jpg](https://toyama-asbb.com/wp-content/uploads/2013/05/DPP_0927.jpg)〉

〈[https://toyama-asbb.com/wp-content/uploads/2013/05/DPP\\_0928.jpg](https://toyama-asbb.com/wp-content/uploads/2013/05/DPP_0928.jpg)〉

(いずれも最終閲覧は 2022 年 12 月 21 日)





## 第II部

おもう・かたる



## 第5章 宿場町の過去と現在——滑川市瀬羽町の事例を中心に

浦上 結衣

### はじめに

私が初めて滑川市の宿場回廊を訪れたのは、令和3（2021）年5月末だった。文化人類学研究室の所属になって、初めてのフィールドワークを行った日だ。雨の日ということもあり、人通りは少なかったが、昔ながらの建物や雰囲気が残る町並みになぜか心惹かれた。普段買い物をするショッピングモールなどの場所には車で移動するので、目的地の周辺を歩いて散策することは滅多にない。そんな私にとって、風情ある町を歩いて散策することは新鮮なことだったようだ。通りを歩いていると、何軒かの店を見つけることもできた。昔ながらの雰囲気が漂うこの場所で、どんな人が、どのような経緯で店を開いているのかと、ふと気になったのが、この調査を始めることになったきっかけである。

今回は、かつて宿場だった場所のなかでも、現在多くの店が集まる、瀬羽町を中心にフィールドワークを行った。主に、現在店を構える店主の方々や、過去に商店を営んでおられた方に聞き取り調査をお願いした。それらの調査データをふまえて、本章では、宿場回廊のかつての様子と現在の様子を記述していく。

第1節では、文献調査に基づき、滑川の宿場の概要を説明する。第2節では、聞き取り調査に基づき、昭和期の瀬羽町の様子を記述する。第3節では、店主の方々からの聞き取り調査に基づき、現在の瀬羽町の様子をまとめる。第4節では、瀬羽町以外にある店を紹介する。第5節では、フィールドワークを行う中で見えてきた課題を記す。

### 1. 宿場として栄えた滑川の姿——文献調査から

#### 1-1. 滑川の宿場

滑川は、北陸街道の宿場として栄えた町だ。藩政初期から宿駅としての役割を担っていた。滑川の宿駅は、北陸街道に沿って東西に発達している。旅人が休憩・宿泊するための、休み茶屋や旅人宿が多く並んでいた。滑川の町で直接的に宿場の機能を果たしていたところは、「本町」と呼ばれる、草分町人が居住する、格式の高い場所だった。滑川における本町は、大町、狭町（現在の瀬羽町）、新（荒）町の3つの町であった（滑川市史編さん委員会編『滑川市史通史編』100～102、138～150頁参照）。

#### 1-2. 瀬羽町

第2節、第3節では、瀬羽町の住民や店主から聞いた話をもとに記述している。それに先立って、文献から読み取れる、瀬羽町の過去の様子を記述する。



図 5 - 1 滑川市地図（国土地理院地図を加工）

瀬羽町は、天正期（1573～1591年）にできた町である。当初は、狭（せわ）町と表記されていたが、寛永6（1629）年に町域が海岸に浸食され、山方に移転し、天和3（1683）年に瀬羽町と改めた（滑川市史編さん委員会編『滑川市史通史編』102頁）。寛永期（1624～1643年）には、年貢米収納の御城米屋敷や鍛冶拝領屋敷があり、有力商人の屋敷があった。明治時代に入ると、銀行や肥料商、米問屋、藤細工問屋などが軒を連ね、客でにぎわっていたという（婦人ボランティアお講研究会編「滑川市立博物館双書 11 滑川のお講 その5」64頁）。



写真 5 - 1 明治期の瀬羽町（出典：『目で見える滑川・新川・婦負の100年』）

瀬羽町には、国登録有形文化財に指定されている建物がある。そのうちの一つ、旧宮崎酒造店舗兼主屋は、もともとは売薬と酒造業を営んでいた有力町人、小泉屋のものだった。天保9（1838）年に本陣<sup>1)</sup>を務めていた桐沢家（綿屋）が焼失したため、それ以降は、養照寺と交代で本陣を務めていた。その後は、明治8（1875）年に宮崎家が小泉屋から土地と建物を購入して、平成19（2007）年まで宮崎酒造株式会社を営んでいた（滑川市立博物館編『滑川の文化財』112頁）。現在は、瀬羽町の中心的な建物として、イベントなどが行われている。



写真5-2（左） 旧宮崎酒造（筆者撮影）



写真5-3（右） ベトナムランタン祭りが行われている旧宮崎酒造（筆者撮影）

## 2. 昭和期の瀬羽町——聞き取り調査から

本節では、聞き取り調査をもとに、昭和期の瀬羽町の様子について記述していく。

### 2-1. 当時の瀬羽町の様子

旧宮崎酒造の向かいに住み、かつて床屋を営んでおられた、菅田榮子さん（78歳）に話をうかがった。菅田さんは、瀬羽町でかつて床屋を営んでいた方だ（この床屋については、次項で述べる）。菅田さんによると、かつての瀬羽町には「ないのは葬儀屋くらい」と言われるほど、たくさんの店が並んでいたという。また、店が閉まった後でも、店と同じ場所に店主が住んでいたため、住民の数も多かったそうだ。店が閉まったあとでも、「ごめんください！」と店にあがりこんでいくこともしばしばあったという。

菅田さんには、瀬羽町の通りを一緒に歩きながら案内してもらい、かつてどこにどんな店があったのかについて上のようなお話を交えながら、ひとつひとつ教えてもらった。図5-2は、その話をもとに昭和40（1965）年～昭和50（1975）年頃の商店の様子について作成した地図である。なお、菅田さんおひとりの記憶に頼ったものであるため実際と多少のずれがある可能性はある。

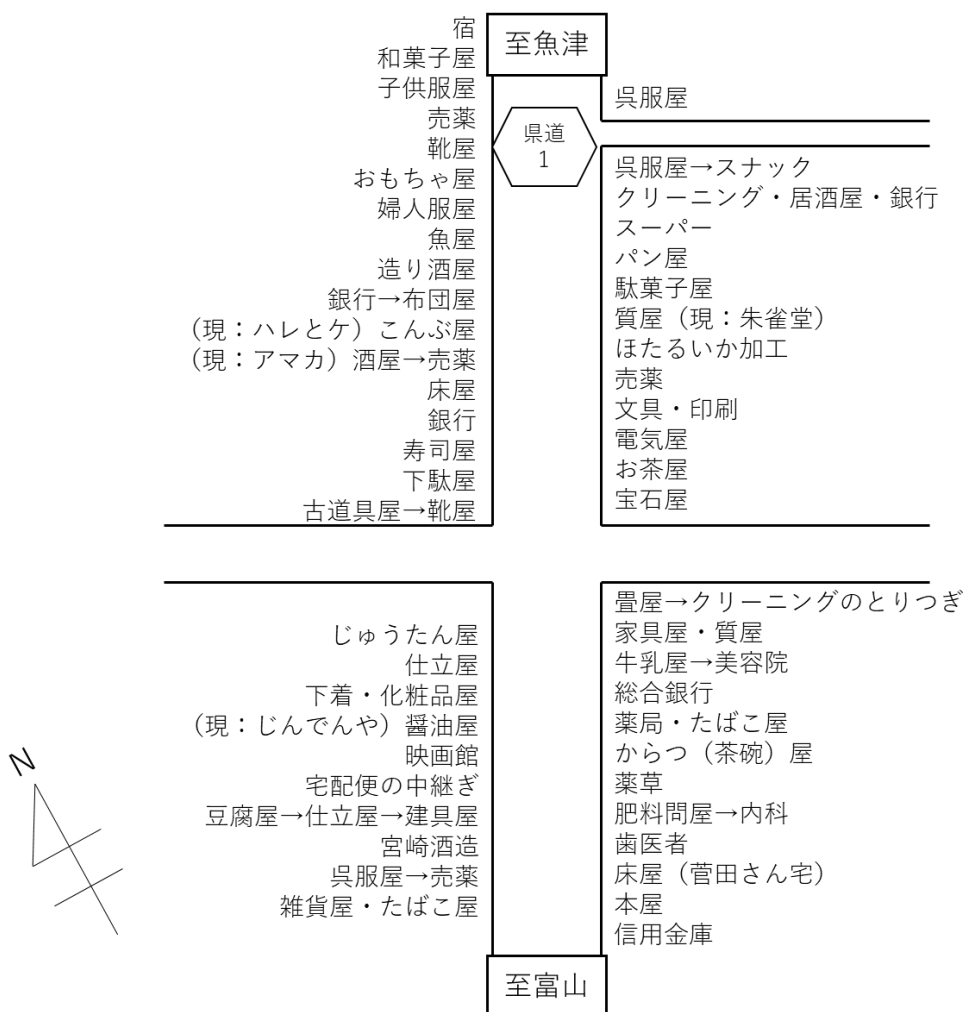


図5-2 昭和40(1965)年～昭和50(1975)年頃の瀬羽町の地図

地図を見て分かる通り、当時の瀬羽町には多くの商店が並んでいた。また、食料品から衣料品、日用品、そして娯楽施設に至るまで多様な商店が存在しており、瀬羽町だけでも生活するのに困らないほどであったことがうかがえる。

その頃の瀬羽町の様子について尋ねたところ、当時は、店や人通りがとても多く、にぎわっていたと菅田さんは話した。「瀬羽町銀座」と呼ばれるほど栄えていたそうだ。映画館では、レイトショーも行われていたため、夜までにぎやかだったという。現在、旧宮崎酒造が文化財に登録されたり、カフェなどの店ができたりしたことで、人通りが戻りつつあるが、昔ほどではない。また、かつてとは違って、現在瀬羽町で営業中のお店の店主たちは瀬羽町の住民ではないため、店が閉まると別の場所にある自宅に帰ってしまう。そのため、夜になると誰もいなくなってしまう、寂しいというふうに話された。



写真5-4 昭和30(1955)年頃の瀬羽町(滑川市立博物館所蔵)

## 2-2. 床屋を営んでいたころの思い出

菅田さんが営んでいた床屋についても教えていただいた。「Men's Beauty Salon Sugata」は、菅田さんのお姑さんが開業し、家族で経営していた店だ(お舅さんは、バスや霊柩車などの運転手をしており、床屋とは別の仕事をしていた)。当時、女性が床屋を営むことは珍しいことだったという。結婚を機に20歳で瀬羽町に移り住んだ菅田さんは、お嫁に来た後に理容学校に通い、資格をとった。その後は、菅田さんのご主人が店を引き継いだ。昭和6(1931)年から営業していた床屋だが、ご主人の体調不良が理由で、平成31(2019)年に長年の歴史に幕を下ろした。菅田さんに子どもはいないが、もし子どもがいたとしても店を継ぎたいと言わない限りは継がせなかつただろうという。閉店することになったときには、常連さんが悲しんでくれて嬉しかったと話した。お客さんから色々なお話を教えてもらったといい、お客さんとの関わりが楽しみなことだったと語っていた。

床屋を営業していた当時の様子や思い出も教えてもらった。営業時間は朝8時～夜7時までだったが、開店前に来店する人もいれば、大晦日には紅白歌合戦を見終わってから髪を切りに来る人もいたという。このように、営業時間外であってもお客さんの要望があれば対応したものだ。また、入学式や運動会があるたびに大勢の子どもたちが髪を切りに来ていたため、自ずと学校行事の日程がわかったという。2世代・3世代で通う人がいたり、予



約をする習慣がなかったため行列ができたりすることもあったといい、当時の繁盛ぶりをうかがうことができた。

### 3. 現在の瀬羽町

現在の瀬羽町は、国登録有形文化財に指定されベトナムランタン祭りなどのイベントが行われている旧宮崎酒造を中心に、歴史的景観が残された町である。現在ここには、11の商店が並んでいる。この数年の間に開店した新しい商店が多い。今回は店主の方々にご協力いただき、聞き取り調査を行った。本節では、詳しく聞き取り調査を実施することのできた2つの店舗、「ハレとケ」と「朱雀堂」について主に記述するが、それに先立って他にどのような店があるかについても、簡単に説明しておく。



写真5-5 現在の瀬羽町（筆者撮影）

瀬羽町には、飲食店、雑貨屋、古道具屋、古本屋、花屋、パン屋といった店が並んでいる。飲食店のひとつ、「ハンモックカフェ・アマカ」は、季節の果物を用いたパフェなどを提供するカフェで、インスタグラムのフォロワーが1.2万人を超える（2022/12/20時点）人気店だ。店内にはハンモックがあり、ハンモックにゆられながらパフェを楽しむことができる。パン屋「hope」は、低糖質パンを提供する店で、令和4（2022）年7月に瀬羽町にオープンした、新しい店だ。花屋「Cotton Cup」については、第4章で丑蘊斐が詳しく記述しているので、そちらを参照されたい。

令和4（2022）年11月末をもって閉店してしまったが、旧宮崎酒造の2階では、「アガリ curry」というカレー屋が営業していた。店主は、世界各地をバックパッカーとして旅していた経験があり、東南アジアに行った際にカレーの作り方を見て勉強したという方で、本

格的なカレーを提供するお店だった。もともとカレーが好きで、スパイスの知識があったため、においてどんなスパイスが使われているのかを判断し、インターネットでそのスパイスを検索したり、購入したりして、カレーの研究をしていたそうだ。

このほかにも紹介しきれないお店もあるが、個性的な店が多く並んでいる通りである。また、空き家を改修して営業するお店が多く、外観に高度経済成長期以前の面影が残る店も多くある。後述する、「ハレとケ」でも、かつてこんぶ屋だった頃の看板がそのまま残されている。昔ながらの面影と新しさが融合した、風情ある町並みである。

### 3-1. ハレとケ

「玄米&海洋深層水デトックスカフェハレとケ」にお邪魔し、店主の鍋谷智子さん(56歳)にお話をうかがった。ここは、滑川沖で取れた海洋深層水と、その深層水からつくられた天日塩を使った料理を提供している店だ。メニューは、平日(ケの日)と土日(ハレの日)で異なっており、ケの日には、玄米ごはんと汁物を基本食にして、自分の好きな主菜、副菜を選ぶことができる。ハレの日には、玄米ごはん、汁物、主菜、副菜、プチデザートがセットになった「ハレの日ランチ」を提供している(ハレとケのホームページより)。

店内には、写真やアート作品が飾られている。飾られている作品は定期的に模様替えが行われているので、毎回違う展示を見ながら食事を楽しむことができる。私が訪ねた時には、後述する「じんでんや」の作家さんが描いた絵が飾られていた。

ハレとケは、令和元(2019)年5月3日にオープンした店だが、鍋谷さんはもともと、同じ通りで平成27(2015)年5月3日にオープンした雑貨屋「じんでんや」の店主であった。現在は、じんでんやの営業を別の人に譲り、鍋谷さん自身はハレとケの営業に専念している。

鍋谷さんには、まずはじんでんやについて教えていただいた。じんでんやは、仕入れた雑貨に加えて、作家からの委託販売も多く行っている店だ。じんでんやは、国登録有形文化財である建物、城戸家住宅主屋を利用して営業している。この城戸家住宅主屋は、19世紀前半に神田村(現上市町)から移り住み、味噌や醤油の製造、後に金物屋や貸鍋を行っていた家だ。家主の出身地にちなんで、「神田屋(じんでんや)」と呼ばれている(滑川市立博物館編『滑川の文化財』61頁)。

鍋谷さんがじんでんやを始めたきっかけは、次のようなものである。鍋谷さんはもともと、滑川市のケーブルテレビに関係する仕事をしていたそうで、議会の中継や、滑川の現状を見聞きする機会が多かったという。そのなかで、かつて宿場だったこともあり有形文化財が多く存在するにもかかわらず、人通りが少なくなっている瀬羽町ににぎわいを作り出したいという思いから、この地で店を始めた。瀬羽町に存在する店は、2010年代後半や2020年代に開店した店が多いが、その先駆けとなったのが、このじんでんやだった。

じんでんやがオープンする際には、「昭和まつり」というイベントを行った。「紅白歌合戦」を行ったり、夜には、鍋谷さんの娘さんが所属しているダンスグループを招いてディスコ大会をしたりしていたそうだ。このイベントでは、資金集めと集客(広告)を兼ねてクラウド

ファンディングを行ったそうで、大掛かりなイベントだったという。



写真5-6 じんでんやの外観（筆者撮影）

次に、ハレとケについてである。ハレとケは、この通りを訪れた人が少し休憩できるようなカフェがあるといいのではないかと思い、始めたという。ちょうどその頃、鍋谷さん自身が玄米を主食とする生活を送っており、玄米の炊き方教室にも通っていたようで、それが今のハレとケのメニューに繋がっている（今では鍋谷さんが玄米の炊き方教室を開いている）。滑川市のもを使いたいという思いもあったため、深層水や天日塩を使った料理を提供することにした。客層は、鍋谷さんと同年代の主婦のほか、平日はサラリーマンが来店することもある。しかし、オープンして1年で新型コロナウイルスの影響を受けてしまうことになった。ちょうど客が多くなり、忙しくなってきた時期でもあったため、本音を言うと少し休みたかったという思いもあったそうだ。しかし、すぐに弁当の販売を始め、完全に休むということにはなかったという。



写真5-7（左） ハレとケの外観（筆者撮影）



写真5-8（右） 2階にあるじんでんや SHIKI（筆者撮影）

ハレとケの2階には、「じんでんや SHIKI」という雑貨屋スペースもある。先程述べた、同じ通りに存在するじんでんやは、4月～10月しか営業しておらず、冬期は営業していない。そのため、1年中営業している雑貨屋として、じんでんや SHIKI を開業した。

さらに、鍋谷さんは、ハレとケでも数多くのイベントを行なっている。先程記述した、じんでんやオープンの際に行ったイベントをオマージュして、令和4(2022)年には、昭和の日(4月29日)に「昭和まつり」というイベントを行なった。昭和の歌謡曲を聞きながらのランチや、じんでんやで作品を販売する作家さんらによるファッションショーなどを行った。他にも、熊本地震があった時には熊本の名水を販売したり、前述したように店内で作品の展示をしたりと、様々な企画を行ってきた。今まで行ってきたイベントの企画は全て鍋谷さん自身で行っている。イベントを行うのはものすごく大変だが、やはり楽しさがあるからイベントを行なっていると語った。

今後やりたいことについてもお聞きした。今はお客が増えて、日々をこなすので精一杯なのだそうだ。調査で訪問した日も、店の定休日であったが、翌日の仕込みをされていた。完全な休みがほとんどないと話されていたが、瀬羽町の通りににぎわいが戻りつつあり、当初目標にかかげた役割を果たせたという思もあるという。

### 3-2. 朱雀堂

令和元(2019)年に開業した、美濃焼とアクセサリーの店「朱雀堂」の店主、柿澤沙帆さん(22歳)にご協力いただいた。

柿澤さんは、県内の短期大学卒業後すぐにこの店を開いた。短期大学生時代から、インターネットで仕入れ先を見つけ、ネットショップでの販売を行ったり、イベントに出展したりしていた。不動産屋の紹介で物件を見つけ、朱雀堂を開業することになったという。



写真5-9 朱雀堂の店内(筆者撮影)

店内では200種類ほどの商品を販売している。まとめてお皿を買っていくお客が多いと

いう。美濃焼の皿だけでなく、アクセサリーや洋服などの商品も販売している。店内には和室もあり、落ち着いた雰囲気の内装になっている。

柿澤さんは、不定期で「SEWA MARKET」というイベントを開催している。これは、朱雀堂店内に何人かの作家さんを集めて、雑貨の販売を行うイベントだ。アクセサリーやドライフラワー、布小物など、毎回多種多様な作品を扱う作家さんが集っている。

SEWA MARKET を始めた経緯をうかがったところ、天候の影響で客が少なく、暇になったときがあったため、その期間に準備をし、このイベントを始めてみることにしたという。また、「今はハンモックカフェ・アマカがあるから、この通りがにぎわっているが、それ以外にも人が集まる場所をつくりたい。何もないところだが、何もないところなりの良さがある。このまちで店を出したからには、このまちに人を呼ぶことは義務だと思っている」と語った。

SEWA MARKET への出店者の募集は行っていない。過去に朱雀堂が出店したイベントで商品を購入した作家や、朱雀堂の店舗に来てくれた作家に出店を依頼しているのだという。また、マーケットへの来店客に朱雀堂の商品にも興味をもってもらうことをねらって、朱雀堂の客層と合う作品を扱う作家を選んでいる。出店料は1,000円で昼食付き。1回のイベントで出店できる店舗数はせいぜい7～9組ほどで、お客さんは全ての店舗を見る人が多いため、購入率が上がるという。逆に大きいクラフトイベントなどでは、出店者数が多すぎて全店舗を見る人が少ない。SEWA MARKET くらいの規模のマーケットは、出店する作家にとってもメリットが大きいのだ。

柿澤さんには、瀬羽町にある他の店との交流についてもうかがった。柿澤さん自身は、瀬羽町にある店をよく利用しているそうで、先述したハレとケやアガリー curry (2022年11月末で閉店) に昼食を食べに行くこともしばしばあるという。

また、柿澤さんは、自身で「瀬羽町偏愛 MAP」というものを作成している。このマップには、現在の瀬羽町にある全ての店が紹介されている。各店舗についてのコメント付きで、柿澤さんの瀬羽町への思いが詰まったマップになっている。このマップにも、先程、SEWA MARKET 開催経緯でも述べたような、このまちに人を呼び込みたい、このまちの良さを広めたいという思いが表れているように思う。

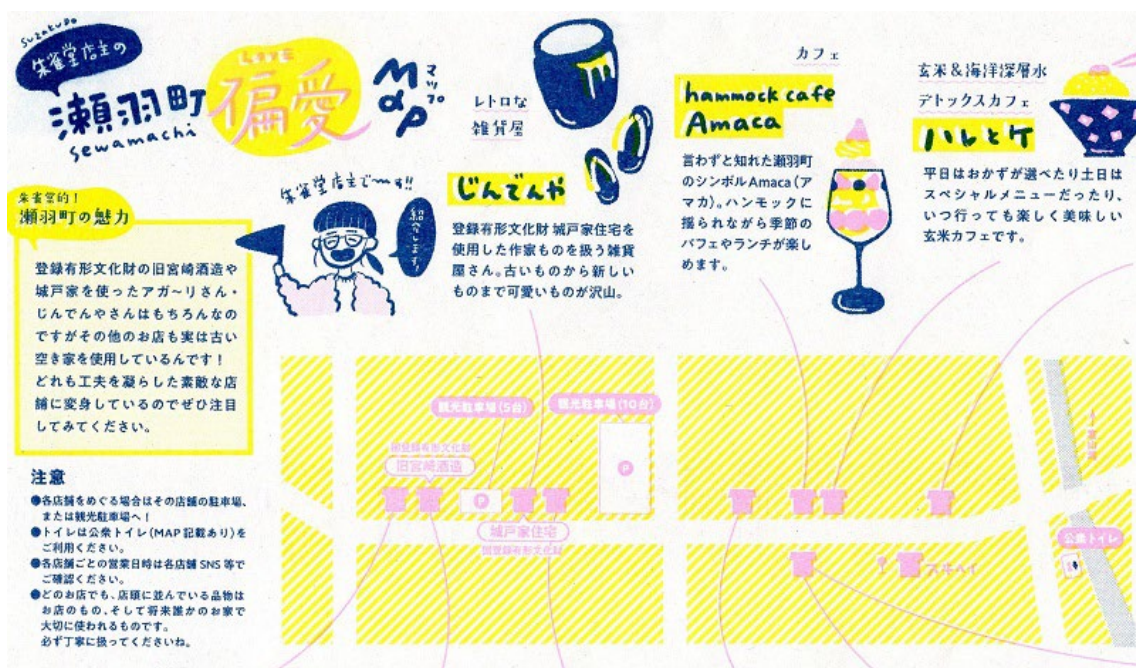


図5-3 瀬羽町偏愛MAPの一部

#### 4. その他の宿場回廊の様子

かつての宿場だった場所は瀬羽町だけではない。第3節でも述べたように、現在は瀬羽町に多くの商店が並んでおり、他の町に比べてにぎわっているように見える。瀬羽町から北東に向かって進むと、橋場町、大町、荒町、中町といった町が並んでいる。では、他の町の人々の様子はどのようなものなのだろうか。

##### 4-1. カフェふう

中町にある「Cafe ふう」の店主、角川淳子さん（70歳）に話をうかがった。

カフェふうは、ランチや軽食などを提供する店で、私としては「おばあちゃんの家」に似たような感覚になれる、アットホームな店だ。一見したところ、店というよりは、一般的な家のように見えるからである。「Cafe ふう」という看板が目印になっている。

角川さんには、店を始めたきっかけを教えてくださいました。「瀬羽町には新しい店ができてにぎわっているが、同年代の人たちが遊びに行けるようなところがない。同年代の人が集まれるような場所をつくりたい」という気持ちで、5年前に店を始めたという。中町の別の場所に住んでいる角川さんは、現在のCafe ふうの建物が空き家になっているのを紹介してもらい、店を始めた。

来店客は近所に住む常連さんがほとんどで、角川さんと同年代の人が多く。あとは、月に2、3人新しいお客さんが来るくらいだ。地域の情報誌から取材の申し込みがあったが、取材は全て断っているという。これは、常連さんなどの地元の人たちの居場所を残しておくた

めだという。自分たちで自分の居場所をつくる、そんな感じであった。



写真5-10 Caféふう外観（筆者撮影）

第3節で紹介した、現在の瀬羽町についてどう思うかもお聞きした。角川さんは、普段は瀬羽町に出かけることはあまりないと話された。瀬羽町で開催されるイベントに行くとしても、気軽に入店し、お茶をしながらゆっくり休めるようなところがないから、ということのようである。たしかに、瀬羽町には飲食店はあるが、若者にアピールする店や、人気店が多い。加えて、中町から歩いていくには少し大変だし、バスで行くと、帰りのバスまで2、3時間待つことになるが、その間の暇をつぶせない。だから、気軽にお茶ができる場所ができたらうれしいと言っていた。

また、角川さんに、中町も瀬羽町のようににぎわってほしいかと聞いたところ、瀬羽町みたいになってほしいとは思わないという返答が返ってきた。現在の瀬羽町には、かつてのように住み込みで店を営んでいる人はおらず、店主は日中に店を営業しにくるだけになっている。そういった店が中町にできることを特に望むわけではないという。

## 5. これからの課題

聞き取り調査を行っていく中で、これからの課題となるようなことも見えてきた。この節では、それらを紹介していく。

### 5-1. 空き家

私が聞き取り調査を行う中で、滑川市の空き家問題を知る機会があった。瀬羽町では、空き家を利用したお店が多くある。現在瀬羽町に空き家はないというが、住民に話を聞く中で、

かつて宿場だった他の町には、空き家となっている物件が存在することがわかった。

そこで、瀬羽町で平成 27 (2015) 年から営業している不動産屋、「富山中央エステート合同会社」(以下、「エステート」)にお邪魔し、堀田裕司さん(60歳)に話をうかがった。同社は、富山県内全域の不動産に対応しているが、今回は主に滑川の空き家の現状について聞いた。同社の建物自体は、もともとは空き家だったところを改修して、事務所として利用している。

堀田さんは、滑川市の空家等居住対策課と民間企業が協力して開催した、空き家を減らすための会議に参加したことがあるという。その会議資料によると、平成 27 (2015) 年には 874 軒あった空き家が、令和 3 (2021) 年には、819 軒になっており、空き家が少し減少していることがわかった。しかし、そのまま放置すれば倒壊などの恐れがあるとされる危険空き家の数は 19 軒から 38 軒に増加しており、その対策が求められていることがわかった。この危険家屋の解体には、市が補助を出している。

また、滑川市の空き家対策の一環として、「ミライノミカタ 滑川市空き家等での居住体験を通じた課題発見事業」というものがあることを教えていただいた。県外に居住するテレワーカーや、県外事業者等を対象に、3ヶ月間、滑川市が提供する空き家に住んでもらおうという企画である。なんと、この3ヶ月間の家賃と光熱水道費は無料である。令和 4 (2022) 年 7 月 11 日から募集を開始し、私が聞き取り調査を行った令和 4 (2022) 年 7 月 22 日時点で、すでに申し込みがあったという。このように、行政も空き家に対する対策を練っていることがわかった。

しかし、この空き家対策に対しては、難しい面も多くある。たとえば、大気汚染防止法の改正でアスベストの飛散防止対策が強化されたため、解体工事を行う際は、都道府県への報告が義務化された。これに伴い、今までほど簡単には解体工事を行うことができなくなった。また、空き家の持ち主が解体工事を行い土地を売ろうと思っても、地価の安い滑川では、解体工事の費用の方が土地を売って得られる金額を上回ってしまうという。こうした問題が、簡単に空き家を減らすことのできない要因になっている。

エステートには、空き家を売りたい人、それから利用したい人の両者が訪れる。その双方の繋ぎ役となるのが不動産屋である。空き家を売りたい人は、基本的には空き家を手直しせずに売ることが多い。買い手側の傾向としては、近年は、空き家を住まいや店として利用したいという若者が多いという。第 3 節で紹介した瀬羽町にも、空き家を改修して営業している店が多数存在している。しかし、瀬羽町の場合は、空き家があることを宣伝したことがなく、個々に空き家の買い手や空き家を使用したい人が集まったようだ。

先程、空き家対策の会議について述べたが、堀田さんに、空き家を減らすためにはどうするべきと思うかについてお聞きした。すると、空き家問題を解決するにあたっては、先述の会議のようにどこかが大元となってまとめることも必要かもしれないが、やはりひとつひとつ事情が違うので一軒一軒地道に対応していくことが大切だと話された。堀田さんは、地道にひとつひとつ問題を解決している途中なのだという。



## 5-2. 駐車場

調査のなかではもうひとつ、瀬羽町における「駐車場不足」という課題も見えてきた。現在、瀬羽町には、町を散策する際に利用できる、共有駐車場がある。また一部の店は、2、3台の駐車可能なスペースを所有している。前項で紹介したエステートが、瀬羽町の土地を買い取り、駐車場として提供しているところもある。しかし、土日祝日や大型連休には、駐車場が足りなくなってしまう。瀬羽町は道路幅がとても狭いため、路上駐車などで道を塞いでしまうと、近隣住民の迷惑になる。店と客、住民の三方が心地よく過ごせる場所になるには、こういった問題に向き合っていく必要もあるだろう。

## おわりに

今回の調査では、主に店を営む方々に聞き取り調査を行ってきた。店を始めたきっかけも、店に対する思いも、皆さまざまで、とても興味深かった。聞き取り調査を行うなかで、どの方からも、この土地に対する愛着のようなものを感じた。にぎわいをもたせたいという思いで店を始めた人や、人が集まる場所をつくりたいという思いでイベントを行う人、反対に、にぎやかさを求めるというよりは、地元の人たちの居場所をつくりたいという人など、それぞれの思いがあることがわかった。話を聞けば聞くほど、その人の思いやこだわりが伝わってきて、人それぞれに物語があり、引き込まれた。

とりわけ、菅田さんには、昭和期の思い出やエピソードを語っていただいた。たくさんのエピソードが出てくるので、こんなことまで覚えているのかと驚くほどだった。菅田さんの生き生きとした語りは今でも印象に残っている。町の様子は時代と共に変化していくが、かつての町の様子は、記憶の中にずっと残り続けているのだということを実感した。これからも、町の様子が変わっていったとしても、誰かの記憶に残り続ける、そんな町であり続けてほしい。

この調査は、「はじめに」でも書いたように、「ふと気になった」宿場回廊の現在の姿について、軽い気持ちで店主の方々に話をうかがうことから始まった。しかし、どうしてこんなにも店を営む方に惹かれるのだろうかと考えてみると、私自身、大学を卒業してから、自分のやりたいことは何だろうかと模索している時期だったからだと思う。自分の店を構える人たちは、自分のやりたいことに向き合っている人なのではないか、そんな思いがあった。私自身のなかに、自分を表現した空間、つまり自分の店をもつ人たちに憧れがあるということを発見する機会にもなった。この調査を通して、様々な方々から話をうかがうことができたのは、私にとってとても有意義な時間だった。

## 謝辞

お忙しい中、今回の調査にご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。突然の訪問や度重なる訪問にも関わらず、温かくインタビューに応じていただいた、菅田榮子様、鍋谷智子様、

柿澤沙帆様、角川淳子様、堀田裕司様には、重ねて御礼申し上げます。皆様に貴重なお話しを提供していただいたおかげで、この報告書を執筆することができました。ありがとうございました。

#### 注

- 1) 江戸時代の宿駅で、大名等の身分の高い人が泊った、公認の宿舎。

#### 参考文献

- 高井進監修、1993年『目で見ると滑川・新川・婦負の100年』郷土出版社。  
滑川市史編さん委員会編、1985年『滑川市史通史編』滑川市。  
滑川市立博物館編、2009年『滑川の文化財』滑川市立博物館。  
滑川市立博物館編、2014年『市制60周年記念なめりかわ昭和今昔写真館』滑川市立博物館。  
婦人ボランティアお講研究会編、1991年『滑川市立博物館双書11 滑川のお講その5』滑川市。

#### 参考にしたウェブサイト

- ハレとケホームページ 〈<https://hare-ke.jp/>〉 (最終閲覧日：2023/01/10)



## 第6章 上市町市街地の歴史を紡ぐ——街と人々の記憶

松井 成弥

### はじめに

この報告書では、上市市街に住む人々の記憶を辿って、普通は文章にならないような、街に暮らす人々の日常の様子を書き出すことを目標とした。主に街のさまざまな人々に聞き取りを行い、なるべく文献の情報に拠らずに人々の記憶の中にある歴史を元として文章を作成した。

本文の構成としてはまず、人々にインタビューをした中で大きく状況が変わったと感じられていた1980年代を境とし、2節と3節の内容を区分した。

第1節は上市町の起こりを中心におおよそ昭和期以前の出来事についてまとめたが、ここに関しては当時を知る方がほとんどいないこともあって文献の情報が比較的多めである。それでも伝え聞いていることとお話ししていただき、それを可能な限りまとめた。第2節では上市町がととも賑わっていたと言われる昭和期の記憶を主としてまとめ、第3節ではそのように賑わっていた時代から上市町を取り巻く状況が大きく変わった昭和期末期から平成、令和に至るまでをまとめた。

### 1. 上市市街地のおこり

#### 1-1. 常福寺の訪問

上市町南町に常福寺というお寺がある。上市市街の中心部に位置し、明治6（1873）年には興文小学校も置かれた。上市商店街のアーケードの中に佇むデパート、「カミール」東側の広い道路を西中町通りから南に進み、車1台がやっと通れるほどの幅をした左手の脇道へ入ると右側に大きな門が見える。そこが、およそ400年に渡って上市市街の発展を見守ってきた常福寺である。

それ以前の調査でお話を伺った、上市町に古くからある呉服店を営む小森さん夫妻から「上市の歴史を知るには常福寺に行くのが一番早い」と強く勧められたこともあって、お話を伺うことに決め、数日前に電話で連絡していた。

堂々とした門の前に、思わず一礼して中へ入ると左手に石碑がある。駅から案外近く、約束していた時間よりも早くついたので、なんとかわかる部分だけ読んでみると、どうやらここには昔に寺子屋があったらしいことがわかった。他にも何かないかと境内を少し見回してみると、立派な本堂の前に、荘厳な寺院建築とは少々不釣り合いに思われる象の石像があった。インド象だろうか、浄土真宗のこの寺にあって、それはかなりコミカルだった。時間

になったので、本堂の右手にある、住居だと思われる建物の呼び鈴を鳴らすと、中から袈裟を着た優しそうな女性が戸を開けて下さった。住職の松尾はるなさん(27代目)である。

松尾さんによると、常福寺は15世紀後半に加賀より移り住み、1527年に亡くなった浄賢法師という人物によって作られたということである。浄賢法師は親鸞上人の高弟(24輩)真仏房の末裔であるらしく、加賀に居た際に一向一揆(1580年に織田信長の軍勢によって滅ぼされる)の一派についていたことから、戦局の悪化を受けて、当時新川一帯で力を振っていた土肥氏を頼りに上市へ逃れてきたのだという。常福寺縁起という、常福寺が建立された当時を記録する資料も存在しており、上市町史にも常福寺縁起に拠る情報が書かれている。

### 1-2. 上市の起こりにまつわる伝承

さて、常福寺には「松の野に家三軒」という伝承が残っている。これは「松の生えている野原に家が三軒建っている」という意味であり、常福寺が現在の場所に移ってきた当時の周辺地域の様子を表しているとされる。事実がこの伝承通りだとするならば、16世紀当時には、現在の上市市街地区に村や町が存在していなかったと考えられる。

松尾さんは、現在の上市市街は常福寺や若杉地区に現存する神社の門前町として発展した可能性がある、ということ为先代住職から聞いたという。常福寺の門前では、かつて月に9回、「九斎市」と呼ばれる市が開かれていたという記録が残っているらしい。ここからは、常福寺が上市市街の中心として商業の繁栄に寄与した可能性が垣間見える。なお、上市の街なかで人びとに聞きとり調査をするなかで、上市市街の起こりが常福寺の門前町であったと語る人に多く出会った。このことから、常福寺は上市市街の人々にとって思い入れの深い特別な場所であることが窺える。

ところで、上市には、「法音寺」という地名がある。法音寺もかつての大きな寺だったとされており、法音寺地区が現在でもかなり大きな面積であることを根拠に、上市町は法音寺地区のすぐ隣である上市町三日市地区から法音寺の門前町として起こった、とする説もある。常福寺の松尾さんによると、交通の要衝であった三日市がまず発展し、ついで、滑川と大岩山日石寺を結ぶ街道に三日市より近かった、現在常福寺のある大徳寺地区(現在の児童館[旧役場]付近一帯)が発展したのではないかと、ということだ。この説は有力ではあるものの、法音寺や大徳寺という寺の記録として残っているものが常福寺にもないため、推測の域を出ないそうである。

なお、『上市町誌』などにも、法音寺の門前町としてまず三日市(月に3回市を開くことからそう呼ばれたのではないかと)が発展し、ついで山に近い側(上手)であった大徳寺地区に市ができた(上の市と呼ばれ、上市の由来となった)というふうに書かれている。町で聞き取りをした際はこの、「山に近い側に市ができ、それが上の市と呼ばれた」という部分の話をしてくださる方が多く、松尾さんからもこの話をお聞きしたため、少なくともこの部分に関してはある程度の正確性があるのではないかとと思われる。

若杉地区に現在ある神社に関しては、松尾さんは、かつてあったものが移転した後の、後継の神社である可能性が高いという。また、どこにあったのかわからないため、現存する神社は中世の上市町の姿を想像する手掛かりにはならないのかもしれない。

なお、『上市町誌』には「若杉五社明神」という神社に関する記述があり、三日市は若杉五社明神の門前町としてできたという。この若杉五社明神は「天明7（1787）年の洪水で三本杉<sup>1)</sup>から今の場所に移された」とのことだが、この「今の場所」は三日市であって、三日市には現在、若杉五社明神という神社は存在しない。上市町史には同様に、天明年間に三本杉から神明神社が移転した、ということが書かれており、神明神社（神明社）は上市町若杉新に現存しているため、この若杉五社明神とは神明神社のことではないかと思われる。（なぜ名称が違うのか、「明神」と「神社」では祀る神が違うはずであるが、その点に関しては不明である。）

### 1-3. 商業の発達

江戸時代になると、現在の上市市街地は「上市村」として、新川木綿の加工、販売の中心として繁栄した。現在も洋服店を営む小森武次・はる美さん夫妻は、上市町の立地が良かったため、江戸時代から昭和にかけて加工や販売の中心になったのではないかと推測する。昭和の終わり頃まで上市に機場（織物工場）が多くあったのは、その名残であるようだ。もっとも、それらの建物はほとんど現存していない。上市町正印にある細川機業の広大な工場敷地（現役で稼働している。細川機業に関しては第2節で詳述する）や、長く南町に住んでいる浦田キヨ子さんと街を歩いた際に教えていただいた南町北東部（上中町との境界付近）の空き地（土井の機場跡地）、熊野町で長く酒屋を営む辻秀一さんに教えていただいた上市駅東側に広がる空き地（細川機業工場跡地）などがあるのみである。

上市は富山市以東の主要都市（黒部や滑川など）と富山市を中継する立地にあり、現在に至るまでそれらの都市と地理的なつながりが強い。

現在の西中町商店街のはずれにある市姫神社は、商業の繁栄を願って当時の人々によって創建された。この市姫神社には、興味深い伝説がある。次郎右衛門という商人が三日市まで行ったところ、美しい姫が、「上の市まで連れて行ってくれ」というのでおぶって連れて行くと、ついたところで石になってしまったというものだ。

小森武次さんによると確かに御神体は大きく丸い黒い石であるという。続けて小森さんは、この石は上市の三日市ではなく、黒部の三日市から運ばれたものではないか、と話した<sup>2)</sup>。というのもこのような石は上市で取れるようなものではなく、片貝川にある石と御神体がよく似ているからだという。確かに片貝川と黒部市三日市は直線距離にして4kmほどしか離れていないため、三日市からの帰りに拾って帰ったとしたら辻褄があうように思う。

この伝説の真偽は不明であるが、伝説に商人が出てくること、その商人が（黒部か上市か不明であるが）三日市と呼ばれる場所まで移動していたことなどから、当時の商業の発達ぶりを多少うかがい知ることができるのではないだろうか。

## 2. 上市市街の隆盛

### 2-1. 人口と上市駅の移動

上市町は戦後になって、更なる発展を遂げた。この発展の根本にあるのは人である。昭和25（1950）年に人口25,000人を超えた上市町は、昭和50（1975）年ごろには「3万都市を目指そう」をキャッチコピーにかかげていた（人口が30,000人を超えると地方自治体における「市」として認められたため）当時の人口はピーク時より1,000人ほど少ない約24,000人であった。令和4（2022）年12月1日現在の人口が19,279人であることを考えると、このときの人口がいかに大きかったかがわかる。

まず戦時中に上市町には大きな変化があった。上市駅の移動である。現在の上市駅はもと「上市口駅」という名前であり、当時の上市駅は、そこからまっすぐ東方向に伸びる県道46号線（上市駅前から南町まで）の先、現在の上市町立児童館のある位置にあった。当時はそこまで線路が敷かれていたのである。昭和18（1943）年に上市口駅—上市駅間の路線は廃止され、それに伴い、かつての上市口駅が上市駅と名前を変えて営業されることとなった。

路線が廃止された理由に関して詳しいことはわからないが、南町に生まれて、この地域に古くから住む浦田さんによると、戦争に係る鉄の需要の増加からレールを資源として提供しなければならなくなったことに加えて、現在の鍵町交差点にかつて存在した踏切で事故があったことがきっかけになったのではないかと、いうことであった。廃線になった頃に、近所の大人たちがそのような噂をしているのを聞いたのだという。鉄の供与のために廃線が決定されたという話は、浦田さんのほかにも複数の方から伺っており、信憑性は高いと言えるだろう。

また、路線の廃止、駅の移動の原因となった可能性のある事故に関しては、同じく南町に住む岡本さんから興味深い話を聞いた。それによると、昭和2（1927）年に現在の越中三郷駅付近で起きた列車事故が原因となっているのではないかと、いうのである。富山駅からくる列車と、上市駅からくる列車が正面衝突を起こし、脱線してしまったというこの事故は、ちょうど通学の時間帯だったのか富山から上市農学校に向かう学生や上市から富山に向かう学生を中心に多数の死傷者を出したのだという。なお、この事件は公に報道されなかったらしく、当時の新聞にも載っていないということである。

それ以前の計画では、旧上市駅の先に、大岩まで線路を延伸することになっていたらしく、家が近いこともあって子供の頃によく上市駅で遊んでいた浦田さんは、線路のわきに積み上げられたレールを見たおぼえがあるとのことだ。当時は電車に乗る人が珍しく、遊び場も少なかったために、駅で電車に乗る人を眺めることがあり、仲の良かった駅員がよく中に入れてくれたとのことである。なお、上市口駅—上市駅間の路線が廃止された後の上市駅（旧上市駅）は、その後しばらく（昭和47〔1972〕年までのあいだ）上市町役場として活用されていた。

## 2-2. 戦後上市の産業

戦後10年もたつと上市町はほぼ完全に復興していた。

上市町の戦後の発展を語る上で外せないのが、富士科学、池田模範堂、細川機業の3社である。この中でも特に細川機業が上市町の発展に大きく寄与したのではないかと上市町で長らく商店を営む辻さんは言う。

上市町は江戸時代より繊維産業が盛んであり、第1節でも書いたように、富山と黒部の中継地として栄えた歴史がある。その名残で、昭和に入っても町のあちこちに機場(はたば)があり、それぞれが広い土地を有していたという。その中でも特に細川機業は「別格」で、駅前に広大な工場を構えていた。現在本社がある上市町正印には、当時から稼働している、かなりの面積を誇る工場が存在する。

上市町は昭和30(1955)年ごろより出稼ぎ労働者を数多く受け入れていたが、特にその受け入れ先として主だったのが細川機業であるという。労働者の出身の多くは東北(山形や秋田など)で、繊維産業であるため女性も多くいた。県外出身者の多くは社員寮に住み、上市町とその近隣の市町村に住む社員は乗合バスで出勤していたらしい。敷地には野球場や体育館などもあり、当時は休憩時間に野球をする姿を見ることができた。社員寮や野球場、体育館などは、現在も本社工場敷地内に現存している。

浦田さんによると、昭和5(1930)年ごろの春先に細川機業の機場から火が出て、その火が三日市商店街まで広がったことがあった。火は新町で消し止められたが、商店街はほぼ燃えてしまい、そのときは細川機業が当時の2万円を商店街側に払うことで解決したらしい。浦田さんが6才か7才の頃に起こった出来事であり、新町に親類の経営する風呂屋があったために気になって見に行ったとのことである。「2万円」という金額は、当時の大人がそう噂をしていたためにおぼえていたようだ。当時の細川機業の存在感の大きさは、そうした記憶にもあらわれている。焼けた三日市商店街は、支払われた2万円で新しく建て直されたが、その後に改築されることはなく、今に至るといふ。浦田さんが覚えているところでは、平成初期には三日市にかつてのような活気はなく、営業している商店がほぼなくなっているような状態であった。このことを浦田さんは「とても寂しく思った」と話した。

当時の細川機業の影響力の大きさは、昭和44(1969)年の第20回植樹祭の折に昭和天皇皇后両陛下が細川機業を視察されたことから窺える。辻商店の辻さんによると、細川機業の正面を横切っている県道157号線は、その時、天皇陛下が来るからと整備されたものであるそうだ。辻さんご夫妻はお二人とも、両陛下が来られた際に旗を振った記憶があるという。当時は町をあげて迎えたのだろう。

先に細川機業が出稼ぎ労働者の主な受け入れ先だったと書いた通り、細川機業以外の企業や商店も労働者を受け入れていた。西中町にある書店「カップ堂」では、住み込みで働く従業員を常時4人ほど雇っていた時期があったと、店主の藤縄千栄子さんが話してくれた。カップ堂は、初代が工事現場で利用する合羽(当時は和紙に油を塗って撥水加工を施した)を作っていたが、これまでに女性の嗣子が多く、婿入りしてきた男性が反物職人や教師だっ



たため、現在のように制服や教科書なども扱うようになったという。この教科書の販売などが当時は忙しく、従業員を今以上に雇っていたのだと、藤縄さんは語る。その従業員らの中には、氷見出身で上市高校の夜間定時制に通いながら働きに来ている人が2人いたことが印象に残っているという。

### 2-3. 商店街および道路の拡幅

当時は商店街もかなり賑やかであり、度々抽選会が行われるなどして人を呼び込んでいたそうである。当時の抽選会の目玉には東京見物・皇太子殿下（現在の皇陛下）の成婚パレード（昭和34〔1959〕年）というものもあり、藤縄さんご夫妻が当選して見に行ったのだという。

特に、市姫神社の祭りの際には西中町通りに露店が店を連ね、この時はいつもにも増して賑やかであったらしい。ただ、ホリ薬局の堀さんが語るところでは、「道が広くなったら集客が落ちた」ようで、露店の数もどうやら減ったようである。西中町通り（県道3号線）の拡幅工事を境に祭りの規模が小さくなったということだろう。

また、西中町商店街は道路の拡幅工事をおこなった際に商店街の近代化を図ったという。拡幅工事の際に入ってきたお金も使用して、商店街の店は建て替えとアーケードの設置をしたらしい。「うちは8m後ろに下がり、空いたところに1m（あたり）100万円をかけて8mのアーケードを作った」とカップ堂の藤縄さんは言う。総費用は拡幅工事に入ってきたお金を上回ったらしく、当時は他の店もそのような状態だったらしい。この設備投資の様子からも、当時の商店街がとても繁盛していたことが窺える。

上市町には、先ほど言及した県道157号線のように、現代に入ってから整備された道が多く存在する。かつての上市には、2台の車が余裕を持ってすれ違えるような幅の広い道はほとんどなかった。現在でも、市街地の住宅地にその面影が残っている。上市市街地には昭和中期ごろまで南北を結ぶ道幅の広い道路は数少なく、現在でも上市市街に見受けられる細い路地のような道は、住民の重要な生活道路だった。

現在、「カミール」のすぐそばを通り、県道3号線と交差するように走る市道は、昔から上市と魚津を結ぶ重要な幹線道路である県道155線に接続しており、上市市街を南北に貫くという意味でも重要な道路の一つであった。この道路は南側3分の1が昭和前期に開通し、常福寺の所有していた竹林の小道などを拡幅しながら、現在のように道幅の広い道路は平成初期によく完成した。

このように上市町の道路事情が改善されたのは比較的最近のことである。しかし、（次節に後述するように）北陸地域が車社会であることを考えると、現在でも恵まれているとは言えないだろう。



写真6-1 カミールそばの市道、平成初期に完成したため状態が良い（著者撮影）

#### 2-4. 上市川の氾濫とダム工事

昭和 30 (1955) 年ごろの上市町に人が集まったのは、細川機業をはじめとする有力な企業が人を雇っていたためだけにとどまらない。上市川のダム建設とそれに係る人の移動も、上市町に大きな影響を与えた。上市川は暴れ川であり、度々氾濫し、上市川第一ダムが完成したのちの昭和 40 (1965) 年にも洪水が起こるなど、町に被害が出るが多かった。先に述べたカップ堂の初代店主が合羽を作っていたというのも、上市川の氾濫などの対応をした工事とその工事現場が多くあり、需要が見込めたからだという。

浦田キヨ子さんは、若い頃に上市川に入っていて洪水に巻き込まれそうになったことがあるという。川に入ってしまったら、上流から木のおがくずが流れてきて、通りかかった知らないおじさんに「早く上がれ」と声をかけられた。また、洪水が起こったときに、モンペの中に水が入ったことで流され、亡くなってしまった女性がいたことも覚えているという。2つのダムができてからは洪水が起こった記憶がない、とのことであるが、当時の浦田さんは「ダムを作っていることなんて知らなかった」。

昭和 46 (1971) 年に工事が着手され、昭和 60 (1985) 年に竣工した上市川第二ダムの建設の際は、上市町市街地に作業員がよく訪れていたという。浦田さんの友人で、ダムの建設現場の近くに住んでいたという方の話によると、上市町白萩東部、逢沢という場所に橋があり、その付近にあったカクゾウという店舗（詳細な場所は不明）の周辺や上市町稲村に、ダム建設に関連する建物が建てられていた。そこには、ダム建設を担当した佐藤工業の従業員が多く出入りしていたという。この作業員の人々は、時折上市の市街地まで「集団で降り

てきて」、駅前や松和町にある飲み屋などにきていたという。これは、主に熊野町より西側に住む人々からよく聞いた話である。酒屋を営み、当時から松和町などにある居酒屋へ酒を卸していた辻さんは、当時はダム工事に関わる人が上市にお金を落ととしていたことで、経済が回っていた部分があったのではないかと語る。

一方で、ダム建設が行われていることを知らなかったという浦田さん（南町在住）は、町に作業員が多くきていたことも知らなかった。このことから、直接的な経済効果は小範囲（駅前帯）に限定されていたのではないかと考えられる。

## 2-5. 上市駅の記憶

上市駅は、昭和 18（1943）年の上市駅－上市口駅間の廃線に伴って上市口駅から名称が変更されると、平成初期にかけて約 40 年間、上市町の中心として栄えた。

昭和 47（1972）年に改築されるまでの上市駅舎は木造であり、これはこれで味のある建物だったと辻さんは語る。当時は通勤で駅を使う人が今より多く、教師をやっている人が使う印象が強かったと浦田キヨ子さんは話した。また、滑川でカワハギがたくさん獲れた年に、上市駅まで運ばれてきたのを買いに行ったことも印象に残っているという。映画の撮影の際に映画俳優の山田五十鈴と山村聡が上市駅まで電車に乗ってきたエピソードなどからも、上市駅が上市町の玄関口であったことが窺える。浦田さんが当時聞いたところによると、山田五十鈴と山村聡は役場へ行った後、馬場島に向かったのではないかとということであるから、撮影場所は馬場島（劔岳）周辺であり、キャストがこの二人ということであるため、この映画は、封建的な家庭で育った息子たちが、長男の遭難死などの困難に直面しながらも、なお果敢に山へ挑む様子を描いた、昭和 37（1962）年公開の『山の讃歌 燃ゆる若者たち』の撮影であると思われる。当時は浦田さんの知人が家までやってきて、「山田五十鈴来とるよ！」と声をかけてくれ、そのまま上市駅まで走って見に行ったのだという。

『山の讃歌 燃ゆる若者たち』では長男省一の遭難だけでなく、次男の進吾が劔岳登山を試みたことで、右足を切断する事態となってしまう描写がなされるが、実際の劔岳では進吾のように怪我をするだけにとどまらず、亡くなってしまう人も多くいたらしい。浦田さんの話では、そのように亡くなった人の遺体が上市町南町にある竜光寺の境内にかつては集められていたという。子供の頃に、親から「今日は竜光寺に行っちゃダメやぞ」と言われた浦田さんは、かえって気になって竜光寺に行ったところ、境内に白い布で包まれた遺体を見たということだ。当時、人から聞いたところによると、遺族と思しき人々は電車で上市駅までやってきて、歩いて竜光寺まできていたのではないかとということである。

もっとも、昔は事故などにより死亡者が出た際は寺などに運ばれることがあったらしく、第 2 節で書いた越中三郷駅付近で起こった列車事故の際には、あまりにも多くの死亡者が出たために複数の寺に遺体を安置していたということである。

昭和 47（1972）年には駅ビルを伴った新駅舎ができ、中にはパチンコ屋、喫茶店、居酒屋が店を構え、ボウリング場やゲームセンターなどのアミューズメント施設などもあったと

いう。また、スーパーマーケット（「チューリップの店」から「ひまわりの店」、その後「A-COOP」へと変遷した）もあり、2階にはジャスコ（当初はまだ「いとほん」）が入っていて賑わっていたとのことである。上市駅のボウリング場は上市町では2店舗目だった。その少し前に、現在の上市町横越周辺に、当時流行のボウリング場が初めてオープンしたのだと辻さんは語る。

浦田隆彦さんは小学生のとき、この駅ビルのオープニングセレモニーを見に行っており、その後もよく遊びに行っていたが、高校生になってからは上市で遊んでいるところで親戚などの知り合いに会ってしまうのが煩わしく感じるようになったため、富山市まで行くこともあったという。また、駅舎の改築とともに駅ビルに居酒屋ができはじめて、会社勤めの男性などがその居酒屋に入っていくのをちらほら見たとのことである。

なお、上市駅構内にあるベーカリー、「サンタ・エンジェル」の横手にある通路からは上市駅西側にある駅ビルの一階部分を通過して外に出ることができた（令和4〔2022〕年2月から封鎖されている）。その通路の壁面には現在でもボウリング場の案内が存在し、完全に閉鎖されたゲームセンターと思しき施設があるなど（扉の窓からは当時稼働していたと思われる筐体が確認できた）、往時の上市駅・駅ビルの雰囲気を感じることができる。他方で、上市駅正面入り口から入り、右手側にある階段を登った上にある駅ビルの2階部分の入り口には完全にシャッターが降りていて、中を伺うことはできない。



写真6-2 上市駅、駅ビル1階の連絡通路、左側にゲームセンターがあったと思われる  
(著者撮影)

## 2-6. 花街

上市駅周辺が発展する以前、上市町でお酒を楽しむ時は多くの人が松和町に行っていた。松和町は上市川沿いに広がり、西中町通り（県道3号線）に面する西中町や新町より少し川に向かって奥まった位置にある地域のことである。松和町は昭和32（1957）年に施行され

た売春防止法が適用された、いわゆる赤線地帯であった。かつての遊郭などは飲食店などに姿を変えて昭和中期ごろまで繁盛していたようであり、現在でも松和町に居酒屋やスナックなどが多いのはその名残である。

ただ、この居酒屋やスナックは、花街にあった店舗の経営者が引き続き経営しているというわけではなく、商工会の女性や従業員などの店舗関係者が経営しているものだったということである。

辻さんは、大学に入って上市を離れる前（およそ昭和 31〔1956〕年頃）までは楽しそうなところだと思っていたが、大学を卒業してすぐ、地元に戻ってきくとすっかり廃れてしまっていた、と話す。大学を卒業した昭和 35（1960）年ごろは松和町にある飲食店を訪れるのは年配の人だけになっていたという。なお、酒屋を営む辻さんはその当時から現在でも、松和町にある飲食店に酒を卸している。

花街が営業していたころを知る浦田キヨ子さんによると、客が芸者遊びをする「置屋」と呼ばれる場所が松和町一帯に点在していたという。浦田さんは「ヤナセ」という置屋が白竜橋手前の県道 3 号線沿いにあったことを話してくれた。松和町の通りは、当時としては夜でもかなり明るかったらしい。また、置屋に派遣される前の芸者さんが集まる「見番」という場所が堤防の際にあったという。浦田さんの父親は大工をしており、その仕事仲間の男性は芸者遊びが好きで、よく浦田さんの父も付き合いで行っていたのだという。浦田さんの記憶によれば、その仕事仲間の奥さんは元芸者さんだった。浦田さんがまだ小さい頃、風呂へ行くと言った父親に連れられて一緒に外出したことがあった。しかし、行き先は風呂屋ではなく、女郎屋であり、くだんの仕事仲間も一緒だった。幼い浦田さんは女郎屋の人からお菓子をもらい、店先で待っていて、そのお菓子を持って遊び終えた父親と一緒に帰った。家に帰ると、持って帰ったお菓子について、どこでもらってきたのかと母親から問われ、「きれいな姉ちゃんたちがたくさんおられたわ」と言ったところ、父親が浦田さんを連れて芸者遊びをしに行っていたことが明らかになってしまい、父親は母親から叱られていたという。

花街の存在した一帯には、定食屋の「山本屋」や、こちらも定食屋だが出前専門の「デンカツ」などがあり、女郎屋にも出前を持っていったのだという。山本屋は近年まで営業していたが、デンカツでは浦田隆彦さんが 3、4 歳の頃に火災が発生し、松和町の 2 軒も延焼してしまったらしい。母親の浦田キヨ子さんは幼い隆彦さんに抱っこ紐をかけ、おぶって火災の様子を見に行った、と語る。

また、花街に関する話題でよく聞いたのは、「農家の方が米を担いで遊びに行っていた」という話である。戦後の、ものが不足していた時などによく見られたらしいこのエピソードは、当時の様子を思うことができ興味深い。

浦田さんの父親の仕事仲間のように、芸者と婚姻関係を結んだ人、芸者を親類縁者に持つ人などは案外多くいたらしく、おもて沙汰にはされないが、地元の人であれば、どこの誰の嫁が元芸者であるなど、ある程度把握していたようである。もっとも、それは特段憚られるようなことではなく、あくまで世間話の一つとして語られる程度のものであった。

これらの話から、現在の商店街およびその周辺エリアと赤線地帯（花街）のあいだに想像以上に近いつながりがあったことを窺い知ることができる。「小さい町だからそんなに悪いことはできなかった」と町の人はいう。松和町一帯が赤線地帯だからという理由で街から距離を置かれることはなく、経済的にも感覚的にも、上市町の一部であったということだろう。

芸者は主に県外から仲介業者を通して、置屋に引き渡されていたらしく、上市からも長野県などに売られていく子供がいたらしい。浦田さん曰く、当時芸者業をしていた方はおろか、芸者の世話をしていた付き人なども含めて、今日、知る範囲では誰も存命ではないとのことである。

### 2-7. 経済成長と教育

上市町は昭和期の人口増加とともに、教育にも力を入れていたということである。

西中町通りは、「東大通り」と呼ばれ、当時の上市では東京大学ほか有名国立大学への進学者が多かったということである。当時経済的に豊かであった自営業者が多くいたことなどから、子供に家庭教師をつけるなど、教育にお金をかけることができたのではないかと辻さんは語る。

実際に、教育に力を入れる政策は当時の町長が掲げていたらしく、『上市町誌』にもそのことが明確に記載されている。当時の上市は僻地教育にも力を入れ、白萩にある学校の校舎を建て替えるなど、設備の更新に余念がなかったようである。

しかし、この高い教育水準の裏で地元に残る人が減ったことも事実である。そしてこれと同時に、上市にスーパーマーケットができ始め、上市の経済を取り巻く状況も激変していく。この優秀な人材の流出と、経済状況の変化、後述する社会的・地理的な変化などによって、1980年ごろより上市町は大きく変わるのである。

## 3. 上市町の現在

### 3-1. 小売業の変化

平成初期ごろから、上市町は大きく変化していった。

まず、複合商業施設である「ショッピングタウン パル」や「Max Valu」、ドラッグストア等の大手小売業者の進出が挙げられる。これらの商業施設は利便性の点から、地域の商店街より優れており、（特に新規の客の）客足が商店街から遠のくこととなった。実際に、洋服店を営む小森さん夫婦は、「ここ20年ほどで廃業する店が増えた」という。

ただここで1つ注意しておきたいのは、ショッピングタウン パルは西中町商店街の商店が協力して建てた施設だということである。カップ堂の藤縄千栄子さんのご主人、藤縄順清さんはパルの建設計画の理事をしていたと言うことで、千栄子さんから詳しくお話を伺うことができた。

まず、パルの建設計画は道路の拡幅（商店街の近代化）と同時期になされたという。大手小売業者の台頭に備えなければ上市がダメになる、と商店街の人々が相談して建設を決めたらしい。

しかし、パルを建設する上で2つ問題があった。資金と土地である。資金に関しては、国から30年間での返済を約束して借り、土地に関しては所有者と付き合いを重ね、土地の購入権を得て、国、県、町に許可をとるところまでこぎつけた。大変な仕事で、順清さんをはじめとする商店街の人々はとても頑張ったのだと千栄子さんは話す。毎日、カップ堂の2階に集まっては会議をしていたのだという。

パルへ出店する店舗は商店街で話し合っただけで、5、6店舗がパルへ店を出したということである<sup>3)</sup>。オープンしたばかりのパルはとても繁盛し、商店街の店よりもパルを選ぶ客が多かった。

こうして、有力な店がパルへ行ってしまった後、商店街に再び賑わいを取り戻そうと次に建設したのが「カミール」であるらしい。カミールには商店街に残った店が出店したそう。ここからも、当時はMax Valuなど、参入しつつある大手に必死で抗っていたことがうかがえる。

酒屋を営む辻さんは、「昔は配達や小売で儲けることができたが、現在は飲食店への卸売があっただけで暮らしていける」と語る。また、現在と違う点として挙げられるのは、辻さんが語った「配達」である。かつては宴会場や常連客に酒を配達することが多かったという。同様の話はホリ薬局の堀さんからも聞くことができた。堀さんの話では、昔は配達専用の社員がいて、遠くは滑川などにも化粧品、紙おむつなどを届けていたとのことである。なお、現在でも配達はしているが、オンラインショップやドラッグストアの台頭により、往時と比較してその範囲はかなり狭く、上市町市街に限定される。配達する商品も処方箋が多い。

### 3-2. モータリゼーションの影響

次に挙げられるのは、移動手段の変化である。洋服店を営む小森さんは、「モータリゼーションが起こって、街の人の生活スタイルが大きく変化した」と語った。

『上市町誌』によると昭和40（1965）年代の中頃から上市町の一般家庭に自動車普及し始めたらしい。カップ堂の藤縄さんは、「店をやっていたこともあって、うちには自動車（＝営業車）がくるのが早かった」と話す。昭和35（1960）年のことらしい。また、辻商店の辻さんは、中学生の頃（昭和45〔1970〕年ごろ）には家に営業車があったという。昭和40（1965）年ごろには道路で遊んでいた、とも話していたことからすると、昭和40（1965）年ごろは町誌にある通り、乗用車はまだ普及していなかったのだろう。

移動手段が車中心に変化していくのと同時に、ショッピングタウンパルやMax Valuなど郊外型複合商業施設や大手スーパーマーケット、ドラッグストアなどの郊外型店舗の開店がそこに重なった。このために徐々に顧客が流れたことは先述のとおりである。

また、富山市との時間距離が小さくなり、富山市街まで足を運ぶ敷居が低くなったことも地域の商店から人が流れる要因の1つともなっただろう。かつては、市内を移動するための手段の多くが徒歩もしくは自転車だったために長い距離を簡単に移動することはできず、日用品の購入には地域の商店が使われる場合が多かった。

モータリゼーションと共に変化が始まった上市市街であるが、上市市街の交通インフラが車中心の社会に適応していないという点もそれに拍車をかけているといえる。車での移動が中心になったにもかかわらず、上市町市街には細い路地が多いために、幹線道路を外れた場所への車での訪問が難しい。住民が車で移動する場合でも、車の置き場所や通行に困る。こうした道路状況が、人が集まらない、人が出ていってしまうという状態を作り出す一因となっているのである。これは、後述する、若者が上市町市街を離れて郊外に家を持つ理由の1つともなっている。

### 3-3. 西中町商店街通りの拡幅

上市市街の道路は昭和期から平成にかけてほとんど変化しておらず、現在のメインストリートである西中町商店街通り（県道3号線）の道も、拡幅工事が行われたのは平成3（1991）年である。なお、この道は三日市と新町の境目で道幅が変わっており、三日市側からは古い状態を窺い知ることができる。近くで理髪店を営む斎藤さんは、「昔はバスが1台通るのがやっとであるほど狭かった」と語るが、実際に三日市側から見た県道3号線は歩道幅が狭く、車道も軽自動車がなんとかすれ違えるほどである<sup>4)</sup>。見通しも悪く、いかにも事故が起りやすそうである。県道3号線を含む基幹道路は今でこそ整っているが、民家を縫うようにして進む道幅の狭い生活道路が依然として上市市街には多く残っている。



写真6-3 県道3号線、新町から三日市いたるところに幅員減少の標識がある

写真6-4 上市市街の典型的な生活道路（いずれも著者撮影）



### 3-4. 若者の行方

上市市街の変化と同時に起こっていることとして挙げられるのが、若者の流出である。交通の不便さなどの点から上市を離れる人が増えている。家業を継ぐなどといった、上市で仕事をする必要がなくなり、交通の便も悪いため、県外や富山市などより良いところに引越そうというわけである。今回、主に話を聞いた自営業を営む人々は皆口々に、「私の代で商売はやめる」と言う。採算が取れない現在の職業を息子や娘たちにやらせるわけにはいかない、ということだ。家業を継ぐ、という伝統自体は親の意識的な変化により、平成初期にはかなり薄れていたようである。「自由に職に就けなかった自分達のような思いをしてほしくなかった」と理髪店を営む斎藤さんは言う。

また、「日用品などを売る店では、大手企業に勝てないだろう」と酒屋を営む辻さんは語る。実際、上市町に新しく開かれているのはネイルサロンなどの店で、日用品のように全ての年齢層に需要があるわけではない、特定の層をターゲットとした店であることが多いように思われる。

親たちの意識的な変化と、採算が取れないという現実的な問題が、商店の廃業とそれにつながる上市市街からの若者の流出につながっていると考えられる。上市市街から出た人の中には郊外に新居を構える人も多い。聞き取りをした方々の中にも「息子（娘）はこの家ではなく郊外に住んでいる」と話す人が多くいた。その背景には郊外型店舗へのアクセスの良さ、駐車場の確保のしやすさなどがあるという。上市市街では駐車場の確保が難しく、車を持つには不便であるらしい、上市市街の交通インフラはこのような面でも場所と環境にうまく噛み合っていないといえるだろう。

### 3-5. 現在の取り組み

西中町商店街の現在の取り組みについてもカップ堂の藤縄さんから伺った。

まず、青年会と商店街が協力して催しをおこなっているということだ。青年会の人々は子供の頃の楽しかった祭の体験を今の子どもたちにもしてもらいたいという趣旨で、年に2回、カミールの駐車場で縁日をおこなっている。キッチンカーが出店するなど繁盛しているらしい。

次に、高校との連携について教えてもらった。街と高校とのふれあいを盛んにしようと、カミールを積極的に活用してもらっているとのことである。たしかに、カミールの2階で上市高校の生徒の作品が展示されているのを見たことがあった。

また、青年会は空き家の活用に関しても検討しているらしい。藤縄さんはそのことを、とても楽しみだというふうに語った。

西中町商店街を夏に訪れると七夕飾りが、冬に訪れるとイルミネーションが飾られている。これについても聞いてみると、これは西中町一帯の商店や一般の家の奥さんで構成される「おかみさん会」でやっているのだと、藤縄さんは教えてくれた。6月には花も植えているらしい。「冬のイルミネーションは、何個か（灯りが）つかなくなると大変なのだ」とも

話していた。それでも毎年、通りを飾りつけ続けるのなぜかと尋ねると、「だって、何にもないと寂しいじゃない」と話された。

## おわりに

調査を進めてみて最も感じたことは、人々の記憶の中にこそ歴史を知るための重要な鍵が含まれているということである。記憶というものは当人の見たもの、感じたことの集合体であり、明文化されたものを読むだけでは地域のことなど何もわからないのだということを感じた。

いつ洪水が発生して誰が亡くなったとか、父親が花街で遊んだ後の一幕、ましてや普通の家族・個人のエピソードなどは、ふつうであればなかなか文字にされるものではないかもしれない。しかし、誰も人はそれぞれに歴史を紡ぎ、それが街全体の記憶となっているのである。

また、商店街（個人商店）に関しても思うところがある。第3節で小森さんが話したように、現代は自由化の進んだ、高度な情報化社会であるために、これらの個人商店では大手小売業者に対抗できないということだ。西中街商店街は時代に取り残されないように、複合商業施設である「パル」を協力してオープンさせたが、それにまつわる苦労は本文に書いた通りである。しかし、資本金、影響力で上回る大手企業は比較的安易にこれを成し遂げてしまう。現在はオンラインショッピングも普及してきているため、なおさらであろう。

多様性というのはいかなる場合でも大事である。インフラという側面から見ても、供給元が少なくなってしまうのはリスクの高い状態であるし、何よりこのような個人商店での買い物はその地域での所得の循環を生む。第2節で、人が集まっていた昭和初期の上市について触れたが、あれこそが地域経済循環がうまくいった例であるように思う。

資本金に関しては難しいと思うが、マーケティングとオンラインショップに関しては、アプリ開発など解決策を見出せるようにも思う。「アルプスシティ・ペイ」のような地域通貨を導入するのもひとつの方策だろう。地域経済の活性化は私たちにとっても身近な問題である。筆者もその一員としてこの問題を考え続けたい。

## 注

- 1) 上市町神明町にある三杉公園内にかつてあったとされている3本の立山杉のこと。昭和40(1965)年時点で樹齢は約450年とされている。昭和50(1975-1984)年代まで残存し、現在は三杉公園に標本が展示されている。
- 2) 小森さん本人からは伺わなかったが、カップ堂のご主人藤縄千栄子さんによると、小森さんは市姫神社の管理をしているということである。
- 3) パルへ出店した店は、原則、商店街に店を構えることはできなかった。しかし、パル内で売上が上位10%以内の店舗は商店街にも店を構えることができた。

4) このような道に慣れない筆者は、対向車とすれ違うことができずに来た道を引き返したことがある。

#### 参考文献

上市町誌編纂委員会、1970年『上市町誌』上市町。

新上市町誌編纂委員会、2005年『新上市町誌』上市町。

#### 参考にした新聞記事およびウェブサイト

松竹株式会社「作品データベース 山の讃歌、燃ゆる若者たち」

〈<https://www.shochiku.co.jp/cinema/database/03481/>〉 (2023/1/27 閲覧)

## 第7章 上市町における歓楽街の昔と今

上野 由愛

### はじめに

本章で主に取り上げる松和町および石浦町は、かつて栄えていたと言われる上市町の商店街の裏手に位置している。かなり入り組んだ狭い道に古びた建物が立ち並んでいるこの町からは、いかにも「昭和」の雰囲気を感じられる。町の中を歩いていると、所々にスナックがあることに私は気がついた。はじめは、どうしてこのような人目につかない路地裏にスナックが集まっているのかとても不思議に思った。調査を進めていくと、かつてこの町は遊郭や料亭が集まる歓楽街で、スナックが多いのもその名残であることが分かった。現在では想像出来ないような、かつての賑わっていた花街の姿があったことを知り、強く興味を惹かれた。

他方で、当時の様子を知っている人は現在では数少なくなっているだけでなく、文献や資料として残っているものもほとんどない。このままではかつての町の姿を知っている人がいなくなってしまうのではないかと、忘れられてしまうのではないかと思った。昔の町の様子を語ってくださる方々の懐かしそうな表情や遠くを見つめる目を見たとき、なんとしても後世に伝えたい、残したいと考えるようになった。

また、私は、当時の町の様子だけでなく「スナック」という場についても元々関心があった。スナックに一度も足を踏み入れたことがない私にとって、そこはさまざまな想像の膨らむ場所であった。どんなお客さんが訪れ、どのような会話を楽しんでいるのか。お客さん同士の関係性はどんなふうで、どのようなコミュニティが築かれているのか。外側から見ても分からない、親密なコミュニティやそこで織りなされる独特な文化があるのではないかと考えたのだ。今回の調査では、石浦町にあるスナックの一つをフィールドに、スナックのママやお客さんとの交流場面を間近で見るとともに、私もその輪に加えさせてもらった。そこには自分が想像していた以上の、スナックで取り巻く人間性や文化的側面を垣間見ることができた。

本章では、上市町の歓楽街である松和町と石浦町に焦点を当てて、かつて花街であった頃から現在までどのように変遷してきたのかということについて、知りえた範囲で述べる。また、現在のスナックではどのような人間関係が築かれているのかについても述べる。まず第1節では、遊郭や料亭があった昭和30年前後の石浦町・松和町について、当時のことを知る人の記憶をもとに記述した。続く第2節ではあるスナックのママの語りをもとに、スナックという場はどのような場なのか、ということについて記述する。第3節では、実際にスナックの「チーママ」を体験させてもらった経験をふまえて、身をもって感じたことなどを中心に記述している。それを踏まえて、上市における歓楽街の昔と今は、人々にとってどのよ

うな場所であったのかを私なりに考えたい。

## 1. 松和町・石浦町の歴史

松和町・石浦町にスナックが集中しているのは、かつてこの町は遊郭や料亭が集まる歓楽街であったことと関係している。現在では飲み歩く人の気配はほとんどないが、かつての賑わいが垣間見えなくもない。一見したところかなり古びた街並みのなかに、遊郭や料亭の名残のある建物が未だに残っているのである。昔の雰囲気は漂う静かなこの町は、かつて活気あふれる花街であった。当時の様子について書かれている文献や資料はほとんどなく、時が過ぎていくにつれて忘れられていってしまうばかりである。この節では、昭和 31 (1956) 年に制定された売春防止法の施行により、「赤線廃止」になる前後の松和町・石浦町のかつての姿を、人々の“記憶”をたよりに記述していく。

### 1-1. 昭和 30 年前後までの松和町・石浦町

昭和 31 (1956) 年以前の松和町・石浦町の様子を知っている人は、今では数少ないようだ。そうした少数の方々が遊郭や料亭のあった頃の町について語る時、「赤線廃止」という言葉をよく口にしていた。そもそも赤線とは、「集団的な管理売春（組織売春）を黙認するかたちで、戦前の遊郭や私娼街の業者を風俗営業として許可し、営業場所を指定した地区」（加藤，2009，p.17）のことであり、松和町・石浦町もそれに該当するエリアであった。

松和町で大正時代から続く床屋のご主人である野越さんは、生まれてから 78 年間、松和町で生活している。赤線が廃止された当時、野越さんはまだ小学生であった。その頃は松和町や石浦町に遊郭や料亭が 20 軒ほどあったという。町を歩いているとよく芸妓（げいこ）さんを見かけ、夜になると独特の雰囲気が漂っていたそうだ。野越さんによると、遊郭や料亭には、地元の人だけでなく、立山町や滑川などといった少し離れた土地からも客が訪れていた。勤め帰りに立ち寄る人も多く、会社の重役や地元の名士といった、裕福な人々が遊びに来ていた印象が強いという。

当時は上市町が合併する前で、現在の中心部から少し離れたところにある、ムラやヤマの方から町まで出てきて遊びに来ることがあったそうだ。その多くは地域で行われたお祭りの後に、その二次会として松和町や石浦町に出向いて、楽しい時間を過ごした。そして、夜の 11 時、12 時頃になると切り上げて、真っ暗な山道を歩いて帰った。当時は電柱や明かりがなかったため、家にたどり着くのは難しく、朝になるととんでもない場所で寝ていることがあったという話も、野越さんは聞いたそうだ。当時の人々の間では、家に帰ることができないのは、真っ暗な道中を動物について行ったためだと考えられていて、このことを人々は「モズナ（ムジナの訛りと思われる）にだまされた」と言っていたそうだ。

松和町や石浦町には料理屋がいくつかあったが、そこには必ず「離れ」があった。料理屋の営業時間が終了したあとに、夜遅くから明け方にかけて、客がそこで芸妓と過ごすことも

あったのだという。表向きは料理を出す店であっても芸者遊びが行われる離れがあったことは、意外な発見であった。

### 1-2. 町の人々の記憶に残る松和町・石浦町

令和4（2022）年5月25日（水）に私は、石浦町にある「ゲストハウス松月」というところで宿泊した。ゲストハウス松月は、石浦町の端、上市川にかかる白竜橋のたもと近くにあり、上市町のランドマークのひとつである。100年以上の歴史を持つこの建物は、もとは石浦町に数ある料亭の一つで、近年になってゲストハウスとして改修された。そこで生まれ育ったHさんも、赤線が廃止されたときに小学生であった。フィールドワークでは、Hさんに芸妓さんについて詳しく教えてもらった。本項では、主にHさんと、前項でも述べた野越さんからお聞きしたことを中心に記述する。



写真7-1 ゲストハウス松月の外観

Hさんによると、当時、松和町・石浦町には100人以上の芸妓がいた。東北や四国など、かなり遠方から来ている人がほとんどだったという。貧しい家の娘たちが、稼ぐために出され、家族と離れ遠い地で芸妓として働き、遊郭や料亭に置かれていたという。町には検査場が置かれ、月に一度、性病にかかっているか検査が行われていたようだ。

Hさんは石浦町の料亭に生まれただけあって、「芸妓さんの一日」がどのようなものであったかについても知っていた。それによると、芸妓の朝は掃除から始まる。早朝からお店を綺麗に掃除し、午後は温泉や美容院へ行って身だしなみを綺麗に整える。そして夜になると客を迎え入れる。これが芸妓の一日の様子だ。石浦町・松和町やその周辺地域は、当時は温泉や床屋が沢山あり、今もその名残があるそうだ。床屋の野越さんによると、午前中は床屋で芸妓さんの顔の産毛を剃刀で剃っていた。当時は日本剃刀という肌に柔らかくあたる剃刀が使われ、床屋の午前中は芸妓でいっぱいだったそうだ。そのため、男性客の髪を切るの

は午後からが多かった。

まだ遊郭や料亭が多くあった頃、野越さんは小学生であったがその頃の町の様子や雰囲気を書いてくれた。春から秋にかけて、遊郭や料亭では戸が開いており、小さい窓のような格子戸から子どもたちは中の様子をよく覗いていたそうだ。中では支度前や支度中の芸妓が何人か見え、タバコをふかしていることもあった。華やかな印象のある芸妓さんがタバコを吸っている光景は珍しく、子どもたちは興味津々に中の様子を覗こうとしていた。

また、学校終わりはちょうど支度前の芸妓が沢山歩いていたので、すっぴんの芸妓をよく見かけたそうだ。芸妓さんに話しかけられることも多くあり、挨拶だけでなく軽く会話することもあったと野越さんは教えてくれた。町ではしやぎ回る子どもたちを見守りながらも、自分自身は故郷を離れ暮らしていた芸妓さんたちは、どのような思いで毎日を過ごしていたのだろうか。

ひとくちに芸妓といっても、それぞれに「特技」が違った。踊りや楽器が得意な芸妓は、芸によって客を楽しませていた。また、お酌をして客との会話を楽しむ芸妓もいた。そして、「あまり芸に自信のない」芸妓は「体で勝負していた」という。野越さんによると、上市川の土手のところに芸者学校があり、芸妓さんは昼間にそこへ通い礼儀・作法を身につけていたそうだ。昭和10年代頃までは学校が存在していたが、その後、赤線廃止になるよりも少し前に、すでに学校はなくなっていたそうだ。当時は「おっしょさん（＝お師匠さん）」と呼ばれる、三味線や踊りを教える先生が個人教室を開き、朝の10時頃からお昼頃までお稽古をしていた。三味線や踊りの文化は今も残っているのではないかと予想したが、話を聞いている限り伝える人はほとんどいなくなってしまったようだ。

上市町では、夏に「相撲巡業」が小学校のグラウンドで行われていた。相撲は二日間にわたって行われ、初日は上市小学校、二日目は上市町の近くの相ノ木小学校で開かれた。訪れていた力士たちの中で、横綱や大関といった位の高い者は石浦町・松和町の遊郭に泊まることができた。各料亭、各遊郭に力士が一人ずつ泊まっていた。出羽海部屋や春日部屋の一行がよく訪れていたそうだ。その他の力士は、上市町にある温泉の大広間に泊まった。階級によってかなり待遇が異なったようである。沢山の力士が巡業していたため、上市町でも泊まらない場合は立山町や滑川の遊郭や料亭に泊まったこともあったそうだ。上市町には様々な芸妓がいる中で、町で一番美しいとされる女性が横綱の相手をした。次の日、横綱と一晩を過ごした女性は美しく仕立てられた着物を召し、砂かぶり席に座って相撲を観戦する。その姿を見た誰もが、横綱と一夜を過ごしたということにすぐにわかった。これは、当時の女性にとって名誉なことだった。

料亭や遊郭に泊まった力士たちは、石浦町・松和町に来る際、町の人々から大歓迎され、一目見たいと大勢の人が集まった。一日目の取組が終わると、力士たちは料亭や遊郭で一休みした。二日目の取組を控えるその日の夕方に、呼出しが料亭や遊郭を回り、次の日に誰と対戦するのか大声で呼び上げていたそうだ。この時、相撲ならではの独特な太鼓が町中に鳴り響いた。その様子が忘れられないと、野越さんは書いてくれた。大人から子どもまで、石

浦町と松和町に点在する料亭・遊郭を回る呼出しにぞろぞろとついて行き、二日目の取組相手が誰なのかと興味津々に耳を澄まし、響き渡る太鼓の音と風流ある独特な雰囲気に魅了されていたようだ。

ところで、芸妓たちが身につけた美しい着物は、普段の客から買ってもらう場合も多かった。呉服屋では、芸妓たちのために贅沢に仕立てあげられた着物がかなり作られていたらしい。呉服屋というところも羽振りがよく、土地を所有していることも多かったようだ。上市の商店街を歩いていると、現在はシャッターが降りている呉服屋の看板をいくつか見つけたことがある。かつての花街の名残は松和町や石浦町に限らないのだと感じさせられた。

### 1-3. 赤線廃止後の松和町・石浦町

昭和 31 (1956) 年に売春防止法が制定され、日本全国の遊郭や料亭は廃業へと追い込まれた。松和町・石浦町も同様に、20 軒ほどあった遊郭や料亭が次第になくなり、経営者は転廃業していった。経営者の廃業後の生活は様々であった。田んぼを所有しており元々農業を営んでいた人は農家の仕事に戻り、女将の夫や息子が会社員として働いていた家は、その収入で生活するようになった。そのため、遊郭や料亭を本業としていた家と、勤め人が家において副業としてそれら営んでいた家とでは、廃業後に異なる道を歩んだ。他にも、廃業した経営者たちは居酒屋、いわゆる「赤提灯」を営むようになり、それまでとは異なる、手軽な飲み屋が町に増えていった。いつしか町は「横丁」へとシフトしていったのだ。

Hさんの実家である松月では、廃業後もしばらくは芸妓を置いていた。遊郭や料亭に置いてもらっていた芸妓たちは、次の居場所を探してもすぐに見つかるわけではなかったため、次に移る場所が見つかるまで住まわせていたようだ。Hさんの父親は、もともと農業を営んでいたため廃業後は農家に戻った。料亭として使われていた建物は、学生たちに間貸しするようになった。冬の積雪が多い時期に、上市の「山の方」(伊折や種)から学校に通う学生のために部屋を貸し、わずかながら収入を得ていたという。廃業後、遊郭や料亭の建物をこのように活用する家は多かったようで、どこでも冬の間は学生たちを下宿させていた。女将がご飯の支度をして学生たちのお世話をしていたようだ。

遊郭や料亭の廃業後、居場所がなくなった芸妓たちのその後も様々であった。東北や四国など遠方から来ていた芸妓のなかには、それぞれの故郷に戻っていくものもあった。また、廃業をきっかけに恋愛関係にあった客と結婚し、上市で生涯を送る者も多かった。踊りが得意であった芸妓のなかには、日本舞踊の教室を開いて生活していた人もいたようだ。

赤線の廃止は、様々な商売に間接的な影響をおよぼした。それまで芸妓たちの着物を仕立てていた呉服屋は、当時 10 軒ほど上市町にあったそうだが、結婚式や成人式といった特別な日にしか着物を着る機会がなくなったため、次第になくなっていった。また、現在の「美容院」は当時「髪結い」と呼ばれ、芸妓さんが毎日髪の毛を綺麗に束ねてもらった場所であった。時代の移り変わりとともにそれらは「パーマ屋」と呼ばれるようになり、スナックのママが髪を整えるために多く利用されていたようだ。



## 2. スナックはどのような場なのか

第1節で記述した「ゲストハウス松月」の地下には、「コーヒー&スナックもぐら」がある。松月で生まれ育ったHさんは、実は「スナックもぐら」のママなのだ。松和町や石浦町のスナックについて関心を持ち始めた私は、ゲストハウス松月に宿泊し、その晩に地下にあるもぐらを訪れ、Hさんと出会った。スナックでフィールドワークをしてみたいという私の思いは、はじめはなかなか理解してもらえなかった。なぜ調査してみたいのか上手く説明することができない私を前に、Hさんも少し困った様子であった。幸い、私がどのような調査をしたいのか、どのような関心があるのかが徐々に伝わり、スナックもぐらで様々な経験をさせてもらうなど、スナック内外の場で親しくしていただいた。普段のHさん、「スナックのママ」としてのHさんの両方の姿から、Hさんの生き様やスナックのママとしての思いなどを垣間見ることができた。以下は、スナックのHさんの語りをもとに記述していく。

### Hさんとの出会いと初めてのスナック体験

5月25日（水）に上市町を訪れ、スナックもぐらの2階にあるゲストハウス松月で宿泊をした。この日の夜、私は地下にある「スナックもぐら」に顔を出した。スナックに入るのはこれが人生で初めてであった。地下へと続く入り口にさしかかると、カラオケの賑やかな歌声が聞こえてくる。ためらいながらも扉を開けると、そこには20人以上のお客が集まり、楽しそうにお酒を交えて盛り上がっていた。年齢層は40代～60代が多く、70代～80代と思しき人の姿も少なくなかった。

店内がおしゃべりやカラオケで大いに賑わっている中、私はスナックもぐらのママであるHさんを探した。ゲストハウス松月の宿泊予約をした際に、オーナーさんとしてのHさんの紹介記事を事前に確認していたため、どの人かはすぐにわかった。Hさんは「いらっしやい」と笑顔で声を掛けてくれた。私はHさんに、自分が富山大学の学生であること、なぜスナックに来たのかを大まかに説明した。Hさんはすぐに7、8人で賑わっているボックス席に通してくれた。Hさんが私のことを簡単に紹介すると、私はその場にいたお客さんに大歓迎された。この日は、年に一度開かれる町の商工会の総会が行われていたらしい。その打ち上げがスナックもぐらで行われていたのである。

その場にいた人たちは、どうして「年の若い人」が上市町のスナックをたずねてきたのか、とても不思議がっていた。酔いも回り上機嫌な人が多かったため、とにかく分かりやすく伝えようと、「上市町の歴史や文化について調査している」と説明した。石浦町・松和町に関しては、「ママ（Hさん）がよく知っている」とその場にいた人が口を揃えていた。第1節で記述した石浦町・松和町のかつての姿が、Hさんからの聞き取りにもとづいていることは、すでに述べた通りである。

### スナックの止まり木

スナックの中にはカウンター席とボックス席がある。カウンター席の椅子は少し高くなっているため足下にある棒に足を掛けて椅子に座り、座った後も足が宙ぶらりんにならないようその棒に足を乗せて安定させていた。このカウンター下にある棒のことを「止まり木」と呼ぶということも、Hさんが教えてくれた。お客はカウンター横一列で、一本の止まり木に足を掛け並んで座る。「止まり木に止まって、お客さんが一休みできる場なんだよ」と教えてくれた。Hさんは何十年にも渡り、止まり木に止まったお客さんと楽しく会話をし、時には相談に乗り、一体どれだけ多くの人々が心の拠り所としてここに止まっていったのだろうと思った。そしていつしか、私もその一人として止まり木に止まり、隣のお客さんと和気藹々と会話をし、時には真剣な相談もして、いつの間にか自分の居場所の一つになっていたことがとても不思議であった。

### 目の前に繰り広がる人生模様

「スナックはママにとってどんな場所なのですか」という質問をHさんに投げかけたことがある。Hさんは今までのことを回想するように少しだけ考え込み、そして暖かい目でこう答えた。「様々な人の人生が詰まった場所かな。まさに人生模様だよ」。

スナックには色々な人が訪れる。嬉しかったことを報告しに来る人、大きな悩み事を抱えて来る人、他愛もない会話をしに来る人。一人一人違う人生を歩んでいる人たちがカウンターに一列に並び、ママはその相手をする。Hさんはスナックのとある日の出来事について話してくれた。ある日、Hさんの前には嬉しそうにしているお客さんがいて、その方はこう言った。「ママ、実はね娘が結婚したんだよ」。Hさんはその方と一緒に喜び、お酒を乾杯した。その隣では、なんだか辛そうな表情でうつむいているお客さんがいる。その方はHさんにこう言う。「ママ、この間ね、息子が亡くなったんだ」それを聞いたHさんは「そうかい」と答えその人と一緒に悲しんだ。

娘の結婚を喜んで報告するお客さんの隣には、息子が亡くなり深い悲しみに襲われているお客さんがいる。様々な人生をもつ人たちが一列に並んで、その場を共有している。まさに目の前には人生模様が繰り広がっているのだ。悲しんでいる人には「この人はこの曲がいいかなあ」と悩んだ末、その人に合ったカラオケの曲を選んで、時に一緒に涙を流しながら歌う。人生の相談をしてきた若い子には、真剣に話を聞き、一緒になって考え、アドバイスをする。カウンターに座っているお客さんは、一人一人千差万別の人生を歩み、一人一人色んなものを抱えて並んでいる。スナックのママはそんな一人一人の人生模様に心から寄り添ってあげる存在だと言うことを、私はHさんから教わった。

スナックもぐらにはこれまでに色々な人が訪れHさんは一人一人に寄り添ってきた。どのような人も明るく迎え入れ、その場を楽しんで帰ってもらおう。それはどんなに自分が辛いことがあったとしても、ママやチーママさんたちは決してそれを表に出してはいけない。自分の娘や息子に悲しい出来事があったとしても、お客さんが我が子の結婚を喜んで話

を聞いて、一緒に良かったねと喜び、自分自身の話をすることは絶対にしない。自分にどんなことがあろうと、お客一人一人の人生に寄り添ってあげるのがスナックのママの役割なのだ。

### 3. スナックのママを体験する

調査合宿中である8月8日(月)に、私はスナックもぐらで「チーママ体験」をする機会に恵まれた。そうだったいきさつは次のようなものであった。私はHさんに、Hさん自身の話を聞くだけでなく、実際にスナックに出向くことでスナックを文化としてもっと知りたいということを伝えた。Hさんは、スナックについて深く知るためには、客の立場とスナックのママの立場の両方の世界を経験する必要があると私に言い、是非スナックのママを体験してみしてほしいと提案した。こうして私は、スナックの「チーママ」としてスナックもぐらで不思議な体験をすることができたのである。「チーママ」とは、お店のオーナーであるママの次の立場にあたる人物を指す業界用語である。私が訪れたスナックもぐらでは、主におしぼりを出すところから、食べ物やドリンクを作って提供し、お客さんと一緒にお話しする接客、そして片付けまで様々な仕事内容があった。

私が「チーママ体験」をさせてもらった日は、平日の月曜日であったにもかかわらず、カウンター席がほとんど埋まるほどの、約8人の客が訪れていた。一人で来ている年配の男性客、上司と部下と思われる女性の二人組、そして夫婦と思しきお客も二組いた。80代の男性から、まだ小さな子供がいるという30代くらいの女性までと、年齢層もジェンダーも様々であった。ほとんどが顔見知りで、お客同士も盛んにお喋りしていた。週に2回定期的に通っているという人もいれば、かなり久しぶりに訪れたという人もいた。なかには、別の店の常連客同士が、たまたまその日の夜にスナックもぐらを訪れ、嬉しそうに声を掛け合っている姿もみられた。

#### お客さんとの関係性

ママをはじめとするもぐらの女性たちと来客者は、世間話もしていたが身内の話も沢山していた。ママであるHさんとチーママのSさん(80歳)は、それぞれのお客に合わせて話を振り、具体的な人物名を挙げながら、最近あった出来事だけでなく過去にあったことまで把握しているようだった。たとえば、何十年もスナックに通い続けている常連客が、生まれや出身高校、若い頃の勤務先、昔は陸上に明け暮れていたということなどを私に話してくれると、横から相づちを打つだけでなく、「〇〇さん××で何十年間も働いてたもんね?」と会話をリードしてくれた。また、「あそこの端っこにいる方は、中学生の子どもさんがいて、△△から嫁いでこられたんだよ」と、普段は来ない方のこともよく知っているようであった。

友達や親戚という関係性でないのに、私がほとんどついていくことが出来ないくらいの

身内ネタが飛び交っているのがとても不思議であった。昔からの地元の常連客が多いからこそ、お互いの生い立ちや経歴といった個人的なことも知っており、「〇〇ちゃんは元気にしてる?」、「××さん最近大変らしいね」と、客の身内や友人のことを気遣ったり噂話をしたりと、様々な話題が飛び交っているのだなと思った。

### カラオケ

スナックではお喋りだけでなくカラオケも盛んに行われていた。私がとても驚いたのは、それぞれの客の名前がカラオケ機械に登録されていたことだ。客がリクエストして曲を入れることもあるが、ママやSさんが「〇〇さん歌って〜」と呼びかけて、その人の好きな曲を入れてあげるということもあった。カラオケの機械でお客の名前を選択し、さらに「十八番」を押すと、その人が以前歌った曲やお気に入りの曲まで登録されていた。その時の話の流れやその場の雰囲気に合わせて、ママやSさんはそれぞれの十八番を選曲していくのである。私はその手際にとっても感心した。

お客さんたちは、歌い出すと周りのことなど全く気にすることなく、各々自分の気持ちをぶつけるように、時には過去を懐かしむように、その人自身の世界に入り歌っていた。その様子も私にとってとても印象的であった。同年代の友人たちとカラオケに行くと、機械の採点機能を使って高得点を狙うなど、歌の「上手さ」を重視することが多いように感じる。最近では練習感覚で、一人でカラオケに行くのが主流になってきていると私は思う。しかしスナックのカラオケでは、人に聞かせるというよりは自分が全力で楽しむことを大事にしている、周りの人と一緒に盛り上がることで心の底から楽しんでいることが伝わってきた。ママやSさんも、例え他のお客とお話ししていたとしても、カラオケに間合い良く合いの手を入れたり、場が盛り上がるような一声をかけたり、とても周りに気を配り機転を利かせていることに感心した。

客の歌うほとんどの曲は、1960年、70年、80年代といった私が生まれる前に流行っていた曲であったため、知らない曲ばかりであった。現在では「歌謡曲」と言われている曲は、歌詞が非常に分かりやすくみんなで口ずさめるようなフレーズが多かったため、はじめは分からなかった私でも一緒に盛り上がることができた。目をつむって言葉一つ一つに魂を込めるように、当時の情景を思い浮かべていることがわかるように情熱的に歌っているお客さんたちの様子は、今でも忘れられない。

客が歌っているのを聞いたり盛り上げたりするだけでなく、ママやSさんもお客さんにリクエストされて歌うことがあった。あるお客がSさんのことを、「〇〇ちゃんは富山で一番上手い歌手だ」と言っていたので私も楽しみにしていると、想像を越える歌の上手さに心から驚いた。ママや若いチーママさんの歌も聴く機会があったのだが、みんな本当に上手だった。歌に自信がないとスナックのママやチーママになるのは難しいのだろうかと思ったのと同時に、毎日のようにお客の前で歌う機会があればこそなのかもしれないとも感じた。

## 噂話と本音

もぐらでは常に賑やかな雰囲気が続くのではなく、時には神妙な雰囲気になることもあった。ある客が帰った後、「実はあの人は〇〇なんだよね」と、その人の身の上に降りかかった災難が打ち明けられることがあった。その場にいた別の客も、「確かあの人は〇〇だったよね」「ただここだとすごく楽しめるみたいだね」というふうに、その人のことを心配している様子であった。私がカウンターで接客しているときは、カラオケや周りの人との会話を本当に楽しんでいるように見えたので少し驚いたが、人それぞれに事情があるのだということを実感した瞬間であった。

また、くだけた雰囲気だからこそ生じる「危険」に対する配慮もある。店内で、私に対してとても気さくに話しかけてくれた客がいた。今後の調査でも協力してもらいたいという思いもあり、その場で連絡先を交換したのだが、そのやりとりを見ていたママは、あとでこっそりと「あの人は連絡は取らない方が良い」と私に耳打ちした。表向きの会話だけでなく、噂話や本音などが飛び交うのも、実際に経験しなければ気がつかなかった側面だと感じた。

## カウンターの向こう側

さて、私がチーママ体験をした日は、まず一時間ほど客側の席で楽しんだ後で、ママに呼ばれてカウンターの向こう側にお邪魔させてもらった。カウンターの向こう側から見る景色は、想像していたものとはかなり異なっていた。客側から見ることの出来ないカウンター内には、おしぼりやおつまみ、日によって変わる手作り料理、お酒をつくるための道具などが置かれていて、初めて見る私にとっては何が何だか分からなかった。客が座るとすぐにおしぼりを出す。ドリンクの注文を聞き、手際よくお酒を作ったかと思うと、すぐにおつまみや軽食を用意する。その間も会話でつなぎつつ、作業する手を止めることなく動き回っていた。

初めてで、どこに何が置いてあるか分からない私は、最初は戸惑った。Sさんの作業を見様見真似でやってみるがなかなか上手くこなせなかった。一見単純な作業のように見えるが、実は一つ一つのことが意外と難しかった。狭いカウンターの上のどこに何を置けばいいか、お酒の種類、お酒の注ぎ方、どのタイミングで何を出せば良いのかなど、自分が予想していなかったことにつまずき、慣れるまでに時間がかかった。その間も次々とお客さんが入ってきて、接客しながらドリンクや軽食を出す。カウンターのグラスの中の飲み物が少なくなったら、手際よく氷を入れてお酒を注いでいく一連の作業はとても難しく、なかなか会話に集中することが出来なかった。

## ビールの注ぎ方

ビールを飲むお客には、コップの中のビールを飲み干す前に気がついて注がなければならぬ。その注ぐタイミングや、強引にならないように上手くビールを勧める「ほどよい距

離感」を掴むのに苦戦し、私はなかなか思うように注ぐことが出来なかった。そんな不慣れな私に、あるお客さんは毎回ビールがなくなるごとに「お姉さん」と私のことを呼び、空になったコップを見せて、ビールを次ぎやすいようリードしてくれた。その人は「このお仕事は大変だよ～」と何度も声をかけて、水商売の基本的なことを教えてくれた。また、何人かのお客さんからは「この子にも飲ませてあげて」と、お酒と一緒に飲ませてもらうこともあった。お客さんとのテンポの良い会話、タイミング良くドリンクを次ぎ、各々の客の様子を見つつ接客ということと同時に進行しているチーママさんの姿は、本当に真似することができないと痛感した。

### 状況に合わせたお喋りのテクニック

客との会話にも独特のテクニックがあった。まずは、ママが私のことを紹介する、その言い回しが巧みであった。地元の年配の方々には、「チーママ体験で来てくれたんだよ」、「スナックのこと知りたいんだって」と、「調査」という仰々しい言葉ぬきに紹介してくれた。そのため、スナックのチーママとして新しく入ったと勘違いしている人もいたが、そのおかげで親しく話をする事が出来た。反対に、ある議員に対しては、「富山大学の学生さんで上市のこと研究してるんだって」、「町のこと色々教えてあげてね」と紹介してもらい、そのおかげもあってその人物からは名刺をもらい、繋がりができた。チーママとしてではなく、カウンターに座って客側にいたときは、「ママ、この子は孫？」と聞かれることが多かった。「私の秘蔵っ子だっちゃ」とHさんに紹介されると、それをきっかけに周りのお客とも馴染むことができた。客の属性やその場の雰囲気に合わせて、私のことを紹介するのにも色々なやり方をしていたのだ。

一方で、私もお客さんに合わせて話し方を工夫しなければならないということに気づいた。自分自身のことをただ話せば良いというわけにはいかなかった。「学生」と紹介してもらったときは、自分が大学生であることやどんなことを学びたいのかを明確に説明して、「学生らしさ」を出すようにした。その後すぐに隣にいた年配の方に「スナックの見習い」として紹介されたときは、自分が学生であることや初めての経験であることを言い訳にできない状況だったので、なぜスナックで働こうと思ったのか、あるいはどうやってママと出会ったのかということ聞かれることになった。この時は、すべてを正直に話すでもなく、かといって嘘をつくでもなく、上手くかわしながら、楽しい雰囲気を損なわないように会話を進めて行った。「私の孫だよ」と紹介されたときも、それは違いますと指摘したのではせっかくの冗談が台無しになるので、その場の盛り上がった雰囲気を壊さないように対応した。自分自身のことをありのままに紹介することがどれだけ簡単だったか実感したと同時に、どう返せば相手が喜んでくれるか対応する難しさを痛感した。私のことを「スナックの見習い」と思ってビールの注ぎ方や水商売について楽しそうに話してくれたお客が、「実は大学の調査でここにいるのであって、スナックで働くつもりはない」とあとで聞いたとすれば、きっとその場がしらけてしまったに違いない。

お客さん一人一人にそれぞれの人生や価値観がある。年齢も性別も家柄も全く違う方々がカウンター一列に並んで一緒に空間にいる。そんなお客さんたちに合わせて会話をするものの意外な難しさを感じると共に、機転を利かせて微妙な言い回しの変化を使いこなすママの接客力も本当に凄いと感じた。

## おわりに

「どうしてここにはスナックが多いのだろう」というふとした疑問から私の調査は始まった。調査を進めていくと、このエリアは昭和 31（1956）年に売春防止法が制定される前まで遊郭や料亭が立ち並ぶ赤線地帯であったということを知った。花街として賑わい、遠方から沢山の芸妓さんが移り住みこの町で働いていた。赤線廃止後は遊郭や料亭が廃業し、芸妓さんもそれぞれの道を歩んで町の様子は次第に変化していった。飲み屋やスナックが集まる横丁として町は大きく盛り上がり、上市ダム建設の時期には関西から働きに来た従業員が沢山訪れていたという。今ではお店を閉めてしまったところが多いが、スナックがこのエリアに多く集まるのはこのような理由からであった。

このような歴史が刻まれてきた町で、主にスナックもぐらをフィールドとして、私は地元の人と一緒に過ごすことができた。スナックでは、お酒やカラオケの力を借りて自分の本音を赤裸々に話し、ママもその話に耳を傾ける。他人同士であるにもかかわらず、親密な関係を作り出すこの不思議な空間は、上市の人々にとってなくてはならない、生活に不可欠な場であると私は考えた。

振り返ってみると、今回の調査を進めるまで、私は水商売に対して偏見のようなものを持っていたのかもしれない。しかし、私もその空間で一緒に過ごすことで、お酒を飲みながら心から楽しめる場所、心から打ち解けられる場所なのだということを、少しだけかもしれないが「腹で」理解することができた。また、赤線地帯が国で認められていたという時代背景の中、当時は多くの人が遊郭で芸妓さんを交えた時間を楽しんでいた。そうした、捉えようによっては後ろ暗いかつての姿を決して否定しないHさんや野越さんのおかげで、私自身も石浦町・松和町の歴史を肯定的に受け入れることができた。この町にとって、過去の歴史と現在は、地元の人にとっても私にとっても、切っても切れない存在になった。

松和町と石浦町は、上市で一番大きな川である上市川に面している。花街であった頃は、遊郭や料亭は川沿いに何軒も立ち並んでいた。不思議に思った私は、何故川の近くに歓楽街があるのかHさんに尋ねたことがある。Hさんは明確なことはわからないようであったが、「昔も今もどこか同じ水が流れている」と語った。かつての赤線地帯は、赤線が廃止されてから飲み屋やスナック街へとシフトしていった。故郷を離れ遠方から来た芸者さんはどんな思いでこの川を眺めていたのだろうか。時代の変遷と共に人々はどのような思いでこの川を見てきたのだろうか。立山がそびえ立つ上市川の景色は一見美しいだけのように思える。しかしここでは、現在では想像出来ないような歴史が刻まれ、様々な人がそれぞれの思

いでここへ訪れた。そこには現在の私が立っている。川の水は今も変わらず流れているのだ。

**参考文献**

加藤政洋、2009年『敗戦と赤線 国策売春の時代』光文社新書。





## 第8章 自然を求める人々——山岳と緑に恵まれた上市町において

渡辺 聖菜

### はじめに

私が上市町における森林や山をめぐる文化について調査をしようと考えたきっかけは、上市町の図書館で見つけた「かみいちのヒキダシ」という小さな冊子である。その中にあった「森林セラピー」という聞き慣れない言葉に目が留まり、「森林」と「癒やし」の関係性について興味を持ったのが、そのはじまりだった。そうして、森林セラピーにかかわる人々に実際に会ってお話を伺ううちに、人は癒やしだけでなく、様々な関係性や影響を求めて森林や山と触れあっているらしいことにも気付いた。そこで、現在の上市町において、森林や山を利用した活動や、人々の森林・山への向き合い方について幅広く調査をすることにした。

フィールドワークでは、上市町で森林セラピーや森林や山を活かした活動をしている方々にお話を伺ったり、実際に自然の中を案内していただいたりした。また、トレッキングをしている方々や上市町民に街中で声をかけて聞き取りを行った。

以上を踏まえて、森林セラピーとはどのようなものなのか、なぜ人々は森林・山を求めるのか、また単に自然と親しむだけに留まらず森林・山を活かした活動を始めたのはどんな人たちなのかなどについて明らかにしていきたい。第1節ではまず、私の調査のきっかけになった森林セラピーについて取り上げ、第2節では山に登る人々の聞き取り、第3節では森林や山を活かした活動をしている方々の意識や考え方について記述し、最後にまとめと考察を行う。

### 1. 上市町における森林セラピー

本節では、NPO法人森林セラピーソサエティのホームページと上市町産業課が観光客向けに作成した「かみいち 剣・きらめきの森 森林セラピーBook」（平成 30〔2018〕年 11月改訂）に基づき、森林セラピー一般について、また上市町における森林セラピーの取り組みなどについて記述する。

#### 1-1. 森林セラピーとは

森林セラピーソサエティによると、森林セラピーとは、科学的な証拠に裏付けられた「森林浴効果」が根拠になっている。植物から発散されるフィトンチッドにはリフレッシュ効果があるとされ、森林セラピーでは、この効果を利用して人々の心身が健やかになれるよう様々なプログラムが用意されている。森林の中でのウォーキングや運動、レクリエ

ーションなどにより、ストレスの発散や心身のリラックス、身体のアンチエイジングなどの効果が期待されている。

NPO法人森林セラピーソサエティ<sup>1)</sup>が行う森林セラピー基地の認定は平成18(2006)年から始まった。観光・町おこしや地域住民の健康増進のための手段として各地域で森林セラピーが導入されており、現在では日本で60カ所以上の森が認定されている。森林セラピー基地の認定を受けるためには、①道幅が広く緩やかな傾斜で、歩きやすい散策路が2本以上あり、②滞在・宿泊施設がある、という2つの条件が必要だ。審査では、リラックス効果の実験結果、自然・社会条件等の評価、滞在型施設面等の評価によって審議され、適否が決定される。

森林セラピーの活動においては、「森林セラピーガイド」と「森林セラピスト」が活躍する。森林セラピーガイドとは、「森林を訪れる利用者に対して、森林浴効果が上がるような散策や運動を現地で案内する者」のことだ。森林に関する環境科学的な知識や森の癒やし効果についての生理学的な知識を有する者で、利用者に安心・安全な森林散策を確保し森林環境内での正しい森林セラピーの方法を助言することが求められる。

森林セラピストとは、「森林を訪れる利用者に応じて適切なプログラムを提供し、効果的なセラピー活動を指導する者」のことだ。森林セラピーガイドとしての知識だけではなく、健康・心理についての専門的な知識と高いコミュニケーション能力を有する者で、利用者に質の高い保養プログラムを提供し、森林セラピーの実践を指導することが求められる。

## 1-2. 上市町における森林セラピー

本項では、上市町産業課の米山さんとガイドチーム「トコトコ」に所属する森林セラピーガイドの平野妙子さんからの聞き取り、そして上市町民の方に伺った話を参考に、上市町における森林セラピーについて記述する。

### 上市町の森林セラピーの特徴

上市町では、眼目・大岩・馬場島の3エリアから構成される「剣・きらめきの森」が「森林セラピー基地」として認定されている。基地には、日石寺や眼目寺など由緒ある寺院が含まれており、自然と歴史文化が融合したものは全国的にも珍しい。眼目エリアには「トガ並木コース」(図8-1)、大岩エリアには「大岩の森コース」(図8-2)、馬場島エリアには「ゆったり家族の森コース」(図8-3)などがあり、散策からトレッキングまで楽しむことができる。実際にトガ並木コースとゆったり家族の森コースを歩いてみたが、どちらも平坦な道が多く、障害者や小さな子どもでも無理なく歩けるような道だった。トガ並木コースは、トガ並木の参道から本堂入り口までバリアフリーであり、車椅子でも散策できるように整備されていた(写真8-1)。



図8-1 (左)「トガ並木コース」眼目山立山寺の境内から始まり、参道に立ち並ぶトガ並木の中をのんびり歩くコース

図8-2 (右)「大岩の森コース」大岩山日石寺のふもとにある登山口から始まり、城ヶ平山遊歩道を歩くコース (いずれも上市町観光協会「かみいち旅ネット」より)



図8-3 (左)「ゆったり家族の森コース」馬場島荘周辺の森をゆっくり歩く。勾配が緩やかな「初心者にもおすすめ」のコース (「かみいち旅ネット」より)



写真8-1 (右)眼目山立山寺の階段プレート (筆者撮影)

上市町の森林セラピーは、ウォーキングをベースに上市町ならではのさまざまな体験を楽しむことができる。眼目エリアでは、眼目山立山寺のトガ並木に点在する観音様に願

事を書いた袈裟の一種である輪袈裟をかけて祈る「森の観音さまウォーク」や森の中での座禅などが体験できる。大岩エリアでは、大岩山日石寺を拠点に滝行体験や「不動明王」を写して描く写仏体験、空海の修行の遺跡を巡拝する八十八箇所巡礼体験をすることができる。馬場島エリアでは、座って景色を眺める「こもれび浴体験（座観<sup>2)</sup>）」、クロモジの葉から抽出されたクロモジティーの試飲を体験することができる。

### 上市町の森林セラピーフード

森林セラピーでは、地元の旬の素材を活かした料理を味わうことも重要とされている。ここでは、私が実際に食べてみた森林セラピーフードを紹介する。上市町の特産品つるぎさといもを使用した「拇参道」（写真8-2）は、和菓子店「花月堂」が参道のトガ並木をイメージして平成26（2014）年7月に開発したお菓子である。「花月堂」のスタッフによると、森林セラピーフードとしてではなく、眼目寺のお土産として開発されたそうだ。見た目と質感はダックスワーズのようで、抹茶風味で甘すぎずとてもおいしかった。上市にある特産品の会社「メデルケ」が販売する「里山ドレッシング」は、「わらび」「ずいき」「よもぎ」「ゆずとかりん」の4種類の味がある「新感覚ドレッシング」だ。販売されていたカミール（上市町市街地のデパート）の店員によると、日常品としては値段が高いため上市町民が町民以外の人に贈り物として購入する方が多いそうだ。特に30代ぐらいの比較的若い方がよく購入するという。私は、「わらび」味を購入して食べてみたが、ほどよい酸味がおいしく、家族からも好評だった。



写真8-2 拇参道（「かみいち旅ネット」より）

### 上市町で森林セラピーの取り組みが始まった経緯

上市町産業課の米山渉さんによると、上市町は森林が豊富で身近な資源であり、この観光資源を活かして町をPRすべく、上市町ではエコツーリズム活動にさかんに取り組んでいるそうだ。この活動は、ないものねだりをするのではなく町の資源を活かした観光振興を目指して平成24（2012）年に設立された、「上市まちのわ推進協議会」を中心に始まった。主に観光産業を中心とした持続可能な経済の地域内循環のしくみづくりのために、エコツアーの実施やトレッキングルートの活用、土産品の開発・販売促進など町の宝を活かす活動を行っている。森林セラピーもその取り組みの1つとして始まった。他にも、環境

教育やフォトロゲイニング大会<sup>3)</sup>、ふるさとガイド育成事業などといった活動も行っている。

### 上市町の森林セラピーの現状

森林セラピーの利用者数は、平成30(2018)年は68名(4件)、令和元(2019)年は61名(2件)いたが、コロナ禍の令和2(2020)年には0名と大幅に落ち込んだ。令和3(2021)年には36名(4件)と多少回復した。エコツアー全体は、平成30(2018)年は1,456名、令和元(2019)年は1,289名と多くの利用者がいたが、コロナ禍の令和2(2020)年には406名と3分の1以下に減少し、令和3(2021)年には596名と多少回復した。やはり、エコツーリズム活動にもコロナが与える影響は大きいことが読み取れる。森林セラピーの利用件数が少ない要因としては、上市町は宿泊場所が少ないうえに、関東圏の希望者は森林セラピーの先進地である長野に行ってしまうという現状があるようだ。実際のところ、森林セラピーはエコツーリズム活動の中の1つに過ぎず、今でも道半ばの状態だそう。

表8-1 森林セラピーとエコツアー全体の利用者数

	森林セラピー	エコツアー全体
平成30(2018)年	68名(4件)	1,456名
令和元(2019)年	61名(2件)	1,289名
令和2(2020)年	0名(0件)	406名
令和3(2021)年	36名(4件)	596名

参加者の世代は、60～70代と年配の方が多いが、最近では30～40代の参加者も増えている。また、そのうち8、9割は女性だそう。男性の利用者は夫婦で来るケースが多い。コロナ前は県外の参加者が多少いたが、大半は県内の顧客で占めている。森林セラピーガイドと利用者との距離が近いことからリピーターは多いようだが、森林セラピーはエコツアーのプログラムの中の1つであるため、森林セラピーからまた森林セラピーを体験するという顧客はあまりおらず、森林セラピーから他のエコツアーを体験するというリピーターが多いそう。

森林セラピー事業の問題点の1つとして森林セラピー基地として利用するためのランニングコストがかかることが指摘されている。大岩エリアでは、平成23(2011)年度～平成26(2014)年度の間で案内看板道標や千巖溪遊歩道等改修、登山道橋などで約1300万円を要した。眼目エリアでは、平成25(2013)年度～平成26(2014)年度の間でサイン看板や公衆トイレの改修、間伐・竹林の整備などで1200万円弱を要した。馬場島エリアでは、平成27(2015)年度で案内・サイン看板や下草刈り・雑木伐採、防護柵の設置などで850.9万円を要した。

## 上市町の森林セラピーガイド

上市町の森林セラピーガイドの登録者数（1級・2級）は合計24名で、以前までガイド組織は「立山・つるぎ山麓の会」と「トコトコ」の2つがあったが、現在は「トコトコ」だけが中心に活動している。森林セラピーガイドとして個人的に登録している人もいれば、組織の1人として登録している人もいるようだ。有償ボランティアであるが本業としてではなく、エコツアーなどがメインでその副業として取り組んでいる人や、土日だけ取り組んでいる人など働き方はさまざま。近年では森林セラピーガイドの年齢層が高くなっており、人材育成に苦労しているようだ。そのため、若い森林セラピーガイドへとどうつなげていけば良いのかについて検討中である。

今回の調査では、森林セラピーガイドの平野妙子さんにお話を伺った。上市町生まれ上市町育ちの平野さんは、大好きな上市町を紹介したくて森林セラピーガイドになった。平野さんは医学的効果を求めるような森林セラピーよりも、人同士のコミュニケーションの方がセラピーにつながると考えているため、会話を通して参加者と距離を縮めながらガイドしている。参加者との仲を深めるために、敬語よりも方言を使って話すことを心がけていて、参加者と友達のようなフラットな関係性になれるのが自身の「武器」なのだ話す。対話を重視しているため参加者の顔を見ることができるよう、ガイド1人に対して参加者の人数は5、6人と少人数にしている。血圧や心脈などの数字で測ることができる効果ではなく、参加者自身が楽しかった、気持ちよかったと思うような「セルフセラピー」が大事だと捉えていた。

上市町の森林セラピーの特徴は、電話で森林セラピーの要望がくると、希望者が何を求めているのかを聞いて、オーダーメイドでプログラムを立てていることだ。例えば、希望者からゆっくり森林セラピーを楽しみたいと言われたら森の中で横になるプランを考えたり、長く座禅をしたいと言われたら座禅の時間を増やしたりしている。五感をフルに使ってもらうように、例えば、普通に歩いたら10分の眼目山立山寺の並木道を1時間かけて歩いたりするようだ。また、立山寺の座禅石では<sup>ひとけ</sup>人気がなく自然の音しか聞こえないようだ。平野さんは上市町は五感を感じられる自然に恵まれていると語る。

上市町の森林セラピーガイドの後継者問題に関して、平野さんはまずは森林セラピーガイドに興味をもってもらうことが必要だと言う。ただ、森林セラピーガイドはどこにいてもできるため、まずは上市町を好きになってもらい、上市町の資源に興味をもってもらいたいと語る。

## 2. 山に登る人々

「森林セラピー基地」に行き行って出会った方々に聞き取りを行う過程で、必ずしも「自然の癒やし」だけではなく、さまざまな目的や影響を求めて訪れていることに気付いた。そこで、なぜ人々は自然がある空間を求めるのかを調査するため、対象を広げて、トレッキ

ングをしている方や登山者にも聞き取りを行うことにした。本節では、城ヶ平山周辺で出会った方々や剣岳登山経験者の聞き取りを取り上げる。

### 2-1. 城ヶ平山の登山者の語りから

城ヶ平山は標高 446.3mの低山で、大岩山日石寺のふもとに登山口がある。広々とした平坦な頂上では 360 度の眺望を眺めることができ、剣岳をはじめ毛勝山や大日岳などが見える。もう一方の登山口には、アニメ映画「おおかみこどもの雨と雪」<sup>4)</sup>のモデルになった古民家「花の家」<sup>5)</sup>があり、登山の帰りにこちらに立ち寄る登山者も多い。歩きやすさに加えて、山野草や野鳥のさえずりを満喫できるこの城ヶ平山を目的に上市町を訪れる人は多いという。ここでは、城ヶ平山大岩側登山口付近(写真8-3、図8-4)で出会った方たちの聞き取りを紹介する。



写真8-3 (右) 城ヶ平山大岩側登山口 (筆者撮影)

図8-4 (左) 城ヶ平山ルートマップ (国土地理院地図より作成)

まずは、高岡市に住むという40代くらいの女性にお話を伺った。この方は友達に誘われて、約10年間山登りを趣味にしているという。現在は毎週のように山に登っていて、なかでも簡単に登れる低山が多い上市町にはよく訪れるそうだ。年に1回は他県の山にも登ったり、旦那さんと2人で雪山に登ることもあるらしい。森林浴や健康だけが目的なのではなく、山の中の花を眺めたり野鳥の鳴き声や水の流れる音を聴くなど、自然と触れあうことが目的だと語る。山でしか見られない花や動物の写真を撮ることも楽しい。とりわけ、現在のコロナ禍ではマスク生活で呼吸が浅くなりがちなのに、山でマスクを外しておいしい空気を吸いながら身体を動かせることが大きな魅力だという。また、頂上まで登った後の食事が特別おいしく感じられるのも楽しみのひとつなのだそうだ。その場所ならではの匂い(例えば日石寺のお香の匂いなど)も感じることもできる。このように、五感であらゆるものを感じることができると癒やしいのだという。また、山登りのアプリを使っ



て、今まで登った人のデータを見ながら登ったりすることも楽しいのだそうだ。これは、森林浴とは少し違った山登りの楽しみ方といえる。

次に、滑川市在住の男性（74 歳）の語りを取り上げる。この男性にとって山登りは趣味でもあるし、健康のための活動でもある。約 10 年前から始め、週に約 3 回も山登りをしている。去年は約 130 回、2022 年は聞き取りを行った 6 月 13 日時点で、56 回目だった。普段は奥さんと一緒に山登りをしているそうだ。奥さんは、最初は山登りを嫌がっていたが、「家でテレビばかり見ているとボケて子どもたちに迷惑かけるようになるかもしれないよ」と説得し、一緒に山登りをするようになった。最初のうちは、少し登ると息を荒くしてふくれ面をしていたそうだが、最近はそうでもないらしい。以前まで「尖山」（立山町にある標高 559m の低山）によく登っていたが、去年か一昨年ぐらい前から上市町の山の方が自宅から近く、運動量もちょうど良い山があることを知ったため、上市町で登るようになった。この男性は、山登りのことを「健康を維持するための仕事」と捉えていて、城ヶ平山に登って中浅生（図 8-4 参照）まで歩くと「一日のノルマ達成」なのだと語る。山登りの一番の魅力はお金をかけずに健康になれることなのだそうです。ウォーキングと山登りの違いを尋ねると、山登りの方が血の巡りが隅々までいくし、人の目を気にする必要がない利点があるという。山登りはきれいな緑を眺めることができたり、奥さんとふたりで世間話をしながら歩くことができるから長続きするのだそうだ。山登りの帰りに滑川市で好きな惣菜を買って帰るのも楽しみのひとつである。

最後に、高岡市と砺波市から来たという 70 代の女性二人組の語りを紹介する。このおふたりは、趣味の山登りを週に約 2 回している。ひとりは 2、3 年ほど前、もうひとりは 5、6 年ほど前から山登りを始めたそうだ。いずれもきっかけは自分の自由時間ができたからだと言ふ。友達と話したり、「山のイオン」を感じながら歩くのが楽しいのだそうだ。山登りの後に温泉に入るのが醍醐味で、山ごとに入りたい温泉がなんとなく決まっていると言ふ。城ヶ平山の場合は、登った後にゆのみこ温泉（上市町湯神子）に入るらしい。頂上で良い景色を見て、お風呂に入って汗を流すと気分転換になる。山登りはストレス発散になるし、山に登る日が楽しみで仕事のやる気が出るのだそうだ。日頃は建物の中にいるため、外の別世界のような感じが気持ち良いと語る。山のふかふかとした土を歩いたり、きれいな花や空を見たり、鳥の鳴き声を聴いたり、クーラーではない自然の風を感じたりすることが新鮮に思えるのだそうだ。

## 2-2. 剣岳登山者の語りから

剣岳は、上市町と立山町にまたがる標高 2999m の山である。日本国内で最も険しいとされ、多くの登山者が命を落としてきた危険な山である。しかしその分、登山家にとっては憧れの対象であり、これまで多くの登山者が剣岳に挑んできた。一般的な登山ルートは別山屋根ルート（立山町）と早月屋根ルート（上市町）（図 8-5）の 2 つであり、早月屋根ルートは別山屋根ルートに比べて勾配がきついといわれる。ここでは、剣岳に何度も登

頂したことがある方たちの聞き取りを紹介する。



図8-5 早月屋根ルート (国土地理院地図より作成)

まずは、上市町東種で公民館の館長を務める廣田さん(81歳)の語りを取り上げる。廣田さんは働いていた頃は時間がなくあまり山登りをする事ができなかったが、定年退職の60歳を過ぎたあたりから頻りに山に登るようになった。天気が良くお金の余裕があれば、山登りをしているそうだ。近くの山ならいいが、県外の山にも登りに行くためお金がかかるのだという。槍ヶ岳や富士山など県外の山は大体登ったことがあると言う。立山と劔岳は毎年、立山は少なくとも年に3回は登る。5月の山開きのころに毎年立山に登っていて、山頂の神社でお参りをして帰るそうだ。県外の山だと、山登りのツアー参加者とグループで登っているが、県内だと一人で登る。70歳までは、日帰りで劔岳登山を何回もしていた。そのときはお茶とおにぎりだけという簡単な荷物で登っていたそうだ。廣田さんはTシャツと短パンという簡単な服装で登ることもあったが、近年登山者の服装が変化しカラフルな服を着ている人が多くなってきたと感じている。また、昔は登山者同士で「ごくろうさま」「どこから来られたの?」などいろんなことを聞いたり話したりすることが山登りの息抜きになっていたが、最近はそのがなくなってしまったと言う。上りの人が下りの人に道を譲るという慣習や、落石があったら「落」と叫んで下の人に知らせるといったルールもだんだんなくなってしまったと語る。

山登りのきっかけや目的は特になく、「そこに山があるから」と言う。もともと、線路の枕木を売るために山で木を伐採する仕事をしていたため、山に対する恐れはなかった。その頃から高い山を見つけると登っていて、そうするうちに自分の足に自信がついたそうだ。年を取ってからは、「山に相手にされるかを考えるようになった」と語る。3月頃に山に行くとウグイスが鳴く。この鳴き真似をしてウグイスが返してくれるかどうかを試すそうだ。鳴き声が返ってくれるのが楽しく、疲れを忘れると言う。これができている限りは「自分は大丈夫、元気だ」と思えるが、落石や足を滑らせるなど怖いことがあると唇が

動かなくなり鳴き真似ができないため、気をつけなければならないと身が引き締まるようだ。鳴き真似ができるかどうかを、自身に山登りをするのに適した心構え、身構えがあるかどうかの判断基準にしているようだ。

私にとって廣田さんの山に対する姿勢、山との関係性は非常にユニークなものに思えたが、廣田さんは山好きな人にはもっといろいろな人がいると語る。山に行ってもテントも持たずに岩屋やハイマツの中で一晩休むなど自然に溶け込んで生活する人や、最近は劔岳の頂上で何時間も絵を描きそこに俳句を添えて知り合いに贈る人もいるそうだ。

次に、早月尾根にある唯一の山小屋である「早月小屋」で働くようになって3年目という男性の語りを取り上げる。この男性はもとは立山側の「劔澤小屋」で働いていたが、人手が足りなくて困っていた早月小屋で働き始めた。出身は東京だがたまに帰るくらいで、夏と秋に富山で、冬は長野の山小屋で働いている。こうした働き方をこの10年くらいしているそうだ。劔岳の頂上には、山小屋から頂上までも含めると40回くらい行ったことがあると言う。劔岳を怖いと思わないのかと尋ねると、「山だから」と答えた。亡くなる人は中山（馬場島に登山口がある標高1255mの山）でも亡くなるし、劔岳に限らずどの山でも命を落とす可能性はあると言う。劔岳は岩のイメージがあるが、早月尾根だと岩より樹林帯の方が事故が多い。一般的によくいわれる「鎖の難所」<sup>6)</sup>よりも、ちょっとした一般ルートで怪我をする人の方が多いそうだ。私は、この男性にも山登りの目的は何かと尋ねてみたが、廣田さんと同じくこの方もよくわからないという様子だった。

早月小屋の客層は20代から80代までと幅広く、日帰りは若い人が多く小屋で泊まる人は年配の人が多く。男性に限らず女性も結構来るそうで、その中には年配の人もいると言う。コロナの影響を尋ねると、人が一度少なくなったが世間が慣れてくるとまた回復したそうだ。しかし地元の人にはコロナ禍でも「裏山感覚」で来ていたと言う。毎週のように訪れる人もいるらしい。そのような人はいろいろな谷や尾根を何度も何度も登る。そうして何回も劔岳に登るうちに、劔岳の奥深さに魅了されるようだ。劔岳は谷が深いことや山自体の山塊が大きいところなどいろいろな側面があり、懐が深いといわれる。昔と今との違いを尋ねると、昔は日帰りで劔岳に登る人が少なかったそうだ。挨拶に関しては、大体の人は返してくれるが、コロナになってやりづらくなった気はすると言う。

### 3. 上市町の森林や山を活かした活動

趣味や仕事の一貫として山に登る人々を調査してきたが、個人的に森林や山と親しむだけに留まらず、森林や山を活かして普及活動をしている人々はどのような人たちなのかについても気になってきた。そこで、上市町民の方々やインターネットで得た情報を基に、上市町で森林や山を活かした活動をしている方々に聞き取りを行った。本節では、聞き取りを行った方の取り組みやその過程について取り上げる。

### 3-1. 大観峯の古道でマウンテンバイク

大岩山日石寺までの道中に、「城山の湧水 きっさ城山」という喫茶店がある。フィールドワークのついでに立ち寄ってみたところ、そのスタッフから上市町の自然を活かした活動をしているという佐藤将貴さんのことを教えてもらったため、話を伺った。佐藤さんは、一棟貸切宿「<sup>の</sup> 壱の家」のマネージャーを務める傍ら、「里山マウンテンバイクツーリズム実行委員会」の代表も務めている。調査では、佐藤将貴さんの半生とその活動についてお聞きすることができた。

佐藤さんは兵庫県神戸市出身で、幼い頃は海と山がすぐ近くにある環境で育ち、学校のレクリエーションやプライベートでも山に登ったりしていた。陶芸家のみどりさん<sup>7)</sup>と結婚し、田舎で暮らしたいと思っていた矢先に東日本大震災が起これ、人生は一度きりだしやりたいことはやった方がいいと思ったそうだ。

佐藤さんは平成 24 (2012) 年に公開されたアニメ映画『おおかみこどもの雨と雪』を観て感動し、プライベートや自治体が企画するツアーなどで富山を訪れるようになった。すると、立山町役場に佐藤さん夫婦の情報が行き、陶芸家であるみどりさんに地域おこし協力隊として是非来てほしいという逆オファーがあった。当時は、みどりさんと同じ故郷である神戸で田舎暮らしをするつもりだったが、挑戦してみようとその話を承諾した。

佐藤さんは富山に移住した後、機械メンテナンスの仕事をしていた。一方、みどりさんはクラフトイベント「立山 craft」を運営する NPO 法人「立山 craft 舎」を設立し、大きな話題を呼んでいた。佐藤さんは、表彰されたりメディアに取り上げられたりしているみどりさんのきらきら輝く姿を羨ましいと感じるようになっていった。

同時に、佐藤さんは里山の「自然資本」に注目していた。佐藤さんが住む立山町上東地区では、少子高齢化による休校や里山の森林放置による鳥獣被害の影響を受けていた。佐藤さんは、自分たちは里山の魅力を独り占めするばかりで何もできていないと感じ、里山の自然資本を活かした活動をしたいと考えた。それから、狩猟の免許を取ったり、ラフランスで地ビール造りをするなどしてきた。そうした活動を続けるなかで、地元住民と地域活性化について話していたときに、「里山×マウンテンバイク」のアイデアが生まれ、令和元 (2019) 年にマウンテンバイクを購入した。その後、マウンテンバイクで走れる山道が多い長野県で山を下るダウンヒルを体験してみるととても楽しく、家から近い大観峯でやりたいと考えた。しかし、大観峯はアップダウンが激しく地形を選ぶダウンヒルには適さないため、どうしようかと考えていたところ坂でも登れる高性能な e マウンテンバイク<sup>8)</sup> のことを知った。

当時の佐藤さんは、15 年続けた業界の仕事を退職して富山県内のまちづくり会社に入社したが、コロナ禍で思うような活動ができなくなっていた。しかし、そのことをきっかけに、「今しかない」と大観峯で旧登山道の藪道調査を始めた。毎朝、出勤の 2 時間前に、ノコギリとクワを持って山に行き、ひとりで道を切り拓く作業を続けた。旧登山道を開拓していくと、洞窟や廃村の牧場跡、忘れられたキャンプ場などそれまで眠っていた地域の

「お宝」が次々と発見されたようだ。そして半年後、マウンテンバイクで走れる大観峯展望台から上市町柿沢までの約2キロの道（図8-6）が完成した。その後、トレイル整備や里山の保全維持活動を行う里山マウンテンバイクツーリズム実行委員会を立ち上げた。また、開拓した道を誰でも楽に走行できるように、クラウドファンディングで10台のeマウンテンバイクを購入した。

現在は、eマウンテンバイクで里山と村をめぐる「里山マウンテンバイクツーリズム」を実施している。日石寺やおおかみこどもの花の家などの定番スポットから、「須山切石跡」<sup>9)</sup>など知る人ぞ知る秘境まで、eマウンテンバイクでひと味違ったアドベンチャー体験をすることができる。佐藤さんは、各地域の点（魅力的なスポット）と線（今ある道や古い登山道）をつなぎ合わせたコースを巡ってもらうことで、里山の魅力を感じてもらいたいと考えている。今後は、最低でもあと5本の道を開拓する予定だという。そして、より多くの人に里山を楽しんでもらうため、eマウンテンバイクの体験会を実施していくのだそうだ。



図8-6 柿沢—大観峯周辺地図（国土地理院地図より作成）

### 3-2. 劔岳Tシャツをつくった久我奈美子さん

劔岳に魅せられて劔岳Tシャツを作ったという久我奈美子さんの情報を「YAMAP」<sup>10)</sup>から見つけ、話を伺った。久我さんは、現在ファミリーマート上市中央店の店長を勤めていて、店内のイトインを利用した「劔岳ギャラリー」（写真8-4）で劔岳Tシャツ（写真8-5）を販売している。ここでは、山に対する意識や久我さんが劔岳Tシャツを作るに至った経緯、人生観について取り上げる。

久我さんは山登りを趣味にしている。土日と平日で登山をするいくつかのグループと知り合いになって、タイミングが合ったときにそれらのグループに混ぜてもらって登山に行く。山をきっかけに広がった人脈はかけがえのないものなのだそうだ。久我さんの場合、山頂からの景色を眺めることが目的なので、良い景色が見れない天候のときには無理して行こうと思わない。低山でも登ることは辛い、山頂に着けば来て良かったと感じる。また、山で食べる食事を準備して友達に喜んでもらえるのがうれしいと語る。ひとりで登山に行くことはせず、友達と楽しい時間を作るために登山に行くのだそうだ。

久我さんは体力に自信がなく「運動音痴」を自称していて、かつては「登山とマラソンなんか絶対しない」と言っていた。ところがコロナ禍になり、趣味だった旅行や街中に行くことができなくなり、行くとしたら自然の中だという考えから、山に興味を持った。ただ、親子で立山に登ったときに辛い思いをした経験から、登山はしなくなかった。そこで、事故などの不幸が重なったことや友達の影響を受けて、令和元年に神社参詣と御朱印集めを始め、全国の神社巡りに熱中した。

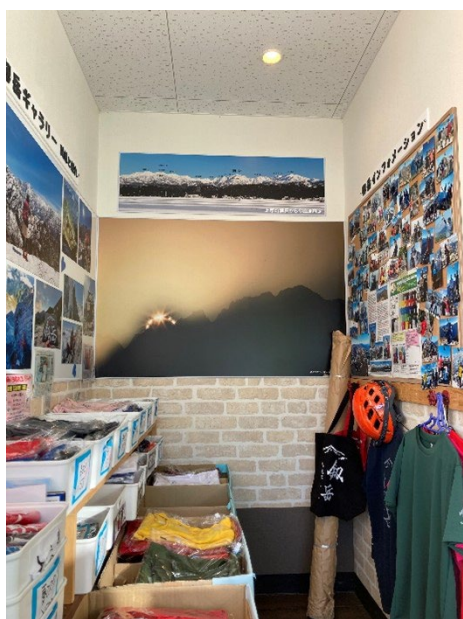


写真8-4 (左) 劔岳ギャラリー



写真8-5 (右) 劔岳Tシャツ (いずれも筆者撮影)

令和元(2019)年8月に、立山山頂の雄山神社・峰本社の御朱印をもらうために、仕方なく立山登山をした。さらに、立山登山をした日の夜にあった中学校の同窓会で再会した旧友の中に立山に登りたいという人がいて、2週間後にその人と一緒に再び立山に登った。そのとき登った立山が今まで見たことがないほど綺麗で、「一瞬で山に魅了された」。それからは、登山も神社参りもできて一石二鳥という考えから、山頂にある神社を目的に山登りをするようになった。そのうち、周囲から「次は劔岳に登らんなんね。上市町民なんだ

から死ぬまでに劔岳登らんなんやろ」「馬場島はなみちゃんの庭だし、早月屋根は散歩コースやちゃ。何回でも散歩してこいやー。そのうち、山頂に着いているかもしれんちゃ」などと言われているうちに、徐々にその気になっていったのだそうだ。

久我さんが現在運営するファミリーマートは、平成 29 (2017) 年 1 月まではサークルK だった。その頃、全国で 6,000 店舗あるサークルK の中で、おでん売上全国 1 位を 10 年間取り続けた。昔からみんなが注目する 1 番が好きだった久我さんにとって、この達成は「エネルギー源」だった。登山愛好家が憧れる日本で 1 番険しい山である劔岳、そんな宝物が上市町にあるということに心が惹かれた。

そうして、劔岳登頂を目標に登山トレーナーとのトレーニングや 1 日 3 キロのランニングを始めた。この努力が実って、登山を始めてたった 4 ヶ月後に劔岳に日帰り挑戦し、17 時間の登山の末、登頂に成功した。実際に登ると劔岳への愛がさらに強くなり、劔岳をもっと多くの人に知ってもらいたいと思うようになった。

山頂で久我さんは、多くの登山者が背中を向けて写真を撮ることに気付いた。その背中のキャンパスをいただこうと、劔岳 T シャツを作ることを思いついたのである。馬場島の石碑<sup>11)</sup>に刻まれた「試練と憧れ」という、劔岳の象徴となる言葉を使う許可を得て、話題性も考慮して上市高校生に文字を書いてもらうよう交渉した。さらに、「しろくまキャラクター」<sup>12)</sup>とのコラボ商品を依頼し、2 種類の T シャツが完成した。そして、自分がプロデュースして作った劔岳 T シャツを着て、二度と行くことはないと思っていた劔岳に再チャレンジした。

劔岳 T シャツを通じた友達が増えて、PR 活動に積極的に協力してくれる人もでてきた。劔岳 T シャツを購入する人の中には、劔岳に登る人はもちろんのこと、劔岳を眺めるために他の山に登る人や、ここぞという大会に参加する人などもいるそうだ。劔岳 T シャツをきっかけに輪が広がるのだと言う。

今まで、4 人兄弟の子どもを育てながら、PTA 会長・副会長を 15 年間続け、加えてコンビニの店長という多忙な生活を送ってきた。久我さんは、人生においてあえていばらの道を選ぶようにしていて、上に立ったときにしか見れない景色があると言う。気合いと根性を原動力としていて、有言実行を大事にしている。このような人生観が劔岳に向かわせたのかもしれないと語る。山登りを始めて、大嫌いなことに挑戦して克服したことが自信につながった。インタビュー時には、富山マラソンにもエントリーし、それに向けて練習していると語った。

### 3-3. 劔いおりの郷

馬場島までの道中で、直売所「劔いおりの郷」に目が留まり寄ってみたところ、上市町伊折地区の山里の魅力を伝える活動をしているという酒井勲さんに話を聞くことができた。また、周辺の観光スポットも案内していただいた。ここでは、劔いおりの郷のホームページと劔いおりの郷を訪れた方のブログ、北日本新聞 (平成 27 [2015] 年 8 月 25 日 23 面)

をもとに「劔いおりの郷」や酒井さんの想いについて取り上げる。

伊折地区は、昭和 44 (1969) 年に起きた大水害が原因でほとんどの住民が村を離れた。酒井さんによると、かつては 90 世帯ほどあったが今は誰も住んでおらず、廃村寸前なのだそうだ。この地域を活性化するため、伊折地区出身者たちが平成 26 (2014) 年に一般社団法人「劔岳山麓振興開発」を発足させた。商品開発や山菜の計画栽培に取り組んでいる。平成 27 (2015) 年 8 月に商品の生産拠点だった小屋を利用して特産品直売所「劔いおりの郷」を開設した。旧集落周りの整備を進め、古民家や散策路の活用や歴史・文化の PR を目的としている。山菜を使った手作りの食事や伊折産の山菜などのお土産を提供するこの場所には、馬場島までの道中にあることも手伝って、県内外の登山客が訪れるのだそうだ。直売所から約 0.5km の伊折橋近くの緑地には、耐久性や見た目を考慮して六方石<sup>13)</sup> で作ったテーブルや椅子が設置されている。また、劔岳を望む事ができる緑地には地区出身者たちによって平成 19 (2007) 年にオモイガワ<sup>14)</sup> などが植えられており、絶景スポットとなっている。

酒井さんには、まず「劔ふるさとサンポーロ」と呼ばれる「劔いおりの郷」から早月川までの、約 1.5km の遊歩道を案内してもらった。この遊歩道を進むと「せせらぎの小径」(写真 8-6) と呼ばれる小川に沿って歩く遊歩道につながった。そこには上市町の花である「りんどう」が植えられており、秋のシーズンには紅葉が見られるそうだ。小川のせせらぎを聞きながら自然の中を歩くこの道は、とても心地よい空間だった。この遊歩道を進んだ先には、「みんなのプロムナード」と呼ばれる場所があった。「プロムナード」とはフランス語で「散策するところ」という意味なのだという。ここでは実のなる原木に加えて、山ぶどうやあけび、さるなしを見ることができる。これらの植物の管理や道の整備のほとんどは酒井さんがしているのだそうだ。さらに奥に進むと、早月川の堰堤<sup>えんてい</sup>からの滝とともに劔岳を見ることができる場所に行き着いた(写真 8-7)。私がここを訪れた日は天気が悪く劔岳を見ることができなかったが、壮大な滝と透き通った早月川を眺めるだけでも十分なほど良い景色だった。早月川には、全国からイワナを釣りに訪れる人も多いと言う。劔岳をはじめ、周囲の山を目当てにした登山客も多く、コロナ前までは人は来ていたそうだが、今はまったく来ないそうだ。

酒井さんは、この白萩東部地区で生まれ育ち、中学 3 年生のころまで住んでいたという。仕事を引退されてから、廃村寸前の伊折地区に賑わいをもたらそうと PR 活動を始めた。「劔いおりの郷」を立ち上げるために「とやま企業未来塾」に行き、過疎集落等自立再生対策事業として国から補助を得て村おこし事業を始めたのである。もっとこの地区をアピールし、魅力ある場所にしようと、食や散策を通じて懸命に取り組んでいる。酒井さんは、伊折地区には魅力がたくさんあるのに、アピールする人がいないからみんな知らないのだと語る。劔岳に登りに県内外から人がやってくることを活かせば、道中を活性化させられるはずだし、そのためにはおもてなしの心が必要である、もっと町に PR に取り組んでほしいと言う。来た人が来て良かったと思えるような場所にしたいと考えているのだそうだ。





写真 8-6 せせらぎの小径（筆者撮影）



写真 8-7 早月川の堰堤（筆者撮影）

### 3-4. 馬場島荘

馬場島荘は標高 750mに位置する劔岳の登山基地であり、ハイキングやキャンプ場としても親しまれている。レストランや宿泊施設などの設備が充実しており、登山客だけではなく、日帰り入浴や手打ちそばを目当てに来訪する人も多い。豊かな自然や劔岳を水源とする清流に囲まれていることから上市町の森林セラピー基地としても知られている。森林セラピーガイドの平野さんから馬場島に行くことを勧められたことから、私は、馬場島荘スタッフの方にアポを取って、お話を伺いに行った。

お話を伺ったのは、馬場島荘で調理人をしているという 61 歳の男性である。この男性は、今は調理学校の生徒で、馬場島の調理士が身体を壊してしまったと聞き、夏休み中手伝いに 40 年ぶりに馬場島に来たのだそうだ。山登りはしばらくしていないが、昔はプライベートで中山という山の道を開拓したりしていたという。

馬場島という地名は、立山川と白萩川が合流しているところに島のような形の平たい場所ができ、その場所が馬場という馬をならす平らなところに似ていたことに由来するのだそうだ。馬場島荘はかつて、夫婦ふたりで営まれていた。当時、宿泊客は雑魚寝で、いかにも避難小屋のようで何もなかったそうだ。コテージやバンガローのようなものもいくつかあったが、今では全て廃墟になってなくなってしまった。現在、劔岳の登山口は整備されて分かりやすくなったが、昔は登山者が登山口だと気づかないほど険しかったため、そうと分からず帰ってしまう人も多かったそうだ。また、昔は登山に限らずウドを採るために大窓という山に登るなど、山のものを調達しながら山登りをしていた人がいたという。

馬場荘で聞いた話のなかで衝撃を受けたのは、劔岳で命を落とす事例はあまりにありふれているということだ。あるときは、ふたり組が劔岳に登りに行った30分後に、「片方が落ちました」と言ってひとりだけが帰ってきたことがあったという。劔岳に登るのに安全な時期は、毎年2人ぐらいは亡くなるため、2人亡くなった後が安全だという話もあるそうだ。劔岳の登山者の特徴としては、60代以上の年配の初心者が多く、よく歩き慣れている人を連れて一緒に行くことがあるのだそうだ。さすがは全国に知られた名山だけあって、県外の登山者や団体客が多いという。

#### 4. まとめと考察

ここまで、主に人々の森林や山への向き合い方について記述してきた。今回の調査の出発点は、森林セラピーとはどのようなものなのか、なぜ人々は森林や山を求めるのか、また単に自然と親しむだけに留まらず森林や山を活かした活動を始めたのはどんな人たちなのかを明らかにすることであった。

まず、森林セラピーについて調査して分かったことは、森林の中を散策するだけではなく、自然がある空間で食事やレクリエーションなどの活動を行うことで、人々にリラックス効果やリフレッシュ効果をもたらすということである。私の当初の森林セラピーのイメージとして、漠然と自然に囲まれた空間を散策することだと思っていたため、食事やヨガ、座禅をするなど他にもさまざまな活動をしていることに驚いた。そうした活動が「癒やし」の効果を高めるだけではなく、上市町での「森の観音さまウォーク」や写仏体験など、その土地ならではの活動を行うことで、観光としてのPRにもつながっていることが分かった。

森林セラピー基地や城ヶ平山、馬場島などで出会ったトレッキング姿の方々や登山者への聞き取りから、登山を趣味とする人と趣味を超えたレベルで本格的に山登りをする人とのあいだで、山に対する向き合い方が大きく異なることが分かった。城ヶ平山で出会った人々は登山の目的として自然の癒やしだけではなく、人同士のコミュニケーションや登山後の温泉、食事などと答えていることから、山に登ることをレジャーの1つとして捉え、登山が主というよりもそこに付随するものに見出しているように思える。「カラフルな服を着ている登山者が多くなった」ことや久我さんの「劔岳Tシャツ」からは、登山がカジュアルに楽しめるものになってきたことが考えられる。また、第2節で取り上げた城ヶ平山で出会った女性は登山向けSNSを活用して過去のデータを見ながら登っていたが、これもSNSが普及した現代ならではの、新しい山との向き合い方と感じた。コロナ禍の状況も、レジャーとして山や自然に目を向ける人が増加したことの背景であるかもしれない。城ヶ平山で出会った女性は「マスク生活で呼吸が浅くなりがちなのに、山でマスクを外しておいしい空気を吸いながら身体を動かせることが大きな魅力だ」と言っていたし、久我さんもコロナをきっかけに登山を始めたと話していた。閉塞的になった日

常生活において、ストレス解消や癒やしを求めて自然がある空間を求めるようになったようだ。

一方で、剣岳登山者の山に対する姿勢はそれとは異なる。廣田さんが高い山を見つけるのと登るものだと語っていたり、登山の目的を尋ねると「そこに山があるから」という答えが返ってきたことから、登山の目的が「健康」や「楽しみ」といったわかりやすい言葉に回収されない様子がうかがえた。筋金入りの登山家の人は日常生活の一部のような感覚で山を捉え、理由も無く山に惹かれてしまうものなのだろうか。

森林や山を活かした活動を始めた人たちについて調査して分かったことは、始めたのが比較的最近だということだ。マウンテンバイクツーリズムを始めた佐藤さんや「剣岳Tシャツ」を作った久我さんは、どちらもコロナ禍が活動のきっかけであった。剣いおりの郷の酒井さんも、平成 26（2014）年から本格的に活動を始めている。最近になって、自然がレジャーの対象として捉えられるようになってから、地域活性化の一環として森林や山を活かそうと考える人が増えたのだと考えられる。また、調査した方々からは、地域の魅力を伝えたいという思いが強く伝わってきた。その魅力を伝える方法のひとつに、森林や山がある。佐藤さんや久我さんは昔からマウンテンバイクや山登りをしていた訳ではなかったが、里山や剣岳の魅力をどうにか伝えたいという思いから活動が始まった。森林や山を活かした活動をしている人たちは、自然を個人的に楽しむよりもむしろ多くの人に楽しんでもらいたいという思いから活動に至ったのだと考えた。

今回の調査で、登山者の方や自然を活かした活動をしている方々にお話を伺ったり、自然のある空間を散策したことを通じて、山や森林に対する自分の考え方が変わった。私は、今まで田舎で生まれ育ち、自然がある空間が当たり前のように思っていた。しかし、フィールドワークを通じて、五感を働かせて真剣に山や森林と向き合い、日常生活では感じられない爽快感や落ち着きを感じ、自然の良さを改めて実感することを学んだ。また、ただ散策するだけでなく、食事や撮影、瞑想をするなどさまざまな自然との向き合い方があることを知り、自然には多くの楽しみ方があることを知った。これからは、今ある自然を当たり前と感じるのではなく、自分なりの向き合い方を模索し、どう活かしていけばいいのかについても考えていきたい。

## 謝辞

今回の調査にあたってご協力して頂きました全ての皆様に心からお礼申し上げます。突然の訪問やお声がけにも関わらず快く受け入れて下さり、感謝の思いで一杯です。拙い文章ではありますが、このような形で報告書をまとめることができたのは調査に協力して頂いた皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

## 注

- 1) 森林セラピスト資格者の育成や森の整備など、実践的な森林セラピー活動を支援する

ために生まれたNPO法人。

- 2) 森の中で静かに過ごし、深呼吸して過ごすこと。
- 3) 地図をもとに、時間内にチェックポイントを回り、得点を集めるスポーツ。
- 4) スタジオ地図製作の日本のアニメーション映画。映画では、細田守監督の出身地である上市町や立山町の景観が描かれている。
- 5) かつて民家だった家を休憩場所として解放していたところ、偶然通りかかった監督一行の目にとまり、舞台モデルとなった。
- 6) 別山屋根ルートに合計で13箇所設置されている鎖場。なかでも、登山用ルートのカニノタテバイ、下山用ルートのカニノヨコバイは難易度が高い。
- 7) 2018年の本研究室の調査報告書『霊峰に抱かれ生きる人々と伝統』の中の第9章「暮らしから見る立山町の大きな魅力」(富奈緒)のなか(p.205)で紹介されている。
- 8) 電動アシスト機能がついたマウンテンバイクのこと。体力に自信がなくても勾配差の大きい坂や林道などに挑戦しやすい。
- 9) 幕末から大正末期にかけて、かまどやこたつ等に使用する石を切り出していたとされる。
- 10) オフラインの山の中でもスマートフォンのGPSで現在地と登山ルートがわかる登山アプリ。登山の活動記録や情報収集などに活用したり、全国の登山好きとの交流のツールとして利用することもできる。
- 11) 劔岳で遭難した人の名前を刻んだ銅板が増え設置する場所がなくなってきたため、ご遺族の方々を思い、昭和50年10月に合同慰霊堂・遭難慰霊碑として建てられた。
- 12) 「しろくま納屋」オーナーである yoshie kanematsu 氏のオリジナルキャラクター
- 13) 六角形に近い柱状の石材のこと。固い石質と特有の形状が特徴的。
- 14) ジュウガツザクラとソメイヨシノの種子から生まれた自然交雑種の遅咲きザクラ。

#### 参考文献

- 上市町産業課、2018年『かみいち劔きらめきの森——森林セラピーBook』上市町。  
白萩東部協議会、2021年『つるぎのふもとの散策ガイド——上市町白萩東部散策マップ』  
白萩東部協議会。

#### 参考にした新聞記事およびウェブサイト

- 「劔の麓に特産直売所——展望広場にテーブル・いす」『北日本新聞』2015年8月25日朝刊
- Ameba ブログ 貴代美の日記「劔せせらぎ (仮称)」〈<https://ameblo.jp/kiyomil014/entry-12090880716.html>〉(最終閲覧日2022年12月27日)
- 上市町観光協会「かみいち旅. ネット」〈<http://kamitabi.net/shinrin/>〉(最終閲覧日2022年12月27日)

上市町ホームページ「馬場島荘」

〈[https://www.town.kamiichi.toyama.jp/hp/kanko\\_turugi/babajimasou.htm](https://www.town.kamiichi.toyama.jp/hp/kanko_turugi/babajimasou.htm)〉（最終閲覧日 2022 年 12 月 27 日）

CAMPFIRE「集え！冒険者たちよ 忘れられた里山の秘境を e-MTB で探検」

〈<https://camp-fire.jp/projects/view/374844?list=projects>〉（最終閲覧日 2022 年 12 月 27 日）

剣いおりの郷・ホームページ 〈<http://www.tsurugiorinosato.com/>〉（最終閲覧日 2022 年 12 月 27 日）

特定非営利法人森林セラピーソサエティ・ホームページ 〈<https://www.fo-society.jp/>〉（最終閲覧日 2022 年 12 月 27 日）

# 第III部

まつる・いのる



## 第9章 滑川市加島町における獅子舞——次世代へと継承される伝統

小林 滉

### はじめに

私は地域に存在する伝統行事や祭礼、芸能について関心がある。そんな私が、今回、滑川市加島町の獅子舞について詳しく調査することになったきっかけに、次のような出来事があった。5月中旬のある日、私は「文化人類学フィールド演習」の時間にフィールドワークで加島町を訪れていた。加積雪嶋神社という大きな神社のあたりを歩いていると、近くの建物から楽しそうにカラオケをしている声が聞こえてきた。近づいてみるとそこは加島町二区の公民館であった。扉には「一期一会」と書かれた暖簾がかかっており、さらにそこには「まちの縁側」と書かれていた。見るからに内輪の集まりであり、自分のような部外者がいきなり入っていいものか悩んだが、意を決してお邪魔してみることにした。するとそこには、70～80代ぐらいの女性と男性が合計7、8人でカラオケを楽しんでおられた。私が加島町の獅子舞に関心があると伝えると、すぐに受け入れてくださり、これまでの獅子舞で撮影された集合写真や記録用として残された映像をたくさん見せてくださった。さらに、そこにいらっしゃった方の獅子舞の思い出や、地元の方ならではの話を聞かせていただいた。また、今回の調査で大事な話を聞かせていただいた方の何人かは、この老人クラブの方たちから紹介していただいた。

富山県は全国でも有数の獅子舞が盛んな県として知られるが、私としては、獅子舞が行われる形式に興味を持った。獅子舞が町内を巡行し、住民の前で舞うという町をあげた大掛かりな形式は、富山県に来てから初めて知った。私の地元の長野県下高井郡山ノ内町では獅子舞は神社の祭礼の時に境内だけで行われるものであり、祭礼に関係がない住民にとっては馴染みがないものであった。そこで、加島町町民たちにとって獅子舞とはどのような存在なのか、そしてどのような思いで獅子舞を継承しているのかについて、明らかにしたいと考えた。調べてみると、滑川市加島町の獅子舞には、別の特徴もあった。他の地域では主に成人男性が行うという「獅子取り」の役割を、子どもたちが担うという点である。また、加島町は、現在の滑川市で唯一獅子舞が行われている場所でもあるという。

フィールドワークでは、加島町二区と三区の獅子舞の歴史や昔の事情をよく知る方々や、獅子舞を現役で主に支える方々、獅子舞のこれからを担う子ども世代の皆さんに協力していただいた。令和4（2022）年は、加島町の獅子舞は新型コロナウイルスの感染拡大のために中止となってしまった。そのため、獅子舞を実際に見ることはかなわなかったが、保存用に記録されている映像を住民の方から提供していただいた。調査ではこの動画データも活用した。

第1節では舞台となる加島町について述べる。第2節では加島町で行われている獅子舞



の流れ、演目、道具などの詳細を説明する。第3節では獅子舞の実行組織として活動している団体についてその役割などを説明する。第4節では実際に獅子舞に関わってきた住民の方の話を紹介する。第5節ではこれまでの調査を元に自分自身の考えについて述べていきたい。

## 1. 加島町概要

### 1-1. 加島町について

加島町は富山県滑川市の沿岸部に位置する地区である。町内はほとんどが住宅街であり、田中小学校、滑川高等学校、滑川警察署などの施設が存在する。現在は加島町一区、二区、三区と分かれている。平成27(2015)年時点で人口は570人、228世帯である。加島町という地名は昭和27(1952)年に堺町と西町が合併して以来のものであり、昭和29(1954)年には南町も合併して今の形が出来上がった。一区、二区、三区はそれぞれ、旧南町、旧堺町、旧西町にあたる。町名の「加島」はこの地域にある「加積雪嶋神社」に由来していると考えられている。かつて加島町のあたりは、旧北陸街道と現在の立山町方面へ向かう五百石往還の分岐点であった。全国から訪れる立山・大岩山の参詣者たちはここから旧北陸街道を外れ、立山・大岩を目指した。その道標となる「立山・大岩道しるべ」は3つが滑川市の文化財に指定されており、そのうち2つが雪嶋神社の脇に存在している。

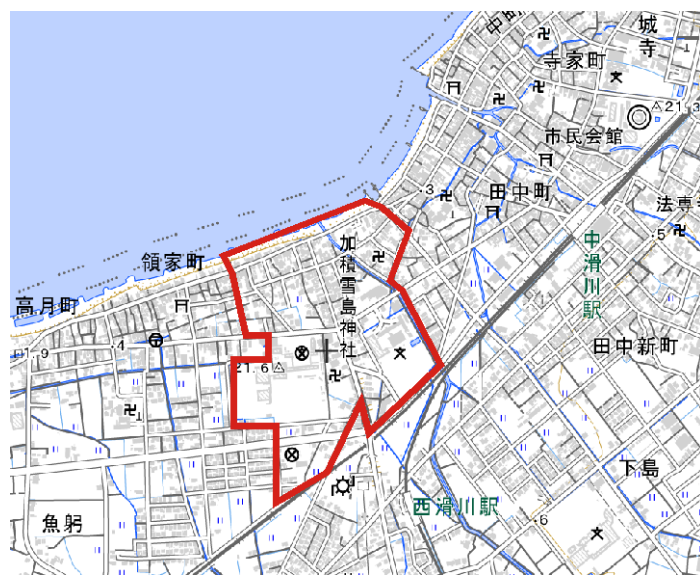


図9-1 加島町（地理院地図を加工して作成）

### 1-2. 加島町の歴史

加島町は江戸期から昭和29(1954)年にかけて存在した「滑川町」の一部であった。滑川町は狭町（現在の瀬羽町）、新町（荒町）、中町、神明町が北陸街道沿いに形成され、町と

しての様相をなしていった。寛永 19 (1642) 年には滑川本陣が置かれ、宿駅や物資の集荷市などの宿方、物資の船積みや漁業などの浦方といった機能を持つ北陸街道の宿場町として発展してきた。現在の加島町にあたる南町、堺町、西町の3つの町の詳細は次の通りである。

南町は、明治 13 (1880) 年から昭和 29 (1954) 年にかけて使用された大字名であり、明治 44 (1911) 年までは「滑川南町」というように「滑川」を冠称していた。江戸期には滑川町西の「御蔵所」と呼ばれる、税として納められた米などが集められている建物があった。これとは別に「給人蔵」と言われる、藩から俸禄として与えられた米を収蔵する建物などもあったことから、この辺りは「西の御台所」とも言われた。南町には、西側を北陸街道から分岐し、立山、上市・大岩へと続く上市五百石往還が通っていた。明治 8 (1875) 年には、この加賀藩の藩倉跡にあった倉庫を壊し樹木を切って開墾し、数軒が建った。その後、旧滑川町の発展に伴い住宅地として人家が密集しはじめ、明治 13 (1880) 年に「南町」として成立した。(『角川日本地名大辞典』372 頁)

堺町は江戸期～昭和 27 (1952) 年の町名・大字名であり、南町と同様、明治 44 (1911) 年までは「滑川境町」と呼ばれていた。町名は滑川町の境界に位置することに由来し、北陸街道から上市・大岩および立山登山道の分岐点があり、街並みは街道沿い両側にあった。富山湾に近いと、江戸末期から明治初期にかけて漁商が盛んな町であったが、西の藩倉が近く、米と共に集まってくることから米穀やワラ工芸品を扱う商店も発展した。その後は滑川町の発展とともに人家が集まってきたが、こういった商店がその後どのようなようになったのかは不明である。(『角川日本地名大辞典』838 頁)

西町は江戸期～昭和 27 (1952) 年の町名・大字名であり、江戸期～明治 44 (1911) 年は「滑川西町」と呼ばれていた。北陸街道沿いの町で西側では富山湾に接している。地名は滑川町の西端に位置するところ由来するといわれる。海岸に沿った町並みのため毎年波浪の害が大きく、特に明治 13 (1880) 年には多くの民家が破壊された。大正 2 (1913) 年頃にコンクリート造りの長堤を築き、海上の光景は「小万里の長城」と呼ばれた。昭和 10 (1935) 年には激浪のため堤防欠壊の被害を受けた。(『角川日本地名大辞典』643 頁)

住民の語りの中に「二区は売薬さんだった家が多くて、三区は昔漁師をやっていた家が多い。だから街自体の雰囲気も二区は経済的にも豊かで、上品な雰囲気だった。三区はヤンチャな雰囲気があった。だから二区の上品な踊りと三区の激しい踊りは今考えてみるとそこから来てるのかな」というものがあった。確かに話を聞く中で「昔は売薬をやって、私も薬剤師だった」と語る加島町二区の 70 代ぐらいの女性がいた。加島町三区で漁師をやっていたという人には出会えなかったが、もしこうした生業上の背景とそれにもとづく特徴があるのであれば、それと町の獅子舞の特徴が結びついているという可能性も考えられる。

### 1-3. 加積雪嶋神社

加積雪嶋神社は加島町の東の海沿い、隣接する山王町との境界に位置している。地元住民には「西の宮」と言われ親しまれており、「東の宮」と呼ばれる櫛原神社と対をなすような存在となっている。主な祭礼としては歳旦祭（1月1日）、鎮火祭（2月3日）、祈年祭（2月21日）、春季例祭（5月22日）、秋季例祭（9月15日）、新嘗祭（11月24日）がある。鳥居の横には3メートルほどの「郷社加積雪嶋神社」と書かれた石碑があり、境内にある蔵には例祭で使われる神輿が保管されている。この神輿は市の文化財に指定されている。総重量は450kg程度で、かつては16人ほどの屈強な男たちによって担がれていたが、現在はこの重量を担ぐほどの人手がおらず、神輿車に乗せて巡航している。

地元住民の話によると、加積雪嶋神社には男性の神（オオヤマクイノミコト大山昨貴命）が祀られており、毎年の例祭では西の宮から神輿に乗り、東の宮に祀られている女性の神（アマテラスオオカミ天照皇大神）に会いに行っているということである。この男女両神が出会うというのは北陸地方の特色であり、他にも福井県敦賀市の気比神社、能登島の伊夜比咩イキヒメ神社の伝承があり、韓国にも男神が女神を訪れる例がある。

## 2. 加島町獅子舞概要

本節では住民から教えていただいた情報や提供された資料、加島町についてまとめられた『加島町史』を元に加島町の獅子舞はどのようなものなのかを説明していきたい。

### 2-1. 概要

富山県内には獅子舞が3,000ヶ所以上で伝承されていると言われており、日本有数の獅子舞が盛んな県である。そのほとんどは、頭振り1人、胴幕1人の計2人で行う「二人立ち獅子」と、胴幕に5、6人が入る「百足獅子」のいずれかに分類される。加島町の獅子は百足獅子であり、その中でも射水系獅子舞に分類される。起源ははっきりと判明していないが、明治時代に能登通いの北前船によって伝えられたという説がある。滑川市では蓑輪、寺家町、加島町二区、三区に獅子頭が保存されているが、現在の獅子舞を行っているところは加島町二区、三区のみである。蓑輪では昭和54（1979）年を最後に休止状態である。寺家町はいつごろから途絶えてしまっているのかについて記録が残っていない。

加島町二区と三区では、それぞれが獅子頭を保有している。二区は雌獅子、三区は雄獅子であるとされている。住民の間では「二区はゆったりとした優雅な踊りで、三区は激しい勇壮な踊り」と言われる。獅子は成人男性が担当し、その獅子を相手にする「踊り手<sup>1)</sup>」は、幼児～小学校6年生までの男女が担当している。戦前までは男子のみであったが、戦後の昭和20年後半から昭和30年代にかけて女子も参加するようになった。理由としては戦争による人手不足、第一次ベビーブームの影響など様々な説がある。基本的には踊り子、獅子方、囃子方、裏方全てを町内の住民のみで行っているが、加島町の獅子舞の主役である子どもた

ちの数は減少傾向にある。加島町三区の有澤<sup>おさむ</sup>蔵さんによると、加島町三区では町内の子どもたちだけでは獅子舞を行うことができない状況である。そのため近隣にある田中小学校から希望する児童を募り、参加してもらっている。加島町二区では今のところこういったことはなく、町内の子どもたちだけで行えているが、加島町二区の梅澤友彦さんは「そろそろうちも田中小学校にお願いしないといけないかな」とおっしゃっていた。前回の獅子舞を二区が行なった時には、小学5、6年生の女子がおらず、本来その学年が行う「カサ」という演目を4年生が行うということもあった。少子化の影響は大きい。他にも、獅子舞にはあまり関わらないが、春季例祭で同じく町内を巡行する神輿の周りには「バッチャバッチャ」と呼ばれる天狗のような面を被った人がいる。

獅子舞は、毎年5月21日の加積雪嶋神社の春季例祭宵祭で披露される。現在は毎年交互に獅子舞を行っているが、昭和20年代後半までは毎年両方の獅子を同時に奉納していたという。隔年になった原因としては人手不足などが挙げられているが、住民からの聞き取り調査では「花の取り合い」という背景も浮かびあがった。

「花」というのは縁起物である獅子舞に対して贈られるご祝儀の隠語であり、獅子舞を行うための資金源にもなっている。この花を渡す行為を「花を打つ」と言う。中身は大抵が金銭であるが、加島町ではそれ以外にも米屋だと米俵、警察だと交通事故防止ステッカーなどと、中身は多様である。かつて加島町で獅子舞が2つ同時に奉納されていた時代には、雪嶋神社の氏子が打つ花を巡って喧嘩が起きていた。花の金額はどの家でも年によってそれほど変わらなかったため、二区も三区も「獅子方（獅子の中に入り舞う人）」たちは我先にと高額な花を打つ家に行き、取り合いになっていた。また、花を打つ側も「二区の獅子舞に花を打ったのに三区の獅子舞も来てしまった」、「どちらに花を打ったらいいのか分からない」という状況に陥ってしまった。毎年交互に獅子舞を行うようになったのは、これが原因ではないかという説もある。

## 2-2. 獅子舞の流れ

ここからは、獅子舞が行われる当日の流れについて説明していきたい。ただし、令和4（2022）年度の加島町獅子舞は新型コロナウイルスの影響により中止となってしまった。そのため、本稿の記述は地元住民の方からの聞き取りが元になっている。また、加島町獅子舞は二つの地区で行われているため、各地区の事例を織り交ぜて記述する。

獅子舞の準備は、まずは道具の点検から始まる。加島町二区の場合、例年4月末の日曜日に睦会（3-1に詳述）のメンバーが中心となって、獅子舞で使う小道具の点検、消耗品の確認、当日に飲み物や小道具を乗せるためのリアカーの屋台の準備などを行う。小道具は獅子舞が終わるとそのままの状態でも保管しておくため、使用する前に状態を確認しなければならない。主な消耗品としては草履がある。草履は早くて半日で履き潰してしまうため多めに準備する必要がある。これらの消耗品は高岡市にある祭り用品店「大國屋<sup>だいこくや</sup>」に会長が注文する。さらに食事の材料、警察への道路の使用許可などを行う。

5月のゴールデンウィークが終わると本番に向けた練習が始まる。場所は基本的にその地区の公民館で、夕方から夜にかけて練習を行う。小さい子どもたちから練習を行い、眠くなったり、疲れすぎないように早めに帰宅させていく。どの学年の子が何時に、どの演目を練習するのかといった計画は、睦会・保存会が主体となって立てる。練習の指導は睦会・保存会だけでなく、OBも行う。練習ではビデオも使用するが、それだけでは伝わらない細かなニュアンスは、こうしてOBからも受け継がれる。この要素は獅子舞にとって重要な部分でもある。練習と並行し、当日に誰がどこで踊るのかといった計画も、このときに立てられていく。踊り手として参加する子どもの家からは、ほとんどの場合花が打たれるため、その家の子どもが踊るように配慮がなされている。

当日は、朝の7時ごろに加積雪嶋神社で獅子舞を奉納する。8時ごろには加積雪嶋神社から神輿が出発するため、その前に全演目を行わなければならない。また、子どもたちは着付けを行うため、朝の5時半ごろから女性たちに着付けをしてもらう。加積雪嶋神社を後にすると、その年の各会長の家などで休憩を挟みながら、各世帯を回っていく。12時ごろに西地区コミュニティセンターに到着し、お昼ご飯を食べる。以前は各家庭で昼食をとっていたが、町外から参加する人が増え、お昼のためだけに遠くの家に戻るのはいかたまりなことで、町外から参加する人だけは西地区コミュニティセンターで昼食をとるようになった。そのうち、やはりみんなで一緒に昼食をとったほうが良いということになり、現在は全員がこの施設で昼食をとっている。

5月21日が平日の場合、昼食の後はすぐ近くにある田中小学校で獅子舞を披露する。小学生たちは学校が公欠扱いとなり、そのお礼と文化を伝えていくという意味を兼ねて披露する。普段とは違う同級生の姿に児童たちはとても盛り上がり、翌日の学校ではヒーロー扱いされて嬉しかったという思い出を語った、現在40代の住民もいた。また、「学校を休めて嬉しかった」という思い出を語った児童もいた。

午後からは再び各世帯を回り、「東の宮」（櫛原神社）へと向かう。かつては、東の宮へ向かう道中でも加積雪嶋神社の氏子ではないが、花を打つ家庭もあった。しかし、現在ではそうした家庭はほとんどないこともあって、東の宮へはバスで移動するようになった。もし花を打つ家庭があった場合は、担当する踊り子と獅子だけがバスを降りて、その家の前で披露する。17時15分から18時までは「火の宮」と呼ばれる神社で夕食を取る。夕方、東の宮に到着した後は、神輿が到着するまでに全演目を披露する。披露後は再び加積雪嶋神社へと戻っていく。その後、21時ごろに獅子舞を終えると解散となり、子どもたちにはご褒美として加積雪嶋神社にある出店で遊べるようお小遣いが渡される。今となっては出店が少なく、「出店で遊んでもらうため」という目的は失われつつある。大人たちは役目を終えると、公民館に集まって宴会を行う。この宴会も日付を超えるということはほとんどなく、22時か23時ごろには解散する。

### 2-3. 演目

加島町の獅子舞には10以上の演目が存在する。獅子取りを演じる小学生の学年によって担当する演目が決まるうえ、獅子舞を行うのは2年に1回であるため、子どもによっては目当ての演目ができないということもあるようだ。二区・三区では基本的に同じ演目だが、一部異なる演目が存在する。二つの地区が地理的に隣接しているにも関わらずこうした差異が存在するという事は、非常に興味深い。二区と三区の間には、舞いやお囃子にも雰囲気の違いがある。先ほど少し触れたが、加島町二区は上品で優雅な踊りが特徴であり、囃子もゆったりとした印象が強い。一方、加島町三区は激しく勇壮な踊りが特徴で、囃子も軽快なリズムで元気がある印象が強い。さらに、三区は掛け声も二区より大きく、激しい様子をビデオからでも見てとることができた。

なお、以下の記述は住民の方のご厚意により見せていただいたビデオを参考に作成した。掲載した写真も同様である。

#### デンドコ・マリ

主に小学校1、2年生が担当する演目。加島町二区では「デンドコ」、加島町三区では「マリ」と呼ばれている。両手に鎖鎌のような道具を持って舞う。三区では鎖の先に鞠がついており、そのため「マリ」と呼ばれている。小さな子が行うため可愛らしい雰囲気である。マリや玉で獅子を遊ばせ、疲れたところを峰打ちにする。

#### カタナ

主に2、3年生の男子が担当する。木造の模造刀を使用して舞う。刀で獅子の前足を打つようにする。



写真9-1 マリ



写真9-2 カタナ

#### キリコ・ハナ

こちらも二区と三区で違いが見られる演目である。二区では「キリコ」と呼ばれる。棒の

両端に房をつけた道具で獅子を驚かす。三区で「ハナ」と呼ばれるのは、紙製の花をつけた笠を使って舞うためと思われる。



写真 9-3 キリコ



写真 9-4 ハナ

#### マサカリ

主に3、4年生の男子が担当する。模造品のマサカリを使い舞う。大きなステップを踏む、かなりアクロバティックな演目であることも手伝って、これを好む住民も多い。荒々しく、激しい動きで獅子の前足を打つ。

#### ヤリ

主に5年生の男子が担当する。小学生の背丈ほどの模造品の槍を使い舞う。槍のリーチを生かして隙を与えずに獅子を制す。

#### エグリ

主に6年生男子が担当する。模造品の長刀を使用する。獅子の足を払うように舞う。

#### カサ

主に3～5年生女子が担当する。渦巻き模様の傘を使用する。傘を回して獅子の目を回し、倒していく。獅子舞が行われる期間以外でも自分の傘を回してこの真似をするところから、子どもたちにとっては真似しやすい身近な演目であるとも言える。



写真9-5 エグリ



写真9-6 カサ

### ダイカグラ

主に6年生男子が担当する。「エグリ」と同様に長刀を使う。おどけた動きや舞いを行い、獅子を油断させる。

### タル

主に6年生男子が担当する。槍と酒樽を使用して舞う。樽に入った酒で獅子を誘い出し、槍で退治する。



写真9-7 ダイカグラ



写真9-8 加島町二区で使われるタル  
(筆者撮影)

### 前踊り

ノッタノッタの前に行う演目。獅子の周りを回り、獅子をあやして獅子に乗れるようにし、次の「ノッタノッタ」に繋げていく。加島町二区では周りを踊り歩くが、加島町三区では腰につけた籠から紙吹雪を取り出し、獅子に投げつけるようにする。



## ノッタノッタ

神社や小学校などの入退場時に行う演目。獅子の上に幼児がまたがり、刀や傘を回しながら練り歩く。夜の雪嶋神社では歓声とともに拝殿へ飛び込み、鈴を鳴らす。加島町三区では、特にこれを「拝殿駆け上がり」と呼称している。加島町獅子舞の中でもメインと言える演目で、住民の中ではこのノッタノッタを行うことが名誉であり、自らの子どもにやらせたいと考えている親は多数いる。



写真9-9 ノッタノッタ

### 2-4. 道具・衣裳

獅子舞で使われる道具は、昔からずっと同じものを使用しているわけではない。平成17(2005)年に、文化庁から「平成十七年度ふるさと文化再興事業」という伝統文化保全のための補助金が交付された。二区と三区で合計約286万9000円が獅子舞の道具のために使用された。三区では獅子頭を新調し、二区では小道具類を全て新調した。加えて、保存用のビデオもこのタイミングで作成された。こうした道具の新調にはかなりの資金が必要となるため、なかなか行うことができない。多くの場合は住民の手で作成・保全・修繕がなされ、長く、大切に使われていく。

衣裳は幼児、小学校高学年、大人で異なる。まず幼児は白鉢巻に白のシャツ、タイツ、そして白足袋を履く。そこに男児は水色の法被、女児はピンクの法被を着用する。それをジャワラ帯と呼ばれる帯で締め、赤青の懸帯と呼ばれる前掛けのようなものをつける。

小学校高学年になるとそれまでとは違う衣裳を着用する。女子は赤の着物に白の股ひきのようなものを着用し、黒の前掛けを掛ける。着付けの際に袖をたくしあげるための紐や帯の締め方はこの地域独自のものであり、実演と口頭で代々伝えられてきた。現在では着付けを担当する女性の高齢化が進んでおり、その方法が継承されていくかどうかとも不安の一つである。男子は法被を着用する。かつては父親の所有していた着物のじゅばん襦袢を使用していた。しかし、着物を日常で着る機会がなくなり、襦袢を持つ人も少なくなったため、今ではシャ

ツに別の法被を着用し、帯でたくしあげている。胴幕に入る大人たちは白シャツに黒のズボン、黒足袋に草履を履く。そして「若」と書かれた懸帯を着用する。囃子方はさらに頭に傘を被り、白足袋、草鞋を履く。

懸帯は現在では町内会で保存されているが、以前は各家庭で手作りされていた。かつては絹で作られており、家紋や鯉の滝登りの図を刺繍するなど各家庭で工夫が行われていた。

「鯉の滝登り」は古くから縁起物とされており、金運向上・商売繁盛などのご利益があるとされている。



写真9-10 加島町二区の獅子頭



写真9-11 囃子方の衣装

(いずれも筆者撮影)

## 2-5. 鯛灯行

ヤサコとは、雪嶋神社の春季例祭で出される子ども神輿のようなもので、加島町の中でその年に獅子舞を担当しない地区と近隣の地区の子どもたちが担ぐ。例祭では御神体が乗る神輿と獅子舞が町内を巡行するが、夕方になると櫛原神社に複数の町内会のヤサコが集まってくる。19時半頃になるとこのヤサコが先導として出発し、その後に御神体を乗せた神輿が20時頃に多くの人と共に出発する。神輿が出発する際には大掛かりな花火が打ち上げられる。西の宮（加積雪嶋神社）に到着するとヤサコは解散し、各町内会に戻っていく。

木の枠組みでできているヤサコには紙が貼られており、そこに、その時どきで流行していたアニメキャラクターが描かれているという、かなり世俗的なものである。さらに花紙で華やかに装飾が行われている。中にはホタルイカの形をしたものもあり、青森県のねぶたのようなヤサコも存在する。

加積雪嶋神社の氏子は加島町だけでなく、河端町・瀬羽町・横町・浜町・橋場町・神家町などがある。つまり、加島町以外の町が祭礼に参加する場の一つとして、このヤサコがある

ということのようだ。

ヤサコの由来のひとつに、「驕りみこし」があったのではないかと考えられている。これは明治時代、加積雪嶋神社の祭礼では御神体を乗せる神輿とは別に少し小さな古い神輿があり、それに多くの若者が縋ろうとした。そうして群がり、押し合い、大きな掛け声を出しながら、玄關に押し入ったり人にぶつかったりする激しい祭礼であった。これは戦前まで行われており、今では実際に体験した人はほとんどおらず、今回お話を伺った方も話を聞いただけとおっしゃっていた。この「驕りみこし」が始まって程なくして、12 歳ぐらいの男児たちは木の枠組みに紙を貼った小さな神輿のようなものである「ヤサコ」を作り、驕りみこしの若者と同じように掛け声を出し、町内を担いで練り歩き、そこかしこにぶつけるようになった。「驕りみこし」という、ある種のハプニングが定型化したものから派生して生まれたヤサコは、やがて昭和 27（1952）年頃に正式に春季例祭の中に位置付けられることとなった。現在ではどこかにぶつけて壊してしまうことはなくなり、同じヤサコを使い続けているという。ヤサコはこのように「驕りみこし」の子ども版であったという説がある。



写真 9-12 ヤサコ（筆者撮影）

### 3. 獅子舞を支える組織および役割について

本節では獅子舞を運営する組織や役割について記述する。男性中心の組織と女性の役割の二つに分けて説明していきたい。

#### 3-1. 睦会（二区）と三区獅子舞保存会

獅子舞を運営する主体として加島町二区では「睦会」、加島町三区では「加島町三区獅子舞保存会」という団体が存在する。いずれも、主に 50 代までの男性が所属していて、準備、練習、本番までの計画・実行を主に担っている。獅子頭や胴幕に入る人も主にメンバーが行っている。二つの組織では対象年齢が定められており、大体 16～50 歳までの男性が対象になっている。睦会の梅澤さんによると、二区では以前は 40 歳までが対象年齢であったが、

人口減少を理由に対象年齢の引き上げが行われたそうだ。

両者のあいだには所属人数に大きな差がある。睦会のメンバーが現在13人程度であるのに対して、三区獅子舞保存会の有澤さんによると保存会には40人弱が所属している。この差はそれぞれの会の目的の違いに由来する。三区獅子舞保存会は名前の通り基本的に獅子舞に関することだけを行なっている。そのため、町内に住んでいる人だけでなく、普段は町外に住む加島町三区出身者も、「獅子舞だけなら」という理由でこの保存会に入っている。しかし睦会は、獅子舞以外のさまざまな町内の仕事も担う、いわゆる「町内会」である。睦会では獅子舞以外に、一泊研修や年末警備、親睦会のような飲み会もあるのだが、それを敬遠する人が最近が増えてきているため、人数が比較的少ないということらしい。

睦会では30歳ぐらいが最年少で、なかなか新規で入会する人もいないという。それでも、5月あたりになると睦会に入っていなくても獅子舞に協力するという人が現れてくるため、獅子舞の際には人手が全く足りないということもない。加えて、最近では家を建てるまでの「つなぎ」で町内のアパートに住む人も増えており、そうした住民にもできるだけ協力を仰いでいるようだ。「すぐに引っ越してしまうかもしれないから」という理由で参加を断られてしまうこともあるが、たとえ短い期間だとしても参加してほしいというのが梅澤さんの願いである。

梅澤さんによると睦会による獅子舞の準備は、4月末の日曜日に飲み物や道具を乗せるリアカーの屋台骨を組み立てたり、小道具の準備を行うところから始まる。小道具は、オフシーズン中は保管場所におきっぱなしであるため、練習期間の前に確認を行わなければならない。その上で、今度は会長が消耗品などの手配をする。たとえば草履は半日で履き潰してしまうため、かなりの量を、高岡市の「大國屋」に発注しなければならない。さらに、婦人会が作るお弁当やおにぎりの材料も注文する。ほかにも、警察に道路の使用許可をもらうという重要な仕事もある。獅子舞は一般の道路を使用して行うため、この手続きは不可欠なのだ。

当日は朝の7時ごろから行動を開始するため、5時半や6時に集合する。獅子方や囃子方は主に睦会とその協力者や保存会、そして各会のOBが担当する。そこから21時までひたすら練り歩く。かなりの長丁場になるため、高齢化が進む睦会メンバーの負担は増えていく一方であるという。

### 3-2. 獅子舞を支える女性たち

女性の役割としては、獅子舞に参加している子供の母親による付き添いと、高齢の女性を中心とした祭りの裏方の仕事がある。基本的に獅子舞という行事では男性が主役であり、女性は表立ったところではなく、裏方の仕事を中心に行うことになる。まずはこの仕事内容について、Aさん（仮名）から聞き取りをしたことをまとめていきたい。

Aさんは富山で生まれ育ったのではなく、東京都の出身者である。結婚後しばらくは関東にいた後で、家庭の事情で夫の地元である加島町に引っ越してきた。Aさんの地元にも山車

が出る祭りがあったこともあり、祭りや獅子舞といった伝統文化に対して高い関心を持っている。夫が加島町三区の保存会長を務めていたことがあり、そうしたいきさつもあって、現在のAさんは獅子舞の裏方で活躍する女性たちの取りまとめ役のような存在であるという。

裏方の仕事は、以前は「婦人会」主体となっていたが、現在、婦人会は自然消滅してしまっているため、有志の女性たちが行っている。具体的な準備の前に、60代以上の女性を中心に町内で協力を「お願い」しに回らなければならない。チラシを配り、参加してくれる方へ会合への出席を依頼する。もし、それでも足りない場合があれば各家庭を直接訪問したり、電話でお願いすることもある。60代以下の女性は仕事や子どもの付き添いがあるため、裏方で頼りになるのは60代以上の女性である。ほとんどの方は快く引き受けてくれるのだとAさんは嬉しそうに語っていた。

次に、練習期間に入る時期に様々な手配を始める。まず、祭りの当日に必要な酒や飲み物、つまみ、お菓子、弁当などを手配する。どの店にいくつくらい発注するのかだけでなく、どこに・いつまで保管しておくのか、どのタイミングでお弁当や飲み物、つまみなどを配るのか、どのように渡すのかといった細かいところまで、綿密に計画を立てていく。さらに今では頻度は減ってしまったが、10年ほど前までは、練習後の21時ごろから22時ごろまで、決まって宴会が開かれていた。そのために、近所の魚屋などにつまみを注文したり、瓶ビールを準備するといったことも、女性の仕事であった。かつてはこの時期が一番忙しくて辛い時期であったそうだ。

獅子舞の本番当日を迎えると、まずは子どもたちの着付けから1日が始まる。着付けについては、公民館で衣装を見せていただいた際に、本番と同じ着付けを見ることができた。現役で着付けをしている女性に実演していただいたのである。その女性は「覚えてるかしら」と言いながら進めていたが、3年間のブランクを感じさせないほど手際よく、素早く行っていた。着付けの方法は昔から見よう見まねで覚えたり、口頭で伝えられてきたものなのであり、文化の断絶は踊りや音楽といった側面だけでなく、衣装の着付けといったところにも及ぶのである。なお、この着付けの方法は加島町独自のもので、おそらく獅子舞が始まった当時に得意だった人が編み出したのではないかということであった。

着付けが終わると、獅子舞の神社奉納が始まる8時半から、すべての出番を終えて21時ごろに始まる宴会が終わるまで、ひたすら事前に決められた計画通りにサポートを行っていく。具体的には、休憩時の飲料・食料の手配、準備、場所の確保、昼食、夕食、宴会の準備などである。休憩時はその時の睦会、獅子舞保存会の会長の家や、田中小学校の目の前にある西地区コミュニティセンター、「火の宮（川南神社）」などを利用する。

またAさんによると、獅子舞行事における女性の役割にはこれまで述べたような裏方仕事のほかに、30～40代の親世代の女性が担う、自身の子どもの付き添いもある。しかし、最近になって若い世代の女性の中で獅子舞に対して腰の引けた態度が目立ってきたそうだ。この傾向は男性よりも女性に顕著で、若い世代の男性はむしろやる気がみられる。町外から

お嫁に来た女性の場合、親としてどのように振る舞えばいいのかわからないことが多いからである。従来であれば、子どもの付き添いに加え、子どもが使う小道具の持ち運び・受け渡し、飲み物の持ち運びなどは、子どもの親の役割であった。ところが現在は、こうした付き添いを除いた役割のほとんどは、車で追走しながらAさんが担っている。こうしたお話をするAさんは、どこか寂しそうな表情であった。もしかすると、昔ながらの助け合う雰囲気を知っている世代の住民のあいだにも、似たような感情があるのかもしれない。獅子舞という行事において女性はほとんど主役になるということはないが、こうした方々がいないと成立し得ない部分も多分にあることを忘れてはいけない。

#### 4. 住民の語り

本節では、聞き取り調査に協力いただいた方たちの話から、獅子舞に対してどのような思いがあるのかについて述べていきたい。

##### 4-1. 獅子舞を支える男性たちの語り

調査では、主に表に立って獅子舞を支える男性たちの代表として、中屋一博さん、睦会会長の梅澤友彦さん、加島町三区獅子舞保存会会長の有澤蔵さんから聞き取りをすることができた。ここから獅子舞の主力となる男性たちの獅子舞に対する思いを記述していきたい。

まずは、お三方の紹介をしておこう。中屋一博さん（75歳）は、平成14（2002）年から平成22（2010）年までの8年間、滑川市長を務めていた。獅子舞が行われているこの加島町の出身であり、自身が小学生時代の頃から獅子舞の踊り子として参加し、その後も囃子方や口上などの役割を担うなど、長い間獅子舞に携わってきた。中屋さんは獅子舞に対して熱意を持って取り組んでいる。睦会会長の梅澤友彦さん（44歳）は、幼少期には田中小学校区の他町に住んでいたが、結婚を機に加島町へ移り住んだ。令和3（2021）年から睦会の会長を務めており、小学生の子どもがいる。加島町三区獅子舞保存会会長の有澤蔵さん（48歳）は加島町で生まれ育ち、獅子舞にも踊り子、獅子方、囃子方としてずっと参加してきた。保存会の中で有澤さんは、獅子舞の計画を立てるなど、統括・管理を担っている。

梅澤さんによると、会長として獅子舞を行う中で一番大変なのは、準備段階であるという。獅子舞の練習はゴールデンウィーク後に約10日間行われるが、その段取りと踊りの指導も主に睦会員が行う。以前はかなり厳しく教えていたそうだが、現在では「時代に合わせて怒鳴ったりしない」ように行われているようだ。また、囃子方として参加している睦会OBが踊りを指導することもある。練習後の飲み会では、その日の練習で録画したビデオを見て反省会をしたり、昔のビデオを見ながらOBのお話を聞いたり、「(踊りでは) こうしろよ」というアドバイスを聞いたりしたそうだ。ビデオだけでは伝わらない微妙なニュアンスこそが大事な部分でもあるので、OBとの交流はとても大事な経験である。

獅子舞を行うなかで、どこで、誰が踊るのかといったことも、準備期間に決めなければな

らない。この調整も非常に大変な仕事である。注目度が高い田中小学校での踊りや、メインである夜の雪嶋神社などは人気が高く、以前は「なぜうちの子どもが雪嶋神社や学校で踊れないのか」と親から詰め寄られたこともあったそうだ。ただ、今では子ども的人数も少なくなり、こうしたことはほとんどなくなっているらしい。

中屋さんは、小学生時代に演じた「ノッタノッタ」がとりわけ思い出深いと話された。ノッタノッタは先述した通り、雪嶋神社の朝と夜、川南神社、櫛原神社、田中小学校の計9回に限られている（夜の雪嶋神社では入る時のみ行われる）。他の演目とは違い、限られた人数、限られた機会に絞られているため、かつてはこれを経験できる人数は限られており、住民たちの羨望の的であった。

現在は子ども的人数も少なくなってきたり、ほぼ全員の子どもがこのノッタノッタを経験するようになってきている。ところが、ノッタノッタを演じる子どもを選出には、現在でも考慮すべき事情があるそうだ。それは親の行事への参加度合いとでも言うべきものである。高度経済成長期あたりから、地域の行事よりも仕事を優先せざるを得ない状況・風潮が広がってきた。その結果、地域の行事に協力的に参加する家庭と、そうでない家庭のあいだに、温度差のようなものが生まれたようだ。そこで、行事に協力的に参加している家庭の子どもを優先的にノッタノッタに選出するようになった。でなければ協力的な家庭に示しがつかなくなり、不満が生まれてしまうからである。ノッタノッタは住民の憧れであり、親にとっては是非とも子どもに経験してほしい演目である。そのため、このような事情を考慮した選出は仕方ないと考えられる。

大人になってからの中屋さんは「口上」を務めることもあった。口上とは、花（ご祝儀）を「誰から」「何を」受け取ったのか、読み上げる役割である。これに関して中屋さんは「口上をやるには声に艶、張りがないとできない。明瞭に聞こえないといけないからね」と話していた。「この口上の内容を考えるのが大変なんだよ。毎回同じじゃ、言う側も聞く側も飽きちゃうからね」とも話しており、中屋さんの口上に対するこだわりと自負が感じられた。

梅澤さんにも獅子舞への思い入れについても語っていただいた。獅子舞の楽しいところは、「子どもがうまく踊れた、頑張っている、楽しんでるところを見る」ところであるという。さらに、住民や子どもたちが一堂に会する機会というのは獅子舞以外だとなかなか無いため、団結力が深まる場であり、それがコロナによって奪われたというのはとても寂しいと語っていた。これについては三区の有澤さんも「そこでしか会えない人もいるからそれが無くなってしまって寂しい」と、同様のことを語っていた。さらに、有澤さんはコロナ禍による獅子舞の中止による住民のモチベーション低下についても非常に危惧していた。

また梅澤さんは、獅子舞には辛い部分もあるが、それを超える楽しさがあると話しており、それが住民の中に深く刻み込まれているという。住民が獅子舞を楽しみにしており、快く協力してくれているのには、そうした背景がある。だからこそ、梅澤さんも獅子舞を「やめられない」のだという。二区でも三区でも、住民たちはそれぞれの獅子舞にプライドを持っており、「うちの地区が一番いいんだ」という自負を持っているそうだ。

加島町の獅子舞が滑川市で残る唯一の獅子舞だということについて、梅澤さんは「絶やしてはダメだし、他の町からもそう思われていると考えている」と話されていた。それ以外にも「獅子舞は縁起物で、やらないと縁起が悪いという気持ちになってしまうから、その積み重ねもあったと思うよ」とおっしゃっていた。これは私にとっては非常に興味深いお話であった。獅子舞は元々邪気を払うためのものであるとされている。私の地元（長野県下高井郡山ノ内町）にも獅子舞があったが、それが縁起物であるという認識はなく、どちらかというとな単なる見せ物のようなものという認識であったからである。梅澤さんにとっての獅子舞は、体力的に辛い獅子方をする事で自分の体力を確認する場であるとともに、獅子舞という大仕事を終えてまた2年後まで頑張ろう、また皆で集まろうという目標になるものであり、獅子舞を中心とした人生サイクルのスタート地点のような存在であるようだ。

中屋さんは獅子舞という行事を、住民同士のコミュニケーションの場とも捉えていているようだった。特にそれが顕著に表れる場として、練習後や本番後の飲み会が挙げられた。「この飲み会を通して昔の大人たちはコミュニケーションを取ったり、地域の絆を確認していたもんだよ」と話されていた。獅子舞の本番中はあまり参加者同士で話すという時間は取れないため、こうした飲み会の場が本格的なコミュニケーションを交わす場であると言える。

中屋さんは、獅子舞を「文化の伝承」とも位置づけている。特に令和2（2020）年～令和4（2022）年にかけては、新型コロナウイルスの影響で獅子舞は中止になってしまっている。行事が2、3年途切れると、行事自体が断絶してしまう恐れがあるあり、再開したとしても踊り（舞い）というのは非常に変わり易いものであり、変化してしまう恐れもあるという。さらに、これからの担い手である子どもたちが獅子舞を経験する機会も減ってしまっている。実際、中屋さんのお孫さんも参加できておらず、隔年で行われるがゆえに貴重な機会が失われてしまっている。中屋さんは、現在、滑川市で唯一存続している加島町の獅子舞を「受け継いでいかなければならない」のだと、熱意をこめて語った。インタビュー時に中屋さんが語った、子どもたちは伝統行事の中で人との付き合い方、社会的モラルを学んでいくという「伝承なきところにモラルなし」という言葉が深く印象に残った。

#### 4-2. 獅子舞に携わっている女性の語り

調査では、上田智美さん（40歳）から詳しい聞き取りを実施することができた。これをもとに、獅子舞における女性の役割について記述する。

上田さんは、今から約20年前に成人女性として初めて加島町の獅子舞に参加した。獅子舞といえば、ほとんどの演者、囃子方は男性であり、女性は表舞台に出ることはなかなか無い。しかし、ここ加島町三区の獅子舞では女性が囃子方として参加しているのだ。上田さんは、今でも度々獅子舞に参加している。上田さんとのインタビューはオンラインで実施することができた。

上田さんは現在東京都でトロンボーン奏者として活躍している。幼少期は千葉県に住ん



でいたが、父方の祖母の家がある加島町を訪れたときに、地元の小学生に混ざって獅子舞に踊り子として初参加した。その後加島町へと引っ越して、小学校2、4、6年生の時に踊り子として参加した。みんなで一緒に舞うことや、カサやキリコなどの道具を使って獅子を倒すことが非常に楽しかったという。また、獅子舞は子どもと大人が一堂に集まる滅多にない機会であり、年齢関係無く交流できることも好きだった。その後、獅子舞に携わることはあまりなくなったが、約20年前の大学3年生の時、当時加島町三区の獅子舞保存会の会長であった父親から「笛をやってみないか？」と誘われた。当時、上田さんは大学で音楽を専攻していたのだが、加島町三区の笛を演奏する人手が減少傾向にあったのである。「ただ、音楽やってるから笛も吹けるんじゃないか、と父は考えてたんだと思いますよ」と上田さんは語る。

父親から頼まれた上田さんは、元々好きだった獅子舞に「また携わることができて嬉しい！」という思った一方で、「女の人が入っていいのか」という気持ちもあった。横笛の経験は無かったが、断る理由もないということで結局引き受けた。

当時は東京に住んでいたため、練習期間の稽古に参加することはできなかった。しかし、幸いなことに、自宅で楽器を演奏できる環境にはあった。笛と経験者や踊り子たちが練習している様子の映像を送ってもらい、それを見ながら「こうすれば音が出るかな？」「この指遣いでこの音が出るかな？」と、自己流で練習した。今でも指遣いが「あっているかどうかは分からない」という。しかし、昔から獅子舞に参加していたため、お囃子は自然と覚えていた。獅子舞が大好きだからこそ記憶の中に鮮明に残っていた。

参加を決めた当時の周囲の反応がどうだったのかとお聞きすると、「あまり否定的な反応はされなかったかな」と語っていた。反対に、「わざわざ東京から出てきてくれてありがとう」といった反応が多かったそうだ。

こうした取り組みがなされた背景に、人口減少や担い手不足があることはすでに述べた。しかし、そうだとしても女性が獅子舞に参加するということは珍しい事例であり、当時は新聞社も取材に訪れた。徳島県の阿波踊りや富山県旧八尾町のおわら風の盆のように、女性が中心となる行事があるが、盆踊りに起源を持つこれらの踊りと比べると、神に奉納する神事という意味合いが強かった獅子舞は事情が異なっていたのだろうか。しかし、それまで男性しか参加してこなかった獅子舞に自分の娘を参加させたことについて、「父は『(獅子舞には)男しか出れない』とかいう考えはなかったと思いますよ」と上田さんは語った。いわゆる「女人禁制」のような考え方は、加島町の獅子舞にはあまり存在していなかったのかもしれない。

現在、東京に住んでいる上田さんには、加島町から離れた場所から獅子舞がどう見えるかについても語っていただいた。獅子舞という行事、さらに地域住民が一堂に集まり、老若男女関わらず交流できる機会の良さには、地元を離れることで初めて気づいたという。そのために、町内に住んでいる人よりも獅子舞が再開することへの思いはむしろ一段と強いかもしれないと語った。上田さん自身も「町内にも再開を強く願う人がたくさんいたらいいな」

と語っていた。

上田さんによると加島町では、男性は獅子舞、女性はそのサポート・裏方という役割は、以前はもっとはっきりと別れていた。だから上田さんも、小学校を卒業した後は獅子舞に関わることはできないだろうと考えていた。しかし、再び参加するチャンスが訪れ、携わることができたのはとてもありがたいことだと語っていた。また、参加できると分かっているからこそ、いまだに獅子舞に興味を持っているのだそう。今後も参加していきたいという意欲を持っており、自身の小さなお子さんと一緒に参加するという夢もあるのだという。こうした「自分の子どもと一緒に参加する」という夢を持っている方は多いのではないだろうか。

#### 4-3. 主役となる子どもたち

今回の調査では、中学1年生女子のBさん、小学6年生男子のCさん、小学4年生女子のDさんの3名（全て仮名）に、家族同席の下で聞き取りを行うことができた。ここから、獅子舞の主役でもあり、将来を担う存在でもある子どもたちが、獅子舞をどのように捉えているのかについて考えていきたい。

3名とも幼稚園の時から獅子舞に参加し続けていたそうだが、近年のコロナ禍により獅子舞自体が中止になってしまっている。Cさんは小学6年生のため踊り子からは今年で卒業である。Bさんは、最後の学年にあたる6年生の時に参加する予定だったが、このときも中止になった。

まず、踊り子を行う中で心に残っていることについて聞くと、人数の少なさがまずあげられた。Bさんの年代では同学年に男子が3人いたが、女子はBさん一人きりであった。そのためBさん一人で踊る機会が多く、「ミスが目立ってしまうのでプレッシャーがあった」と語った。1人で踊る寂しさや小学校で同級生に踊るところを見られる恥ずかしさよりも、転んだり間違えたりしないようにと必死だったようだ。しかし、人数が少ないことが逆に利点になる場面もあった。「カサ」という演目では、立ち位置が激しく入れ替わったり、手に持っている傘を回したりするが、人数が多いと人にぶつけてしまう恐れがある。演目を行う道路の幅を考えると3人で行うのが理想だが、4人、5人と増えるとうような危険性が増してくる。しかし、Bさんは一人で行っていたためこうしたことは気にせず思いきり行うことができ、気楽だったようだ。

次に、練習についてもあげられた。「優しく指導してもらえて嬉しかった」というのが、3名に共通した意見だった。練習は厳しいのではないかというイメージがあったが、実際はそうではなく、友達と鬼ごっこやスリッパ投げなどして遊ぶこともあるような「緩い雰囲気」であった。しかし、Dさんは「パパが怖い」とも話した。獅子舞の練習になると父親からの声の強さや厳しさが増えるという。それだけ父親が獅子舞に対して熱意を持っているということの表れと考えられるが、他方では、地域の繋がりが希薄になってきている現代では、以前のように他人の家の子どもを叱りにくいという事情もあるのかもしれない。そのた

め、本人の父親の厳しい声が余計に目立つのかもしれない。指導は誰にでも出来るが、一人の子どもを注意できる大人は限られるようになってきている。

今回、話を聞いている中で、子どもたちには「昔からやっていることだから自分もやる」という意識があるように思えた。生まれた時から獅子舞が行われており、「自分もいずれはやらなければならないもの」と捉えてきたかのようなのである。子どもたちはしばしば「やってみたら意外と楽しかった」と言うが、能動的に自分から「獅子舞をやりたい!」と言うことはあまりなかった。実際、Cさんは獅子舞が中止になったことをむしろ、「やらなくてラッキー」と話していた。

このインタビューに同席した家族は、「進学とかで都会とか県外に行った子からは『獅子舞は朝から晩までで大変だったけど良かったよね』って言うてるのをよく聞きますよ」と話していた。これは一度地元を離れて、外から獅子舞を見てみたからこそその視点であり、そうすることで獅子舞の価値に気づくことがある、ということなのかもしれない。現在は大人になり、獅子舞をやりたい、継承させたいと考えている人たちも、案外子どもの時には漠然と、ただやっていたのが、ある日「獅子舞が身近にあることの価値」に気付いたのではないだろうか。子どもたちの「子どもより大人の方が明らかに気合が入ってるし、子どもよりも楽しんでいる」という声からも分かるように、その価値に気付くことで人々はさらに獅子舞へのめり込んでいくのである。これは加島町の獅子舞に対する高いモチベーションに繋がる一つの要因ではないだろうか。

## 5. まとめ

今回の調査を通じて、私はさまざまな刺激的な経験をした。そんな中で、公民館で獅子舞の映像を見せていただいている中で気づいたことがある。それは、その場の方々が映像に合わせてお囃子を口ずさんだり、踊りの手の部分を真似たりしていたことである。それも、私に見せたり聞かせたりというものではなく、獅子舞をしている時の記憶が蘇り、自然と体が動く、といった感じであった。人々は、「昔から見聞きしてるから覚えてしまった」、「息子が踊ってるのを見てたら覚えちゃった」と口々に話していた。獅子舞の道具を見せていただいた際にも、3年間も獅子舞を行なっていないとは思えないほど、獅子舞についての知識や記憶がすらすらと住民の方から出てきた。これらの場面は、地元住民がどれほど多くの時間、獅子舞に触れてきたかが分かる一幕であった。

これまでの聞き取り調査や公民館での経験から、町民の中に獅子舞はとても深く入り込み、町民は獅子舞を誇りに思っていることが明らかになってきた。加島町で生まれ育った人にとって獅子舞は生まれた時から身近に存在するものだからこそ、コロナ禍で獅子舞が中止になってしまった現在は、「縁起が悪い、活力が失われる」といった思いがあるようだ。また、加島町が滑川市で唯一の獅子舞であることを住民は自覚しており、「絶やしてはならない」といった意識を強く持っていることも分かった。獅子舞の存在は住民だけでなく加島

町自体にとっても不可欠な役割があるのだ。

さらに、獅子舞にはもう一つ重要な役割がある。それは「貴重な地域住民の交流の機会」になるということである。様々な方から「獅子舞を機に地域のいろんな人と顔を合わせられるのはとても嬉しい」、「ここでしか会えない人もいるからこういう機会はありがたい」、「人に会うのが目的なところもあるよね」といった言葉を聞くことがあった。久しぶりの再会の高揚感を、獅子舞を通して味わっているのだ。また、梅澤さんは「獅子舞は人生のスタート地点のようだ」と語った。梅澤さんのように獅子舞を一つの目標としている方も複数いた。このように、獅子舞は文化的な価値だけではなく、地域住民の交流のツール、住民たちの人生の目標としての役割もある。

なぜ滑川市にあったほとんどの獅子舞が消滅したなかで、加島町の獅子舞が現在まで存続してきたのだろうか。今回、聞き取り調査を行う中で、その理由の一つではないかと思える事実が浮かび上がってきた。それは子どもの存在である。中でも、演目の一つ、「ノッタノッタ」の存在は非常に大きい。先述した通り、「ノッタノッタ」は住民の間で名誉あるものとされている。その「ノッタノッタ」を自分の子どもや孫にやらせたいという思いが、多くの住民の「自分の子ども（孫）がノッタノッタをやっているのは是非とも見てみたい」という言葉から感じ取れた。さらに、上田さんのように自分の子どもと一緒に獅子舞をしたい、子どもにも自分がやった同じ獅子舞をやってほしいという思いを持つ方も多くいた。こうした「自分の子どもにもやらせたい」という思いが根強くあることで自然と次世代への継承が行われ、今も加島町の獅子舞が行われているのではないだろうか。

### 謝辞

今回調査を行うにあたって非常に多くの方にご協力いただきましたことにお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。フィールドワークを始めてはみたものの、計画をなかなか行動に移せず、お話を聞くことすら出来なかった自らの非力さに気づき悩んでいました。しかし、加島町の皆様がそんな私を受け入れてくださったおかげで、私自身も大きく成長できたと感じています。今回調査した加島町の獅子舞は現代社会に生きる私たちにとって馴染みが無くなってしまった大切な思いが詰まっています。今回の研究が加島町の獅子舞をより多くの方に知って頂くための一助となれば幸いです。

### 注

- 1) 基本的に獅子舞は「踊り」ではなく「舞い」であり、「舞い手」「舞い子」と呼ばれるが、地元の方の呼称に合わせて「踊り子」としている。

### 参考文献

「角川日本地名大辞典」編纂委員会、1981年『角川日本地名大辞典(16) 富山県』角川書店。  
中屋一博、2012年『伝承 加島町史』中屋一博(私家版)。

滑川の民俗編集委員会（編）、1995年『滑川の民俗 中』滑川市教育委員会。

## 第10章 道端の石仏と地域の人々との関わり——上市町の地蔵を中心に

森 由希子

### はじめに

石仏<sup>1)</sup>を調査することになった最初のきっかけは、上市町の市街地を散策中、たまたま松和町の地蔵堂（後述）を発見したことであった。表通りから少し外れた道幅の狭い住宅地の四つ角。その隅に唐突に地蔵堂は現れた。そばにあるのは古い木造住宅でレトロな雰囲気漂う中、その地蔵堂は妙に新しく色鮮やかに目に映り、そこだけ異空間であるかのように感じた。

松和町以外にも、上市町では道端に地蔵などの石仏があるのをしばしば見かける。この手のもは富山市内にも数あるが、筆者の地元である東京都ではどちらかといえば珍しいものである。ゆえに興味を持った。神社や寺のように遠目から見て目立つものではないが、そばに寄って見てみると、確かに周囲とは区別された空間であることが分かる。それが面白く感じられた。なぜこのような場所にあるのか。そんな問いから始まった調査だったが、石仏の由来や歴史を調べるのは思ったより難しいことに気付いた。というのもこうした道端の石仏はかなり古いものも多だけでなく、それについての文献資料が残っていることがまれであるからだ。見方を変えれば、文字資料にない事柄を調べるこそ聞き取り調査の醍醐味であった。とはいえ、聞き取りで由来を調べるにも限界がある。そこで、由来はよく分かっていないということも含め、石仏を取り巻く現状について調査する方向へ切り替えた。石仏そのものの由来や歴史よりも、近隣の住民たちと石仏がどのように関わっているかということに筆者の関心が移っていったというものもある。

本章では、石仏と近隣住民との関わりに着目して述べていく。調査は松和町の地蔵堂に始まり全部で7ヶ所の石仏に及んだ。第1節ではこれら7ヶ所の石仏について観察と聞き取りをもとに紹介する。第2節では、石仏と地域住民との関わり場の最たる場として南町の地蔵祭り（後述）を取り上げる。調査を実施した令和4（2022）年はコロナ禍により祭りは中止されたため、実際にそれを見ることは叶わなかったが、本来であれば祭りが行われた当日の様子を筆者の体験に基づき描写する。第3節では、この報告書のメインテーマである石仏と地域住民との関わりについて、調査データをもとに考察する。

調査は石仏の近隣の住民を対象に行ったが、初めのうちは誰に訊けば良いのか分からず困惑させられた。なぜなら、道端の石仏は一見してその所有者や管理者が不明だったからだ。そのため、まずは地道に近隣の家を一軒一軒訪ね聞き取りを試みた。突然の訪問に驚かれた方も多かったに違いない。その中で特に詳しい方を紹介して頂いてお話を伺うこともあれば、複数人から少しずつ情報を拾い集めていくこともあった。このようなやり方であったため、データの量・質ともにばらつきがあることは否めない。しかし、至らない部分も多くあ

ったが、色々な方からお話を聞き、石仏を巡る様々な思いを知ることが出来たのは大きな収穫だったと思われる。

なお、本章で「石仏」と呼ぶのは地蔵及び地蔵「のようなもの」であり、地蔵についてはごく簡単なイメージ以上のことは想定していない。地蔵、不動明王、弘法大師などそれぞれの呼称はすでにあるものに依拠している。本章では石仏とは何か、地蔵とは何かといった議論やそれらの定義づけをすることはしない。その理由は、第一に、筆者にそのような専門知識がないためであり、第二に、恐らく住民たちにとってはそのような複雑な議論はそれほど重要ではないと考えるからだ。一地域住民と石仏との関わりは、信仰と呼べるかも分からない、あやふやでささやかなものではないだろうか。本章ではそれを探ることにしたい。

## 1. 各所での聞き取り

本節では、地域住民を対象に行った聞き取り調査の記録をもとに、7ヶ所の石仏について日常の管理や関わり、行事などの事柄を中心に述べていく。先に述べたとおり、地域によって得られた調査データには濃淡がある。また、調査にご協力頂いた方の氏名については基本的に本名で記すが、諸事情によりそれを記さない場合や、仮名を用いる場合があることもここで断っておく。石仏の呼び方については明確な固有名詞がないため、次のような方法をとる。石仏が単数のとき、または石仏そのものを示すとき、「地蔵」「不動明王」のように簡潔に呼び表す。これに対し、石仏が一ヶ所に複数あるとき、または建物の存在も重要であるとき、「地蔵堂」「弘法大師堂」のように「～堂」を付けて呼ぶ。さらに、異なる場所の石仏を区別するため、「〇〇町の地蔵」のように地名を冠して呼び分けることとする。調査の中で住民の方がしばしばこのような呼び方をしていたので、それにならっている。実際、こうした道端の石仏は地域との繋がりが強く、管理や行事も地区単位で行われることが多い。したがって本節でも以下、地区単位で記述していく。

### 1-1. 松和町の地蔵堂

松和町は、西中町商店街のある通りから少し奥に入った所で、細い道が多い上市町の中でもとりわけ道が入り組んだ地区である。昭和の中頃まで遊郭があった場所であり、その後はスナックなどの飲み屋街として栄えていたようだが、今では数あったスナックもほとんどなくなり、閑静な住宅街といった印象だ。そのような場所であるため、この地蔵堂の存在はとてもし際立っている。

地蔵堂は十字路の角にあり、白を基調としたお堂に鮮やかな紫の垂れ幕が特徴的である。「南無地蔵尊」という木札のあるそのお堂の中には5体の地蔵が鎮座している。手前に生けられた花は造花だが綺麗に調えられており、蜘蛛の巣などもなく、手入れが行き届いている様子がうかがえる。向かって右に「■三界為霊」と読める石碑（■の部分は判別不能）がある。こちらにもお堂の地蔵と同様、花と水が添えられている。

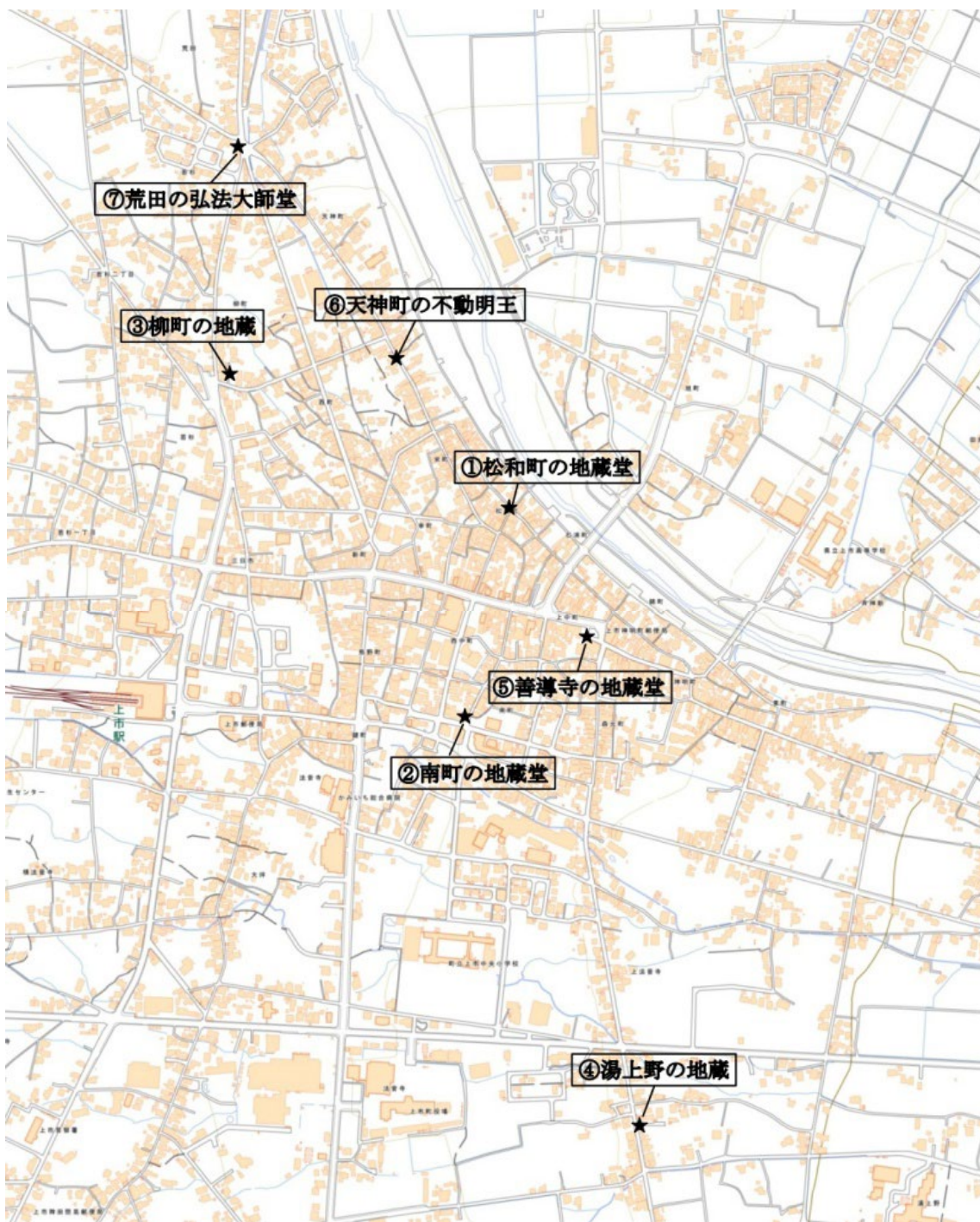


図10-1 調査対象の石仏の地図、数字は項番号に対応（地理院地図をもとに筆者作成）



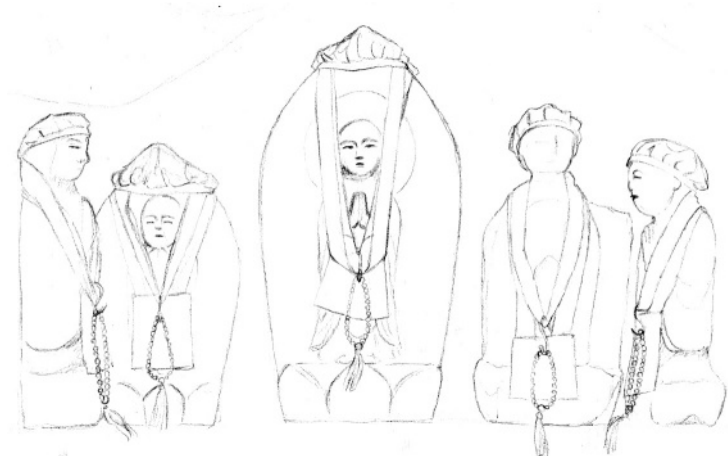


写真 10-1 (左)、10-2 (右) 松和町の地蔵堂及びそのスケッチ (筆者撮影・作成)

これらについて、松和町で床屋を営む野越幸夫さん・サト子さんご夫婦にお話を伺った。

野越幸夫さん(70代)は、松和町で生まれ育った方である。野越さんいわく、地蔵堂の5体は戦争で弾に当たらないようにと願って造られたものである。右側にあるものは、もともと火葬場に行く途中にあったが、野越さんが6～7歳の頃、火葬場が無くなったので、今の場所に移動してきた。この火葬場は、野越さんのお宅から数十mほど離れた位置にあったものであり、子どもの頃の野越さんは、火葬場に行く途中でこの碑に手を合わせていた。

地蔵の由来は必ずしも地域の住民に共有されているわけではないようだ。上市町の外から嫁いできたというある女性は、この地蔵について、遊郭の女性の慰めとして造られたらしいと言っていた。野越さんによれば、芸者さんたちのお墓は別にあるということで、実際に案内して頂いた。こちらも野越さん宅からさほど離れていない。

地蔵堂及びその隣にある石碑の管理は、町内の有志10人ほどが交替で行っている。以前は松和町の住民だけで管理していたが、現在は、実家が松和町だが今は町外に住んでいる人も入っている。その方とおぼしき女性に偶然お会いしたことがある。その女性は、今は結婚して隣地区の栄町に住んでいるが、松和町にあるご実家を代表して地蔵堂の管理を担当しているということであった。管理メンバーは4つの班に分かれており、1班の人から順に一週間ずつ担当する。担当者には名前を書くノートとバケツが回される。日々の主な仕事は、蜘蛛の巣を払ったり、花や湯飲みの水を替えたりといったことである。これらは、夕方行う人もいるが、大抵は朝行う。野越サト子さん(70代)は朝6時半頃にしている。花は、以前は暑さや寒さの厳しいときだけ造花にしていたが、ここ一年ほどはずっと造花である。造花にしたことにより水を替える手間が省けたという。生花だと容器の中もきれいにしなくてはいけないので、手間がかかるのだそうだ。また、地蔵堂の中は蛍光灯が点きっぱなしである。「地蔵さんは明るいところじゃないと」いけないから、と野越さんは説明した。昔は裸電球のような電灯だった。お堂内の電気は近所の家から引いており、電気代は町内が負担する。

サト子さんによると、朝、散歩の途中に参拝していく人がおり、そこで「あんたんこの

お地蔵さん、いつもお掃除してきれいだね」と言われることがある。実際、この地蔵堂はいつ見てもぴかぴかに整えられている。やはり、それだけ地蔵を大切にしているということなのだろう。この話を聞いて、「きれいだね」と言われた側はとても嬉しかっただろうと思い、同時に筆者も少し嬉しく感じた。

8月23日に地蔵祭りが行われる。昭和30(1955)年頃の松和町の地蔵祭りでは、主に小学生の子どもが手分けして松和町外を廻り、ろうそく代と称して寄付を集めた。町名を名乗り「ろうそく代お願いします。」と言って廻った。野越さんも小学校1～2年生の頃にこれを行った。これは祭りの宣伝も兼ねていた。町内でも寄付を集めるが、それには子どもたちは関わらなかった。他の地区でも地蔵祭りは行われるが、方法はそれぞれである。たとえば、野越さんの記憶によると、他の町内の子が松和町のように寄付を集めていたのを見たことがないという。また、かつては地蔵祭りのとき、年配者を主体として河原で盆踊りが行われた。屋台が出たことも2、3度あった。

現在では子どもの数が減少し、野越さんが子どもだった当時は松和町内に20人ほどいた小学生も、今は1人だけだという。そのため、かつては子どもたちが盛り上げていた祭りも、現在は大人たちに運営を任されている。昨今の地蔵祭りでは、僧侶を呼んだり、菓子や果物などを供えたりするくらいである。寄付をした人には下げた供え物をわたしている。僧侶については、隣地区の栄町にある海松院(海松寺)から禅宗(曹洞宗)の僧侶を呼ぶ。宗派が違うとお経が異なるため、この点は重要である。

なお、地蔵祭りは、コロナ禍のため、令和2(2020)年から令和4(2022)年現在にかけて行われていない。

地蔵祭りのときに帽子・袈裟・信玄袋と垂れ幕を一新する。数珠だけは古いものをきれいに洗って繰り返し使っている。地蔵の帽子・袈裟などは住民たちの手作りである。管理している人たちの中で作れる人が何人かで作るが、大体同じような顔ぶれだという。それらの製作について、サト子さんに伺った。毎年、地蔵祭りの一ヶ月ほど前から制作し始める。他の仕事もしながら合間に作っていくのだという。以前は、1～4班ごとに交替で、5人ほどで行っていたが、4年ほど前からはサト子さんとお嫁さんの二人だけでしている。コロナ禍のため地蔵祭りがないあいだも、毎年作っているという。

デザインおよび作り方は毎年同じである。帽子・袈裟・信玄袋の3点は5体分用意しなくてはならないが、5体の地蔵はそれぞれ大きさが異なるので、サト子さんは一体一体の寸法を採りそれをもとに作っている。見せて頂いた型紙には、それぞれの寸法が書き込まれていた。ちなみにサト子さんによると、5体のうち真ん中の一番大きいものは菩薩で残りの4体は地蔵だという。布地にはナイロンモスという生地が使われていて、これは買う店も色も決まっている。発色の良さにくわえて、乾きやすさと洗いやすさもこの生地の利点である。松和町と違って、屋根がない、野ざらしになっている地蔵もあるため、この点が重要であるらしい。帽子と信玄袋は赤色、袈裟と垂れ幕は紫色である。

このように、関わる人は少なくなっているものの、依然として地蔵堂をきれいに管理し、

繋がりを維持し続けていることが分かる。

## 1-2. 南町の地蔵堂

南町の地蔵堂は町立上市図書館のすぐそばにある。周辺は住宅地で、通学時間以外は閑散とした場所だが、南町区長の澤村俊晴さん（70代）が子どもの頃は様子が異なっていた。当時この辺りは上市駅、学校、役場が集まる町の中心地だった。旧上市駅は地蔵堂の西側にあった。地蔵堂は今と同じ場所だが、当時にしてみれば上市駅前と眼目山立山寺<sup>2)</sup>へ続く通りをつなぐ街道筋という要所にあった。

松和町の地蔵のように文献資料がない石仏も多い一方で、南町の地蔵堂は『上市町誌』など複数の文献に記述がある。南町の地蔵堂は主に次の二つの話によって知られている。一つ目は、弘法大師の伝説である。

昭和の初めころの事だが、当町釈泉寺伝右衛門の老婆はなかなか信心の厚いお方であった。たまたま或る日の夜明けころ、夢幻の間に弘法大師様枕元に顛われ給い「是より西方上市町南町の地蔵堂に永年全国を巡錫した杖を置いて行く。そして、此の錫杖を拝むものの願を成就せしめる此の由をお前に伝える」と仰せられ、そのまま姿が消えた。さっそく、朝食も取らず地蔵堂にかけつけた処、不思議にも錫杖は地蔵菩薩の前に供えられてあった。あゝ正夢であったか、御大師様の御告げであったかと押し戴き恭敬礼拝する事久しく、大師様の御霊験を歓喜帰命した。（『上市町誌』 p. 1346）

二つ目は、地蔵の隣にある「おこり石」の話である。「おこり石」がいつ頃からあったのか定かではない。木曾義仲が腰掛けたという言い伝えがあるので、少なくとも800年以上前には存在していたのだろう<sup>3)</sup>。「おこり石」の名は、この石に祈願すると<sup>おこり</sup>瘡（マラリアのこと）が落ちるといわれるがあったことに由来する（地蔵堂内説明書きより）。地蔵堂はその「おこり石」の隣に建てられた。



写真 10-3（左）、10-4（右） 南町の地蔵堂及びそのスケッチ（筆者撮影・作成）

木造のお堂の中には大小複数の像が見られるが、このうちもとからあったのは中央の大きな3体で室町時代のものと言われている。他の数体は、詳細は不明だが後に他所から持ってこられたものである。どれも異なった造りで、大きさも顔立ちも様々だ。お堂は比較的大きく三角屋根の尖った部分で高さ2m以上ある。内部は夜でも灯りが点いており、この点は松和町の「南無地蔵尊」と同様である。現在のように地蔵堂と「おこり石」を囲むようにして南町公民館が建ったのは数年前からだ。これによって、建物の中に建物があるような奇妙な構造になっている。それ以前は今ほど立派な建物はなく、小さい小屋のようなものがあるだけだった。公民館の中に入ってみると、床は畳敷きだが、地蔵堂と「おこり石」の部分だけ土台に沿って畳が切り取られているのが分かる(図10-3)。入り口の上に「地蔵堂」の木札がある。本来「地蔵堂」は中のものだけを指すと思われるが、住民の方たちと話した印象では外側の建物とあまり区別していないようだった。そこでこの報告書でも以下、南町公民館の建物も含めて地蔵堂と呼ぶことにする。

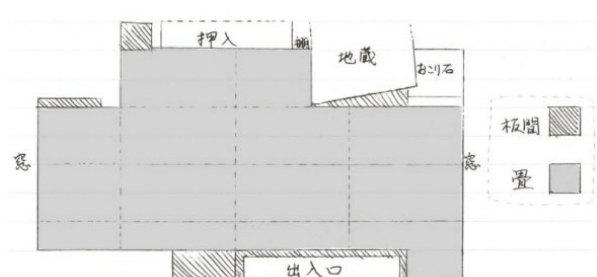


図10-2 (左) 地蔵堂のおおよその間取り (筆者作成)

写真10-5 (右) 地蔵祭りの神輿 (地蔵堂より提供)

澤村さんにお話を伺った。地蔵堂の管理は、町内の宮総代及び近所の女性たちが行っている。宮総代は町内総会にて推薦で一人決められ、町内の神社(地元の人々は「お宮さん」と呼ぶことが多い)や公民館である地蔵堂に携わる役職である。近所の女性たちは有志で行っているらしい。年に一度、8月23日に地蔵祭りがある。地蔵堂の壁の説明書きには8月24日とあったが、澤村さんによれば8月23日である。もともと24日だったのがいつ頃からか23日に行くようになったのかもしれない。

南町の地蔵祭りでは子どもたちが活躍する。この日、子どもたちははっぴを着て手に杖を持ち、神輿を引いて練り歩く。かつては神輿ではなく、和紙で作られた地蔵を綱で引いて廻ったそうだ。子どもたちだけでなくその母親も祭りの運営に携わる。母親たちは母親クラブなるものを結成し、地蔵祭り以外にも色々な行事に関わっている。僧侶が来て読経と説教をするのは19時頃と決まっている。このとき住民は皆地蔵堂に集まる。地蔵堂の入り口前にテントを立て、住民たちはそこで参拝する。その後は21時頃まで地蔵堂のある公民館内で

酒を飲んだりする。コロナ禍以前は10年ほど、日をずらして地蔵祭りと納涼祭を併せて開催していた。夕方から近辺で青壮年会主催の屋台やカラオケ、大道芸のような催しが行われ、僧侶が来る間は中断しつつもだいぶ盛り上がっていた様子である。しかし、地蔵祭りも納涼祭もコロナ禍で令和2（2020）年から3年間中止されている（令和4〔2022〕年の地蔵祭りの日の様子については次節で述べる）。このような地域の行事は住民たちの交流の場としての意味を持っていた。そのような場で年少者は年長者から様々なことを教わるのである。しかし祭りをしなくなり、そうした付き合いがなくなってしまう。母親クラブや青壮年会も数年前に解散していた。

澤村さんは、令和4（2022）年7月23日にフェスティバルと称して納涼祭を開催する計画を立てたが、費用や手間などの点から結局見送られた。2年間のブランクが開催を阻んだのである。地蔵祭りに関しては他の問題もある。子どもたちが活躍する地蔵祭りだが、現在南町に小学生は約3人しかいない。これでは、コロナ禍が去ったとしても以前のような祭りを行うことは難しい。地蔵祭りが子どもの祭りではなく「じいさんばあさん祭りになってしまう」と澤村さん。これはおそらく南町だけの問題ではないと考えられる。

### 1-3. 柳町の地蔵

柳町の地蔵は通りから少し引込んだ場所にあり、見た目もやや地味なので目につきにくい。そのため、筆者がこの地蔵の所へ行くときは、背後にある「むつみの里<sup>4)</sup>」という就労支援施設の建物を目印にする。地蔵はこの施設の敷地の前にぽつんとある。木製の古そうなお堂の扉はいつも閉まっている。扉の格子の隙間から覗くと、紙製の飾りとおぼしきものが見え、地蔵は中央の奥の方にいるような気もするがはっきりとは判別できない。特に看板のようなものも無いので、知らない人が見たら地蔵かどうか分からないかもしれない。お堂の前に花や湯のみの類いはないが、夏頃行ったときにはキウイが一つ供えられていた。この地蔵について、近隣の人々から少しずつ寄せられた情報からは、次のようなことが分かった。



写真 10-6 柳町の地蔵（筆者撮影）

由来に関しては大岩山日石寺<sup>5)</sup>と関係があるらしく、大岩の流れであるとかその石を持ってきたらしいといった話を聞いた。石を持ってきたという話については、別の方に確認したところ否定されたため、伝え聞く中で異なった認識が生まれたのかもしれない。また、小林勇夫さん(60代)によれば、イボがよくとれるという御利益があるようだ。普段管理している人はいない様子だった。この地区の最長老だという男性によれば、今はもう亡くなった方々に以前は管理を任せていた。地蔵のすぐそばに住む副区長の松谷秀男さん(70代)は、参拝に来る人は時々いて供え物をしていくくらいのことはあるけれど、誰も掃除はしていないと思うと語る。小林さんもやはり、誰も管理していないと話した。その一方で、この地蔵が町内のものであるという認識が強いのか、町内で管理していると思うと言った男性もいた。いずれにしても、自分が管理しているという方には出会わなかった。参拝者もあまりいないようだった。

調査の中で、地蔵の背後に位置する障害者のための支援施設である「むつみの里」の方が朝参拝しているのを見る(松谷さん談)と聞いたので、そちらにも話を聞きに行った。対応して下さった理事長の男性によると、「むつみの里」が設立されたのが30年ほど前であり、その頃から地蔵はあったという。あくまで町内の地蔵だと言っていた。実際に見たわけではないが、「むつみの里」に通うメンバーが1~2人参拝していると聞いている、とのことだった。メンバーは全体で30人ほどだそうだから、参拝しているのはごく一部の方だけと分かる。職員は、お参りはしていないが、祭りのとき地蔵のそばにゴザを敷いて集うことがあり、その際にお酒を寄付するなどしたこともあったようだ。

地蔵祭りは地区の夏祭りの意味合いも兼ねているようだ。日時は、8月24日の前の土曜日という話と8月の第3日曜日という話があった。若干食い違っているものの、とにかく8月24日付近の週末に行われている。小林さんによれば、祭りのときは供え物をして五色の旗を飾る。そして天神町の尼寺(道器寺のこと)の尼さんが来る。以前はこの日に町内全員でお参りをしていたが、今は「心ある人くらいしかしない」そうだ。なお、令和2(2020)年から令和4(2022)年にかけてはコロナ禍の影響で開催されていない。

#### 1-4. 湯上野の地蔵

湯上野<sup>ゆうわの</sup>の地蔵は、松和町や南町の地蔵とはまた違った印象を受ける。筒型のコンクリートのお堂の中に、少しひびの入った地蔵。その手前には造花とお茶のペットボトルが供えられているが、あまり手入れはされていないように見える。

近所の方々に聞いたところでは、以前この地蔵に花を供えたりしていた方がいたが2年ほど前に亡くなっており、今は誰が管理しているのか分からない、普段お参りに来る人は多くないということであった。地蔵祭りのような行事もない。この地区に住む杉木栄子さん(90代)によると、かつて地蔵の管理は主に男衆がして女は口を出さないようにしていた。杉木さんが買い物に行くときは必ず拝んでいた。息子さんの<sup>おきむ</sup>統さん(60代)の場合、子どもの頃はよく拝んでいたが今はしない。たまに菓子<sup>おきむ</sup>が供えてあるのを見るそうなので、多少

は参拝者がいるのだろう。



写真 10-7 (左)、10-8 (右) 湯上野の地蔵及びそのスケッチ (筆者撮影・作成)

この地蔵に関しては、住民の方の紹介で関連資料を見つけることが出来た。『おじぞうさまのお話』<sup>6)</sup>と題されたその冊子は、上市町の幾つかの地蔵について婦人ボランティアによって聞き取り・記述された貴重な資料で、「子宝地蔵」として湯上野の地蔵が紹介されている。書かれたのは昭和 61 (1986) 年頃、つまり 30 年以上前の話になる。そこには「大岩街道の湯上野バス停近くに古ぼけた一つのお地蔵様が建っています。いつも、誰からか新しい花、小さいコップに水をもらい、心なしかとても嬉しそうなお顔のお地蔵様です」とあり、その当方で造られてからかなりの年月が経っていたにもかかわらず、きちんと管理されていたことが分かる。また、この頃地蔵の世話をしていた甚内チカさん (当時 76 歳) の話が載っており、それによると、この地蔵は甚内チカさんのお舅さんの兄弟が建てたらしい。その方はそれまで子宝に恵まれなかったが、地蔵を建てた後、子どもを授かることが出来た。当方でその方が生きていたら 100 歳を超えていたということだから、19 世紀末のことと考えられる。地蔵はその後、今日に至るまでに二度ほど場所を移し、お堂も木の祠からコンクリート製のものへと変わっている。

ジンナイという女性が地蔵に花をやっていたという話は、調査の中でも耳にした。すでに亡くなっているとのことだった。彼女が甚内チカさんと考えられる。甚内さんの家は、地蔵の丁度向かいにある。甚内チカさんの孫にあたるイチタさん (仮名) にお会いした。イチタさんは「亡くなったばあさん (チカさんのこと) が、前は下 (地蔵のお堂の基礎部分) がコンクリートではなく石だったと言っていた」と語った。イチタさんの家では地蔵を管理しておらず、誰か他の人が管理しているのだろうがそれを見たことはないという。では、今はもう誰も管理していないのだろうかと思ったが、後日しばらくしてから再び地蔵を訪ねるとそこに生花が供えられていた。この花は、イチタさんとご夫婦であるフウコさん (仮名) が生けたものだった。数日前に法事があり、そのときの花を地蔵に供えたのだという。ちなみ

にイチタさんもその息子さんも、フウコさんがその花を生けたということは知らなかった。

フウコさんからもお話を伺った。杉木さんのお話ではかつては男性が地蔵の管理をしてきたということであったが、甚内家では代々女性が地蔵の管理をしているらしい。以前はフウコさんの義祖母であるチカさん、そしてフウコさんのお姑さんが毎日世話していた。フウコさんはそれを見てきたが、自分はそれをどうしていいか分からないという。分からないのは地蔵のことだけでなく、自宅の広い敷地に関してもそうだ。今地蔵がある場所は、その背後にある車庫まで含め甚内家の敷地である。引き継いできたそれらをどう扱うべきなのかという戸惑いがある。

この湯上野の地蔵に関しては、異なった思いを聞くことが出来て、とても興味深かった。

### 1—5. 善導寺の地蔵堂

善導寺は神明町にある寺だ。周囲は車通りが多い他は静かな住宅地で、少し引込んだ位置にあるため、あまり目立たないかもしれない。そして正面の2本の石柱の横に建つ地蔵堂も、どちらかといえば質素な印象である。この地蔵堂は、広さは2畳ほど、高さは屋根の上までで3mほどあるだろうか。三方は壁に囲まれ、正面の北側部分のみ壁がなく、高さ約1mの柵が取り付けられている。その上部にはくすんだ薄紅色の幕。西側の壁面にドアがあり、そこから中に入ることが出来る。内部は手前側つまり北側に人が出入りする場所があり、奥は高く台になっていてそこに二十ほどの石像が並んでいる。



写真10-9 (左) 善導寺の地蔵堂 (筆者撮影)

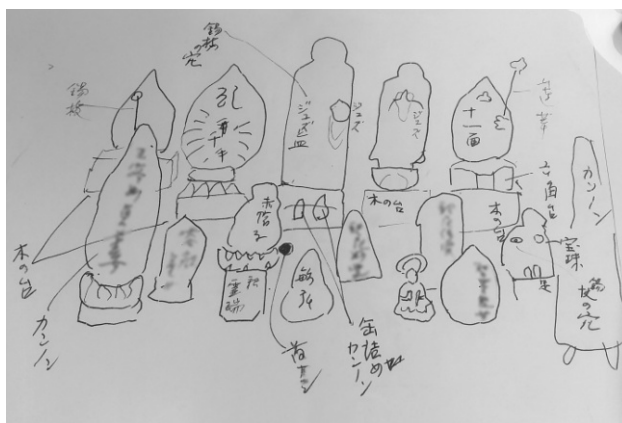


写真10-10 (右) 地蔵堂内の配置図 (善導寺より提供)

この地蔵堂は善導寺が管理している。住職の戸田<sup>こうりゅう</sup>光隆さん(50代)にお話を伺った。戸田さんは、そもそもは眼目山立山寺の住職で、その支社である寺も含め現在8ヶ所の住職を兼任している。立山寺の住職は平成28(2016)年から、善導寺の住職は令和2(2020)年から勤めている。善導寺は、眼目山立山寺の2代目を開祖とする。立山寺の開山が652年前であるから、大変歴史ある寺だと分かる。地蔵堂がいつ頃からあったか定かではないが、現



在の地蔵堂は平成 10 (1998) 年に改築したものである。その際石像の並びが多少移動したと思われる。地蔵堂改築以前に当時の住職が書き残した石像の配置図 (写真 10-10) があるが、それと現在の配置を比較すると、一致しない部分があることが見て取れる。数も一致していないので、後に加わったものもあるのかもしれない。これらの石像は、厳密には地蔵だけではなく、観音など地蔵以外のものもいる。これらのうちの幾つかは、他の場所から移動してきた可能性がある。というのも、善導寺は本来曹洞宗であるが、浄土真宗を示す法名がつけられた像も数体あるからだ。

戸田さんが前住職から引き継いだ資料の中に、「地蔵様関連」と題された A4 判一枚の紙がある。これには次の内容が記されている。①地蔵を建てた (と思われる) 人物の名前及び住所、②寄進した地蔵 (誰の供養か)、③地蔵に関連して寄進したもの (幕、地蔵祭り用の旗・提灯など)、これらが 4 人分連ねてある。いずれも女性で神明町に住んでいた。一部を紹介すると、ある女性は子どもの供養のため「黒い地蔵様」を建てた。そして、地蔵堂に掛ける「日常用の紫の幕」と「地蔵様祭り用の旗」を寄進した。さらに「本堂用の黄色の垂れ旗」「本堂用の水色の垂れ旗」がその女性の子どもの名義で寄進されている。

また、これらの他に幾つかの注意書きも記されていた。以下に抜粋する。

- ※ 下段の中心にある「釈霊瑞」に、(向かって) 右横のお地蔵様は善導寺で新しくした (顔が無かったり痛んだ地蔵様有り…供養した)
- ※ (地蔵堂改築時) 地蔵堂から門柱の横に移動した大きな地蔵様有り
- ※ 「地蔵堂内の観音様」

上市町中町の、カミールの十字路を松和町の方へ行って直ぐ右側に料亭?があった。そこから寄せられたと聞いている。

善導寺では、8月23日に地蔵祭りを行う。なお、戸田さんは「地蔵様祭り」と呼んでおり、見せて頂いた資料 (上記) にもそのように書いてあった。地蔵祭りにも色々な呼び方があるようだ。これには寺の関係者だけでなく地域の住民も参加する。

地蔵祭りについて、近所に住む男性 (70代) にお話を伺った。神明町出身であるが、祭りにはあまり参加したことがなく「流れは分からん」と話す。一応コロナ禍以前は祭りをしていたと聞いていたが、その男性に確認すると、それは 20 年ほど前までだという。どうやら、近年ではかつての地蔵祭りとは異なり、祭りの日に旗を出すくらいしかしていないため、祭りとして認識されていないらしい。かつての地蔵祭りは、善導寺の住職がお経を読んだり、来た人に甘茶を振る舞ったりしていた。住民たちはお布施を渡した。祭りには寺のある神明町の住民だけでなく、隣接する上中町の住民も来た。人数はそれほど多くなく、10~20 人ほどで、それも年寄りばかりであった。

もともと地域の地蔵堂というより善導寺の地蔵堂であり、普段の管理も寺が行っている。祭りも地域という単位ではなく、寺と一部の近隣の住民で行っていたと考えられる。調査の

中で、ずっと神明町に住んでいるがこの地蔵祭りのことを知らないという方に出会ったが、そういうわけだったのだろう。近年になって祭りが廃れたから参加しなくなったということも考えられるが、そうではなく、同じ神明町の住民でありながらも祭りに関わらないという人々が以前から一定数いたのではないだろうか。

#### 1-6. 天神町の不動明王

天神町の不動明王は、荒田の六叉路（後述）から松和町方面へと続く細道の途中にある。周辺は閑静な住宅地であり、その中に木造のお堂がひっそりと建っている。お堂の扉はいつも閉じられており、不動明王像は格子戸の隙間からかろうじて見える程度である。お堂上部の「不動明王」と書かれた木札がなければそれが何か分からなかっただろう。お堂は比較的新しく、華やかさはないが清潔に調えられている。参拝者は普段あまりいない様子である。



写真 10-11 天神町の不動明王（筆者撮影）

この不動明王について、天神町に長く住んでいるミヤマさん（仮名）ご夫婦（主に奥さん）にお話を伺った。この不動明王は大岩山の分身で、100年ほど前からあるという。新しそうに見えたお堂は数年前に建て替えたものである。祭りのときの賽銭や寄付が年々貯まってある程度の額になったのを使用した。「不動明王」の札は町内の達筆な方が書いたという。

不動明王の管理は、10年ほど前まではミヤマさんの家でしていた。その頃は、春から秋にかけて家で育てた花を供えていたが、段々年を取って花を育てられなくなってきていた。また、松和町に住む人から、松和町では何人かで世話しているという話を聞き、天神町でも皆で管理するようにしたら良いのではないかと思った。このような経緯で、今では町内でするようにしている。同じく天神町に住むある男性によると、天神町は4つの班に分かれており、月ごとに一つの班が不動明王の管理を担当する。どの班でも、班長が各家の割り振りを決めて表にしている。たとえば、一世帯3日ずつ担当して、それを町内の全ての家が行う。日数に余りが出た場合は、適宜調整している。その表を見せて頂いたところ、令和4（2022）年11月は3班の担当月であった。3班は9戸あり、何日から何日までは誰々、といったよ

うに連続して担当が記されてあった。当番は水替え・清掃を行う。以前は生花を供えていたが、最近はずっと造花を用いている。これらの仕事は朝に行われることが多いようだ。ミヤマさんは水を替えるとき、その水を目の周りや痛いところにつけて御利益にあずかっている。

毎年8月27日が祭りの日である。地蔵祭りに近い日程であるが、住民たちはこれを地蔵祭りではなく「お不動さまの」祭りと呼ぶ。令和2（2020）～4（2022）年はコロナ禍のため中止されたが、少なくとも60年以上前から行われている。祭りのときは雨天に備えて前日からテントを立てる。当日は19時半から道器寺の尼僧を呼んでお経を上げてもらう。また、提灯を下げ、生花を用意する。かき氷や「あんばやし」<sup>7)</sup>などの夜店が出た年もあり、沢山の人が参拝に来た。ミヤマさんによると、かなり以前は年寄りも多く、「ばあちゃんたち」が主になって祭りをしているのが、数十年ほど前から町内で行うようになったという。「ばあちゃんたち」というのは、近所の年配の女性たちのことである。つまり、以前は天神町という単位ではなく、より近い間柄の人々が集まって祭りを行っていたようである。女性が中心になっていたというのも興味深い。

かつての天神町は人口が今よりもかなり多く、昭和30（1955）年代は間借りで暮らしている人もいたほどだった。しかし今では家は半数くらいに減り、小学生もせいぜい2～3人程度である。このような人口の変化は祭りにも影響していると考えられる。

### 1-7. 荒田の弘法大師堂

荒田、天神町、柳町の3つの地区が接する辺りに五叉路（ないし数え方によっては六叉路）がある。荒田の弘法大師堂はそこに建っている。建物の外、向かって右の角に高さ30cmほどの石があるが、ここに弘法大師が座ったとの伝説がある。三角屋根の木造の建物の正面には紫の垂れ幕が掛かり、入り口部分には鈴緒（神社などで参拝する際に鳴らす鈴の付いた縄）が下がっている。4畳間ほどの広さのその建物の奥にさらに3畳間ほどの広さの建物があり、弘法大師像はそこに奉られている。この奥の部屋は外からの光が入りにくい造りになっており、天井に一つある蛍光灯を点けても薄暗さは拭えない。その中でもさらに奥まった位置に弘法大師像はある。くっきりとした目元が何より印象的である。像の手前にはろうそくや金属製の花の装飾、線香などが置かれ、中央に湯のみと生花が供えられている。照明のせいか、どことなく厳かな雰囲気である。

松和町の野越さんが言うには、この弘法大師堂は古くから道しるべとしてあったらしい。立地からして頷ける話だ。しかし、地蔵ではなく弘法大師なので、いささか疑問もある。地蔵の場合、道祖神でもあるので道しるべとしての役割も納得できるが、この弘法大師堂がそれを意図して造られたとは考えにくい。ただ、弘法大師堂が出来た後に次第に道しるべとしての役割を持ったという可能性はある。



写真 10-12 (左) 荒田の弘法大師堂 (向かって右に弘法大師が座ったとされる石)  
写真 10-13 (中) 弘法大師像のスケッチ  
写真 10-14 (右) 弘法大師堂内部 (すべて筆者撮影・作成)

この弘法大師堂について、主に近所に住む高城<sup>たかぎ</sup>弘子さん(70代)にお話を伺った。高城さんは料理屋「味処八山」(令和4〔2022〕年3月で閉店)を経営していた方である。弘法大師堂の管理は、高城さんが一人で行っている。元々は「先代」(高城さんのお舅さんとお姑さん)が管理していたのを、高城さんが引き継いだということである。先代は大変信心深い方で、自宅の木彫りの弘法大師像を拝み、さらに庭に水掛不動像を造るほどであった。健在だった頃はお姑さんが弘法大師堂の管理をして、高城さんの担当は自宅の弘法大師像だけだった。現在、高城さんは「村の弘法大師さん」(荒田の弘法大師堂)と「うちの弘法大師さん」(自宅のもの)と庭の「水掛不動さん」の3つに毎日参拝している。

日々の管理は、湯のみの水を替えたり、花を供えたりなどである。また、参拝の際にはお経をあげる。お経の内容は対象によって異なり、弘法大師に対しては「南無大師遍照金剛」と言うが、水掛不動、仏壇に対しては「また違うことを言う」。筆者の身近にはそのように参拝時にお経を唱える人はいなかったため、高城さんの先代だけでなく高城さん自身も大変信心深い方のように思われた。

冒頭で記した通り、大きなお堂に入っている弘法大師像だが、近隣の他の住民が参拝している様子は見られなかった。筆者が近所で聞き取り調査をした範囲でも、管理者を知らないと言った方もおり、あまり関わりがない様子だった。しかし、時々知らない人が桃などを供えていくことがある、と高城さんは語る。参拝者が全くいないわけでもないようだ。

毎年6月21日に祭りをする。この日には「あんじゅさん」を呼ぶ。「あんじゅさん」は女性の僧侶で、天神町の方だという。どうもこの辺りの地域では、女性の僧侶のことを「あんじゅさん」と呼んでいるらしい。別の男性にこの祭りについて聞いたところでは、天神町の道器寺の僧侶を呼ぶとのことだった。道器寺は尼寺であるから、その僧侶が「あんじゅさん」なのだろう。祭りの日には「村の人」も参拝に来る。地区外の人が飾り付けをしていくこと

もある。しかし、荒田地区の住民全員が来るわけではないらしい。むしろほとんど来ない。令和4（2022）年は区長をはじめ7人ほどが訪れ、「女は私だけ」だったと高城さんは言った。他の地区では地蔵祭りがコロナ禍で中止された所も多い中、荒田のこの行事は令和2（2020）年、令和3（2021）年も開催し続けた。少人数しか集まらないことが幸いして、開催を続けることが出来たのかもしれない。

## 2. 地蔵祭り

令和2（2020）年、令和3（2021）年に引き続き令和4（2022）年もコロナ禍のため地蔵祭りなどの行事を中止した地区が多かった。南町も例に漏れずそうであったが、祭り自体はなくとも住民たちは参拝に来る。この節では、実際に現場を見ることの出来た南町での当日の様子について紹介する。



写真 10-15（左） 当日の南町地蔵堂（筆者撮影）



写真 10-16（右） 五色の旗（向かって左から青、白、赤、黄、緑）（筆者撮影）

令和4（2022）年8月23日。例年であれば地蔵祭りが開催されるこの日、南町の地蔵堂を訪ねた。風がやや強い暑い日だった。午前11時頃地蔵堂に到着すると、すでに区長の澤村さんと3～4人の男性が集まり作業をしていた。皆、澤村さんと同世代くらいの男性たちであった。そのうちの何人かは、地蔵係という地蔵祭りの準備などを担当する係であった。そのような係があることをこのとき初めて知った。名前からして地蔵祭り専門の係だと分かる。南町内で幾つかある係の一つのようだ。わざわざそのための係を用意するほどであるから、地蔵祭りは地区にとって重要なものなのだろう。筆者はもっと内輪的な祭りかと思っていたので以外だったが、確かに地蔵祭りに匹敵するような地区の行事が他に多くあるとも思われない。その点では、地蔵祭りは地区の目玉行事といえる。地蔵係は地区住民の中から毎年決められ、令和4（2022）年は3名が担当していた。

地蔵堂の隅で様子を見学させて頂くことにする。広くない地蔵堂内は数人いるだけでも

少し混み合っていた。筆者が来たときには準備はあらかた終わっており、あとは床に散らかったものを片付けるくらいであった。集まった方々の中でも最年長の男性が一番祭りについて知っている様子で、他の方にやり方が違うなどと指摘していた。会話を聞いた印象では、地蔵祭りの段取りについて細部まで情報が共有されているわけではないようだった。今回の地蔵係の中には、何度かその仕事を経験している人もいたが、前年はこうしていた、というように若干の意見の食い違いが見られた。それが時代の変化によるものか、各々のやり方の違いあるいは記憶違いによるものかは分からない。

地蔵の前には8本の赤いろろうそく（実際のろうそくではなく、ろうそくの形をしたライトでスイッチを入れると灯りが点く）が並べられ、線香に火を付けるための赤いろろうそくも用意されていた。地蔵の帽子や前掛け、たすきは新調されていなかった。ここしばらく同じものであるとのことだ。松和町のように毎年替えるわけではないらしい。地蔵堂の入り口に下げられた幕はいつもの紫色のものではなく、紅白の太い縦縞のものに変わっていた。道の反対側に五色の旗が揚げられていた。また、地蔵堂の端の方に幅30cm、長さ2m弱ほどの旗が掛けられていた。これは普段は地蔵堂の裏手辺りにあったのだが、数日前の大雨で傷んでしまい、こちらへ避難させているらしい。一部、墨が流れて黒く汚れてしまっていた。この旗は、子どもが生まれるとその子どもの安全などを願って作られ、子どもが二十歳になるまで奉納される。地蔵に子どもを守ってもらうわけである。子どもが二十歳になり役目を終えた旗は、地蔵祭りの際に僧侶が立山寺へ持っていき、焚き上げる。

作業が一段落すると、待機役の地蔵係を一人残して他の方たちはそれぞれの仕事や用事のために地蔵堂を去った。祭り仕様になった地蔵堂で地蔵係の方と2人、参拝者を待つ。昼頃になると、住民の方々が1～2人ずつちらほらと参拝にやって来た。参拝者たちが持参する寄付金を受け取るために、待機役が必要だった。寄付金は大抵封筒に入れて持って来られる。参拝者はそれを地蔵係に渡し、それぞれ参拝し、その後は茶を受け取って速やかに帰っていく。

参拝の仕方は様々だった。手を合わせるだけだったり、線香をあげたり、何回も礼をしたり皆思い思いの方法でしているようだった。

供え物は参拝者が持ってくると聞いたが、筆者の見ていた限りではそのような人はいなかった。ただ、それ以前に町外から酒を持ってきた方がいた。町内の住民に限らず、町外の方も参拝に来ることがあるようだ。その酒は地蔵の手前に端に寄せて置かれていた。

正午を過ぎると、ほとんど人が来なくなった。その後は筆者が地蔵堂を辞する16時頃までに1人か2人来ただけだった。昼の参拝者と合わせても10人ほどしかおらず、予想外に少なく驚いた。多くが中高年の方だった。しかし、後日聞いた話だと、夕方から夜にかけて多くの方が訪れたようで、最終的に50～60人ほどが参拝に来ていた。仕事帰りに寄った人が多かったと思われる。南町には現在全部で56軒住んでいるとのことだから、大半の住民は参拝に来たといえる。しかし、例年よりも少なめであるらしい。地域の納涼祭も併せて開催していた年は100人ほどが訪れたという。コロナ禍で納涼祭が開催されなくなること

によって地蔵堂から住民の、特に若い方の足が遠のいたのだろう。夕方以降に訪れたのもやはり年配者が多かったようだった。

参拝者が中高年ばかりで若い人がほとんどいなかったのが気になった。こういったことにあまり関心がないのだろうか。もっとも、この日は平日だったので仕事や学校などで来られなかっただけかもしれない。また、南町には現在小学生は3人程度ということであるから、全体的に若者が減少しているのかもしれない。

基本的に地蔵堂にとどまっていたのは筆者以外には地蔵係が1人だけだったが、午後に他の地蔵係の方や澤村さんが少し立ち寄った。その際、賽銭箱の中身をどうするかという話になった。参拝者から受けとった寄付は地蔵係が中を確認していたが、賽銭箱には鍵が掛かっており、誰が鍵を持っているのか分からなかった。あの人ではないか、などと話し合い、最終的に持ち主は分かったようだった。ただし、この日この場に来られなかったため、賽銭箱の中身は後日取り出すことになった。その一連の会話から、この地蔵堂に関して明確な管理者がいないということがうかがえた。明確な管理者がいないため、どこに何があるか、誰に問えばいいかといったことが曖昧なのではないかと考えられる。

### 3. 住民と地蔵との関わり

#### 3-1. 石仏に寄せる心

地元の住民たちは、石仏に対してどのような思いを抱いているのか。この問いは調査をする中で常に私の頭の片隅にあった。

調査を進めていくうち、住民と石仏の間には、当初想定していたような密接な関わりはなく、むしろ住民たちは石仏に対してあまり関心がなさそうであるとの印象が強まった。石仏について話を聞きたいと言うと、分からない、よく知らないなど返されることはしょっちゅうであったし、普段参拝に来る人はいるかという問いにも、ほとんどいないという返答がしばしばであった。実際、調査中に参拝者に会ったことは一度もなかった。中には、半ば放置され、忘れられかけているように見える石仏さえあった。

しかし、石仏を大切に思う気持ちが失われているわけではない。時折、石仏への思いを垣間見ることにも出来た。印象的だったエピソードを、以下に紹介する。

夏の真っ盛り、令和4（2022）年8月上旬に南町の澤村さんとお会いしたときのことである。澤村さんが「お地蔵さんのところは落ち着く」と口にした。線香の匂いがして、それで落ち着くらしい。それだけでなく、「（地蔵堂の）中に入ると涼しい」のだという。そんなことがあるのだろうか、と私は半信半疑だった。霊的な場所だからということだろうか。あるいは、精神的に落ち着くことで涼しさを感じることもあるのかもしれない。さらに澤村さんは「お地蔵さんは心のよりどころ」だと語った。澤村さんにとって、地蔵は心の支えとしてなくてはならないものであることがうかがえた。

湯上野の杉木さんは、また別の観点で地蔵に対する思いを語った。お宅を訪問し、ひとと

おり話を聞いた後のことである。帰り際に私を呼び止めるようにして杉木さんは繰り返した。その地蔵はとても神々しく尊い存在である、と。そしてそのことを「忘れないで」と言った。その真剣な口調からは地蔵への強い畏敬の念を感じた。

澤村さんの心理的な語りも、杉木さんの強い思いも、私のフィールドワークのなかではどちらかと言えば例外的な事例である。しかし、これほど強い思いはなくとも、日常の管理に携わる人々もまた、石仏を大切にしている。それは、石仏の手入れの行きとどいた様子に表れている。

一方で、石仏に対してもう少し複雑な感情を持つ人もいる。湯上野のフウコさんの場合、祖母、母と地蔵の管理をしてきて、その流れに従うならフウコさんが次の管理者となるのかもしれない。しかしフウコさんはそうなれないでいる。一つには仕事の忙しさがある。それから、気まぐれになのかは分からないが時々やって来て花を供える人が他にもいるようで、以前、フウコさんが花を生けたことがあったが、数日後その花が横に倒され新たに別の花が生けられていたらしい。もし逆の立場だったらどうか。フウコさんは「自分はそういうの（花を倒すこと）を気にする。他の人が生けた花とかどうしていいか分からない」と口にする。同様に、お堂の屋根に生えた苔や古くなって出来た亀裂などに関しても、手を入れていいのか放置するべきなのか、どうしていいか分からない。そのような葛藤もあるのだと考えさせられた。

反対に、筆者が相手に考えさせてしまったらどうか、と思うようなこともあった。荒田の高城さんを訪ねたときのことで。調査で筆者が突然訪ねて行って石仏について聞きたいと言うと、大抵の人がよく知らないと答えるのはすでに述べたとおりである。そして多くの場合そこで終わってしまうものだ。しかし高城さんは、あまり知らないのだと答えつつも「弘法さんのことを勉強せにゃいかんね」と口にした。筆者としては相手の知っている範囲で聞こうという姿勢であったから、そこまでさせるつもりはないと慌ててしまった。けれども、それによって石仏について改めて見つめ直す機会になったとしたら嬉しいことである。

### 3-2. 変化する石仏との関わり

住民と石仏との関わりは、時代を経て少しずつ変化してきている。かつては町内に子どもが多くいて、地蔵祭りなどの行事も賑やかであった。それらは、地区の夏祭りを兼ねていることが多く、地域の行事と違って差し支えなかった。また、外出の際に立ち寄って参拝するということが比較的頻繁に行われていた。湯上野の杉木さんによれば、買い物に出掛けるとき必ず拝んでいたということであるから、参拝が習慣となっていた人も多くいたと考えられる。現在でも「〇〇町の地蔵」などというように言われることから、地域の石仏という認識があると分かる。私が調査をしていた中でも、よく耳にした言葉だ。反対に、「〇〇さん家の前の地蔵」という表現は聞くことがなかった。特定の石仏を表す固有名詞のようなものがないのでそう表現されただけかもしれないが、やはり地域と石仏は切っても切り離せない関係だといえる。



他方で、そうした繋がりが現在では薄れつつもある。柳町や荒田では、地蔵祭りなどへの参加率はかなり低くなっている。加えて、2020年以降はコロナ禍により松和町、南町、天神町では祭りを中止した。また、近年子どもが減少したことによって祭りの在り方も変わってきている。松和町では、数十年前は祭りのときに子どもたちが家々を周り寄付を集めるなどしていたが、その慣習はすでに廃れ、今では大人中心の祭りとなっている。南町では、コロナ禍前まで子どもが神輿とともに町内を巡行して祭りを盛り上げていたが、現在小学生がほとんどおらず、コロナ禍から復帰した後も以前のような祭りをを行うことが難しい状況である。

また、管理者の後継問題もある。柳町、湯上野の地蔵においては、以前管理していた人が高齢で亡くなり、現在、日常的に管理している人がいない状態である。いずれも、管理が一部の人のみに任されていたことが要因だと考えられる。これは、荒田も同じ状況であり、高城さんが管理できなくなった後、誰がそれを引き継ぐのかという問題がある。

以上のように、人々と石仏との関わりは以前と比べ弱まっている部分がある。行事が盛んでなくなったり、日常的に参拝していた人が参拝しなくなったりしている。石仏自体は住宅の近くにあり、物理的に身近であることは以前と変わらないことから、住民側の意識が石仏から離れていっているのだと考えられる。個人の心の変化によって関わりなくなることもあるだろうし、逆に、何らかの理由で石仏と関わる機会がなくなることによって関心が薄れるということもありうる。「石仏への関心がなくなる」と「石仏に関わりなくなる」。この2つはいわば負のサイクルではないだろうか。

現在、多くの地区が少子高齢化と人口減少の問題を抱えている。日常の管理も行事も年配の方々を中心にあって、若い世代に継承されるかどうか危ぶまれる。特に地蔵祭りのような行事に関しては、コロナ禍による3年のブランクが深刻であること、運営費がかかることから、早々に衰退してしまう可能性もある。こうした問題を回避するには、ただ受け継ぐだけでは難しいのかもしれない。それまでのものをそれまでどおりにすることはもう出来ないからだ。

こうした問題に対処するための知恵を、天神町の事例に見ることが出来る。天神町では、以前はミヤマさんの家が管理していたが、地区全体での管理に移行した。こうすることで、誰か一人が亡くなっても、管理者の子孫が管理を引き継がなくても、地区として石仏を維持していくことが出来る。今後人々と石仏との関係がどうなっていくかは分からないが、繋がりを維持しようとするなら、管理体制を変えた天神町のように新しいやり方を生み出す必要があるのではないだろうか。方法は何であれ、負のサイクルから脱却することが重要である。

## おわりに

本章では、上市町の道端の石仏について、地域住民との関わりに着目して見てきた。それ

ぞれの石仏と住民との間には、当初想定したとおりではなかったにせよ、親密な関係があることが見て取れた。その一方で、近年、人々の心は石仏から離れていきつつあることも分かった。特に、コロナ禍で行事が中止されることによってそれが加速している。また、子どもの減少も地蔵祭りに影響を及ぼしている。こうした傾向に危機感を感じ、憂える人もいる。南町の澤村さんの「じいさんばあさん祭りになってしまう」という発言は、もはや笑い話では済まされないだろう。

それでも、石仏が現在進行形で人々から大切にされていると思うとき——例えば新しい花が生けてあったりしたとき——そんなときはやはり嬉しくなるものだ。部外者である筆者がそう思うくらいだから、住民たちはもっと切実に感じているのではないだろうか。そのような気持ちを人々が持ち続けている限りは、石仏の未来について心配する必要はないのかもしれない。普段は何気なく通り過ぎてしまう道端の石仏たちであるが、今回の調査でそれら一つ一つと多少なりとも向き合うことが出来たのは、実に良い経験だったといえる。

## 謝辞

最後に、今回の調査にご協力頂いた方々に深くお礼申し上げます。これらの方々の助力なしにはこの報告書は完成することが出来ませんでした。突然の訪問にもかかわらず調査に協力して下さった住民の方々、とりわけ度重なる訪問を快く受け入れて下さった野越さんご夫婦と澤村さん、本当にありがとうございました。

## 注

- 1) 石に刻んだ仏像。一口に仏といっても様々で、地蔵などは最も一般的な石仏の一つである。参考：尾田武雄、2008年『とやまの石仏たち』桂書房。
- 2) 眼目山立山寺。通称眼目の寺。建徳元(1370)年創立。禅宗曹洞派の名刹として知られる。参考：上市町ホームページ「眼目山・立山寺」  
<https://www.town.kamiichi.toyama.jp/hp/spot/index05.html>
- 3) 「堂内の赤い石は壽永二年五月、旭將軍木曾義仲公、平家追討の為め俱利伽羅合戦に出軍の際、その本隊が当地通過の時、義仲公が此の医師に腰を掛けられ休息せられたと伝えられている。」(上市町誌編纂委員会編、1970年『上市町誌』p.1346)
- 4) 社会福祉法人むつみの里。ホームページ<https://www.mutuminosato.jp/index.html>
- 5) 大岩山日石寺。真言密宗。行基によって岩に掘られたとされる大きな不動明王像で知られる。参考：上市町ホームページ「大岩山日石寺」  
<https://www.town.kamiichi.toyama.jp/hp/spot/index03.html>
- 6) 昭和61年度婦人ボランティア養成講座『おじぞうさまのお話』
- 7) 富山県の郷土料理。茹でたこんにゃくに味噌だれをかけたもの。

### 参考文献

尾田武雄、2008年『とやまの石仏たち』桂書房。

上市町誌編纂委員会編、1970年『上市町誌』、上市町。

昭和61年度婦人ボランティア養成講座『おじぞうさまのお話』。

### 参考にしたウェブサイト

上市町ホームページ「大岩山日石寺」

〈<https://www.town.kamiichi.toyama.jp/hp/spot/index03.html>〉 (2023/01/30 閲覧)

上市町ホームページ「眼目山・立山寺」

〈<https://www.town.kamiichi.toyama.jp/hp/spot/index05.html>〉 (2023/01/30 閲覧)

社会福祉法人むつみの里ホームページ 〈<https://www.mutuminosato.jp/index.html>〉

(2023/01/30 閲覧)

## 第11章 「霊水」に魅せられる人々——上市町黒川地区の穴の谷霊場の事例

星野 正樹

### はじめに

「上市町には万病に効くといわれる『霊水』が湧きでる『穴の谷（あなんたん）の霊場』がある」。調査テーマを決めめぐねていた私は、インターネットで偶然目に入った「霊水」「霊場」という馴染みのない言葉たちに興味をそそられた。そして、私が初めて「穴の谷霊場」にフィールドワークをしに訪れたのは、「文化人類学フィールド演習」のある、7月の金曜日の昼すぎだった。下宿先のある富山市から原動機付自転車を走らせ、国道8号線にのって上市町に向かい東へ進む。8号線を降り10分ほど走ると「全国名水百選 穴の谷霊水」という大きな看板が現れる。看板の方へ進み、つづら折りの道を下ると視界が一気に開ける。そこには連なる山々のふもとで、目の前にはどこまでも続く田園風景、いわゆる「田舎」の風景が広がっていた。しかし霊場の入り口に位置する黒川集落に入ると、私と同じ身長ほどの弘法大師の像が置かれていたり、「あなんたん米」と書かれた看板があるなど、ほかの「田舎」とは一見して違うことが分かった。集落の中心地を抜けてしばらく進むと、そこには「穴の谷霊場入口」と彫られた立派な石が置かれていた。この目印からおよそ1kmにも及ぶ長い勾配を登るとようやく「穴の谷霊場」に到着する。

駐車場に着くと、「富山」だけでなく、「岐阜」や「浜松」と書かれた県外のナンバープレートが数台あることに目がいった。いわゆる「田舎」の風景が広がるこの地区に、県外からの来訪者がいるという眼前の事実は、私にとって不思議なものだった。さらに不思議だったのは、県外から水を汲みに訪れたという人に話を伺うと、皆口々に「穴の谷霊水を数十年間汲みに来続けている」と話したことだ。実際に、私も水汲み場まで歩きこの霊水を飲んでみたのだが、正直に言うと「水道水より少し美味しいかな」という程度の印象であった。だから、県外から、ましてや数十年にもわたって汲みに来るほどのものかと、深く疑問に思ったのである。

「霊水」と銘打っているからには、そこには宗教的な「信仰」のようなものが存在し、だからこそ人々がここまで訪れるのだろうか。はたまた水そのものが単純に「美味しい」「腐らない」といった、実用的な理由があり汲みに来続けているのだろうか。私も調査の度に水を汲み飲むことで気持ちが理解できるのだろうか。一度訪れただけで、これほど様々な想像を膨らませるこの「穴の谷霊場」というフィールドは非常に興味深く、調べ甲斐があるなど感じた。こうして私の調査地は「穴の谷霊場・霊水」に決まった。

本章では、穴の谷霊水について、私の疑問を解き明かすような形で記述していく。第1節では「穴の谷霊場・霊水」についての概要を記す。第2節では、地元黒川出身の伊藤勝保さんによって記された『あなんたん今昔』と黒川の人々の語りをもとに、穴の谷の歴史について

てまとめる。第3節では、主に穴の谷霊水を汲みに来た人々からの聞き取りをまとめる。第4節では上市町にある他の湧き水での聞き取りについて記述する。第5節ではこれまでの記述をまとめ、「穴の谷霊水」とそれにまつわる人々について考察していく。

## 1. 「穴の谷霊場・霊水」概要

富山県上市町黒川には「穴の谷（あなんたん）」と呼ばれる山深い谷がある。ここから湧き出る水は「万病に効く」と古くから言われている（2-1で詳述）。この「霊場」は、富山地方鉄道上市駅から北東へ約6km（図11-1）、スーパー農道を車で15分程走って、黒川の丘陵地を登ったところに位置する（図11-2-①, ②）。市街地からは離れたこの場所に、全国各地から「霊水」を求め人々がやってくる。最近では、コロナの影響や汲みに訪れる人の高齢化もあり、来訪者は減少傾向にあるようだが、記録では昭和45（1970）年から昭和64（1989）年頃にかけては年間約15万人が訪れていたという。

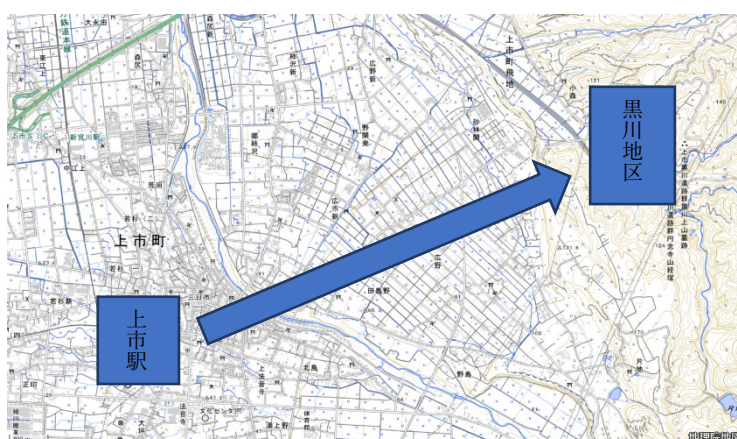


図11-1 上市駅と黒川地区の位置関係（地理院地図をもとに加工）

穴の谷霊場の開場時間は午前8時から17時で、冬期（12月1日～2月28日）は午前8時から16時までとなる。霊場には30台ほど車を止めることができる駐車場（図11-2-③）がある。天候や季節によっても変化はするが、駐車場には、平日の日中であれば大抵は2、3台の車が止まっているのを目にすることができる。この駐車場は、地元である黒川地区の住民が管理している。駐車場の隅には管理棟が建っていて、車を止めると来訪者はここで、受付の黒川住民の方に駐車料金200円を支払う。この管理棟では水を汲むための1.8リットル入りペットボトル、10リットルおよび20リットルのポリ容器（いずれも「穴の谷霊水」という文字入り）をそれぞれ200円、600円、1000円で購入することもできる。また、ポリ容器を持参した人は、この後に続く参道で水を運ぶため台車を、300円でレンタルしていく。こうして準備を整え、来訪者たちは駐車場から水汲み場まで歩いていく。

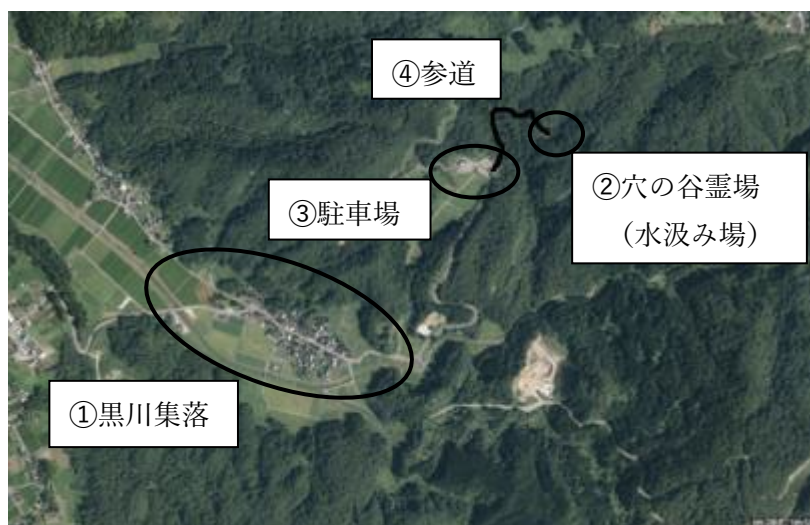


図11—2 黒川集落と穴の谷霊場（地理院地図をもとに加工）

水汲み場までは約400mの参道（図11—2—④）になっていて、周囲には200体余りの石像が並んでいる（写真11—1）。これらは、霊水の効能があった人から寄進されたもので、まさに「霊場」の名にふさわしい荘厳な雰囲気醸し出している。道中にはカエルやトカゲといった小動物がよく見られ、時にはカモシカとも出会うことがある。また高い木々に囲まれ木陰が多い参道は、手近な避暑地としても利用されているようで、休日には若い家族連れが訪れることも多い。8分ほど参道を歩き、最後に108段の階段（写真11—2）を下ると水汲み場にたどり着く。（以下、本章の写真はすべて私が撮影したものである。）



写真11—1 参道の石像たち



写真11—2 108段の階段

ここから先は、「弘真会」（2—1で詳述）が管理している場所となる。ここではまず、駐在員のいる受付で、採水10リットルにつき50円の利用券を買う。後述するコンベアも使用する場合は、10リットルにつき50円の追加料金がかかる。受付のすぐそばにある階段を10段ほど上ったところに水汲み場がある。4本の蛇口の先はいずれも竜の口の形をしてい

て（写真 11—3）、蛇口をひねると勢いよく水が出てくる。20 リットルのポリ容器であれば、2分ほどで満たしてしまう。

持ってきたポリ容器に水を入れ終わると、そのまま帰ってしまう人もいるのだが、なかには御堂（写真 11—4）でお参りしていく人もいる。御堂は穴の谷霊水の水源のある洞窟が存在し、その前には観音菩薩像を中心に、仏教宗祖、地蔵菩薩その他の仏像が所狭しと陳列され、側壁には大量の仏画が張られている。そのような厳かな空間である御堂まで、水を入れたポリ容器を持っていき、線香やろうそくに火をつけて鐘を鳴らしお参りをする人や、お賽銭を投げ入れる人など、各々が好きなようなかたちでお参りをしていた。



写真 11—3 水汲み場



写真 11—4 御堂

水汲みが終わると駐車場に戻るのだが、2リットル入りペットボトル数本ならいざ知らず、水で重量が増したポリ容器を持って108段の階段を上るのは並大抵のことではない。はじめて来た人や休日にふらりと訪れた家族連れを除けば、水を汲みに訪れる人のほとんどは20リットルのポリ容器を3、4本以上は持ってきている。そこで多くの方は、使用料を払ってコンベア（写真 11—5）を利用する。水汲み場からコンベアまでの直線距離約10mの間は、お手製の滑り台（写真 11—6、11—7）を使う。鉄パイプ製の骨組みの上に、木とプラスチックの板が敷かれた滑り台である。水の入ったポリ容器をレーンに乗せて、駐在員に声で合図を出してから、勢いよくポリ容器を押し出す。すると、滑ってきたポリ容器を受け取った駐在員が、1つずつコンベアに乗せて、最後まで乗せきるとスイッチを押し上まで送る。

こうして階段の上に運ばれたポリ容器を台車に乗せ、参道を歩き駐車場まで運ぶとようやく水汲みが終わったことになる。この一連の作業は、テキパキやったとしても、おおよそ30分はかかると考えられる。



写真 11-5 コンベア



写真 11-6 手製の滑り台



写真 11-7 滑り台でコンベアまで水を送る

さて、現在はコンクリートで整備されている参道だが、30年ほど前までは砂利道で、水を運ぶのにも台車ではなくバランスのとりにくい一輪車が使われていたという。また滑り台やコンベアといった、現在では水を運ぶのに欠かせない装置も10年ほど前に導入されたそうだ。このように霊場では、来訪者が楽に水を運ぶための環境が整えられている。ただ水を汲みに来る人の中には高齢者も多く、1年前は水を汲みに来られたが、次の年には汲みに来ることができなくなってしまったということが往々にしてある。そうしたときに、直接汲みには行けないがそれでも穴の谷霊水が飲みたいという声は多く、その需要に応じてか、弘真会では郵送で穴の谷霊水を送る、インターネット販売も行っている。

## 2. 「穴の谷」の歴史

### 2-1. 資料から見る穴の谷

本項では、昭和6(1931)年に黒川で生まれ、富山県農地林務部を退職後、上市町山加積公民館館長、上市町区長協議会理事・監事、黒川町内会長などを歴任した、伊藤勝保さんによって執筆編集された『あなたん今昔』(2020年)に基づいて穴の谷霊場の成り立ちについてまとめる。伊藤さんは、平成29(2017)年に『資料で綴る山加積村の分村合併 付：黒川集落の移り変わり』を自費出版した方でもある。

現在、穴の谷霊場は全国各地から多くの人々が水を汲みに訪れる場所になっている。しか



し、古くは行者が修行するための「行者穴」として利用されていた。はじめて「穴の谷の洞窟」で修行したのは白心行者という人物で、約 200 年前に 3 年 3 ヶ月に及ぶ修行を行ったそう。その時の様子は『あなんたん今昔』にも「行者は修行の間は火にかけたものは食わず、ほとんど、そば粉とくず粉と穴ん谷の清水で命をつないだ」（15 頁）と記されている。その後、明治 30（1897）年に荒木悟道行者、大正 4（1915）年に月岡の女行者、昭和 2（1927）年には尾谷某山が、修行のために穴の谷の洞窟を利用したという記録が残っている。

「行者穴」だった穴の谷が現在のように「霊験あらたかな水」を汲むことができる「穴の谷霊場」へと変化するきっかけになったのは、広島出身の行者、岡本弘真（こうしん）という尼僧の存在が大きい。弘真尼は、昭和 32（1957）年から穴の谷で 6 カ年の修行を積み、その後昭和 37（1962）年に 59 歳で亡くなった。生前親交があった上市町の売薬である塩原伸晃氏に、弘真尼は「穴の谷のご霊水は八功德水となり、阿弥陀如来の水だぞ、唯、一心に信を以っていただければ万病が治るぞ。病に苦しんでいる人に一人でも多く伝えてほしい。南無阿弥陀仏」という遺言を残した。

弘真尼の死後、塩原氏は弘真尼のゆかりの人たちに呼びかけて昭和 39（1964）年に「弘真会」という団体を結成し、自身は初代会長を務めた。現在は一般社団法人となり、現会長は金城清吉さん（4 代目）である。弘真会の宗派や教義は不明で修行者はいない。ひたすら名水を汲むこととその配布に重点が置かれている。

さて、塩原氏は弘真尼の遺言通り、売薬で秋田に行った際、6 カ年間寝たきりで動けないという 24 歳の女性に穴の谷霊水の話をした。その女性は穴の谷にお参りをし、行をすること 110 日間に及び、霊水を飲み、お風呂に入って、ひたすら祈願した。すると不思議なことに、帰りには松葉杖をついて自分で歩けるようになった。参道に置かれた約 200 体の石像のうち秋田県出身の人からの寄進が多い理由は、こういった塩原氏の売薬での口伝と深いつながりがあると考えられる。現在でも「奇跡のエピソード」として語り継がれるこの話が、昭和 54（1979）年に当時テレビの電波に乗ったのがきっかけとなり、霊水は一気に有名になった。またその後、昭和 60（1985）年に穴の谷霊水が全国名水百選に入選したこともその名声を高める大きな要因になったとされる。

## 2-2. 黒川の人々から見た穴の谷

今回の調査では、穴の谷霊場に訪れる人々だけでなく、そのふもとに位置する黒川地区の住民にもインタビュー調査に協力していただいた。ここでは、黒川の人々からみた穴の谷霊場・霊水についての語りを紹介する。興味深いことに、そこからは「行者穴」、「霊場」とは違うような見方をしていることが分かった。

昭和 33（1958）年生まれの伊藤嘉邦さんは穴の谷について、「私が子供のころ（の穴の谷）は単に水が流れ出ている野山でしたし、私の先輩たちが子供のころは、コウモリを捕まえに行くだけの山の穴でした」と語ってくれた。

伊藤さんの記憶のなかでそうした状況が変わったのは、伊藤さんが中学生だった昭和 46

(1971)年前後のことである。その頃には、「街灯もないのに、夜中の12時でも人が(水を汲みに)来ていた」という。黒川村の人々は「どこの家も小銭稼ぎのため」に、一輪車で水を運ぶ手伝いをするようになっていた。思春期だった伊藤さんは、村の大人たちが「守銭奴」のように振る舞うのが「嫌で仕方なかった」と、当時を思い出して語った。『あなantan今昔』にも「集落の県道沿いや家々の庭先の空き地に、自家用車が200台以上駐車し、集落内の混乱が続いた」(40頁)と、黒川の様子が記されている。

黒川に住む稲垣博子さんは、忙しかった当時の様子を「水を汲むのに8時間待ちにもなることもあり、村の人たちはお客さんの交通整理をやっていた」と語る。押し寄せる車を人びとのために、道路と駐車場を整備する必要が出てきたのである。『あなantan今昔』によると、「車の利便と整理のため、うしや〔穴の谷の駐車場にいく道中にある田んぼの名称：筆者注〕の田圃の西側に幅4メートルのコンクリート道路と臨時駐車場を造った。これにより、ようやくバスが上がるようになった。更に管理棟を建てて車の監視、ポリ容器の販売、穴ん谷から駐車場まで水入りのポリ容器を運ぶための一輪車の貸し出しを行った。集落では順番に当番を決めて管理した」(40頁)と記述されている。

黒川に住む女性のAさん曰く、「盛りの時には20リットルのポリ容器が一日で300個売れる日もあった」という。やはり、現在とは比にならないほど水を汲みに人が押し寄せていたことが分かる。

このように、黒川の住民から見た「穴の谷」は、単なる山、遊び場から「霊場」へと急速に変貌を遂げた場所である。そうした時の流れの中でも黒川の人々は、霊水とそれを求め訪れる人とを繋ぎ、霊場を裏側から支えていた存在と言える。

また黒川の人々の語りを通して興味深かったのは、県外から何時間もかけて水を汲みに訪れる人がいるというのに、車で数分程度の距離に住む黒川の人々が、意外にも「穴の谷霊水」を汲みに行く頻度が多い訳ではないことだった。例えば、稲垣さんは「ほりのけの水」と呼ばれる自噴した水を敷地内に有しており、穴の谷霊水も飲むがこちらの水も美味しいので飲んでいと語ってくれた。また、霊場までは赴かず、霊場の入り口の石碑近くにある日枝神社で飲める「お宮さんのお水」を飲むという声もあった。その他、黒川に住む74歳の伊藤勝則さんは、「もともと黒川の水が美味いから、(穴の谷霊水を)少しは飲んでるけど、ちょっと美味いくらいにしか感じない」と語っている。

以上のように、黒川は実に水資源が豊富で、一般に知られた観光地である穴の谷霊水以外にも、地域の人だけが知るような水があった。そのためか、穴の谷霊水は黒川の人にとって間違いなく大きな存在ではあるが、飲み水としては、時と場合によって使い分けられる「選択肢の一つ」という印象であった。ただ中には、穴の谷霊水を汲みに行きたいが体の不都合で汲みに行けないという声もあり、黒川の人々の高齢化も背景にはあるようだった。

### 3. 穴の谷霊水を汲みに訪れる人々からの聞き取り

フィールドワークでは、実際に穴の谷霊場へ水を汲みに訪れた人（21組）、穴の谷霊場の駐在員（3人）、地元上市町の学生（3人）へのインタビューを行った。本節では、彼らの語りを基に、穴の谷霊水の現在の姿について記述していく。

水を汲みに訪れた21組へのインタビューは主に、駐車場で「水を汲むまでの道中、穴の谷霊水についてお話を伺ってもいいですか？」と尋ねて、実際にそのようなかたちで行った。水を汲みに訪れていた人たちのほとんどは、快くインタビューに応じてくださった。

水を汲みに訪れていた人の特徴として、21組のうち半数以上の11組（石川県が3組、長野県、静岡県がそれぞれ2組、新潟県、岐阜県、福井県、福島県がそれぞれ1組）が県外からの来訪者であった。また年齢層としては、60代や70代が特に多かった。

#### 3-1. 霊水的主要用途

第1節でも述べたように、穴の谷霊水を汲むのには、一般的な湧き水よりもかなり多くの手順を踏み時間をかけなければならない。そうして苦勞して持ち帰った霊水がどのような用途で使われるのかについて尋ねたところ、次のような回答が得られた。まず、霊水の使用例として最も多かったのが「お米を炊くときに使う」（7組）というもので、次いで「コーヒーを飲むときに使う」「常用の飲料水として使う」（いずれも6組）、「お茶を飲むときに使う」（4組）、「味噌汁を作るときに使う」「薬を飲むときに使う」「氷を作る際に使う」（いずれも2組）、「白湯として使う」「自家製のラーメンを作る際のスープの水として使う」（いずれも1組）という順であった。霊水をただ単純にそのまま飲むというだけではなく、本人たちの中で「これ」と決められた用途で、使用されていることが伺える。例えば、富山市山室の40代女性は2週間に一度のペースで水を汲みに訪れるそうなのだが、「もったいないから飲み水とお茶を飲むときにしか使わない」と話した。霊場の水汲み場で働く駐在員の60代男性は、米を炊くときに霊水を使っているそうで、「この水でお米を炊くと（味が）まるで違う」と話した。また、「常用していると体に良い、通じが良くなった」とも話した。

#### 3-2. 人々を引き付ける穴の谷霊水

穴の谷霊水を汲みに来る人の中には、数十年間にわたって遠方から通いつけているという人も多い。新鮮な水を飲むというだけなら、県外からわざわざ来なくても、もっと近くにも同じような湧き水がありそうなものだ。しかし穴の谷霊水を汲みに来る人の多くが「この水でなければダメだ」と語る。そうした側面について掘り下げるために、まずは、水を汲みに訪れた人の中でも、穴の谷霊水に対するこだわりがひと際強く感じられた長野県塩尻市の60代男性の語りを紹介する。

駐車場で出会ったこの男性は、水を汲みに訪れる他の人々とは一見したところで様子が異なっていた。まず、軽トラックの荷台には20本以上のポリ容器や水を運ぶための自分専

用の台車など、水を汲むための道具がびっしりと敷き詰められていた(写真11-8)。実際に水を汲むときには、運んだポリ容器を一つ一つ持って階段を下るのではなく、縄で7本のポリ容器一気にまとめ上げたものを豪快に肩に背負って下まで持っていくなど、とにかくインパクトのある人物だった(写真11-9)。この機を逃すわけにはいかないと、霊水のことについて話を聞きたいと話すと、男性は「もちろんいいよ、何かから聞きたい」と、積極的にインタビューに協力してくれた。



写真11-8 水汲み道具一式が乗った荷台 写真11-9 ポリ容器を担ぎ階段を下る男性

この男性は穴の谷霊水を汲みに来始めて約20年になるという。1ヵ月に1度のペースで、住まいのある塩尻市から穴の谷霊場までの約160kmの道のりを、高速道路を使い片道4時間かけて来るそうだ。そのため男性は「ここの四季は全部知っている」と語った。荷台に積んだ22本のポリ容器は一度に全ては持っていけないため、3度にわたり駐車場と水汲み場を往復するのだという。疑問に思ったので「一か月間で20リットルの水を22本も使い切るんですか?」と尋ねると、実は自分の家だけではなく、近所の家と東京の友達、職場に毎度配っているのだという。

この男性は、「水汲み」という動作一つをとっても、他の人とは違うと思わせてくれた。ポリ容器に水を入れる前に、容器の中身や特に口の部分を一つ一つ素早く洗浄する慣れた手つきなどは、まさに「熟練」と呼ぶに値するものだった。男性曰く、こうしてポリ容器を洗浄することで、藻が生えず水が長持ちするのだという。その後、水を容器に入れる段になると、「どうすれば水をポリ容器いっぱいに入れられるか」「4本ある蛇口のうちどれが勢い良くでるか」など、霊水を汲む際に自らが気にしているテクニックについて余すところなく、熱い目つきで語ってくれた。この手の込んだ水汲みの工程を3往復も行い22本すべてに水を入れ終わるまでには、昼食休憩の時間も合わせると4時間ほどかかるそうだ。帰りの移動時間4時間も含めると、計12時間をかけて水を得ているということになる。男性もこの行動に関しては「ここまでして来ているのは自分くらい」と自負していた。そして「これ(12時間かけての水汲み)をやりに来るのも健康じゃないとできないからね」とも話していた。

かかるのは時間だけではない。金銭面でも、高速代やガソリン代、水の料金など諸々含めて、年間十数万円はかかるそうだ。これについて本人は、「高い水だよ、手間とお金がかかる」と語っていた。ただ、男性自身はその状況に、決して困っているという様子ではなく、むしろ誇らしげな表情であった。

しかし、汲んだ霊水の配達先の一つでもある職場では、男性のこうした霊水に対する行動は揶揄されているようだ。昼休憩時には男性が汲んできた穴の谷霊水をみなで飲むにもかかわらず、同僚たちには「道楽だ」と言われるのだと、男性は屈託なく話してくれた。そして、その同僚たちに返すように「こうやって離れたところから水を汲みに来られるのも健康のおかげ、『信じる者はなんとやら』と言うしね」と笑顔で私に語ってくれた。また「教えてあげる」と私に前置きしたうえで、「この穴の谷霊水には、『お金』と『健康』そして『暇』がある人じゃなきゃ来れない」とも語った。

ここまでの労力をかけるほどの穴の谷霊水の魅力とは何かと疑問に思い、「この水の良いところってなんですか？」と率直に尋ねてみた。すると「まず何とんでも腐らない。それにウォーターサーバーだと水が硬いけど、この水はのど越し柔らかく美味しい」と言い、続けて「穴の谷霊水は麻薬と一緒に、一度飲んだらやめられない」「うがいと風呂の水以外は全部これ（穴の谷霊水）、蛇口から出てくる水は飲めない」と語った。水に対する強い想いは男性だけでなく、その家族にも及ぶようで、「野球部だった息子は、どこに行くにもこの水を持っていった。大人になってからは、穴の谷霊水を飲むとそれ以外の水が飲めなくなってしまうから、現在は“あえて”穴の谷霊水を飲んでいない」とその様子を語ってくれた。

この男性と家族に、そこまで言わしめる穴の谷霊水とは一体なんなのだろうか。男性の言葉を借りてその魅力を端的に表すならば「美味しい、腐らない」ということだが、果たして本当にそれだけが魅力なのだとも思えない。また、男性は水汲みの間1時間以上インタビューに付き合ってくれたのだが、霊水について熱く語るその様子や話の数々は、私からすると「熱狂的な霊水信者」のようにも見えた。その行動の背景には、なにかのめりこむ様な「信仰」のようなものがあるのだろうか、そんな疑問がふと私の中で生まれた。次項以降では、より多くの語りを紹介する中で、それらの深層に迫っていく。

### 3-3. 「ついで」を生み出すもの

静岡県富士市から来たという、身体に障害をもつ女性3人組は、同じ施設の友達同士であった。3人のうち1人の女性が、穴の谷霊水を汲みに来るようになって、かれこれ50年というベテランだった。その女性は、一緒に来た2人以外にも、これまで同じ施設の人に穴の谷霊水をすすめたことがあるという。すすめた人の中には、現在でも穴の谷霊水を飲むためにインターネットで注文している人もいると語っていた。他方でこの女性は、その日は「旅行のついでに（穴の谷霊場に）久しぶりに来た」とも言っていた。というのも、女性は50年間休みなく穴の谷霊水を汲みに来続けていたわけではなく、一度、来ることが難しくなった時期があったのだ。それまでは、穴の谷霊水を飲んでいただけだが、以来ウォーターサー

バーを使うようになったという。すると、今までひいていなかった風邪をひくようになったそうだ。この話を聞いて私が、「風邪をひいたのは水が深く関係しているんですかね？」と聞くと、「それだけじゃないと思うけど」と少し笑いながら答えてくれた。

似たような例として、静岡県浜松市から来たという60代の同級生だという男性3人組の語りも紹介する。このグループでは3人のうち1人の男性が、35年ほど前に、むち打ちと肩こりがひどくなってしまい、医者に行っても治らず困っていたところ、この穴の谷霊水と出会った。そして、一か月、半年と飲んでいたら症状が良くなったのだという。その語りを受けて、「やはり霊水の力なんですかね？」と私から男性に話を向けてみると、「たまたま治っただけかもしれない」と話してくれた。現在では仕事も定年退職し時間もあるという男性は、年に3、4回のペースで、浜松市から6時間半かけて水を汲みに訪れているそうだ。またインタビューをした日のように、友人と訪れることもあるという。水を汲んだ後は、みなで富山県の旅館で1泊し、そこで美味しいお酒と温泉を楽しんで帰るのだそうだ。このことを男性は、「(霊水は) うまい酒と良い温泉のきっかけになる」「旅行を兼ねておまけに水までついてくる」と語った。男性に穴の谷霊水を紹介されて、数年前から一緒に水を汲みに来始めたというもう1人の男性も、「1泊ぐらいの丁度いい旅行、良い運動がてら来ている」と話してくれた。

ここで紹介した2組と会話をする中で、3-2で紹介した塩尻市の男性のように、やはり霊水に対して「美味しい」「腐らない」という言葉でその魅力を伝えてくれることもあった。しかし話を広げて聞いてみると、穴の谷霊水を汲む「ついで」に旅行や運動をしている、あるいは旅行や運動「ついで」に霊水を汲みに行くと、その個人的な楽しみを教えてくれた。そういった語りをする人々を見ると、なにも穴の谷霊水の魅力は、霊水そのものの「美味しい」「腐らない」ということだけではないように思えた。汲むことを通じて生まれる「ついで」がある意味では楽しみの一つで、実はそれも人々を引きつける魅力の一つだということに気が付いた。

#### 3-4. 霊水と信仰

第2節でも触れたように、穴の谷霊水は、「霊験あらたかな水」「万病に効く水」として知られたことで、全国から多くの人が汲みに来るようになった。そして現在でも、富士市の女性や浜松市の男性の語りからも分かるように「(穴の谷霊水を) 飲んでいると健康だ」「(飲むと) 体が良くなった」というような旨をはっきりと口にする人がいる。だが、いざそれが霊水のおかげかと正面から尋ねると、誰もが決まって気まずそうな反応をするのである。こうした受け答えの裏には何が隠されているのか。続いて紹介する長野県の男性たちの語りの中で、その答えが徐々に見え始めた。

長野県から来たという30代の男性3人組は、みな同じ観光バス会社に勤めているという。来ていた3人とは別に、同僚で穴の谷霊水の良さを力説する、「どっぷりはまっている人」(Bさん)が会社にいるそうで、たまたま富山県に遊びに来たタイミングでBさんのことを

思いだし、水を汲みに訪れたのだという。つまり、これまでの幾つかの語りで出てきたような、「熟練者」は誰一人としておらず、そのためかどちらかというとな歩引いた目線から穴の谷霊場を語ってくれた。3人のうちの1人で、Bさんから一度穴の谷霊水ももらったことがあるという方に、「霊水といわれていますがその水の効能はありましたか？」と聞いてみると「分からない」と言い、それに続けて「ただBさんは（穴の谷霊水を）めっちゃ信じてる。会社でも例えば病気の人とかに勧めたりしている」とBさんの様子を語ってくれた。私とその方との会話を聞いていたもう1人の方は、そこで「こんな水なんて信じるか信じないかの話」「これ（飲ん）で病気治るなら誰でも来るだろう」と、Bさんや霊水というものをやや嘲るような口調で意見を述べた。しかし、その発言に対して、私と先ほどまで会話をしていた方は「（自分たちも）どことなく信じちゃってるからこんなところ来るんじゃない」と少し皮肉めいた言葉をかけた。

前項と本項では水の効能について3組に質問をしたわけだが、そこからは来訪者の霊水に対する明瞭ではっきりとした「信仰」というよりも、どちらかといえば淡く曖昧な「半信半疑」な様子が見受けられた。次項では、これまでの内容を踏まえて「病」についての語りを取り上げる。

### 3-5. 「病」と穴の谷霊水

岐阜県高山市から来たという70代の夫婦は、夏休み中だという孫を連れて、7月下旬の炎天下の中、水を汲みに訪れていた。夫婦は穴の谷霊水を汲みに来ること40年になるというのだが、初めて穴の谷霊場に訪れた日のことを私に話してくれた。昭和54（1979）年、当時旦那さんの親が癌で入院中だった。その頃、第2節でも紹介した穴の谷霊水の「奇跡のエピソード」がテレビで放送された。それを見た夫婦は、まだ小さかった息子を連れて、高山市から何とか穴の谷霊場までたどり着き、水を汲んだ。その霊水を入院中の親に飲ませたところ、なんとそれまで出ていた熱がおさまったのだという。ただその後、最終的には親は癌で亡くなったとのことだった。

現在、この夫婦は高山市から毎月、2時間半をかけて水を汲みに来ているという。決して近所とは言えない高山市から、かなりの頻度で訪れていることが気になったので「穴の谷霊水よりも、もっと近くに湧き水はないんですか？」と尋ねると、「高山市にも湧き水はあるし、近所にも健康に良いつて言われている水はあるけど、ついつい穴の谷霊水に来ちゃうんだよ。欠かせなくなる」と話してくれた。また穴の谷霊水は夫婦だけでなく家族にも浸透しているようだ。現在、岐阜市に住んでいるという娘さんは、休日に高山市の実家に帰ったとき、穴の谷霊水があると「もらっていこうかな」といって霊水の入った2リットルの容器を3本ほど持っていくのだという。夫婦曰く「自分たち（高山市）でも水道水はかび臭いと思っているのに、都会（岐阜市）に行けばなおさらそれを感じるだろう」とのことだった。

「身近な人の病気を思い、水を汲みに訪れる」というケースは他のインタビューでも見受けられた。富山県魚津市から来たという80代の夫婦は、過去に一度穴の谷霊場に訪れて以

来、来るのはこれで2回目だという。「今日はまたどうして久しぶりに穴の谷霊場に来たのですか？」と尋ねると、「大阪にいる闘病中の娘に霊水を送ろうと思って今日は訪れた」のだそうだ。娘さんは癌で余命数年だというのだが、「霊水でも飲めば気分的に少しでも良いだろう」と思い、インタビューをしたその日に、「急に思い出して（穴の谷霊場に）来た」とのことだった。

その他にも、富山県小矢部市から来た70代の夫婦は、奥さんの妹が穴の谷霊場によく行ってたため、その存在は以前から知っていた。そして6年ほど前に、旦那さんが癌になったことをきっかけに、夫婦で水を汲みに来始めたという。今では、一ヵ月に一度、こうして水を汲みに訪れるのが習慣になっているという。夫婦は、この月に一度の水汲みを、「レクリエーション」みたいなもので、「良い気分転換になっている」と語ってくれた。そして水を汲み終わった後は決まって「また来月も来られますように」と霊場の御堂にある薬師如来像にお参りしていくという。最後に、霊水の効能について尋ねてみると、「こういうのは気持ちの問題だと思う」と話した。

### 3-6. 若者から見た穴の谷霊水

これまで紹介してきた語りからも分かるように、穴の谷霊場へは富山県外、あるいは富山県内でも上市町の外から来訪するという人がかなり多い。また年齢層も60代や70代など高齢の方が多いことが分かる。そこで、これまでとは異なる視点からも穴の谷霊水を見てみよう、地元である上市町出身で女子大学生の3人にインタビューを行うことにした。ここでは3人のうち、霊水を今でも汲んでいると話してくれた、Cさんの語りを中心に紹介する。

Cさんは4年前から穴の谷霊水を汲みに行き始めた。これまで紹介してきた事例によくあったように、月や年に何度のペースで訪れるとかいうわけではなく、趣味の散歩に少し飽きたときや趣向を変えるために、穴の谷霊場を訪れる。特に、このコロナ禍での自粛期間中は暇な時間が多くなり、よく訪れたという。

Cさんの場合、いざ霊場へ行くとなったら、それは「散歩」から「トレーニング」へと意味合いが変わる。空のペットボトル4リットルを持参して、自宅から霊場まで2.7kmの道のりを1時間かけて訪れ、帰りには水を入れて重くなったバッグ背負いながら帰る。Cさん曰く「行くときは修行だと思って行く」、「穴の谷は身近な修行場」とのことだ。またCさんにとって水汲みは「限りなく無駄なこと」であるとも話してくれた。

そう言う背景には、単純な移動距離や水の重さ以外の理由があることが、話を聞く中で分かっていった。Cさんは、これまでの語り手のように穴の谷霊水を「美味しい」とは形容しなかったばかりか、「正直我が家の井戸水と同じ」とまで言った。その理由は、「穴の谷から我が家まで直線距離にすれば約2km、地下水ならさほど水質は変わらない。（我が家の井戸水と）異なるのは霊験あらたかか否かのみだと考えている」とのことだった。そのためか、家庭での霊水の扱いに関しても、「中に入っているのが穴の谷霊水と知ったうえで、ちょっとペットボトルが使いたいという理由で、中に入った霊水は平気で捨てられる」とも語って



くれた。

Cさんは穴の谷霊水を汲みに行くようになって、「穴の谷では楽をするほどお金がかかる」と感じるようになったという。第1節でも触れたが、穴の谷霊場では水を汲むのに、駐車料金や台車やリフト、霊水の採水など各所でお金がかかる。その他にも空のペットボトルやポリ容器が販売されていたり、御堂には二つの賽銭箱などがある。これらに関してCさんもはじめは「なんだか俗っぽいなあ」と感じていたという。しかし、台車やリフトを使って楽をせず、水も欲張らず少しずつ汲み、行きも帰りも歩いて行く、こうした「修行する気持ち」で挑めば、特に費用はかからないことに気づいたようだ。いったんこのような見方ができるようになると、「楽をすればお金がかかるものの、むしろお金さえ払えば楽ができる」、「これは弘真会の方の働きがあつてこそ」とも思うようになったと語ってくれた。

#### 4. 上市町のその他の湧き水

富山県は「水の王国とやま」と言われるほど水が豊富な県である。実際、環境省が昭和60年に選定した「名水百選」と平成20年に選定した「平成の名水百選」に、富山県からは穴の谷霊水も含まれた、それぞれ4か所ずつ、合わせて8か所の名水<sup>1)</sup>が選ばれた。これは熊本県と並び全国最多で、富山県の豊かで清らかな水環境を物語っている。そして上市町には、穴の谷霊水以外にも湧き水を汲むことのできる場所がいくつか存在する。本節では、穴の谷霊水とそれらの湧き水とを比較していくことで、湧き水としての共通性や穴の谷霊水の固有性について記していく。

##### 4-1. 「城山の湧き水」

城山の湧き水は、上市町の観光名所の一つでもある大岩山日石寺に行く道中、そのふもとにある湧き水である。城山の湧き水と穴の谷霊水との大きな違いは3つある。1つ目は、城山の湧き水では、水汲み場と駐車場が隣接していてすぐに水が汲める点だ。2つ目は、水を汲む際にかかる費用が、ペットボトル1本2リットルまでが10円、4リットルまでが20円、ポリ容器5リットルが20円、10リットルが30円、20リットルが50円と比較的安く、それらを賽銭箱に納入するだけでよい点である。3つ目は、城山の湧き水が「超軟水」と言われている点だ。

城山の湧き水において、来訪者5組にインタビューを行った。用途を尋ねると、「お米を炊くときに使う」、「コーヒーを飲むときに使う」、「味噌汁を作るときに使う」（いずれも2組ずつ）などで、穴の谷霊水と共通するものが多かった。その他には、「職場の飲食店で飲み水として利用している。また個人としては二日酔いのときに飲んでいる」といったものや、「定期的に訪れているわけではないが釣りに行くときにだけ来る。イワナを生かすための水として使っている」といったユニークな用途もあった。インタビューを行った人々の年齢層は、40代が2組、70代、50代、30代がそれぞれ1組ずつと、穴の谷霊水に比べ比較的若

いように見えた。さらに水を汲み始めてからの年数も10年間以上が2組、2年間で1組、1年間で1組、不明が1組で、こちらも穴の谷霊水の来訪者と相対的に比べると年月は浅い。最後に、5組とも県内からの来訪であった。

インタビューを行った5組のうち、過去に3組は穴の谷霊水を訪れた経験があった。そこで、「城山の湧き水の魅力は何ですか？」あるいは「どうして穴の谷霊水ではなく、城山の湧き水を汲みに来ているのですか？」と尋ねてみた。1組は「城山の湧き水は汲んでから3年間は腐らないと聞いたことがある」、「(城山の湧き水と穴の谷霊水では)味はあんまり変わらない。ただ、城山の湧き水は、車をすぐ横に止められるから便利」「穴の谷は1回行ったことあるけど、歩く距離も長いし、水を運ぶのに台車を使うのとかが面倒」と語ってくれた。別の1組は「穴の谷は遠いし、あっちの水の方が硬い」と語った。また別の1組は「城山の湧き水は超軟水だから飲んでいると便秘にならない」、「穴の谷まで行ったけど、水を汲むまでの参道の距離が長いし、お金をいちいち取られる。城山の湧き水は汲むのが楽」とのことだった。

#### 4-2. 「弘法大師の清水」

弘法大師の清水は、穴の谷霊場からさらに北東に進み、東福寺野を登り山道を進んだ先にある。立地でいえば穴の谷霊場よりもはるかに山奥である。

ある金曜日の12時頃から1時間半ほど汲みに訪れる人を待ったのだが、立地の関係なのかインタビューできたのは滑川市に住むという親子の1組だけだった。月に一度のペースで水を汲みに訪れるという親子は、主な用途としてはお茶や味噌汁に使用すると話した。また弘法大師の清水の魅力について、「水が腐らない、混じりけがないところだ」と語ってくれた。弘法大師の清水を10年以上汲みに来ているというお父さんは、以前に城山の湧き水や穴の谷霊水も汲みに行った経験があるということだった。そこで、それぞれの湧き水の特徴を尋ねた。城山の湧き水に関しては「弘法大師の清水のほうが無臭」と、穴の谷霊水に関しては「歩かなければならないから大変」とのことだった。

こちらの親子の語りや3-6でのCさんの語り、4-1で紹介した城山の湧き水の来訪者の語りなどで、穴の谷霊場の歩く距離やお金がかかることが不便な点として度々挙げられていた。確かに手間とお金がかかるため大変ではある。しかし穴の谷霊水での聞き取りの中では一方で、「自分の足で苦労して汲むこと」「お金を払うこと」で「ありがたみ」が増し「ご利益がある」と考えるような人もいた。

#### 5. まとめと考察

最後に、ここまでの聞き取りおよび観察の記録をふまえながら、「穴の谷霊水」とそれにまつわる人々の行動や考えについて考察をしていく。

「穴の谷霊水」には、何十年も遠方から水を汲みに通い続けているという人が実に多い。

中には「一度飲んだらやめられない」という人までいる。私の疑問の出発点は、そこまで言わしめる穴の谷霊水の魅力が何であるか、ということだった。霊水の魅力を来訪者に尋ねてみると、多くの場合は、「美味しい」「腐らない」という実際的な回答が多かった。しかし、話を続けてもらおうと、実は「旅行も兼ねて」、あるいは「良い運動がてら」水を汲み来ているという人もいた。また、霊場へは修行だと思って行くと言ったCさんのように、霊水そのもの以上に「水を汲みに行く」という「行為」に重きを置いている例もあった。また、これは来訪者たちが直接口にしたわけではないが、彼らの言動を見ていると「手間」というのも、実は穴の谷霊水の魅力を構成する一部分ではないかと考えた。

これらのことから、霊水そのものだけが人々を寄せ付けるのではなく、そこに付随する「ついで」の楽しみや水を汲みに行くという「行動」、それに一見無駄なことのようにも思える「手間」の数々、それらすべてを含めた「体験」が穴の谷霊水の魅力であり、遠方から訪れる醍醐味だと感じた。

次に、古くから「万病に効く水」「霊験あらたかな水」として知られている穴の谷霊水について、現在でも人々はその効能を信じて訪れるのか、ということを考えてみたい。私ははじめ、水を汲みに訪れる人々は、穴の谷霊水の「霊的な力」を深く信仰しているものばかりだと思っていた。だが、語りを聞く中で見えてきたのは、人々の霊水に対する「半信半疑」な様子であった。汲みに来る人々は、穴の谷霊水を実際に薬であるかのように「飲めば治る」ものとして信じているわけではない。少なくとも、私に対してそのように真顔で言う人はいなかった。一方で、「(穴の谷霊水を) 飲んでみると健康だ」「(飲むと) 体が良くなった」と口にする人はいる。

こうした半信半疑な言動のうらには「あやかりたい」という感情があるのではないかと私は考えた。西洋近代的な発想が台頭し、何事にも科学的根拠を求めようとしがちな現代において、スピリチュアル的なものへの風当たりは強い。だが、「お守り」や「おみくじ」といった、西洋近代的な物差しで測れば非科学的と思われるようなものは、今でも、時に人の心の拠り所として、時に人の道しるべとして重要な役割を担っている。穴の谷霊水を「万病に効く水」だと100%信じて汲みに来ている人は、おそらくそう多くはいないだろう。しかし「霊験あらたかな水」と呼ばれる以上、汲む人々の心には「穴の谷霊水にあやかりたい」「あわよくば効いてくれ」という思いがあると私は考えた。そして、偶然にでも、霊水を飲んでいて自身の健康が良くなったというならば、ゲン担ぎ的な意味も含めて、再び水を汲みに行きたくなることにも納得がいくし、周囲にその効果をお裾分けしたくなるのにも理解がいく。

そうした偶然や奇跡の話とともに霊水は人から人へと伝播されていき、今日でも穴の谷には人々が絶えることなく訪れるのだろう。

## おわりに

今回の調査を行う中で、実は私自身も2リットルのポリ容器を持参し、フィールドワークで穴の谷を訪れる度に、霊水を汲むことをしていた。こうして得た穴の谷霊水は、インタビューの中でも使用用途として最も多かった「お米を炊くとき」に主に利用することにした。なんとなく霊場を訪れる「ついで」程度で始めた水汲みだったが、およそ4ヶ月に及ぶ調査期間の中で、はじめは1本だった2リットルポリ容器も気づけば2本持って行くようになっていた。そして、いつしかこの2週間に一度の水汲みと米炊きは習慣化され、私の生活の一部になっていた。自らの足で赴き、自らの手で汲んだ水で炊く米は、普段の水道水で炊く米よりもどこか特別で、不思議と美味しく感じた。

8月3日から9日にかけて、文化人類学の研究室生11人で行った調査合宿中では、朝食の飲み水としても利用した。ただの水道水や市販の水ではなく、汲んできた湧き水ということもあり、折角ならと合宿仲間の学生も穴の谷霊水を飲んでくれた。そのとき、自分が汲んできた水を「美味しい」と言って飲んでもらえることが、素直に「嬉しい」と感じた。

はじめにフィールドワークで訪れた時には、穴の谷霊水とそれに魅せられる人々のことを不思議にしか思えなかった。しかし、調査を重ねる度に、水を汲みに訪れる人々と出会い、そこで言葉を交わし、また自分自身も水を汲む一員となった。そうして行ったフィールドワークを改めて文字に起こす中で、当初は不思議にしか思えなかった彼らの生き生きとした言動とその想いが、報告書を書き終える今では私にも少しは理解できたように思えた。

## 謝辞

今回の調査にあたり、ご協力いただいたすべての皆様に心より御礼申し上げます。黒川地区の方々をはじめ、霊場の駐在員の方々、弘真会の金城清吉様、また水汲みの最中インタビューに応じていただいた来訪者の方々、皆様のご厚意ご協力のおかげで報告書を書き上げることができました。この場を借りて改めて感謝の意を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

## 注

- 1) 名水百選には、①黒部川扇状地湧水群、②穴の谷霊水、③立山玉殿の湧水、④瓜裂清水が選ばれた。平成の名水百選には、①行田の沢清水、②いたち川の水辺と清水、③弓の清水、④不動滝の霊水が選ばれた。

## 参考文献

- 伊藤勝保、2020年『あなんたん今昔』伊藤勝保（私家版）。
- 鈴木晃志郎・島田章代・伊藤修一、2018年「口コミの効果を通じてみる霊場の脱聖地化と広域化——富山県「穴の谷霊場」を事例に——」『地理科学』vol. 73 no. 2、(pp. 50-65)

地域社会の文化人類学的調査 32

地域の想いに出会う——富山県滑川市・上市町の調査記録(第2版)

発行日：2023年2月27日

2023年10月13日(第3版)

編集：野澤豊一・藤本 武

発行：富山大学人文学部文化人類学研究室

〒930-8555 富山市五福 3190

電話：076-445-6186

E-mail：anthro@hmt.u-toyama.ac.jp

印刷：エース・プリントデザイン

〒930-0003 富山市桜町1-3-8